CITY BOYS CAR CLUB

特別編集
MAGAZINE FOR CITY BOYS
CAR ISSUE 2023
MAGAZINE HOUSE MOOK

POPEYE

車とシティボーイ。

POPEYE BOOKS

004　Los Angeles Car Club “Outtakes”.
010　ポパイの名車図鑑
034　D.A.N. GOLF2が欲しいんだってよ！
038　欲しい車はココにある。
042　はじめて車を買うなら。
046　いざ、マイカー探しの旅に出よう！
051　POPEYE WEBの移動式編集部ができるまで。
052　本当に困ったとき、僕には頼れる整備士(プロ)がいる。
054　好きな車に長く乗るにはどうすればいいですか？
056　パイクカー３部作の時代。
060　めくるめくEVと未来のクルマの話。
066　オレの愛した車。
068　僕らの熱き車の41年史。
070　僕の車。
094　はじめての車。
096　心ゆさぶるあの一台の話。
098　先輩はいかに車と付き合うのか。
100　映画の中の車。
104　サーキットのシティボーイたち。
108　My Archive SPECIAL 中村ヒロキ
110　BOSE × JJGの 伝えたい車がある！
114　POPEYE CAR CLUB FORUM
129　まだ車という自由を知らない君へ。

この本は、『POPEYE』842号「車が欲しい！」(2017年)、902号「車があれば！」(2022年) に掲載された情報を再編集したものです。本誌編集ページに掲載されている情報や、商品の価格は掲載時点のものも含まれます。現在の情報とは異なる場合がありますので、ご了承ください。

©マガジンハウス2023禁・無断転載
® Hearst Holdings,inc.

CITY BOYS CAR CLUB

車とシティボーイ。

車は僕らに“自由”を与えてくれる。
好きなときに乗りこんで、好きな音楽やラジオを聴きながら、
どこでも好きな場所へと走っていける自由さを。
まずはこの本を参考に、欲しいと思える車を見つけてみよう。
良き友人のように、長く大切に付き合っていける君の一台を。

illustration: Krzysztof Nowak

Los Angeles Car Club "Outtakes".

Taro Hirano

僕が車に乗る理由。

初めて買った車はホンダの中古車だった。納車されたときの、あのなんだか気恥ずかしいような気持ちは何だったんだろう。買った車を少し遠くに眺めて、ああ、あの車のネジの一本まで僕のものだなんて、まったく凄い話だなと思ったもんだ。買ったばかりの車で恐る恐る恵比寿まで繰り出し、車好きの友人に見せに行くのがとても嬉し恥ずかしかった。きっと急に大人になったみたいな気がして照れくさかったんだろう。

うちの父親はその昔、ビートルに乗っていたらしいが、僕が生まれる頃にはもう車を手放していた。それ以降うちには車がなかった。父親は車どころか免許も失効し、車に乗って家族で出掛けた記憶はない。なので、僕が車を持つということは平野家にとってとてもイレギュラーなことであって、母親はとても心配していたと思う。

だけど、僕には車が必要だった。僕はどうしてもスケートボードの写真が撮りたかった。それにはスケーター達と日夜を問わず付き合わなければならない。夜中にこっそり攻めるスポットがあったり、辺鄙な工場地帯までスポットを探しに行ったり。カメラ一式とストロボ3台に大きな三脚を担いでプッシュはできない。だから僕にとっての車とは好きな写真を撮るための道具、

というところから始まっている。

良い写真が撮れた帰りの車中はとても自由な気分になった。このまま高速道路に乗って、どこへだって行ける気分。その気になれば横浜だって、名古屋だって、京都だって行ける。交通ルールさえ守れば、僕は自由だ。自分の意志で動く責任ある独自な存在だ。本当は、車なんてなくてもそうあるべきだけど、ぎゅうぎゅうに押し込められた満員電車の中ではなかなか湧き出てこない感情ではないか。

今まで3台乗り換えたけど、全て初めて買ったホンダと同じ車種。どうしてだろう? いろいろと乗りたい車はあるのだけど、どうしてもまた同じホンダに乗ってしまう。似たような服ばっかり買ってしまうのと同じことなのだろうか。それとも車を買ったばかりの初々しいあの感情にまだ取り憑かれているからなのだろうか。たぶん、きっとそうなんだ。あの自由をいつでも味わいたいんだ。さあ、今から車にスケボーと釣り竿を積んで、どこか山の方にでも行っちゃおうかな。

文、写真・平野太呂
ひらの・たろ｜写真家。1973年生まれ。2016年に刊行した私家版写真集『Los Angeles Car Club』では、ロサンゼルスのフリーウェイを疾走する「ピン」ときた車を追いかけて、自身も車に乗りながら並走し撮影した。この6台の車の写真はその本編に収まらなかったアウトテイクである。主な著書に『POOL』(リトルモア)、『ばらばら』(星野源と共著／リトルモア)、『東京の仕事場』(マガジンハウス) などがある。

ポパイの名車図鑑

BEST CARS FOR CITY BOYS

**気になるあの人たちの愛車を18のカテゴリーに分類。
わかったのは、“車は人なり”。乗りたくなったが吉日、さあ君なら何を選ぶ？**

ルーフが開き、寝室になるのがウェスティ最大の特徴。夏は涼しく快適。

VOLKSWAGEN VANAGON WESTFALIA CAMPER 1984

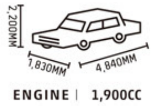
フォルクスワーゲン ヴァナゴン　ウェストファリアキャンパー '84年式

OWNER

谷和レオ

「St. Heavogon Studio」代表

CAR



ENGINE | 1,900CC
PRICE | ¥1,800,000
MILEAGE | 240,000KM

見よ！　いいアイボリーに丸い4つ目、ゴツいバンパーは、僕らのツボを押さえまくり。「4つ目はサウスアフリカングリルという、南アフリカ仕様のオプション。アメリカのVWバンカスタム専門店『Rocky Mountain Westy』でバンパーはじめ、カスタムパーツを揃えました。足回りもリフトアップしてます」と谷和レオさん。米国の『eBay』で発見、輸入代行業者に頼んで、カスタムしてから輸送。ウェスティ仕様で、ルーフとリアシートで大人4人就寝可能、台所、冷蔵庫、ソーラー発電、シャワーも装備の泣く子も黙るまさに“家”！　昔、1世代前の“T2”に乗っていたという谷和さん。トランスポーターは、離れてもまた帰ってきたくなるような“ホーム”なのかもね。

後部座席は一瞬でフルフラットのベッドに。作品運搬も安心。

運転席の後ろには冷蔵庫の他、ガスコンロ、シンクも。

カスタムパーツのシャワー。タンク内の水は太陽光で温水に。

観音開きの貯水タンクと予備タイヤ、バンパーも追加。

※P10〜33のCARデータの「PRICE」は、オーナーの購入価格を表します。

photo: Kazuharu Igarashi text: POPEYE

3列シートもゆったりの広さ。

後ろはハッチバック。

VOLKSWAGEN CARAVELLE GL 1987

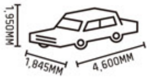
フォルクスワーゲン カラベル GL '87年式

OWNER

井原綾子

家具リペア職人

CAR



ENGINE | 2,100CC
PRICE | ¥1,100,000
MILEAGE | 144,000KM

「家具の配送で職場のボスのカラベルを運転させてもらったとき、操作感がめっちゃ楽しくて、そのあとすぐ頼んだんです。私に売ってください！　って」。神戸のヴィンテージ家具店『北の椅子と』の職人、井原綾子さんとこの車の出合いはこんな感じ。「リアエンジンの後輪駆動（RR）で、後ろからグーッと行くような乗り味がたまりません」と仰せのとおり、初代から続く“RR”が味わえるのは“T3”が最後の世代で、'90年からフロントエンジン・前輪駆動に仕様変更された。「簡単なトラブルなら自分で直しながら乗れるのがワーゲンのいいところ。自分の職業柄かもしれませんけど」。休みには大好きなバイクを乗せて、モトクロスへ。ネイビーの色味も超よくないか？

店の前で配送する椅子を積み込む。シートを1列取り外すと積載量は抜群。

01 | T3

ヴァナゴン！ カラベル！ ヴァナゴン！

　のっけから断言しよう。バンは“T3”ことワーゲンのトランスポーター第三世代がいいと。まず、名前が最高じゃないか。“VAN”と“WAGON”で“VANAGON”。もう一方の“カラベル”とは15世紀頃、探検家たちを海に誘った帆船の通称。角ばったフォルムは言わずもがな。そもそも両者は全く同じ車なんだけど、その輸入経路が違う。「ヤナセ」経由のものは“カラベル”、1990年設立の「フォルクスワーゲン アウディ日本」経由のものは北米仕様の“ヴァナゴン”の名があてられたってわけ。なかでもドイツの名門コーチビルダー、「ウェストファリア」社によるキャンパー仕様、通称“ウェスティ”はベッドあり、屋根は開き、たまらん！

『ムーンライトギア』の前で一時停止。いい業務用感がシティにも映える。

VOLKSWAGEN VANAGON GL WESTFALIA CAMPER 1989

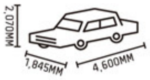
フォルクスワーゲン ヴァナゴン GL ウェストファリアキャンパー '89年式

OWNER

小峯秀行

「NOMADICS」取締役

CAR



ENGINE | 2,100CC
PRICE | ¥2,500,000
MILEAGE | 160,000KM

ワークウェアをファッションに取り入れるように、“業務用”感溢れる車を自分の一台に選ぶのは粋である。その意味では、四角目のヴァナゴンのホワイトは抜群にカッコいい。岩本町『ムーンライトギア』を運営する小峯秀行さんの一台もアジのある“業務顔”をしているが、こちらもやっぱり“ウェスティ”仕様。追加カスタムは後部に付けたイタリア〈FIAMMA〉のキャリーのみで、括りつけられたファットバイクがよく似合う。「数年前には伊勢から鳥取を2週間サーフトリップしました。もちろん宿はこの車。窓が大きく、光がたくさん入って気持ちいい。旅だと何をどう積んでいくかを考えるのも楽しいですよ」と小峯さん。君ならこの広い空間をどう使うだろうか？

キッチンのプロパンガスは週末に使う程度なら年一回の充填で十分。

DATSUN 240Z 1972

ダットサン 240Z '72年式

OWNER

手嶋 慎

〈MAKERS〉デザイナー

CAR

ENGINE | 2,393CC
PRICE | ¥2,500,000
MILEAGE | 170,000KM

これが噂の日産フェアレディZか、と思いきや、手嶋さんが教えてくれた車名は“ダットサン 240Z”。ダットサンとは、かつて日産が海外への輸出車に冠したブランドネームで、世界各地で広く人気を博した。つまり、このZは逆輸入車で左ハンドル仕様。手嶋さんがその存在を知ったのは、旧車への憧れが強まった中高生の頃だった。「それからZにいつか乗ってみたいと心の奥底にありました。2016年の購入に至るまでずっと（笑）」。実際に目にすると、セットバックされた運転席に国産とは思えないフォルムにスピード感がみなぎる。「これぞ！ スポーツカーの真骨頂！ 当時ではズバ抜けたトルク感と走りも爽快。車に乗り込む前に、必ず毎回眺めてしまいます」

高さ127㎝と、驚くほど車高が低いから、マシンとの一体感は格別だそう。

02 | SPORTS CAR

胸高鳴るスポーツカー。

スピードをただ一途に追い求める。そのために計算し尽くされ、研ぎ澄まされたフォルムは別格の美しさ。スポーツカーを前に平常心ではいられないし、スポーツカーという単語だけで興奮する。とはいえ、ショールームに置かれた近未来的すぎる車はあまりにも無機質で、さほど高揚感を得られないのも確か。対照的に、この２台には確実にときめく。ブロロロンと音を立てながら走る'72年式ダットサン 240Z、ぐいんと滑るように進む'87年式ポルシェ 924S。正面を見据え、ハンドルをぎゅっと握り、アクセルを踏み込むドライバーの息吹と相まって、加速とともに車の“肉体感”が際立ってくる。そこには“スポーツ”が満ちているのだ。

PORSCHE 924S 1987

ポルシェ 924S '87年式

OWNER

神保匠吾

「DRIVETHRU」ディレクター

CAR

ENGINE | 2,470CC
PRICE | ¥2,000,000
MILEAGE | 130,000KM

車にまつわるウェブサイト「ドライブスルー」を運営する神保さんが選んだのは、少しマニアックなスポーツカー。ポルシェといえばの“911”ではなくて“924”。初めて知ったけど、正面、横、後ろと、どこから見てもポルシェっぽくない。「'76年に新世代ポルシェとして発売された924。これは、その後期モデルです。バックフェイスが特徴的なのは、フォルクスワーゲンと共同開発で作られたものだから。国産に見えるのはマツダのRX-7が模倣しているからといわれています」。週末、趣味のサーフィンに行くときは、もちろん924Sで。「同じスピードで走っていても、他の車とまったく違う時間を過ごせる。それが、スポーツカーの一番の良さかもしれません。バイクに近い感覚です」

924はオートマ車があるが、「心底、その良さを体感するならマニュアル！」と断言。

photo: Takeshi Abe (P12), Koh Akazawa (318i), Kazuharu Igarashi (323i)
text: Koji Toyoda (P12), Yu Kokubu (P13)

BMW E21 318i 1982

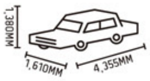
BMW E21 318i '82年式

OWNER

島田悠紀

『FILM』オーナー

CAR



ENGINE | 1,766CC
PRICE | ¥1,500,000
MILEAGE | 100,000KM

まず解説しよう。BMWの品番の見方は最初の「3」がシリーズ（ベンツでいうAやE)、続く「18」が約1800ccという排気量を表している。島田さんはアメリカ買い付け時に、街で素敵な車の写真を撮りためていたそう。なかでもE30にグッときて古いBMWの購入を決意。帰国後に調べると、E30より安い１モデル前のE21を発見！　千葉県館山市の中古車店まで足を運び、正統派なアルピンホワイトカラーや、２ドアセダンのコンパクトさ、燃費10km/ℓの実用性に加え、いい意味で“日常的”な気取りすぎていないこのE21を購入。前オーナーが替えたBBSのホイールと〈RECARO〉のシート以外は純正のままで、今後も乗り替える予定がまったくないほどのお気に入りだ。

３シリーズは日本の立体駐車場に収まるサイズも魅力！

03 BMW

BMWはE21で決まり！

ナイキよりプーマ、トミー・ゲレロやレイ・バービーよりビン・ジ・リン。どの世界にもハズしとは違うけど、絶妙なツボがある。世界中に熱心なファンを持つ小型２ドアセダンの大ヒット作2002（通称マルニ）と、バブル期にナンパ車としても人気を博した“六本木のカローラ”ことE30。年式的にその間にいるE21こそ、まさに僕らの“ツボ”。スポーティなコンパクトサルーンの３シリーズ初代にあたるE21は、2002の格式そのままに価格控えめ。色っぽくて直球のおしゃれ感漂うE30に比べ、角張ったスタイルもいぶし銀で小洒落てる。名車に挟まれ“忘れられたBMW”なんて呼ばれているが、音楽でいえばレアグルーヴのような小粋でツウ好みの一台。

BMW E21 323i 1982

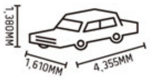
BMW E21 323i '82年式

OWNER

ソリマチアキラ

イラストレーター

CAR



ENGINE | 2,315CC
PRICE | ¥580,000
MILEAGE | 60,000KM

ソリマチさんの愛車は、これまで直列４気筒エンジンだったE21が直列６気筒エンジンに上級グレードアップした323iモデル。33歳で免許を取るなり中古で購入し、23年間一途に乗り続けているというソリマチさんにこの車の魅力を尋ねると、「古いヨーロッパ映画に出てきそうな車が欲しい、と漠然とイメージしているときに出合いました。主人公は絶対に乗らないタイプの車種だけど、背景に溶け込むような自然体な感じに一目惚れしたんです。色合いも相まって“昭和のおっさん顔”というか、一見どこにでもいそうだけど絶妙に味があって、いい顔しているんですよね」と。スーツの色とリンクしているブラジリアンメタリックが超素敵！　やっぱりシブいね、E21！

４灯のヘッドライトも特徴。ソリマチさんはグローブを着ける派で、お供はラジオだ。

04 | MINI

MINIは、やっぱりオースチン?

1959年、イギリス生まれのミニは、ビートルズ、デヴィッド・ボウイ、ポール・スミス、エリザベス女王、冴羽獠など数々のスターに愛された世界一有名な車である。その一方で、年代ごとに変わる社名やグレードが入り乱れ、どれが正解か頭を悩ませる車であるのも確か。だが、しかし、ミニの何たるかを知るのなら、思い切って'60〜'70年代のオースチン（またはモーリス。エンブレムが違うだけで中身はほぼ一緒）時代を選ぶのがベストな選択！小さなボディの四隅に小さきタイヤを配置した象徴的なプロポーション。ゴーカート・フィーリングと呼ばれるワクワクする直感的な乗り心地。僕らの想像するミニらしさは、大体がオースチン時代に完成されたものなのだ。少々値は張るけど、ヴィンテージ古着のオリジナルを着るようにミニに乗るのも悪くないよね。

AUSTIN MINI CLUBMAN ESTATE 1972

オースチン ミニ クラブマンエステート '72 年式

仕事のご縁で「フィッシュマンズ」の故・佐藤伸治さんがかつて乗っていた4速MTのこの一台を譲り受けた仲原さん。観音開きの後部ドアや、木枠張りのカントリーマンタイプほどは気張らない、ウッドパネルもさりげなくていい。フロアマットをめくれば床はボディの鉄板一枚。小さな穴が開けられ、下には地面が見える。「車ってこんな単純な作りなの!?」的なローテク感も愛くるしい。車体が長く荷室の広さも問題ないし、エンジンやパーツのほとんどが現行ミニと同じで部品供給にも困らない。唯一の難点は "夏"。エアコンないからね（笑）。それを踏まえても、簡易的な作りと伝統を感じる、コンバースのオールスターみたいな魅力の詰まった車だ。

OWNER

仲原達彦
「カクバリズム」スタッフ

CAR

ENGINE | 998CC
PRICE | ¥0
MILEAGE | 85,000KM

photo: Kazuharu Igarashi (P14), Taro Hirayama (40), Takeshi Abe (60)
text: Yu Kokubu (P14), Koji Toyoda (P15)

オフロードのトレイル用に、
純正ではなくて、自衛隊用の
背の高いタイヤを履かせる。

TOYOTA LAND CRUISER 40 1984

トヨタ ランドクルーザー 40 '84 年式

OWNER

ピーター・アイビー
ガラス作家

CAR

ENGINE | 3,400CC
PRICE | ¥1,500,000
MILEAGE | 83,403KM

富山で暮らすピーター・アイビーさんは、ランドクルーザー40で山や川を縦横無尽に走り回る。"ヨンマル"は1964年に登場し、20年以上も他のモデルと並行しながら生産され続けた。ピーターさんが所有するのは後期の型番BJ46で、福岡県の八女市役所で使われていたものらしい。「錆加工のされてない鉄板ボディが"売り"の40系の中でも、ここまで状態のいいものは珍しい」。排気量は3400ccで、バスやフォークリフトに使われるディーゼルの3Bエンジンを搭載。壊れにくいからこそ、力強く走れる。「日々、道なき道を見つけては、ランクルで踏破して、獣道ならぬ"ランクル道"を更新し続けてます。私にとってヨンマルは完全に遊び道具ですね」

後部座席&荷室はもはやピーターさんの部屋！　無駄を省いた運転席も軍用車みたいでカッコいい。

05 | LANCRU

ランクルは40か、60か？

屈強な車の代名詞、トヨタ ランドクルーザー。前身は'50年代に警察予備隊（現・陸上自衛隊）への納入を狙って開発されたジープBJ型というのだから宜なるかな。60（ロクマル）、70（ナナマル）など番号が名称でもあり愛称。約70年前の誕生以来、系譜が入り組み、その全貌は掴みにくいが、歴史のスタートは20から。分岐点になったのは40と60。前者は本格的クロスカントリー仕様。じかに振動を感じる荒々しい乗り心地だが、野分け山分け、悪路をものともしない。後者はオフローダーの"遺伝子"を保ちつつ、シティコミューターとしての機能が格段にアップ。全幅1800㎜の車内はとにかく快適だ。ランクルは語り尽くせないが、とにかく40か、60か。思い切ってこの２択だ。

マシンっぽいヒューズボックスが好きだという運転席。渋い表情のハンドルは木製だ。

60のバックドアは観音開きと聞いていたが、上下開きなのはオートマ車だから。製造年などに応じて仕様が異なる。

TOYOTA LAND CRUISER 60 1989

トヨタ ランドクルーザー 60 '89 年式

OWNER

鈴木善雄
「CIRCUS」ディレクター

CAR

ENGINE | 4,230CC
PRICE | ¥2,300,000
MILEAGE | 20,000KM

「CIRCUS」の名で内装デザインなどを手掛ける鈴木さん。「とにかく壊れない車を」ということで60を購入。「丸目のデザインが決め手のひとつ。あとは、この大きさ。仕事で使うサブロク板がすっぽり入ります」。購入後２週間ほどの旅行へ。そのとき、"シティカー"としての実力もすぐに実感したとか。「車内が広いので、おおらかな気分で運転ができます。シートにフィット感があり、長時間座っても疲れません」。ホイールの金具を回し、運転席のボタンを押せば2WDと4WDのスイッチができるのもポイント。「4WDは燃費が悪いと聞いたので、都内では2WDですが、いざとなれば、即、駆動性を発揮できる」。タフで優しい。それが"ロクマル"だ。

こんなにイカツイ見た目なのに、アメリカでは商用車の位置付けらしい。

GMC STARCRAFT 1997

ジーエムシー スタークラフト '97 年式

OWNER

Ryohu
ラッパー

CAR

ENGINE | 4,300CC
PRICE | ¥5,000,000
MILEAGE | 81,957KM

'90年代に日本で爆発的にヒットしたGMCのアストロ。当時のBボーイらにも愛されたが、そのDNAを受け継ぐかのようにラッパーのRyohuさんもこのモンスターカーのアクセルを噴かす。父親から譲ってもらったというこちらは、アストロを改造した"スタークラフト"というコンバージョンモデル。シートが全自動リクライニングなのは序の口で、照明にはイルミネーションランプ、さらにテレビモニターまで付いたVIP仕様！「家より居心地がいいかも。コックピットのような運転席に座り、天井に設置されたスイッチをパチパチとやれば、"機長"のような気分を味わえますし。これでライブ会場に乗り付けると、ラッパーとしての"妙"な貫禄も出るんですよ」

ルーフを掃除できるように梯子付き。

飛行機のビジネスクラスのように、ゆったりくつろげる車内。

06 HUGE CAR

デカい車には夢がある。

目の前にすると、"BIG"というより"HUGE"という単語がしっくりくる。単に大きさの話じゃなくて、"感嘆"の念を抱いてしまうのだ。なぜって、デカい車に乗る人は、総じて器が大きいと思うから（念のため、小さい車に乗る人の器が小さいというわけではない）。図体がデカくて燃費の悪い車をとことん面倒見るという"度量"。何事にも動じることなく、ブロロと低音を響かせながらペースを崩さずに走るという"余裕"。何より、東京で、この車を我が物としてコントロールできる"才腕"。負けました、と頭を下げるしかない。って、諦めたらそこで終わり。器が先か、車が先か。デカい車が人を育てるとしたら、愛車候補にするのもありだ。

フロントガラスはサイドまでが広く、目線も高い位置なので、視界も良好。「先読み運転でイライラしませんが（笑）」

FORD ECONOLINE PANEL VAN 1999

フォード エコノライン パネル バン '99 年式

OWNER

仁科晴雄
『ザップ サーフ』オーナー

CAR

ENGINE | 5,400CC
PRICE | ¥999,000
MILEAGE | 263,742KM

フルサイズバン歴23年！ の仁科さんは、フォード エコノライン パネル バンに乗る。FEDEXの配達車としても使われる、アメリカでもっともポピュラーなフルサイズバンだ。「西海岸のサーフカルチャーには欠かせない車です。僕も基本はサーフィン専用。手作りのカーテン、店のカウンターと同じ木材で仕上げた机など、最低限使いやすく改造。ベッドに寝転び、海を眺めながら、潮や風を待つのは最高です。宿いらず（笑）」。アメ車の代名詞、V8エンジンを積みトルクが太いので、ロングドライブも快適。「実は都内で見掛ける、2.1m以内のパーキングやコインパーキングにも止められます。一発で決められたときほど気分いいものはない！」

photo: Takeshi Abe, Taro Hirayama (TACOMA)
text: Koji Toyoda

サイドの4WDというステッカーが、シルバーボディにホント効いてる！

テントに使用される帆布をカスタムして、雨用カバーに。

MAZDA PROCEED 1997

マツダ プロシード '97 年式

OWNER

鰤岡力也
〈モーブレーワークス〉代表

CAR

ENGINE | 2,605CC
PRICE | ¥1,000,000
MILEAGE | 84,454KM

「2m超えの木材を載せられるというたった一つの理由で手に入れました（笑）」。『パドラーズコーヒー』などの内装をはじめ、家具も作る鰤岡さんの愛車は、日本車にしては規格外の全長を誇るマツダのプロシード！ 4WDで馬力もあるので趣味の渓流釣りへもこれで行くそうだが、その使い方はアメリカのカントリーマンそのものだ。「最大積載量は500㎏もあるので、何も気にせずガンガン荷台に放り込んじゃってます。アメ車並みに堅牢だし、2ドアだけど家族4人乗れて言うことなし。仕事にプライベートに“頼れる道具”って感じですね」。ただ、日本車なのに、4㎞/ℓと燃費が悪いのが玉に瑕。「ここだけはアメリカの真似しなくていいのに（笑）」

※取材当時の内容です。2023年現在は柳田さんとは別のスタッフが使用。

ハイラックスがベース。さらに上のサイズにはタンドラがある。

ここが仁科さんの“簡易宿”。一度は夢見る最高の空間。

TOYOTA TACOMA 2013

トヨタ タコマ '13 年式

OWNER

柳田大地
『ディセンダント』店長

CAR

ENGINE | 3,950CC
PRICE | ¥4,000,000
MILEAGE | 24,700KM

サイドにペイントされた“DESCENDANT SQUADRON”（クジラ軍団）という文字。どこまでもアメリカンマッチョな、このタコマは〈ディセンダント〉の社用車。トヨタの北米専用に販売するピックアップトラックである。デザイナーの西山徹さんが、スタッフ総出で行くキャンプや、納品の際やイベント会場に機材を搬入するときなどに、何かと使えるだろうと、2016年末にドカンと男買いしたとか。ハンドルを握るのは、もっぱら店長の柳田さん。「排気量もボディサイズもアメリカンですが、これでもミドルサイズのエクストラキャブ。現地では軽トラ的な扱いなんだから、アメリカは想像以上にデカいっすね。最初に運転したときは、やっぱり緊張しました」

後ろあおりを倒して、付属のエクステンドベッドを下ろせば、さらに荷室の容量が増やせる！ 筋肉質な外観とは逆に、車内は最新鋭な設備が整ったクールな見た目。大味なアメリカブランドと違い、日本企業らしい細やかな仕事ぶり。

実はアラスカでは、機能性の高さからスバル車の人気は高いとか。雪道だけじゃない。夏のアラスカでもフォレスターは大活躍。

SUBARU FORESTER 2001

スバル フォレスター '01 年式

OWNER

石塚元太良
写真家

CAR

ENGINE | 1,994CC
PRICE | ¥500,000
MILEAGE | 50,000KM

アラスカは町と町の距離が長く、1カット撮るにもかなりの移動を強いられる。それだけに、石塚さんは滞在時の多くの時間を車で過ごす。「これまでアラスカではジープ ラレードやフォード エクスプローラーなど大型4WDに乗っていたんです。車中泊はかなり快適ですが、大きな車体は起伏の激しいアラスカの道ではかなり負担が大きくトラブルも山積み」。でもフォレスターに乗り替えてからは、故障の不安は一気に解決したとか。「車体の大きさとパワーのバランスが、アラスカの道にすごくマッチしています」。ただ唯一、不安に感じるのがヘラジカの存在。「アラスカで一番恐ろしい事故がヘラジカとの衝突。これぱかりはフォレスターでも勝てるかどうか……」

07 | HIGH SPEC

アラスカのフォレスターか、湘南のディフェンダーか？

街でよりも精悍に見えるのは気のせい？　いや、そうじゃない。スペックを解放させうる環境に置かれたら、きっと車は引き締まった表情になるのだ。アラスカに拠点を持つ写真家・石塚元太良さんの現地での愛車はスバル フォレスター。起伏が激しく雪も積もる険しい道をものともしない安定した走りは、まさに頼れる“相棒”。野を越え山を越え、ときに川の向こう岸まで渡り切ることもできるディフェンダー。このゴツい車を湘南の海辺で駆るのは〈キャプテン サンシャイン〉デザイナーの児島晋輔さんだ。とはいえ、高い機能性に尻込みすることはない。最上級のゴアテックスウェアを普段着にするように、オーバースペックを街で楽しむのも悪くはない。

横から見たロングボディも、この車の真骨頂。

LAND ROVER DEFENDER 110 2021

ランドローバー ディフェンダー 110 '21 年式

OWNER

児島晋輔
〈キャプテン サンシャイン〉デザイナー

CAR

ENGINE | 1,995CC
PRICE | ¥7,500,000
MILEAGE | 20,000KM

山道や砂漠などオフロードを走るイメージが強いけど、真っ白なディフェンダーは海辺にもよく映える。児島さんの愛車は新型の110だ。「かつて同じ110の旧型を愛用していたのですが、雪山で大雪に見舞われたときも、他の車が身動き取れない状況の中で、我関せずとばかりに悪路を走破してくれて。ディフェンダーは本当に頼もしい車です」。そのヘビーデューティな作りを経験しているからこそ、新型も迷わずマイカーに。「デザインも機能性も進歩した新型はとにかく快適で、純正のキャリアにボードを積んで、近所の鎌倉のサーフスポットに行くのもコンビニ感覚。しかも目線が高いので、新湘南バイパスを流しながら海を見渡すと気持ちがいいんですよ」

2021年に手に入れた新型ディフェンダーは、旧型と同じモノトーンをセレクト。フジホワイトという硬派な正式名称もなんだかヘビーデューティな雰囲気。

photo: Gentaro Ishizuka (FORESTER), Kazuharu Igarashi (DEFENDER), Takeshi Abe (P19)
text: Yuichi Samejima (P18), Koji Toyoda (P19)

※取材当時の情報です。2023年現在、髙木さんは別の車を所有。

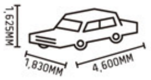
MERCEDES-BENZ 220S 1958

メルセデス・ベンツ 220S '58 年式

OWNER

髙木雄介
〈オールドジョー〉デザイナー

CAR



ENGINE | 2,200CC
PRICE | ¥8,000,000
MILEAGE | 168,923KM

髙木さんは、修理工場で「これは乗るものじゃない。飾るものだ」と諭されたとか。まさに"骨董品"とも言えるメルセデス・ベンツ 220S。ただそこに止まっているだけで、"ロマン"を感じてやまない。ちなみに、映画『シングルマン』で主人公は220Sのクーペタイプを愛用。監督のトム・フォードもロマンに魅せられていたか。愛称は"ポントン"で、英語で"舟橋"の意味。「丸みを帯びた流線形のボディを横から見ると、戦場に架ける臨時の橋に似ているから付けられたとか。インテリアも素晴らしく、ウッド製ダッシュボードの滑らかな曲線美や革張りのシートの座り心地の良さにはいつもうっとり。この時代のドイツ車ならではの"花"と"実"を220Sは備えています」

あらゆる角度から、精緻なフォルムを感じられる。

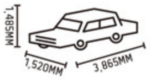
CITROËN AMI 6 1966

シトロエン アミ 6 '66 年式

OWNER

長岡亮介
ミュージシャン

CAR



ENGINE | 602CC
PRICE | ¥1,200,000
MILEAGE | 72,867KM

ペトロールズのボーカル&ギターをはじめ、様々なアーティストと音楽を創造する長岡さんが溺愛するのはアミ6。イタリアの巨匠カーデザイナー、フラミニオ・ベルトーニが手掛けた最後の作品だ。リアサイドのクリフカットデザインはスペイシーであり、かなりの速さを感じさせる。「伝説的大衆車、2CVをベースにアップグレードしたシトロエン初のミドルサイズセダン。中央部分が窪んだ独特のフロントマスクは車好きの間で議論になるけど、僕は好きですね」。意外にも、故障はほとんどないとか。「ボディの揺れ方がゆったりしていて、いくら走ってもお尻が疲れないのもいい。京都まで自走で行ったことがありますが、かなり快適でした。遅いところ以外は（笑）」

"アミ"とは仏語で友達の意味。確かにどこか人っぽいよね。

08 | ANTIQUE

麗しのアンティークカー。

"ロマン"を最優先して車を選んだっていいじゃないか！〈オールドジョー〉のデザイナーの髙木雄介さんの愛車、メルセデス・ベンツ 220Sはなんと'58年式。よくぞここまで残っていてくれたと心から感謝したい。ドイツ車らしい質実剛健さはもちろんだが、艶っぽい黒と優美な曲線のフォルムが相まって、この車はどこかセクシーですらある。ミュージシャンの長岡亮介さんのシトロエン アミ6は少し後輩、といっても'66年式だ。こちらも立派なアンティークカー。フランス車らしい淡い水色と、今見ても"未来"を感じさせる攻めたデザインはさすがの一言。故障の心配はごもっとも。ただ、この2台のハンドルを操る"ロマン"は何物にも代えがたいのだ。

店内は北欧調。出店情報はcafe-ryusenkei.comまで。

NISSAN LEAF 2013

日産リーフ '13 年式

OWNER

合羅智久
『CAFE Ryusenkei』オーナー

CAR

ENGINE | ----
PRICE | ¥3,600,000
MILEAGE | 76,000KM

この日は、神奈川県真鶴半島の中川一政美術館に移動コーヒースタンド『CAFE Ryusenkei』を出店。リーフとエアストリームを切り離すことから一日はスタート。「最初は思い付きだったけど、絵が浮かんだら、もうリーフしかないって。牽引できる目いっぱいのサイズを17フィートと割り出して、エアストリームを注文。最初、みんなから『引っ張れないだろう』と言われたけど、箱根の曲がりくねった坂道も息継ぎなしで快適に走れます」。バッテリーが床に敷いてあるからコーナリングも抜群なのだとか。「GTR並みの加速性も特長。でも、リーフに乗っていると飛ばさないんです。一定の速度で走ったほうが、バッテリーが長持ちして"電費"がいいから」

09 | EV CAR

EVカーっていいじゃない!

正直、「EVカー＝エコ」くらいの認識しかなかった。でも、『北欧家具talo』の店先でアメリカの古いキャンピングトレーラー、エアストリームを牽引する日産リーフを見た瞬間、先入観は吹き飛んだ。これはEVカーだから様になる。そう思わせる説得力があったのだ。エアストリームで移動コーヒースタンドを営む合羅智久さんは、当初のリーフから電源を取れるかもという構想が現状では叶わなかった後も、「この選択は必然！」ときっぱり。EVカーへさらに目を見開かせてくれたのは、写真家・鈴木心さんのBMW i3だ。「自分の生活のあり方をi3にハメ込んだ」と断言する惚れ込みよう。最先端のクールな車。僕らはEVカーをまだまだ知らなすぎる！

BMW i3 2014

ビーエムダブリュー アイスリー '14 年式

OWNER

鈴木 心
写真家

CAR

ENGINE | 647CC
PRICE | ¥6,000,000
MILEAGE | 40,000KM

「BMWはi3のために新たな工場を作ったんです。未来を見据えて、『車はこうあるべきだ』という意気込みをひしひしと感じる」。開発から生産まで再生可能エネルギーを使用。キャビン全体が軽量かつ頑丈なカーボンファイバー樹脂。フル充電でなんと350km以上走行可能。「ドライブ中、すべてのパーツが"そこにある理由"を語りかけてきます」。まさに"未来"を具現化した車だ。「氷の上を滑るような乗り心地も独特。アクセルを踏み込んだときの俊敏な加速も驚くほど。アクセルから徐々に足を離すと、それに応じてブレーキがかかっていく。ギアシフトとはまた違う、"足の抜き方"で車をコントロール。運転する楽しさがちゃんと残されているのも素晴らしい」

扉は観音開き。9Lだけガソリンが入り、約100km走行可能。

photo: Koh Akazawa (LEAF), Shin Suzuki (i3), Fumihito Ishii (BEETLE)
text: POPEYE (P20), Shogo Jimbo (P21)

OZ MOTORS

コンバートEVに精通したカスタムショップ。これまでにホンダ シティカブリオレやダットサン フェアレディなどの名車をEVに。
DATA 神奈川県横浜市都筑区大熊町224-5　045・577・9190

通常、リアに搭載される空冷エンジンは、独特な乾いたエンジンサウンドが魅力ではあるのだが、そっくり電動モーターにスワップ。かのポルシェ博士が設計しただけあって、ビートルのメカニズムはエンジンの積み降ろしもしやすく、コンバートEVにもってこい。ぎゅうぎゅう詰めだったエンジンルームの中央に収まる電動モーターや、スムーズに走るEVビートルを目にしたら、誰だって心を奪われるだろう。

シンボリックなボディデザインが愛嬌抜群！　ヤレた内外装はそのままにラットな雰囲気で乗りこなしたい。

CAR COLUMN 1

えっ! ビートルがEVカーに!?

文・神保匠吾（DRIVETHRU）

どんな時だって〝移動〟は楽しいはず。旅なんて楽しさの塊みたいなもんだし、ロードトリップなら楽しさ100倍！　'15年に立ち上げた『DRIVETHRU』（ドライブスルー）は、そんな移動をテーマにしたオンライン・モーターマガジン。キャンピングトレーラーに住んでみたり、ヴィンテージカーをレストアしてカーシェアリングにしてみたり、常にチャレンジングなプロジェクトを企画して配信中（詳しくはサイトをチェックしてほしい！）。

そんなボクたちが2017年に始めたプロジェクトは「コンバートEV」。コンバートEVとはなんぞや!?　というと、ガソリンエンジンの載ったヴィンテージカーの中身をそっくり電気自動車にしてしまうこと。ここ最近、急速に増えつつある充電スタンドといったインフラの充実をはじめ、日本全国にEVの波が着々と広がっている。でも、ただ単に環境に優しくスマートなEVや、iPhoneがクルマになったようなガジェット感覚なEVも興味深いけれど、どこか〝マシン〟と呼べるクルマがボクらにはしっくりくる。そこで、とっておきの相棒をEVにコンバートすることを思い立った。それはボク自身が学生時代にオンボロのまま乗っていたBMW初代3シリーズ（E21）。実は10年以上も地元、九州の友人宅に眠らせていたままだったクルマを2017年夏、東京まで連れてきた！　その後の展開はボクたちのサイトをチェックしてもらいたいが、便利この上ない公共交通網の発達した都市部の移動の中で、いかにパーソナルな乗り物で移動することがクリエイティブであるか、今後もご期待いただきたい。

さて、ボクたちの話はこの辺にして、今号は『ポパイ』がクルマ特集をするっていうから、とっておきのコンバートEVとしてフォルクスワーゲン・ビートルを紹介したい。

ビートルは、正式名称を「タイプ1」と呼び、ドイツ語で国産車を意味するフォルクスワーゲンが世に送り出した名車中の名車。カブト虫に似たフォルムからニックネームで呼ばれ続けてきたように、世界中で長く親しまれ続けてきたクルマ。中でもビートルは'70年代をはじめカリフォルニアとは切っても切れない存在。ちょうどその頃、創刊した『ポパイ』の読者層の乗りたいクルマの候補には、いつもビートルがあったはずだろう。そんなビートルを今、乗るなら、まるで新車のようにレストアするのも悪くないけれど、せっかくなら当時の読者が羨む存在に仕立てたい。そこで登場するのがコンバートEV。レトロな見た目はそのままに、EVになったビートルは、まさにレトロフューチャーなマシンに！　本来、エンジンがあった場所には電動モーターを搭載。カスタムを手掛けるのは、コンバートEVに精通した『OZモータース』（ちなみにボクたちのプロジェクトもこちらとのコラボ企画）。数十年の時を超えて生まれた内外装のヤレた風合いは、様になるので、あえてそのままの状態で乗りこなしたい。元祖シティボーイが思いを馳せたビートルをEVでドライブできるなんて、未来って感じで悪くないよね!?

『DRIVETHRU』の名物企画は僕が学生の頃に愛用していたオンボロBMWをEVカーに！　詳しくは、http://drivethru.jp

フロントグリルにはCVCCロゴと日米で「カー・オブ・ザ・イヤー」を受賞した記念のグリルバッジが。

コロンとした後ろ姿はゴム製のマッドガードもグッド。

10 '70s CAR

'70年代の国産車が愛おしい。

手のかかるヤツほどかわいいとはよく言ったものだ。'70年代生まれの日本車は今やパーツも希少で、修理できるエンジニアも激減している。ひとたび故障したら、修理にかかる時間は思いのほか長い。レトロカーを愛車とする行為は一筋縄ではいかないのだ。だからこそ、そこには愛しかない！　後年に「20世紀優秀技術車賞」に輝いたホンダ シビックに、あのジウジアーロがデザインしたいすゞ 117クーペ、国産スポーツカー開発の先駆けとなった2代目トヨタ カローラ。ここで紹介する3台は、後世に影響を与えたエポックメイキングな車ばかり。惜しみなく愛を注ぐにはぴったりの名車たちだろう。もちろん、"名もなき一台"に向けた愛も、十二分に尊い。

ドアの"ロックしましょう"ステッカーまで発売当時のまま。

当時斬新だったハッチバック式3ドア仕様は、日本よりアメリカで大ヒット。

HONDA CIVIC 1976

ホンダ シビック '76 年式

OWNER

高澤敬介

『前田屋』／〈WHYTROPHY〉主宰

CAR

ENGINE | 1,495CC
PRICE | ¥600,000
MILEAGE | 93,000KM

1970年代にアメリカで実施された厳しい排ガス規制を世界に先駆けクリアしたCVCCエンジン。その技術が高く評価された初代シビックを高澤さんが手に入れたのは約20年前。「当時はたくさん走っていたのですが、乗りつぶす人が多かったせいか、状態がいい車体はかなり少ないんです。このクルマはオールペンこそされていたものの、限りなくオリジナルに近い状態で、走行距離も少なかったので即決しました」。前オーナーが大切に保管していたという奇跡のシビックは走りも快調。「消耗品を海外から取り寄せたりしますが、大きなトラブルは一度もなし。サスペンションを交換したおかげか、キビキビと走るので街中ではちょうどいいサイズですね」

photo: Koh Akazawa (CIVIC), Kazuharu Igarashi (117 COUPE), Takeshi Abe (COROLLA)
text: Yuichi Samejima, Koji Toyoda (COROLLA)

ISUZU 117 COUPE XTL 1979

いすゞ 117 クーペ '79 年式

OWNER

南 剛
会社員

CAR

ENGINE | 1,949CC
PRICE | ¥1,600,000
MILEAGE | 67,000KM

都内暮らしに車は必要ない！　最近までそう思っていたという南さんは、いすゞ車専門店の『ISUZU SPORTS』で117クーペを見て、その価値観が一変。「もとからクラシックな車自体には興味があったんですけど、所有欲はなくて。でも117のあまりに美しいフォルムを見て、乗る乗らないにかかわらずとにかく欲しいという気持ちが湧いて衝動買いしました」。乗り始めて気付いたのは'70年代車にしては高性能な作り。「この車体はXTLというラグジュアリー仕様だとか。たしかに内装がベルベット張りで豪華だし、パワステも付いて機能も多彩。走りはというと一癖ありますが、それもまたいい。この重厚感のある走りを体感したら他の車では物足りなさそうです」

※取材時点の情報です。2023年現在、南さんは別の車を所有。

かなり目立つミントブルーカラーは純正。光で微妙に色の印象が変わる。リア付近の"117 COUPE"のプレートも洒落ている。窓脇に付いた三角窓から吹き込む風も絶妙に気持ちいい。

※取材時点の情報です。2023年現在、高下さんは別の車を所有。

TOYOTA COROLLA KE20 1970

トヨタ カローラ KE20 '70 年式

OWNER

高下隆次
工務店代表

CAR

ENGINE | 1,160CC
PRICE | ¥300,000
MILEAGE | 108,711KM

昭和の町工場のような雰囲気の場所に、これまたレトロな2代目カローラがよく似合う。ここは、近畿で住宅などの設計・施工を手掛ける高下さんの仕事場兼自宅。「近所に中古車屋さんの在庫保管をしている駐車場があって、そこで偶然見つけました。即決で購入して、すぐさまガソリンポンプやダイナモ、フロントディスクなど、自分で隅々まで"手術"を施してやっと乗れるようになりました」。約50年前のものでも、手厚く修理すれば、現役復帰は十分可能だ。驚いたのは15km/ℓという燃費の良さ。「スピードもビュンビュン出ますし、時速100kmでも安定の走りを見せますよ」。さすが、日本のハイウェイ黎明期に登場した名車。あらためて、この時代の車のすごさを実感する。

シンプルなエンジンルームだから、自分でも修理可能だとか。

SUZUKI HUSTLER 2016

スズキ ハスラー '16年式

OWNER

田附 勝

写真家

CAR

ENGINE | 660CC
PRICE | ¥1,300,000
MILEAGE | 23,000KM

左の写真は、地方へ飛び回る田附さんが、頻繁に使うという関越道のサービスエリアで自ら撮影。「"軽"だけど、いつもバットモービルのような気構えで闇夜に紛れて運転してますね。撮影で訪れる田舎でも、軽は"大衆車"としてみんなが乗ってるから、違和感なく彼らの社会にも溶け込める。小さい躯体は狭い農道をスイスイ走ってくれるし、"道具"としては最高だと思います」。1台前のスバルのR2と16万kmも共にし、このハスラーに乗り替えたのが、2016年末。「4WDらしい力強い走りは"軽"と感じさせないほど。平均9〜10時間のハードな運転にも耐えうるよう、昔デコトラ乗りに教わった居心地のいい車内へとせっせと改造中です」

歴代の車に貼る、"ワーキングクラスヒーロー"というステッカー。田附さんにとってお守りみたいなもの。

11 | K-CAR

写真家の軽自動車。

外国人には「クール！」に見える軽自動車だけど、メインというよりサブカーの印象が強い。コンパクトで小回りも利いて、何より税金が安い。普通車では絶滅しつつある、丸目の現行車もたくさんある。わかっていても、なかなか軽は視界に入らず。そんな状況がイッペンしたのは、写真家・田附勝さんの愛車がスズキのハスラーと知ったとき。「"道具"として完璧！」という言葉にグッときた。待てよ、よく取材を共にする写真家・阿部健さんの車も、パジェロの"顔"ばかりが強く印象に残っていたけど、イエローナンバーだったな。パジェロミニも立派（？）な軽自動車だ。ともに4WD。四駆の軽を道具として使い倒す。なんか、カッコいいじゃないか。

MITSUBISHI PAJERO MINI 2008

ミツビシ パジェロミニ '08年式

OWNER

阿部 健

写真家

CAR

ENGINE | 660CC
PRICE | ¥1,800,000
MILEAGE | 104,000KM

桜の下で、ぽつんと佇むパジェロミニ。恋人を隠し撮りしたような写真から、阿部さんのパジェロミニへの強い愛が伝わってくる。「共に10年過ごして、この車の良さは、スケボーで人混みの中を縫うように、どんなに狭い道をもススッと走れることだと気づきました。車一台通り抜けるのも難しい道でもあっさり抜けられるのは気持ちがいいですね」。おもちゃのような顔つきで一見頼りなさそうだけど、馬力もある。「なんでも雪で立ち往生したバスを、パジェロミニが牽引して救ったという逸話もあるくらい。小さな見た目だけど"意外と"力持ちなんです。でも、普段は2WDしか使わないので、その"力強さ"を実感する機会は少ないのですが（笑）」

小さそうな荷室は脚立や機材も十分入れられるし、3度の引っ越しでも活躍。"意外と"が、パジェロミニのキーワード。

※取材時点の情報です。2023年現在、阿部さんは別の車（P77）を所有。

photo: Masaru Tatsuki(HUSTLER), Takeshi Abe (HUSTLER, PAJERO),
Kazuharu Igarashi(505), Koh Akazawa(900) text: Koji Toyoda (P24) ,Yuichi Samejima (P25)

PEUGEOT 505 GTI 1991

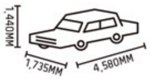
プジョー 505 GTI '91年式

OWNER

江藤公昭

『パピエラボ』店主

CAR



ENGINE | 2,200CC
PRICE | ¥1,500,000
MILEAGE | 130,000KM

フランス車だけどデザインはイタリア人というレアな開発経緯のプジョー 505。デザインに惚れた江藤さんは都内で手を尽くして探すも見つからず、宇都宮まで足を延ばし手に入れたとか。「フロントの有機的なフォルムやバックの美しいラインなど、細部まで手抜きなく作り込まれたデザインにグッときて、初めて所有する車はこれだと心に誓いました。探すのに苦労したけど、その甲斐はありました」。そんなこの車の美しさは外見のみにあらず、室内の作りだってすばらしい。「メーターやハンドルまわりの作りもシンプルで洗練されていて操作もしやすく、ブルーグレーのファブリックで統一された室内のインテリアにもフランス車らしい洒落っ気を感じますね」

12 | EURO CAR

心くすぐるヨーロッパ車。

趣味のいい人の車は、やっぱり趣味がいい。『パピエラボ』の江藤公昭さんのプジョー 505と『サムエル・ワルツ』の保里正人さんのサーブ 900ターボを見ると、それはもう痛切に実感する。どちらもヨーロッパ車で、メジャーすぎず、かといってマニアックすぎず。車の顔やフォルムからも絶妙なセンスが滲み出ている。江藤さんのプジョーは、フェラーリを設計するイタリアの「ピニンファリーナ」がデザイン。「彫刻みたいな美しい面作りに惚れた」との言葉に、さすがと唸るばかり。スウェーデン車のサーブは、北欧ものに造詣が深い保里さんらしい選択だ。車単体より、持ち主と共にあるほうが“洒落感”が増す。センスが行き渡るとはこういうことだ。

バックライトの配列と「900 turbo」のフォントにグッとくる。

SAAB 900 TURBO 1989

サーブ 900ターボ '89年式

OWNER

保里正人

『サムエル・ワルツ』オーナー

CAR

ENGINE | 1,984CC
PRICE | ¥450,000
MILEAGE | 140,000KM

もとは航空機を造っていたというサーブの車は非常に風防効果が高い。その技術のすごさを存分に体感できるのが、保里さんの乗るカブリオレタイプだ。「この車の運転席はまさに飛行機のコクピットみたいで、幌を開けて高速を走っても運転席にほとんど風を巻き込まないほどの設計にはすっかり感動しました。マニュアル車で操作も楽しく、ターボエンジンで低速でも力強い走りもお気に入りです」。幌を開けて走るのが爽快なカブリオレタイプも、思わぬシーンで役に立つ。「僕は仕事柄よくアンティークの椅子や雑貨を載せて運ぶことが多いのですが、幌を開けると荷物が積みやすくて、しかもけっこう大きなテーブルも入るので意外と物を運ぶのにも便利なんです」

スイッチの多い運転席は飛行機の操縦席さながら。

TOYOTA CROWN SUPER DELUXE 2005

トヨタ クラウン スーパー デラックス '05 年式

OWNER

遠山正道
「スマイルズ」代表

CAR

ENGINE | 1,998CC
PRICE | ¥6,300,000
MILEAGE | 32,023KM

東京無線の新型タクシーかと思いきや、微妙に色が違う。遠山さんの車は、そのカラーリングゆえに街中でよく手を挙げられてしまうらしい。「ハイヤー向けの車ですしね。僕は昔から四角い車に目がなくて、街中を走るタクシーを見て決めたんです（笑）」。元は黒塗りだったが、他と一緒は嫌だという天邪鬼な考えがムクッと頭をもたげて、購入時に「トヨペット」で黄緑に全塗装。「"四角い"の次に車に求めるのは、業務用っぽい佇まいなんです。外装はミニカーのクレーン車のボディカラーを参考に、シートはそれに合うレモンイエローの革張りに替えてます。ブラジルっぽいですが、16年たった今でも、我ながらいい出来栄えと見飽きることはありません」

エンジンを降ろし、黄緑にペイント。この情熱はスゴい。

13 | ALL PAINT

塗装車という選択の理由。

'80年代のスウェットが復刻されて、袖が妙に細くなっていたりすると、けっこう落ち込む。それが"オリジン"への敬意ってやつだ。だから、車も純正カラーにかぎる！ それでも気になる"塗装車"がある。代官山で何度か見かけた黄緑のトヨタ クラウンだ。あのインパクトはすごい。どこかのタクシー会社からの払い下げかと思いきや、「スマイルズ」の遠山正道さんが能動的に塗装を依頼したものと聞いてびっくり。祐天寺の『フィート』代表の熊谷富士喜さんは、前オーナーが施した青空のような色合いの塗装に心奪われてトヨタ マーク2ワゴンを購入したという。いきなり"ここ"に手を出すのは勇気がいるけど、オリジンからの逸脱も悪くないかも。

TOYOTA MARK 2 WAGON 1990

トヨタ マーク 2 ワゴン '90 年式

OWNER

熊谷富士喜
『フィート』代表

CAR

ENGINE | 1,988CC
PRICE | ¥300,000
MILEAGE | 132,675KM

「ボルボを買おうと思っていた矢先、友人がこの車を売りに出すという話を聞いて即決。だって、この横顔、完全ボルボそのものじゃないですか」。熊谷さんが"ボルボ"気分、重ステを握るマーク2ワゴン、通称2バンは一部では人気の高い車種。とことん昭和を感じさせるシルバーボディが代表的なイメージだったけど、こんなモナコブルーがあるなんて知らなかった！「いやないですよ。実はシルバーボディがおっさんっぽくて嫌だと、前のオーナーが手作業で塗り替えたんですよ。見事に北関東のヤンキーっぽさが薄れ、北欧の青空のような印象になりました。色を塗り替えるという行為って、こんなにも効果てき面なのかと。って僕はやってませんが（笑）」

フロントマスクは、ボルボというより、完全な昭和顔。

photo: Taro Hirayama (P26), Takeshi Abe (P27)
text: Koji Toyoda

空力を考え抜いた結果、リアガラスはかなりの傾斜角度に。100クワトロが登ったスキー場を想起させる？

AUDI 100 AVANT 1992

アウディ 100 アバント '92 年式

OWNER

YOSHIRO NISHI

アートディレクター

CAR

ENGINE | 2,300CC
PRICE | ¥1,600,000
MILEAGE | 11,899KM

国内外のアーティストやブランドのアートディレクションを手掛けるYOSHIROさんは、アウディ 100 アバントの完成度の高いデザインにずっと憧れていた。CMで登場したクワトロ(4WD)ではないが、100の系譜にあるステーションワゴンだ。「デザイン前のリサーチみたいに、いろんな角度、カラーリングの100アバントを写真で集めていました。懇意にしている中古車店から『見つけたよ！』という連絡が来て、初めて実物と対峙。瞬間で、僕の目に狂いはなかったと確信しました！」。最も心動かされたのはバックデザインだとか。スペーシーなガラスの使い方がとにかく素晴らしい。購入したばかりで乗り心地はまだ評価できませんが、既に大満足です」

14 | '80s CM

あのCMに心を奪われた。

街でホンダ ヴェゼルを見かけると、CM曲であるサチモスの「ステイ・チューン」が脳内をループする。このシンクロ感って意外と新鮮だけど、先輩いわく、衝撃的な映像だったり、楽曲がヒットしたりと、'80年代の車のCMは名作の宝庫だったとか。代表的なのが'81年のホンダ シティ。UKのスカバンド、マッドネスがムカデダンスをしながら「ホンダ、ホンダ、ホンダ、ホンダ～♪」と連呼。'86年のアウディ 100クワトロがスキージャンプ台をぐいぐい上るCMもかなり鮮烈だったんだって。この2台の若きオーナーが駆るのは、そんな名作CMで人気となった車の系譜に連なるモデル。こうやって今でも触れられるのが、なんだか嬉しいね。

HONDA CITY CABRIOLET 1984

ホンダ シティ カブリオレ '84 年式

OWNER

千田隆作

「ホンダ」デザイナー

CAR

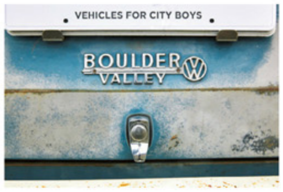
ENGINE | 1,200CC
PRICE | ¥900,000
MILEAGE | 59,904KM

ホンダのデザイナーである千田さん。愛車シティは社内でもかなり珍しがられるという。しかも、オープン仕様だ。「'84年に発売されたシティ カブリオレというモデルで、当時の日本車としては久々のオープンカーだったそう」。丸目＆コンパクトで、とにかく愛らしいデザインのシティ。カブリオレなので幌を開けた状態にすると、もう可愛さが止まらない。「実はアクセルを踏めば、ターボエンジンの加速力でスポーティな走りをしてくれますし、トランクはゴルフバッグが2個入るくらいに大きい。かなり"デキる奴"です」。今では状態のいい一台はめったに出てこないとか。「購入後、シートを張り替えたり、エアコン付けたり、DIY感覚で手を加えています」

幌は、イタリアの名門カロッツェリア、ピニンファリーナが担当。当時の日本車としては異例だったとか。色は純正のモナコブルーだ。

底部から生えたハンドルがシンプルな構造を象徴する。

後ろの剥げ方もいい。バックドアには、“VW ボルダーバレー”のエンブレム。これはコロラド州ボルダーのディーラーで販売されていたことの証しらしい。



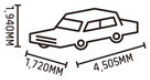
VOLKSWAGEN TYPE2 1968

フォルクスワーゲン タイプ2 '68年式

OWNER

小川祥央
アパレル企画

CAR



ENGINE	1,600CC
PRICE	¥1,600,000
MILEAGE	120,000KM

ブロロン！　バリバリ！　怪獣の雄叫びのような轟音を響かせて、湖畔に滑り込んできたタイプ2、通称ワーゲンバス。「約50年前の車なのでマイナートラブルはちょこちょこ。ちゃんと面倒を見てあげないと、ご機嫌斜めになっちゃうんですよ」と小川さんはどこか嬉しそう。「構造がシンプルなので、自分でメンテナンスできます。バイクをイジる感覚に近いですね」。ビートル（タイプ1）と同じ空冷エンジンを搭載。余計な柱がないベイウィンドーのおかげで、視界が広く、運転しやすいとか。なによりこの“顔”。ブルーがいい感じにくすみ、塗装の剥げ方も最高。『ポパイ』7号に「ワーゲンは汚れ方が問題なのだ」と書いてあったが、このバスの状態は100点満点じゃないか！

VWのエンブレムは心なしか小さいけど、そこもまたいい。

15 | VW

VWのエンブレムにはいつだって興奮する。

“VW”のエンブレムは単なるブランドネームではない！ '77年、『ポパイ』7号の表紙にサーフボードを載せた黄色いビートルが描かれた。それは、当時のアメリカ西海岸のサーファーの“流儀”を示し、車がただの“移動手段”ではないことを物語っていた。以降、ゴルフ、ワーゲンバス、ヴァナゴン、ポロ……、シティボーイにとってフォルクスワーゲンは特別な“相棒”であり続ける。ヤレたボディはそのままに、機嫌をうかがいながら乗るもよし。心ゆくまでレストアして駆るのも楽しい。もちろん、VWの威光は現行車でも変わらず。少し前のコンパクトカー、アップもとても気になる存在。質実と愛嬌が同居した“顔”には、VWのエンブレムがよく似合う。

photo: Takeshi Abe, Taro Hirayama (SANTANA)
text: Koji Toyoda

コンセプトデザインに近い、受注生産の2ドアタイプ。

車高は10㎝低く、前輪より後輪が太いのがキャルルック！

VOLKSWAGEN UP! 2013

フォルクスワーゲン アップ '13年式

OWNER

川端正吾
編集者

CAR

ENGINE | 999CC
PRICE | ¥1,700,000
MILEAGE | 30,000KM

ヒゲっぽいグリルに親しみを込めて、“カールおじさん”がアップの愛称。「僕は“ヒゲ”が目立たないほうが好きで、オールブラックを選びました」と川端さん。愛車は高名なカーデザイナー、ワルテル・デ・シルヴァが手掛けた初代。「鼻（VWのエンブレム）は大きいのに、“景色”のように馴染んでいるところは実に緻密。全面ガラス張りのリアビューは近未来的です。半面、扉は鉄板とプラスチックのコンビで、鍵は差し込むタイプと、アナログ感もある。「車は“道具”だという哲学を感じます。しかも、“疑似オートマ”。シフトにPがなくて、Nで停車。慣れるまでカクンカクンしますが、スピードが出ると抜群に安定する。その辺もドイツ車らしくて好きです」

VOLKSWAGEN BEETLE 1978

フォルクスワーゲン ビートル '78年式

OWNER

尾崎雄飛
〈サンカッケー〉デザイナー

CAR

ENGINE | 1,600CC
PRICE | ¥2,000,000
MILEAGE | 140,000KM

尾崎さんの黒いビートルはピカピカだ。「実は2台のビートルをひとつにしたんです。最初の1台はエンジンなどの状態はいいけど、ボディはあんまり。1年後に見つけた2台目はその逆で、これを“合体”させました」。その過程でビートルの良さを目の当たりにしたとか。「機械系統に無駄なものが一切ないところに感動しました。ビートルは古いパーツがたくさん残っているので、カスタムの幅が広い。一台所有すれば、延々と遊び尽くせる車です」。当初はオリジナルに忠実なスタイルで乗っていたが、あるときに気分を変えて、車高を下げた“キャルルック”にチェンジ。'70年代の『ポパイ』でもお馴染みのスタイルと曇り一つない黒いボディのバランスが面白い。

「かつて中国ではタクシーの定番車だったそうです」と中込さん。

VOLKSWAGEN SANTANA 1984

フォルクスワーゲン サンタナ '84年式

OWNER

中込良陽
『MITSOUKO』美容師

CAR

ENGINE | 2,000CC
PRICE | ¥400,000
MILEAGE | 120,000KM

ワーゲンのセダンといえばパサートが思い浮かぶけど、こんな車があったとは。“サンタナ”のネーミングが、ドイツ車っぽくないなと感じていたら、中込さんが「日本生産です」と教えてくれた。「当時、フォルクスワーゲン社が材料を日本に送り、日産の工場で作っていたとか。忘れもしない、2004年、先輩にこの車のことを教えてもらいました。見た瞬間、VWらしからぬ“主張のないルックス”に一目惚れしました」。20代のときに買った一台を5年間乗り倒し、2代目も手に入れるほどのハマりよう。「車体が長いから、サーフボードも突っ込める。それでセダンというのが仰々しくなくていい。難点はパーツが少なくて、壊れたら簡単に修理できないところ。常に次のサンタナを探しています」

NISSAN EX-TRAIL 2000

ニッサン エクストレイル '00 年式

OWNER

寺村光輔
陶芸家

CAR

ENGINE | 2,000CC
PRICE | ¥1,500,000
MILEAGE | 160,000KM

益子で窯を構える陶芸家の寺村さんは、焼き物のような渋い色合いの日産エクストレイルのハンドルを握って、地元の野山を、はたまた遠方の卸し先へと日々走る。「とにかく陶器を詰めたコンテナがたくさん入る車を探していたんです。後部座席はフルフラットになるし、プラスチック製の防水ラゲッジや撥水加工を施したシートは汚れたら丸ごと洗えるので便利。僕のように土を扱う仕事をする人にとっては最高の道具ですね」と絶賛。愛車は2000年発売の初代エクストレイル。現行車のように丸っこくなく、角張ったデザインもどこかオフロード車然としていて格好いい。「この絶妙な四駆感も決め手。やっぱり車には、どこか男らしさみたいなものを求めるんですね」

その気になれば車中泊もできる荷室には、陶器だけじゃなく、薪も積み込む。

16 | SUV

僕らのSUVはこんな感じ。

SUVってさらりと言ってしまうけど、見た目の共通点は感じるものの、そもそもきちんとした定義はあるのだろうか？ 調べれば、“スポーツ・ユーティリティ・ビークル”の略だとはすぐわかった。さらに言うと、「オフロードが走破できて、街乗りも想定したサイジングの乗用車」のことらしいが、それは聞いても、まだ曖昧なまま。どうやら、具体的な数値化などはされてないようだ。ただ、今回、3人のSUVオーナーに会ってわかったのは、デザイン性や走破性、道具性など、自分なりの“譲れない基準”を貫いたらSUVに行き着いたってこと。あと加えるなら、“自由な心を満たしてくれる車”がSUVなんじゃないかってこと。これが、僕らなりの解釈だ。

高級シートの代名詞、レカロを純正装備。
コーナリング時のホールド感は格別。

ISUZU VEHICROSS 1997

いすゞ ビークロス '97 年式

OWNER

清田直博
編集者、檜原村非常勤職員

CAR

ENGINE | 3,200CC
PRICE | ¥490,000
MILEAGE | 70,844KM

SUVのSは“スポーツ”という意味だったことを思い出せば、'97年にいすゞがビークロスを発売したことも頷ける。というのも、コンセプトは、全天候型スポーツカー。「見た目以上にスピードが出ます。当時は山道でドリフトをキメていた輩もいたみたいですよ」と清田さん。伝説的なスポーツカー、117のDNAを受け継いだSUVなのだが、コンセプトカーそのままなデザインも素晴らしい。「丸っこいシルバーボディが近未来的すぎたのか、2000年の映画『ミッション・トゥ・マーズ』では、これをベースにしたオープンカータイプが登場していましたね（笑）。リアウィンドーが見づらすぎて、バックモニターを付けたという逸話もSF的です」

photo: Takeshi Abe, Taro Hirayama (VEHICROSS)
text: Koji Toyoda

LADA NIVA 2014

ラーダ ニーヴァ '14 年式

OWNER

てんてん

写真家

CAR

ENGINE | 1,600CC
PRICE | ¥3,000,000
MILEAGE | 70,844KM

ロシアの自動車って初めて見た！　それが、てんてんさんの愛車ラーダ ニーヴァだ。「『おぎやはぎの愛車遍歴』というテレビ番組で紹介されてて一目惚れしてしまいました。'77年に登場して以来、見た目も機能もずっとそのままだったんですが、2015年にデザインが急遽変わるというニュースが飛び込んできて……。買うなら今しかない！」と勢いで購入。左ハンドルで、ミッションのみ。室内を見れば、「社用車か！」という、いい意味でのラフさも惚れ込んだ理由。早速、乗り始めて驚いたのは、大きそうな見た目から想像もつかないコンパクトな作りだったこと。「ロシアの国土面積を考えれば、こんなに小回りが利いちゃうのが逆に面白い（笑）」

ホワイトは最も定番のカラー。のんびりとした顔つきに似合っている。

※取材時点の情報です。2023年現在、三上さんは別の車（P119）を所有。

カセットテープデッキは純正の装備。これに〈ION〉のテープ型ブルートゥースアダプターを装着し、iPhoneから大好きな音楽を飛ばす。車内空間もアナログとハイテクの絶妙な間にある。

NISSAN SUNNY 2002

ニッサン サニー '02 年式

OWNER

三上数馬

イラストレーター

CAR

ENGINE | 1,800CC
PRICE | ¥250,000
MILEAGE | 38,694KM

「スバリ言うと、日産の北米向け専用車、セントラに似ているんですよ。アメリカで見たそれが欲しい！　と中古車屋を巡回していたら、シャンパンゴールドの色合いが逆輸入車っぽいサニーを見つけたんです」と三上さん。1996年に誕生した、“ザ・大衆車”のサニーの第9世代となるこちらは、今の車のように15㎞/ℓとなかなか燃費もいい。「まさに日本車の鑑（笑）。その辺はやっぱり安心できるし、古すぎず、新しすぎず、どんな場所にも違和感なく溶け込めるという、僕の理想をクリアしているんですよ、この年代のサニーは。親戚のおじさんが乗ってそうなのもお気に入り。乗り心地も可もなく不可もなくといった感じもいいんですよ」

17 '00s CAR

'00年代カーのオールド具合がツボ。

'90年代〈ヴァンズ〉のスニーカーに、ボテッとしたフォルムの「ファーレン」がある。〈ヴァンズ〉の「オーセンティック」一辺倒だったけど、そのちょいダサ感が今、新鮮な気がする。この感覚を車でいえば、'00年代の日本車、しかも日産サニーあたりか。絶妙なオールド感のセダンは、素っ気ないデザインゆえに心に刺さってくる。思えば、'90年代のビデオでスケーターが乗り回す車もこんな感じだったなぁ。時代は巡るということか。

18 | HATCHBACK

ハッチバックに何を積む？

ハッチバックって軽やかなネーミングで、その響きだけで好感を持ってしまう。その特徴といえば、後ろに跳ね上げ式の大きなドアや窓があって、トランクと後部座席に隔たりがない作り。ようは荷物の積み降ろしがラクチンで広い収納スペースが確保できるということ。骨董市の買い付けなどでたくさん荷物を積んで移動する郷古隆洋さんのように、普段から物をガンガン載せる人にうってつけの車だ。世界を見渡せばいろんなモデルが存在するけど、ここで紹介する3人の愛車はくしくもヨーロッパ車。どれも欧州では有名な商業車で、そのルックスは業務用とは思えないほど個性的。実用性は欲しい。もちろんデザインも譲れない！　なんて人には、ヨーロッパのハッチバック車はよき相棒になるはずだ。

RENAULT AVANTIME 2002

ルノー アヴァンタイム '02 年式

OWNER

郷古隆洋
「Swimsuit Department」代表

CAR

ENGINE | 3,000CC
PRICE | ¥1,500,000
MILEAGE | 90,000KM

3000ccの大型エンジンを積む。そのパワーは大量の荷物を積んでも重さを微塵も感じさせない。

日本で初めてアヴァンタイムを所有したのはあの曙太郎。後部座席にまで及ぶ1.4mの大きなドアと広い室内を持っているから力士ですらも余裕で収めるほどで、曙が気に入ったのも頷ける作り。2002年にこの車を目黒通り沿いで初めて見かけて一目惚れしたという郷古さん。「いつか車を買うならアヴァンタイムと思い続け、2015年に念願叶って購入しました」。特に気に入っているのが近未来的なフォルムや配色、テールランプなどのディテールまで、まさにアヴァンギャルドなデザイン。そして窓が大きく開放感のある室内。「購入してからは関東近郊の骨董市へ足を延ばす機会も増えて、大きなハッチバックがあるからか、不思議と買い付け意欲も増すんですよね」

FIAT MULTIPLA 2006

フィアット ムルティプラ '06 年式

OWNER

川添文子
写真家

CAR

ENGINE | 1,596CC
PRICE | ¥600,000
MILEAGE | 100,000KM

3列シートの前座席に並んで座る姿もユニーク。運転席以外はすべて取り外し可能で収納力は抜群。

川添文子さんの愛車は2代目ムルティプラ。'98年に発売され、そのナマズのような超個性的な顔ゆえ、「史上最も醜い車100選」の2位にランキング。前座席も3人乗りと一癖も二癖もある車と川添さんという組み合わせが意外過ぎて面白い。とはいえ、川添さんにはこの顔と形がツボで、どんどん愛着が湧いてくるとか。「ルックスはもちろん、マニュアル車であることもあって、私が乗っていると驚かれることもしばしば。でも、その反応も楽しみだったり（笑）」。東京と愛知を拠点に写真家として活動しているから、カメラ機材を積んで頻繁に東名間を行ったり来たり。「後部座席が取り外せてどんどん荷物が積めてしまうので、“機材倉庫”としても大活躍です」

RENAULT KANGOO 2004

ルノー カングー '04 年式

OWNER

和田泰斗
『ヴァダアンティークス』代表

CAR

ENGINE | 1,398CC
PRICE | ¥500,000
MILEAGE | 97,000KM

カングーといえばこのイエロー。これはフランス郵便局の配達車に正式採用されているカラー。

「フランスの蚤の市に行ったとき、花や家具を運んでいるカングーの姿を見て、『これだ！』ってピンときました。たくさんの荷物を載せてパリの狭く複雑な道をスイスイ走るカングーに惚れ惚れしました」とは、吉祥寺の古道具店『ヴァダアンティークス』の和田泰斗さん。で、帰国後すぐに即決で購入。「トランスポーターが愛用するだけあって、トランクは高くて広い。なのに、パリの道路事情に合わせて、サイズはあくまでコンパクトで小回りがきく。東京にも、僕の仕事にもぴったりな車です」。なるほど、欧州のアンティークから日本の民藝まで、暮らしを楽しくするアイテムを縦横無尽にセレクトする和田さんに、カングーはよく似合うわけだ。

GOOD HOOD FOOD

いすゞ ロデオ '87年式

いすゞのキャンピングカーをDIYで改装。ブルックリンでエクアドル人の職人から本場のタコス作りを学び、2016年に開店。「タコス作りは生地を練ったり具材を仕込んだり、なにかと作業が多くて場所も取ります。だからこのロデオくらい広い空間があるとすごく働きやすい。横の大きな窓も物を陳列すると見栄えがよくて気に入っています」。タコスもブリトーも絶品だ。※現在はフードカーは休止中。再開を待とう！

CAR

ENGINE	3,160CC
PRICE	¥7,500,000
MILEAGE	140,000KM

CAR COLUMN 2

車は自分だけの立派なお店になるのだ。

下北沢の高架下広場でたまたま見かけた一台のキャンピングカー。近寄ってみると、タコス屋さんだった。店名は『GOOD HOOD FOOD』。いい具合に味が出た外観に、キッチンに改造した内装。店主は、高橋勝樹さんと須野原聡さん。20代の2人がきびきびと動く姿が好ましい。車の名前を聞くと、いすゞのロデオ。若き店主が〝乗りこなす〟という意味では、彼らに相応しい車だ。購入価格は150万円。2人でお金を出し合って捻出したとか。そもそも、なぜフードカーなのか。「ニューヨークに留学中、うまいタコスを出すフードカーにたくさん出合って、『これだ！』と思って。帰国後、すぐに車を探しました。日本ではバンや軽トラが多いけど、アメリカでは断然キャンピングカー」と高橋さん。購入後即、自分たちで全面的に車内に手を加えたとか。「今のアメリカの若者の間では、それが主流。移動販売車といっても、いかにショップとしてきちんと作り込めるかが重要。その車に乗って、僕らのほうから赴いて、たくさんの人に食べてもらう。この車と出合えたから、僕らのスタイルでやれているのだと思う」と須野原さんは教えてくれた。

車でこれだけの世界観を貫けるならもはや立派な店舗だと実感しつつ、以前取材した三田修平さんが営む移動本屋『BOOK TRUCK』を思い出した。確か'80年代のシボレーのバンから車を替えたと言ってたっけ。出店場所を訪ねると、偶然にもこちらもいすゞ車。エルフというモデルだそうだ。「ウォークスルーバンというタイプで、車中でも立ち作業がしやすいよう、荷台が高く設計されている。よりお客さんが入りやすくなりました。この車にして、移動本屋としての〝完成形〟に近づいている手応えがあります」と三田さんは笑顔で語る。

心意気と選択の妙で、車は自分だけのお店になる。そう、車は夢を叶えるきっかけを与えてくれるのだ。

BOOK TRUCK

いすゞ エルフUT '01年式

たくさんの本と棚を積んで出店する三田修平さんが"実用性"を軸に選んだのが、いすゞエルフ。この車は救急車や路線バスとしても使用される、日本を代表する"働く車"。「本を積んで走ってもしっかり前へと進むパワーがあり、なおかつ人が入ってもある程度きつい姿勢にならない高さがある。商用車として人気が高いので、中古車を探すと様々な改造を施した車が見つかります。それを生かしつつ、自分なりにどうアレンジするかも面白い」

CAR

ENGINE	3,100CC
PRICE	¥1,300,000
MILEAGE	80,000KM

D.A.N.

GOLF2が欲しいんだってよ!

初めての一台を探しに、
先輩に会い、楽園を訪ねる。

「昔ヘンな緑のシティに乗ってたら、ライブの出待ちの子に『Boseクソだせえ』って言われちゃった。色って大事だよね」とのアドバイスに爆笑の3人。

桜木くん

市川くん

川上くん

photo: Kazuharu Igarashi text: Ryoko Iino

VOLKSWAGEN GOLF2 1988

フォルクスワーゲン ゴルフ 2 '88 年式

OWNER

Bose
「スチャダラパー」ラッパー

CAR

1,415MM
1,665MM
3,985MM

ENGINE | 1,780CC
PRICE | ¥900,000
MILEAGE | 200,000KM

MISSION 1

Bose先輩の愛車を見せてもらえ！

まずは見なけりゃ始まらん。教えてください！ 色々と。

以前取材をしたときに「最初の一台はGOLF2がいい」って言っていた、「D.A.N.」のボーカル・桜木大悟くん。せっかくの車特集だし、一緒に探してみない？と誘ったら「あの四角いボディとコンパクトさがいいんすよ」といまだ熱は冷めやらぬよう。とはいえ発売から約40年、クラシックカーになりつつある車を最初の一台にって本当に大丈夫か？ てなわけで前に『ポパイ』で愛車のGOLF2を見せてくれたBoseさんにいざ相談だ！

約束の日、ナイスなエンジン音を響かせながら先輩が登場。早速乗せてもらう。「君たち、最初の一台にコレはいい線だね。クラシックな雰囲気がありつつ、ギリギリ現代の車の要件も満たしてるからバランスがいい。意外とリッターで12㎞くらい走ってくれるしさ」

先輩の心強い後押しに「正直、壊れます？」と核心に迫るドラムの川上輝くん。「それがめちゃくちゃ丁寧に錆止めが塗ってあるから錆びないし故障しにくい。いい専門店があるのも安心で、僕は『スピニングガレージ』ってとこで買ったよ。ヴィンテージ楽器と同じでお店がちゃんとしてるかどうかに尽きる」とBoseさん。

桜木くんが選んだ決め手を尋ねると、「このちょっと運動神経悪い感じが僕らの音楽に合ってる気がするし（笑）。ただ、僕の実感だとセドリックに次いで、ミュージシャン同士でかぶりがち！」。

〝GOLF2あるある〟が出た頃には、3人はすっかりハマっちゃったご様子！

4

3

2

1

1. 絶妙なブルーは前オーナーによる再塗装。ベーシックグレードCLiの5ドア、右ハンドルのマニュアル車。この年代でマニュアルはすごく希少らしい。**2.**「『まあ、フォルクスワーゲンっすけど』みたいなロゴのサイズ感がいいよね」とBoseさん。**3.** 購入した中古のGOLF2専門店『スピニングガレージ』のステッカー。**4.** ハンドルはイタリアの名門〈NARDI〉のものに。「好きな人にはわかる目立たないカスタム」

1

常に120台以上あるというGOLF2の在庫は山奥にも隠してあるらしく、ここになければ諦めたほうがいい勢い。敷地内には整備場もあり、メカニックさんが何人もいた。

MISSION 2

スピニングガレージにお邪魔しろ！

運命の一台に出合えるか？ いざ、GOLF2の楽園へ。

4

3

2

すっかり触発されちゃった3人の次に行く先は言わずもがな相模原の『スピニングガレージ』。Bose先輩いわく「実は本体は10万円で、あとは自分の予算と相談して〝どのくらい修繕するかを決める〟という話を受け、道中予算を計算してたらリアリティが一気に増してきた。

お店ではBoseさんが「絶対ＬＩＮＥ交換したほうがいい」と言うほどに信頼する店主の田中延和さんがお出迎え。

大量のGOLF2に早くも大興奮の３人に「生産は１９８３〜'92年まで、ハッチバックとオープンタイプのカブリオがメインです」とガレージツアー開始！

桜木くん、ハッチバックを開けおもむろに覗き込むと「シンセくらいならすっぽり収まりそう！　結構実用的なんですね」とあらためて感動。一方で、彼らがオープンカーにも惹かれている様子を察した田中さん。カブリオの屋根を開けてくれ、「カブリオはハッチバックの半分くらいの積載量なんです。でも開けた状態で後部座席に荷物をぶっさすスタイルならさらに積めますよ（笑）」と悩ましいアドバイス。

ベースの市川くんが気になっているのは、いい味のあるレザーシート仕様、ワインレッドのお洒落なカブリオ。じーっと見つめていると、田中さんがすかさず、「クラシックラインですね。'90年代初頭の限定モデルで、ディープな緑、紺とそのワインレッドの渋い3色と革のシートが最高ですよね」。気になるお値段は……本体１２０万円！　話が違うよ先輩！と思ったら状態が超良いから、全体でも高価格の部類らしい。

ガレージ探検はさらに深層へ。3人が奥地で発見したのはカバーで覆われ〝ご本尊〟と書かれた紙の貼られた、ただならぬ雰囲気、謎の一台。何だコレ？「気付いちゃいましたか（笑）。コレは上級モデル・ＧＬＩのめったに出ない超美品なんです。だいたい２５０万円くらいですね。これをご本尊にお寺を建てたいってくらい珍しいんですよ！」

8

5

6

1. GOLF2は全体的に渋い色合いが多め。「くすんだグレーみたいなシルバーって今の車にはない色ですよね」としみじみ。**2.** ハッチバックの予想外に広いトランクにびっくり。「俺、ここに乗れる」と市川くん。**3.** 修理工房。「角ばったテールランプのラインが可愛い。部品を買って部屋に飾りたい！」と市川くん。**4.** ワインレッドのクラシックラインに夢中の桜木くん。ベージュのレザーシートがかっこいい。「ドライブデートとかも楽しそうですよね」 **5.** 試乗中、「自分たちの曲流したらヤバそう！」と3人。“ウーファー”をカスタムしたいとか。**6.** どの色もよく見えるもよう。**7.** この日のためにVWスウェットまで合わせてきてやる気満々の桜木くん。**8.** エンジン部分を見せてもらい「この爆弾みたいなのなんですか？」と興味津々の川上くん。「現行の車より作りがわかりやすいので、ある程度なら自分でメンテナンスできるのもいいところ」と田中さん。

7

SPINNING GARAGE

GOLF2専門中古車店。販売、メンテ、車検、買い取りまで何でも頼れる。スタッフは全員GOLF2を所有。店主の田中さんはじめ、GOLF2のレーシング大会『ゴルフカップ』受賞者が多数で信頼感しかない。

DATA 神奈川県相模原市緑区長竹2748-1 042・780・8198 9:00〜18:00 水・木休

D.A.N.

2014年デビュー。読み方は“ダン”。メンバーは左から、桜木大悟（Gt、Vo、Syn）、川上輝（Dr）、市川仁（Ba）。桜木くんと川上くんは実家の車＆レンタカー派。市川くんはこの企画でついに免許取得を決意。2023年以降、ライブ活動はお休み中。

GOLF2、奥深し……。田中さんいわく、他にもスポーツモデルのGTＩってのもあるんだとか。「ここに来るまでは、イエローって決めてたんですが、やっぱり渋い色も良いですね……」と、ここまで来て明らかに目移りし始めている桜木くん。田中さん、助けてあげて！

「黄色は初期にしか作られていないのでかなりレアなんですが、白かガンメタを買って好きな色に塗り替えるって手もあるんですよ」とアシスト。

そういえば、さっきやけに艶っぽい黒のカブリオに釘付けだった3人。聞けばそれも再塗装した一台だそうで「ちょっと乗ってみますか」と田中さん。

3人、完全にキッズの顔になりエンジンをかけてみると……コンパクトさにいい意味で似合わないワーゲンサウンドが響く。カブリオもご開帳、テンションは最高潮。試乗後には桜木くん、田中さんに割とマジなトーンで一言。

「ローンって、組めますか？」

完全にお買い上げモード！　かと思いきや、修理待ちで止めてあった、真っ赤でナイスな一台と思わず満面の笑みで記念撮影。やっぱりまだ迷ってるみたいだね。とりあえず、一つ言えるのは若い3人のバンドマンにGOLF2、最高に似合ってたってこと！

欲しい車はココにある。

中古車で“運命の一台”に出合いたいなら、車種を絞った専門店、
一本筋が通った店主の店がいい。そういう店はやっぱり心が躍るね。

いすゞの車に精通した熟練の整備士が丹念にレストアした名車がずらり。117クーペのレンタルも行っているので、購入前にぜひ。

ベレットを真ん中に、117クーペが脇を固める。

ISUZU SPORTS

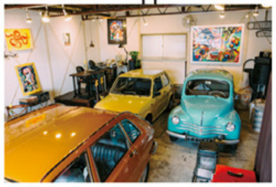
HAMURA

DATA 東京都羽村市富士見平2-1-1 042・570・2160 10:00〜19:00 火・水休

いすゞ ベレット1600GTを筆頭に“イイネ！”な車がずらり。

クレイジーケンバンドの曲「ベレット1600GT」でその存在は知っていた。POPEYEで連載していた「僕の好きな車」では“異界”へワープさせる車と評するほど、剣さんの大好きな車。それを目の前で拝めるなんて！　いすゞといえば、「走れ走れ〜」のCMからトラックのイメージが強かったけど、過去にこんなにもスタイリッシュな名車を出していたことを、この店で初めて知った。流麗なボディラインの117クーペは、あのジウジアーロがデザイン。これまた先生が手掛けたピアッツァなんて、ネーミングだけで高揚する。修理スペースにあるのはジェミニっていうの？　こちらもカッコいい。剣さんばりに「イイネ！」を連呼すること間違いなし！

photo: Naoto Date, Takeshi Abe (SIMPLE AUTO)
text: Kazuyuki Ozawa edit: Koji Toyoda special thanks: Junichi Okumura



年代を問わず数多くのシトロエンを扱うが、フランス以外にもイタリア車なども展開。

AUTORÊVE

OTA

DATA 東京都大田区矢口3-3-15 03-6427-5820 10:00〜19:00 火、第1・3・5水休

シトロエンを通して過去と未来を行ったり来たり。

住宅街にこつ然と現れたここは、"シトロエン帝国"の秘密基地!? なんて言いたくなるほど、4台のシトロエンがギチギチに横並びした姿は壮観。間近で見るDSは宇宙船のようなデザインで、スペーシー感が半端ない。クラシックカー然とした2CVは、宮崎駿の愛車としても有名。店主に'49年誕生と教えられて「やはり」と納得したけど、'90年まで製造されていたと聞いてびっくり。ここに来て心底実感、シトロエンはタイムマシンだ！

ISUZU SPORTS

上／レースでも大活躍した'71年式ベレット1600GTタイプR￥3,980,000 下／丸目後期型の'77年式117クーペ￥2,280,000

AUTORÊVE

上／'73年式シトロエンDS23 IE pallas￥4,980,000 下／最初のシトロエンとしてオススメの'94年式XM-S￥1,500,000

BLOOOM!

上／'97年式ラシーンタイプⅡ￥898,000 下／ホワイトボディが眩しいタイプⅡは3万kmと走行距離が少なめ。￥1,009,800

アップル 宇都宮新4号店

上／左ハンドルの'73年式フェアレディZは逆輸入車。￥3,280,000 下／オールペン済みの'79年式マツダ ファミリアバン￥680,000

ラシーンの名は羅針盤から。

BLOOOM!

YOKOHAMA

DATA 神奈川県横浜市戸塚区名瀬町1091-1 045-814-0510 10:00〜19:00 水、第1・3火休

SUVの選択肢に迷うならば、日産 ラシーンという"どこでもドア"を。

車好きの先輩が「今、ちょうどいい」と教えてくれたのが、日産のラシーン。'94年の発売当初はドラえもんがCMキャラで、「新・ぼくたちのどこでもドア」がキャッチコピーだったとか。実物を見たくて、専門店『ブルーム』に来てみたら、色とりどりのラシーンが勢揃い。大きさや形はSUVのようだけど、普通車に近い車高と、カクカクしつつ、愛嬌のあるフォルムがたまらない。シティでも、アウトドアでも、いい具合に馴染みそうだ。

ラシーンを心から愛するオーナーが手掛ける、オリジナルのカスタム車も販売している。

UTSUNOMIYA!

宇都宮まで来たかいありの在庫を誇る。マツダ シャンテなんてレア車も。58万円。

アップル宇都宮新4号店

UTSUNOMIYA

DATA 栃木県宇都宮市石井町3335-55 028-612-3335 9:00〜19:00 無休

ごく普通の中古車ショップと思いきや、国内外の希少車に珍車という"お宝"がわんさか。

街道沿いでよく見かける大型中古車店『アップル』に、ものすごい店舗があった！ '70〜'80年代の個性溢れる国産車に、アメ車専門店でもめったに出合えない希少車まで、「車は楽しい！」と心底思わせる名車や珍車の数々。これはずばり店長の趣味が大きいとか。特にお気に入りは日産のセドリック＆グロリア。訪れた日に、ひと際目を奪われた'78年式のセドリックは走行距離わずか1000kmって、店長、それってもう新車じゃないですか！

どうやって店から出すのかという疑問はさておき、これだけローバーミニを見たら、そりゃ惚れちゃうよ！

「まさにミニのテトリスや〜」と彦摩呂ならきっと叫んだに違いない!? それほどまでに立錐の余地もなく置かれたミニ！　ミニ!!　ミニ!!!　現行のBMWのミニも気になるけど、クラシックで愛着の湧く“顔”をしたローバーのミニはやはり格別。『イール』が扱うのは、このローバーミニがほとんど。しかも走行距離が少なくグッドコンディションなものばかりだ。最初の一台としてミニを選ぶなら、この店に来ればいい。

iR

SETAGAYA

DATA 東京都世田谷区上野毛4-39-7　03-5797-2288　10:00〜19:00　月休（祝日の場合は翌火休）

店舗前には現行のBMWミニも。こちらとは別に修理・整備の専用工場がある。

整備スペースも併設しているのでアフターケアも万全だ。

240を中心に後継モデルの940や850なども。

DOCTOR. V

SAGAMIHARA

DATA 神奈川県相模原市南区上鶴間1-8-3　042-701-8123　11:00〜19:00（金12:00〜）　水休（祝日の場合営業）

ボルボはワゴンの240で決まり！ いや、セダンも急浮上。

看板をくぐったとき、“V”の文字に自信が漲っているように感じたのは、気のせいじゃなかった！　奥のスペースには、ボルボを象徴する名車、ワゴンタイプの240がキレイな車列をなしている。これだけ並ぶと、特徴的な直線デザインがひと際美しく見える。さて、どの色がいいかなと思案していたら、ぽつんと置かれたセダンタイプの一台に心奪われてしまった。244って初めて知ったけど、かなり新鮮だ。

上のポップなカラーリングは「リノカ」のランクル。下はずらり並んだランクル80。

FLEX RENOCA 世田谷店

SETAGAYA

DATA 東京都世田谷区等々力3-28-1　03-3703-2563　10:00〜18:30　水休（祝日の場合営業）

“ロクマル”“ナナマル”“ハチマル”、一気見して、ランクルの“差異”を知る。

デカくてタフな車といって真っ先に挙がるのがトヨタのランドクルーザー。断然、クラシックな丸目の60でしょ。なんて思い込んでいたけど、横にある角目の70や80もグッとくるじゃないか。バラバラではなく一気に見てこそ、それぞれの特長を客観的に判断できるというもの。これは、ランクル専門店ならでは。『フレックス』がスタートさせたリノベーションカー「リノカ」のランクルもあったりして、大いに迷う！

iR

上／'98年式のミニはポール・スミスバージョンの限定車¥2,149,200　下／走行距離の少ない、'98年式ミニクーパー¥2,872,800

DOCTOR. V

上／人気のクリームイエローの'90年式の240ワゴンは¥1,789,000　下／今回、"発見"した'83年式セダンタイプの244¥1,389,000

FLEX

'93年式ランクル80 4.5 VXリミテッド 4WD¥2,098,000

OLD CAR'S MARKET

上／1940年代のドイツの軍用車、キューベルワーゲンのレプリカ¥8,600,000　中／1973年式のDATSUN 240ZG¥11,000,000　下／映画『栄光のル・マン』にも登場したレーシングカー、ポルシェ917のレプリカ¥6,500,000

SIMPLE AUTO

上／6シリーズの元祖、'70年式2000CS¥5,184,000　下／初期型の2002は'72年式。純正コロラドオレンジがいい。¥5,184,000

OLD CAR'S MARKET

HIGASHIMATSUYAMA

DATA 埼玉県東松山市古凍22-1　☎0493-25-2107　10:00〜18:00　月休

おっ！　このビートルかっこいい。と思いきや、実は店主、関根一生さんの愛車。

ワーゲンバスに移動販売車、'60年代の国産車まで。圧巻！ 壮観！ 感嘆！ 時間を忘れて車に浸ろう。

巨大ガレージのような店の前の広大なスペースにぎっしりと置かれた車。アメリカの珍しい商用バンやエアストリームなども交じった一癖も二癖もあるラインナップ。店内に足を踏み入れると、極上のビートルや'70年代の日産240Zなどなどの名車に目移りしてしまう。ノンジャンルなのか？　何か意図を持って集められたのか？　店主に聞くと、当初のメインはワーゲンバス（タイプ2）で、これまでになんと700台も販売したそう。取材日は1930年代のフォードをカスタム中。ストリートロッドスタイルというらしいけど、これは気になるね。

ピンクのサインがアメリカーンな外観！

オーナーの"マルニ"愛が高じて開店。2002以外にも'70年代の名車が揃う。

Simple auto

SIMPLE AUTO

NEYAGAWA

DATA 大阪府寝屋川市宝街29-8　☎072-839-6778　10:00〜19:00　日休

BMWが誇る'70年代の名車、それが"マルニ"。愛嬌と洗練と走行性、そのすべてが最高だ。

現行のBMWといえば、精悍な表情とソリッドな色合いが印象的。でも、大阪の『シンプルオート』にずらり並んだBMWはまったく違う。クリッとした丸目でポップなカラーに、子犬を見ているような愛着が湧いてくる。こちらは'68年に登場した2002。"マルニ"の愛称で呼ばれるモデルだ。ん？　やはり子犬っぽい？　シートに腰を沈めると、単に愛らしいだけではない、クラシックな品の良さを実感。試乗すれば、スポーティな走りに一瞬で心を奪われるだろう。高嶺の花だけど、さらに価格が高騰の噂。思い切るなら、まさに今!?

"壊れにくい"といわれる2002だけど、整備場も備えているからさらに安心だ。

はじめて車を買うなら。

車欲しくなってる〜っていうキミ。のんびりカーハンターなこの二人と、一緒に第一歩を踏み出してみない？

photo: Ichiko Uemoto
illustration: ZUCK
text: Nozomi Hasegawa

「実は、Be-1を手放したんだ」と夏目知幸さんから聞いたのは2021年末のこと。タフなMV撮影、からの自損。そして泣く泣く廃車。愛車をなくした傷は癒えてるのだろうかと心配していたが、ゆるっと新しい車を探してると の噂が耳に入ってきた。夏目さんの友人のカネコアヤノさんも、最近車に興味津々とのことで（だがまだ免許は持っていない）、夏目さんの「中古車を持っていた人間としてアドバイスもします！」というナイスな心意気を追い風にアクセル全開！　一緒に車探しツアーを決行することに。

最初に向かったのは、横浜の『ボーダレス』。ホンダやトヨタを筆頭に、'80〜'90年代の国産車を扱っている。店主の大貫哲也さんが、部品調達やカスタムまで請け負ってくれるので、何かあったときにも心強い、駆け込み寺的な存在のお店だ。「可愛い〜！」とまず二人が乗ったのは、ホンダのシティ カブリオレ。「オープンカーにもなるんです」と大貫さんが帆を開けると「これはヤバイ！」「走り出したら誰かと何かが始まりそう！」と大興奮。「買って、友達に運転してもらえばいいのかも……」なんて新たな視点をつぶやき始めたカネコさんが、次に見つけたのは日産のサニー。ハッチバックタイプでトランクも広く「機材もすっぽり入るし、見た目も好き。普段使いによさそう！」と実用面で惹かれているよう。「はじめての車だし100万円を切ってると手を出しやすいよね」と修理や車検で中古車あるあるを経験してきた夏目さんから冷静なひと言も飛びつつ、考え、ここはいったん保留。しっかり見積もりをしてもらい、2軒目へレッツゴー！

STORE 1
ボーダレス

アフターケアもバッチリな店でネオクラシックな国産車探し。

何かが始まりそう……。

チョロQみたいだね〜。

CAR HUNTER
カネコアヤノ
ミュージシャン

1993年、神奈川県生まれ。ライブ活動は弾き語りとバンド形態で行っている。街中で見かけて以来、ジープの赤いチェロキー（2代目）が気になっている。ライブ帰りの車内で、その日の録音をバンドメンバーやスタッフと聴きながら多摩川を越える瞬間が好き。

CAR HUNTER
夏目知幸
ミュージシャン

なつめ・ともゆき｜1985年、千葉県生まれ。ソロプロジェクトSummer Eyeとして活動中。2年間乗った日産のBe-1は修理も多く「面倒くさくて手のかかる彼女」のような存在だったが、今でも忘れられない。シトロエンC2や2000年代初頭の国産車にも興味あり。

在庫数が多いとは言えないけれど、シティやサニーなど、'80年代の日本の名車が並んでいる。状態がよいものばかりなのもすごい！

STEP 1：車選び

日本の旧車を目の前にして
わくわくが止まらない！

他にもこんな車があったよ

'86 DAIHATSU MIRA TR-XX

1986年式のダイハツ「ミラ」は、ターボ付きでパワフルなスポーツタイプの軽自動車。小回りも利くので、坂道や路地の多い東京の街乗りにもちょうどいい。ハッチバックタイプで、小さいのに荷物をたくさん積み込めるのが嬉しいね。車両本体価格は65万円。

他と一線を画す装いなのは、1988年式のトヨタ MR2。レーシングカー仕様のエンジンを初めて採用した乗用車で、走り屋が好きな車ともいわれている（漫画『頭文字D』にも登場）。カクカクした見た目で「メカ感が強い！」とカネコさん。価格は応相談。

'88 TOYOTA MR2

'85 HONDA CITY CABRIOLET ¥1,480,000

■SPEC
- 走行距離：4.1万km
- 車検　：なし
- 排気量　：1,200cc
- 燃費　：16.4km/L

全長は短いが車高は高いため、"トールボーイ"の愛称でも親しまれているシティ カブリオレ。二人で並んで座ってみると「意外と広い！」とのこと。12色展開されていた中でも、ヴィヴィッドなピンクのカブリオレがここまで綺麗な状態で見つかるのは珍しいんだとか。チェック柄が可愛いシートもサイドのロゴも当時のまま。手動で帆を畳むとオープンカーに。街で見かけたら注目しちゃう！

'83 NISSAN SUNNY HATCH BACK ¥750,000

■SPEC
- 走行距離：7.6万km
- 車検　：あり
- 排気量　：1,500cc
- 燃費　：12km/L

1966年から2004年まで製造された日産 サニーの5代目として生まれた、3ドアのハッチバックが市場に出回るのは珍しいそう。タクシーでよく見かける白いレースのシートカバーやホイールまで純正のもので、どれも"SUNNY"のロゴが入っているのが可愛い。車載容量も十分だから「ギターやアンプを運ぶにもちょうどよさそう」とカネコさん。

DATA

ボーダレス

'80〜'90年代のいわゆる「ネオクラシックカー」を主に取り扱う。在庫がない場合も気になる車を探してくれたり、「こんな車が欲しいんです」という相談も可能。修理や部品調達までおまかせできて、別の店で買った車でも懇切に面倒を見てくれる。〇神奈川県横浜市旭区都岡町19-23　☎045-955-3110　10:00〜19:00　火休

STEP 2：見積もり

見積もりをとって
諸経費の価格を知る。

項目ごとに金額が記載された見積書を発行してくれた。シティ カブリオレは納車前に車検が必要なため、車両価格に税金や書類準備、入念な整備費用など約14万円プラスの162万350円。一方、サニーは車検済みだけど整備費がしっかりめで約10万円プラスの86万2570円だった。どちらも購入から納車まで1か月ほどかかるそう。

※商品の価格や在庫状況は2022年当時のものです。

STEP 1 ：車選び

アメリカからやって来た
でっかい車を見比べた。

1. 今回見た中で一番大きな車だったのがシボレーのK-5 ブリレイザー。大迫力で、カネコさん曰く「動物園でカバを見ているような気分になる」。これでもかというくらい車高を上げると、見た目の迫力が増すことはもちろん、オフロードを走るときのダメージが少なくなるそう。すでに売約済みだったのが残念！

2. 真っ赤なボディが眩しい日産のピックアップトラック・キングキャブは、アメリカ生まれの帰国子女。車内に向かい合わせの2席もあって、4人まで乗車可能。四輪駆動で、自転車やサーフボードなどの大きいものだって荷台にドカッと積めるので、海や山が好きな人とかなり相性よし。価格は問い合わせ。

3. こちらもメイドインUSA。重厚感溢れるホンダ アコードは、当時のアメリカでもかなり人気の高い車種だったそう。なんと日本国内での販売はなかったハッチバックボディかつ、走行距離約2万kmというシロモノ。外国仕様だからなのか「ドアがめちゃくちゃ重い！」と夏目さん。価格は問い合わせ。

STORE 2
城南ジープ プチ

ビッグスケールな車も試してみたい。
乗り込めばもうそこはアメリカ？

■SPEC
- 走行距離：16万km
- 車検　　：あり
- 排気量　：2,600cc
- 燃費　　：8.2km/L

安江さんの運転するベンツで、試乗という名のドライブを楽しんだ二人。「これを買ったら、まず海に行って天窓から星見るね！」

たった6コマの
車獲得ゲーム

夏目＆カネコさんの車選びを見て「車が欲しい」と思ったそこの君。マイカーを手に入れるまでの道のりを、ざっくり掴んでみよう！

1. 車を探す

気になっている車種や予算を基に、まずネットで調べよう。新車ならディーラーのHPへ。中古車なら「カーセンサー」などの専門情報サイトで検索だ。できるだけ状態がよく安価な車を求めて、先人たちは地方の車屋さんにも目を向けているらしい。掘り出し物を狙ってヤフオクやメルカリで探す人も増えてきているけど、ここでは販売店での車獲得を目指してLet's Go!

2. 車を見に行く

車屋さんはお客さんに合わせた事前準備をしてくれるので、来店前に電話でアポ入れをするのがベター。見たい車種を伝えて、試乗の可否も聞いておくとよい。中古車なら外装・内装の様子を見るのはもちろん、肝心なのはエンジンルームだ。サビや漏れがないか見て、整備の頻度や、今の調子を聞こう。初歩的なこと、例えば「パワステの有無」（あるとハンドル操作が軽い、ないと重い）や乗り心地、左右の視界などを恥ずかしがらずにチェックしてね。

3. 見積もり

購入時には車両本体価格に加えて、車検などの諸費用がプラス数十万円ほどかかることが多い。最終的な支払い金額を知るために、購入を決めてなくても見積もりは気軽に出してもらって持ち帰ろう。わからない項目は丁寧に説明をしてくれるからご安心を。この2と3はフットワーク軽くやって、比較検討してOK。値引き交渉もアリ。

4. 購入、支払い

即決派でも、2と3の経験を積みたい慎重派でも、購入を決めたらお店へ連絡だ！　契約の際には実印や印鑑証明書などの書類が必要になるので、店舗によく確認＆準備をしよう。ローンを組む場合は、頭金の有無と支払いのタイミングも聞いておいて。もちろん現金での一括払いも可能。このタイミングで駐車場の確保も忘れずに！

5. 納車準備

整備や車検など、車が公道で安全に走るための準備期間。中古車の場合、2週間で完了することもあるし、珍しい車だと半年以上かかることも。「葉山までドライブしたいなあ」「コストコで爆買いするぞ〜」と車との生活を妄想を楽しみながら待とう。

6. 納車

おめでとうございます！　今日からカーライフの始まりだ。お店が近いと自分で乗って帰れるけれど、遠い場合は自宅まで持ってきてくれる。輸送費が上乗せになるが、慣れない道を走るよりは安心かも。浮かれた気持ちを抑えて、傷や凹みがないか、部品動作の不備がないかの確認も必須。今後は燃料費や駐車場代、自動車保険料など、月々お金をかけながら車を愛でていきましょう。予期せぬ整備や車検のために、毎月積み立てをする猛者もいるらしい……！

車検って何？

「自動車検査登録制度」の略称。車を公道で走らせるために必要な検査で、更新は2年ごと（新車購入時のみ期限が3年）。法定費用として、車体が重いほど金額が上がる自動車重量税、国が定める自賠責保険、検査標章（ステッカー）を発行する印紙代を支払う。この車検を通すため、お店に整備や手続きの代行を頼むことがほとんどで、その費用も必要だ。相場は10万円前後からといわれているよ。

STEP 2：試乗

ベンツってこーんなにスムーズな乗り心地なのか！

左ハンドルのため、今回は安江さんの運転で試乗へ！　こちらは北米仕様のメルセデス・ベンツで、安江さんが前々から入庫したいと思っていた車のひとつ。爽やかなアイスブルーのボディには、前オーナーが手描きしたと思われる、室内と色を合わせた細いラインがさりげなく。足元にはアメ車の定番「ココマット」が敷かれていたり、クリームベージュの内装もいちいち可愛い。「気持ちも明るくなる色！」と二人ともかなり気に入った様子。これは買いかも？

STEP 3：見積もり

諸経費はお店によってケースバイケースなんだ。

試乗後の二人が選んだのはメルセデス・ベンツ W201。『城南ジープ』は手書きで見積もりを出すスタイルで、値付けがかなり良心的。令和5年11月まで車検があるため、お店に行って納車する場合は車両価格にリサイクル預託金や登録諸経費など、5万円ちょいだけ乗った合計255万1230円。納車までは大体1か月ほどで、購入時にはアメリカで走っていたときに使われていたナンバープレートをプレゼントしてくれる！

DATA

城南ジープ プチ

店名にも掲げられるジープをはじめ、ピックアップトラックやシボレー、左ハンドルの日本車なども取り扱う。基本的には安江さんがアメリカ現地へ向かい、オーナーの元から直接買い付けているそう。日本の気候に合わせて整備もしてくれるので安心だね。〇東京都世田谷区玉堤2-9-5　☎03-3705-4411　10:00〜19:00　水休

国産車のノスタルジーにどっぷり浸かった二人が次に向かったのは、1984年創業の老舗『城南ジープ プチ』。'60〜'90年代のアメリカ車を扱っていて、1軒目とはまったく違う風が吹くお店。珍しいブルーのメルセデス・ベンツを覗く二人を見て、「乗ってみます？」と声をかけてくれたのは2代目店主の安江友未人さん。ドアを開けるとフワッとアメリカンな香りが漂ってきた。ちょうど桜が満開の多摩川沿いをスイスイ〜と2周した二人からは「最高！」との声が。カネコさんは「ベンツって縁遠い車だと思っていたけれど、自分の家みたいにくつろげました」とその魅力に気付いてしまった様子。「エンジン音も静か。'90年代の車なら手間もそこまでかからないだろうし、乗り心地もよかったな〜」と夏目さんも高評価。「この車に乗って桜並木道を走ったら、ベタなJ-popとか作っちゃうんだろうな」「タイトルは『さくら』ね（笑）」なんてミュージシャンならではの話で盛り上がった二人だが、値段を聞いて「まだ手が出ません！」と今回は断念。いつか車を買うときが来たら、報告お願いします！

CAR SHOP

Let's Go to Specialty Stores

いざ、マイカー探しの旅に出よう！

「僕にはコレ！」と言える車を見つけたいのは山々だけど、なんだか大変そうだって？
OK、まずは名店を見に行きまくったこの記録を見てくれ。いい車、案内するよ。

● オートサークル 群馬県前橋市

Place: Maebashi, GUNMA	Type: '60〜'80s JAPANESE CAR	No. 1

※商品の価格や在庫状況は2022年当時のものです。

黄金時代を駆け抜けた、昭和のノスタルジックカーがズラリ！

YouTubeで横山剣さんが愛機のレーシング車両、ダットサン ブルーバード510・1800SSSを紹介している動画を見ていたら無性に'70s前後の国産車が気になり、あれこれ調べたら面白すぎ。ブルーバードの対抗馬としてリリースされたトヨペット コロナは'60年代に熾烈な販売競争を繰り広げ、頭文字から"BC戦争"と呼ばれていたらしく、そのコロナもめちゃくちゃカッコいいじゃないか！　そんな流れで"BC"を販売する群馬の『オートサークル』へ向かうと、早速510・1600SSSとコロナ マークⅡが両者揃い踏み。ボディだけでなくエンジンルームの細部まで悶絶級の美しさで、他にも滅多にお目にかかれない超稀少な昭和の名車がゴロゴロある。あ〜欲しい!!

DATSUN BLUEBIRD 510・1600SSS
Year: 1970 Price: ¥4,400,000

剣さんの1800SSS発売の3年前にリリースされた1600SSS。"SSS" とは「スーパー・スポーツ・セダン」の略で、ボディは超音速旅客機のSSTをイメージ。落ち着いたアイボリーの色味と相まってシェイプの上品さがかなり際立つ。

クラシックカー好き垂涎の車を揃える名店。日産やトヨタのみならず、N360や初代Zなど、ホンダの旧車も頻繁にラインナップ。奥には整備工場も併設していて、アフターフォローも万全。余談だが、近所にある『登利平』っていう鶏肉専門店の「鳥めし」が美味しいよと教えてくれて実際かなりウマかった。 Shop Data 群馬県前橋市石関町201　☎027-212-6988　10:00〜20:00　月休

モスグリーンの色味が武骨な'71年型コロナ マークⅡ HT 1900GSS。363万円。エンジンルームの美しさたるや。8R-DOHCエンジンも好調で、走行距離1万6000kmという奇跡の一台。

TOYOTA COROLLA HT 1.5SE
Year: 1982 Price: ¥1,870,000

いきなり物欲MAX。ワンオーナーで走行距離も7万3100kmの70 カローラ。ヘタリがないライトグレーのシートはオリジナルで、中央に配されたオレンジと黒のストライプがどことなくオールドグッチを想起させる。ローズウッド調の木目もきれいだし、機関も良好。

photo: Kazuharu Igarashi illustration: wackwack edit: Kyosuke Nitta

● Spirit Garage 群馬県伊勢崎市

Place: Isesaki, GUNMA | Type: '70〜'90s NISSAN/ JAPANESE CAR | No. 2

日産の旧車を見ると、なぜ走りたい気持ちが高ぶるのだろう。

尾崎豊の『十七歳の地図』を聴きながら次に向かったのは、日産の旧車専門店『スピリットガレージ』。ハコスカ、ケンメリ、グロリア、フェアレディ……。どれもこれも内に秘めた走り屋の血が騒ぐ車ばかりで、無性に峠を目指したくなる。ダットサン ブルーバード411（左写真左）なんて初めて見たし、チャコールグレーの色がいいな〜なんて物色していると、奥の方で丸っこい目をしてこっちを見てくる白いエスカルゴの姿が！　イカツイ男気系の車両の中で佇んでいるからチャーミングさ増し増し。この瞬間、次の行き先を「キャラ系の'80s国産車」を取り扱う販売店に変更した。

名前のとおりカタツムリがモチーフ。バブル期に一世風靡した日産パイクカーシリーズの一台。三度見必至。走行距離は4万5000km。

全国から日産の旧車好きが集まる理由は、エンジンや排気、足回り、電装や駆動系、内装やボディまで、手に入りにくい日産車のパーツを自社製造しているから。HPに掲載されているオリジナル部品は数知れず。レースカーの整備も行っている。Shop Data 群馬県伊勢崎市三室町5322-2　☎0270-62-0441　9:30〜18:30　水休

● Vintage Car Try 茨城県東茨城郡

Place: Higashi ibaraki, IBARAKI | Type: '60〜'00s JAPANESE CAR | No. 3

王道からちょいズレた変態級のハッチバックが大集合。

個性的な愛くるしい系の'80s国産車が気になるとはいえ、アマノジャクなので普通じゃつまらない。目指すは茨城県の『ヴィンテージカートライ』だ。ここにはエスカルゴと同じパイクカーのBe-1もあるが、ボディカラーはレアなトマトレッドでマニアも唸るキャンバストップ。人気が高いスズキのアルトも初代ではなくギャル車として流行った2代目。そして見てくれ、みんな大好きホンダ シティも、絶滅したと思われていたサンストオレンジ＆マンハッタンルーフ仕様！　といった具合に、変化球のキレ味が鋭角で興奮しっぱなし。このシティは本気で購入を検討中です。

上／Be-1はメーターとエアコン類も丸型。ヘッドレストも楕円型でキュート。右／シティは内装が爽やかなブルー。右奥／2代目アルトは放っておけない魅力がある。

創業50年を誇る老舗販売店。店長の綿引宣考さんの愛車はシティ ターボⅡ。シティのオーナーズクラブ会員というだけあって小さめのハッチバックが多め。綿引さんの変態車解説も軽快で面白い。Shop Data 茨城県東茨城郡茨城町上飯沼2-282　☎029-291-2630　9:00〜18:00　月休

● Euro Garage 茨城県小美玉市

Place: Omitama, IBARAKI | Type: FIAT PANDA/EURO CAR | No. 4

たくさんいるパンダの中から、一生乗りたい自分だけの一台を探す。

左、下／オールペイントで消耗品とシートを替えた状態での販売価格。ハイオクリッター15kmという許容範囲の燃費。今買うべきはコレだと確信した。オールディーなオレンジ色のボディとBOSCHのフォグランプも好相性。右／ちょうど売り切れてしまったミントグリーンの四駆も最高だった。

代表の大槻則夫さんもパンダ乗り。30万km走っていても絶好調で、「整備しやすいシンプルな設計でパーツと消耗品も探せば見つかる。これほど乗りやすい車はないですね」という言葉に説得力があった。Shop Data 茨城県小美玉市羽鳥2812-14　☎0299-46-5692　9:00〜19:00　無休

欧州代表のコンパクトカーも見たくなって、茨城に行ったら訪れたいと思っていた『ユーロガレージ』へ。フィアットのパンダといえばココといわれるほどの在庫数を誇り、初代パンダがきれいに整列した風景は圧巻のひと言。しかも店頭だけでなく、車で3分ほど走ったところにある駐車場にも販売予定のパンダちゃんがざっと20台以上もあり、自分だけの1台に出合う期待感と選ぶ楽しさがある。ちなみに、カクカクしたデザインに惹かれていたけど、四駆MT車に乗せてもらった瞬間、軽快な乗りアジとギュインと伸びるスピード感に惚れた。こんなに走るのが楽しい車だとは！

● マルミオート 埼玉県入間郡

Place: Iruma, SAITAMA | Type: '80～'00s JAPANESE CAR | No. 5

まったく注目していなかったアラウンド'90sの都会派SUVに目覚める。

'80年代の中古車をネットで検索してチェックした車を見ると、取扱店がほぼ埼玉県入間郡にある『マルミオート』だった！　という人、結構いるはず。それぐらい今気分な旧車を抜群のセンスでセレクトしている名店であり、マイカー探しの旅をするならココは外せないでしょ～って流れで向かうと、予想外の出合いの連続で、店舗から通りを挟んだ第二展示場に入った瞬間いきなりノーマークだった車にロックオン。'80～'90年代のV6エンジンを積んだ都会派SUVが抜群にクールで、特に日産のテラノは重厚な佇まいに合うツイードやコーデュロイのシートがザッツ・クラシック。三菱のパジェロ スーパー XLに関しては、サイドに配されたオレンジのラインがズル過ぎる。

NISSAN TERRANO D21
Year: 1992 Price: ¥2,490,000

色は「グレイッシュブルーパール」というわざわざ言いたくなる名前で、走行距離は3.9万kmのワンオーナー。4速AT車。

案内してくれた営業担当の高橋里空さんがめちゃくちゃ親切に案内してくれる。第二展示場には、他に三菱のデリカスター ワゴン GLXやいすゞのビークロスなど不朽の名車が勢揃い。あまりにも在庫数が多すぎて、今回はざっとしか第一展示場を見られなかったけど、ハチマル好きに響く骨太なラインナップ。最低でも2時間は余裕を持って行きたい。Shop Data 埼玉県入間郡三芳町上富2150-1　☎049·274·3250　9:30～19:00　火休

右／カクカク型のクロカンSUVといえばゲレンデかランクルか、いや今こそパジェロだ。スーパー XLとはいえサイズは小さめ。走行距離は6.8万kmでAT車。下／テラノ D21はワンオーナーで走行距離は2.8万km。コンクリートジャングルに映えるガングレーメタリックの鈍い光沢にシビれる。5速MT車。

MITSUBISHI PAJERO SUPER XL
Year: 1988 Price: ¥2,490,000

NISSAN TERRANO D21
Year: 1992 Price: ASK

● レンジャース 東京都目黒区

Place: Meguro, TOKYO | Type: LAND ROVER | No. 6

この絶妙な色の"セカンドレンジ"が気になって仕方ない。

内装のセミオーダーが可能だった前期型の特別グレード「オートバイオグラフィ」。誰が見ても明らかに上質なレザーシートはツートーン。シフトノブとサイドブレーキは木目調ではなくリアルウッドでかなり豪華。走行距離は9.2万km。このウィローグリーンが似合う男になりたい。

LAND ROVER RANGE ROVER 2nd Autobiography
Year: 1997 Price: ASK

埼玉県入間市にある工場兼バックヤードには歴代のレンジが勢揃い。6種類のコースから予算に合わせて選択できる「ビスポークプラン」で、好みの仕上げにできる。英国的だ。

代表の平元鐘大さんはレンジローバー好きの中ではかなりの有名人。とりわけ初代のクラシックレンジとセカンドが豊富で、五本木交差点の近くにある目黒店の1階駐車場にある2台だけが在庫かと思いきや、徒歩3分ほどのところにある駐車場にもストックが並ぶ。Shop Data 東京都目黒区五本木2-25-9 ビルユークリ2F　☎03·5768·5766／埼玉県入間市南峯359-12　☎04·2937·1234　ともに10:30～19:00　月・火休、不定休あり

LAND ROVER RANGE ROVER 2nd
Year: 2000
Price: ASK

コルバーブルーは青と緑の中間。後期の4.6HSEで、走行距離は10.5万km。目線の高い位置から四隅の角張ったキャッスルコーナーを見渡せるコマンドポジションがブリティッシュ。見切りもいい。

シティボーイといえばトラッド。トラッドな車といえば女王陛下のSUVことレンジローバー。そして歴代の中で狙うべきなのがセカンドである。理由は格式高い初代クラシックレンジより価格も見た目も親しみやすく、スポーティ＆エレガントにシフトしたサードより英国的だから。エアサスによるふわふわした優雅な乗り心地は、〈ニューバランス〉の900番台に惹かれる感覚と近いし、主張しすぎず主張する佇まいもまたグッとくる。そんなことを考えながら目黒の『レンジャース』へ到着すると、お目当てだったコルバーブルーとウィローグリーンのセカンドレンジがお出迎え。オールドスクールなストリートマインドをくすぐる軽妙な色がたまらん！　文句なしにカッコいい。

● K's collection　神奈川県大和市

Place: Yamato, KANAGAWA　Type: VOLKSWAGEN　No. 7

空冷ワーゲンは、どこで、誰から買うかによって楽しさが変わる。

店舗奥にはカルマンギアが。「空冷ワーゲンはグチャグチャに改造されていることが多く、オリジナルに近い車両を見極めるのは簡単じゃない」と下村さん。相談すれば状態のいい希望モデルを探してくれる。

　オークションサイトで現物を見ずに購入して後悔している人が多いと聞くフォルクスワーゲンの"ビートル"ことTYPE 1やカルマンギア。だから昔の空冷ワーゲンを買うなら、仕上げとアフターケアまでバッチリしてくれる整備工場を兼ねた販売店で買うのが原則。となれば『ケーズコレクション』、一択だ。代表の下村惠介さんは1950年型のTYPE 1や1954年型のTYPE 2という博物館級のモデルに乗るハードコアなワーゲン好きで、個体の選び方や、空冷エンジンのメンテナンス方法、カスタムに至るまでゼロから指南してくれる兄貴的な存在。口調はちょっと厳しいが奥に底抜けな優しさがあり、販売している車両の解説も激アツ。車をどの店で、誰から買うかって本当に重要だよなぁと強く感じた。

VOLKSWAGEN TYPE 3
Year: 1969
Price: ¥3,300,000

「ウチでずっと整備をしていて、かれこれ20年も大事に乗っていたお客さんが手放した」という1969年型のTYPE 3。走行距離は7.5万kmで、内外装どこを見ても前オーナーの愛着ぶりが垣間見える。リアシートを倒すとラゲージ空間が結構広くなるから、自転車積んでキャンプに行きたいな〜と妄想がずっと止まらなかった。

入り口には、社用車として使っているという日産のエスカルゴ（またもや!?）と、ポルシェの914と同じエンジンを積んでいることで知られるフォルクスワーゲンのTYPE 4が。整備も改造も何でも相談可。ちなみにヤナセで販売していたタータンチェックの空冷ワーゲン専用シートカバーもオーダー可能。 Shop Data 神奈川県大和市福田5696-8　☎046-268-7732　9:00〜19:00　月休

● ORANGE ROAD　神奈川県横浜市

Place: Yokohama, KANAGAWA　Type: NISSAN PIKE CAR　No. 8

パオ、パオ、パオ、パオ！　尖った癒やし系、パイクカーの総本山。

　今回の旅でエスカルゴとBe-1は見たけど、横浜にある『オレンジロード』を訪れずして、日産のパイクカーを語ることはできない。そもそも、パイクカーとは槍（pike）のように"尖ったデザイン"を意味し、1987年のBe-1を皮切りに、パオ、フィガロ、エスカルゴ、そして街でよく見かけるラシーンへと続くレトロクラシックなシリーズのことで、カクカクしてクールだった'80sの日産車の風潮を一刀両断したのが丸っこい癒やし系フォルムと愛嬌満点なデザインだったという歴史が面白い。店内以外にもストックがあり、特に裏からやってきたオリーブグレーのパオに首ったけ。鳥山明の漫画から飛び出てきたようなパンプキンイエローのBe-1も惹かれるし、絶賛悩み中！

NISSAN Be-1
Year: 1987
Price: ¥1,980,000

NISSAN PAO
Year: 1989
Price: ¥2,200,000

左／Be-1は法人ワンオーナーの倉庫内保管車で走行距離は2万km弱。内外装ともに状態が良く、経年劣化しているゴムパーツ類とバッテリーは新品交換済み。上／パオはほっこり系と思いきや、オリーブグレーの実物を見てイメージが一新。ガラスハッチや剥き出しのヒンジが野性的。

整備工場が奥にあり、修理やカスタムも相談に乗ってくれる。部品取り用車両を大量に所有しているからパーツ不足は心配無用なのも頼もしい。「最近の軽自動車と同じぐらいの馬力でスピードも出ない。けどトコトコと走るのが似合うし、だからこそ見える景色もあるんですよね」と代表の毛利雅之さん。ゆっくりが楽しい車ってなんだかいいな。 Shop Data 神奈川県横浜市都筑区池辺町3245　☎045-929-3344　10:00〜19:00　水休

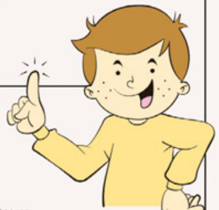
直輸入代行やマッチング。出合い方は自由だ！

● ルパルナス　東京都渋谷区

HP: blog.le-parnass.com | Type: ALL CAR | No. 9

どうしても諦められない車があるならハンターに相談だ！

欲しい車がある。車種、年式、色、MTなどの仕様も全部決まっている。けど、日本中探しても見当たらない。他の車にすれば？　って彼女から言われても妥協できない。そんなキミは、真っ先にネットで『ルパルナス』のHPを見てほしい。代表の渋谷剛史さんは、世界各国に駐在員事務所を置き、世界から諦めきれないクルマを探し出してくれる直輸入歴40年の自動車ハンター。高額では？　というと、そうでもなく、諸費用・消費税・オールイン乗り出しで適正価格。全額前払いだが、逆に後から追加請求がなく安心。Googleの口コミを見ればわかるとおり、車への愛がない人には断固として売ってくれないけど、本気で希望を伝えればなんとしてでも見つけ出してくれる。



欲しい車が決まっていなくとも、HP内の「特選中古車情報」に並ぶのは見たこともない車両ばかり。ロシアのワズをはじめ、国内に出回っていない海外メーカーや限定車種も多数取り扱う。

LADA NIVA 4×4
Year: 2018　Price: ¥2,780,000

2018年型のロシアのラーダニーヴァ。生産終了となった稀少な5ドアで走行距離1万8500kmのワンオーナー。グレーのガンメタがクール。シフトノブはナルディ製。

AUDI A2
Year: 2004
Price: ¥3,500,000

UAZ 2206
Year: 2022
Price: ¥3,900,000

ロシアのワズを正規ルートで輸入販売しているのは日本でココだけ。支援整備も受けられる。自賠責保険や重量税込みで、車検も3年付く乗り出し価格。

FIAT PANDA 45
Year: 1982　Price: ¥3,650,000

上／走行距離2万2700kmでワンオーナー。北欧で人気が高いアルミボディのハイテクエコカー。タレ目が可愛い。左／今年はフィアット パンダのレア車が続々と到着。初期型のスカイブルーは走行距離が9700kmという奇跡の個体。

● Car City Guide　東京都

Instagram: @car_city_guide | Type: MATCHING CAR | No. 10

車に詰まった愛着を、次のオーナーへ！　一期一会のカー・マッチング。

VOLVO 240 SEDAN 65TH ANNIVERSARY
Year: 1992
Price: ¥1,490,000

HONDA BEAT
Year: 1992　SOLD

SAAB 900S CABRIOLET
Year: 1993　SOLD

VOLVO C70
Year: 2007
SOLD(¥680,000※参考価格)

右上／P12に登場の『DRIVETHRU』ディレクター、神保匠吾さんが依頼したホンダのBEAT。右下／4人乗りオープンカーのボルボ C70。マッチング相手の年齢が同じで、大学の専攻と仕事も同じという運命的な巡り合わせ。左上／現在絶賛販売中のボルボ240の限定車。左下／オーナーは広告系AD。細部まで美しいサーブ 900Sカブリオレ。

『CCG』の3人とも愛車が渋い！　写真右から、中川拓海さんはメルセデス・ベンツ 190Eの1987年式。中村真さんはフォルクスワーゲン GOLF Ⅰ カブリオの1980年式。佐々木穂高さんはP82でも紹介してくれた1967年式のMGB GT。

ここまでを読んでマイカーが欲しくなったらInstagramで「@car_city_guide」を検索だ。普段はインハウスデザイナーとして働く20代の車好き3人が2021年に立ち上げたカーメディアで、「整備と修理費の話」や「車で行きやすい店案内」など、車にまつわるあれこれを掘り下げているんだけど、なかでも「カーマッチング」が最高にグッとくる。「大切な愛車を下取りに出して買い叩かれるのは嫌だ。ならばオーナーの思いを次のオーナーへ引き継ぐことはできないか？」というきっかけでスタートし、人と人を繋いで今日までに15台がSOLD。新オーナーへの譲渡式の様子もアップされていて、「乗っていた人の顔と愛着ぶりが見えるって、買う側にとってもいいはず」とはまさに！

CAR COLUMN

POPEYE Webの移動式編集部ができるまで。

昨年、僕らはおそらく世界初・世界最小の移動する編集部を手に入れた。「夢の車」に出合うためには、カスタマイズという選択肢もあるのだ。

photo: Masaru Tatsuki　text: Ryoma Uchida

パルコのアニバーサリーイベントでは本誌の元アートディレクター・前田晃伸さんによるデザインをラッピングして出動。全国を旅してコラボグッズを展示・販売した。

POPEYE Web MOBILE STUDIO

こちらが「移動式編集部」の全貌。後部座席を折りたたむと可動式の机と椅子を広げられる。椅子は繋げればベッドのようになり、寝泊まりも可。バックドアからは屋台がスライド式に出現。車内は板張りで、フックをつければいろんなものを掛けられる。

写真は「MOC OLLIE」のリーダー・松本憲さん（デザイン担当）。バディの大森皓太さん（製作担当）をはじめ、打ち合わせにはたくさんの仲間を呼んでくれた。

MOC OLLIE
静岡県浜松市を拠点とするクリエイティブユニット。得意の木工技術を駆使し、キッチンカーやキャンピングカー、店舗設計や内装、廃材を利用したプロダクトなど、あらゆるものを創作する。Shop Data 静岡県浜松市南区白羽町321　Instagram: @moc_ollie

約2年前にローンチしたPOPEYE Web。その開設当初からウェブ編集部で密かに計画していたのが「移動しながら仕事をする」ということだった。紙と違ってネット・オンリーの仕事だからこそ、一つの場所にとどまらず、移動しながら仕事ができるはず。車で取材に向かい、道中ではポッドキャストを収録。長旅をしたその足で、各地でポップアップショップを開催するのも面白そう……！

　そんな妄想を実現すべく協力を仰いだのが、ランクル・ハイエース専門のカスタムと販売を行う『FLEX』。「普段は編集部でもお店としても使いたい」「ボディは後からラッピングできるように」といった要望をぶつけた結果、ベースの車体はハイエースに決定！　次に、この車を「移動式編集部」へと生まれ変わらせるために訪ねたのが「MOC OLLIE」だ。彼らは木工技術を駆使してキッチンカー、DJカーのカスタムをはじめ、内装設計、プロダクトデザインまでこなすすご腕のクリエイティブ集団。そんな彼らにハイエースを渡し、2か月のカスタム作業期間を経てPOPEYEカーは完成。後部座席には折りたたみ式の机と椅子、充電設備も整備。バックドアを開けると、スライド式の屋台がどーんと飛び出す。屋台はディスプレイケース付きで、好きな本やレコードを並べられるし、フリマも開催できる。車内は板張りなので、まだまだカスタムできる余白だってある。昨年にはお披露目も兼ね、パルコのアニバーサリーイベントで全国を回った。実際にたくさんの場所や人に出会うことができ、今後やりたいことのイメージもますます広がる。車は大量生産品でもあるからこそ、世界に一つしかない、誰も乗ったことがない自分だけの一台にはやっぱり嬉しさがある。いつかマイカーを手にするときも、カスタムで理想の車を“作る”のもいいかもな。さてさて、今日はこれに乗って、どこでどんな仕事をしよう？

打ち合わせで訪れた工場には製作の材料となる廃材やリサイクル品が山のように置かれていた。遊び心で魔改造された斬新なプロダクト品も散見。この日はラフ作りの要領で木材にドリルをバンバン打ち込み、その場で写真右のような屋台を作って見せてくれた。

本当に困ったとき、僕には頼れる整備士（プロ）がいる。

photo: Katsumi Omori　illustration: Isao Aoyama　edit: Kyosuke Nitta

ONUKI AUTO MOBILE

大貫自動車

お手上げ案件のフランス車もお任せあれ。

2000年前後のプジョーやシトロエン、ルノーに採用されているATミッション「AL4」は、変速ショックや3速固定、オイル漏れといったトラブルに見舞われることが多い。そうなった場合は日本全国どの工場に頼んでもお手上げ。たいていが新品交換するのがお決まりで、60万円近くかかるため、仕方なく買い替える人がほとんどだが、墨田区の「大貫自動車」には、田中純さん（上写真右）や松本知明さん（同左）ら、これまで400機以上もオーバーホールしてきた熟練の技術士がいるから、長く乗り続けたいフランス車好きにとっては頼り甲斐しかない。しかも、そんな最高難度の整備力を誇りながらも、めちゃくちゃローカルなムードが漂い、国産車やトラックまで何でもウェルカムな町工場スタイルは創業から60年以上変わらず。親、子、孫と3世代メンテナンスしている家族ぐるみの付き合いも多いそうで、スローガンにある「下町価格と人情と技術力」は伊達じゃない。

工場は、向島百花園の目の前。中古車販売もしていて、車検や保険もセットで相談できる。

20年以上のキャリアを持つ田中さん。この日はシトロエン「DS5」の車検整備をしていた。

'80sの旧車から電気制御された2010年以降の新車まで、年代もメーカーもさまざま。

東京都墨田区東向島3-15-14
☎03-3614-2885　月、平日の祝休

Land Rover Technical Service MIDLAND

ミッドランド

英国気質を伝えるランドローバーの名医。

電気系統やエアサスを筆頭にあちこちで複雑なトラブルが頻発し、意地でも維持する気合とお金の余裕がなきゃ難しいといわれる旧年式のランドローバー。だからこそ腕利きのメカニックが不可欠なワケだけど、「ミッドランド」という心強い味方がいればコワくない。代表の野崎真宏さん（上写真右）が10年以上続けているブログを見れば知識と経験値は一目瞭然。冷却水やオイル漏れなどの症例を写真付きでカルテのように解説していて、その文面から真摯な姿勢がひしひしと伝わってくるし、実際に依頼すると、重症度と作業内容と見積もりを即提示してくれるから漠然とした不安がすぐ吹っ飛ぶ（しかも納得の明朗会計）。おまけに、整備している車両の走行距離はどれも長く、なかには30万kmという強者もいるが、「うちに通うお客さんではさほど珍しくない」と整備士の角田和敬さん（同左）。〈バブアー〉のように、「修理しながら長く大切に」という英国気質がここにある。

都心から30分程度と意外に近い。東関東自動車道の谷津船橋の出口から約5分で到着。

日本一のランドローバー好きと評される飯島浩二さんの「ディフェンダー90」も整備。

ゴリゴリな岩場を走破するオフロード仕様の車両も。ウインチバンパーがかなり重厚。

千葉県習志野市茜浜1-11-12
☎047-481-8950　水休

車を持つことと、すぐ相談できる整備工場を知っておくことはセットだ。ここでは先輩たちも大いに救われてきた、日本屈指の4軒を紹介しよう。

ガレージサイコー

HONDA
CIVIC RS (SB-1)

ガレージサイコー

レジェンドが伝える誇り高きホンダのDNA。

さいたま市の「ガレージサイコー」に次々とホンダの旧車がやってくるのは、'80年代ブームの影響もあるが、何より今井康一会長（上写真右から2番目）の存在が大きい。はっきり言って古い国産車はパーツがない。故障しても交換する部品が見つからず、仮にあったとしても取り扱えるメカニックがいないという八方塞がり状態。その点、会長は1976年発売の初代「アコード」をリアルタイムで整備していた本田技研工業の元技術士。'64年のF1電撃参戦からひたすらトガっていた'70年代以降のホンダを熟知しているだけでなく、米国とヨーロッパからパーツを直輸入する太いパイプがあるため、最後の頼みの綱とすがる思いで、全国から初代「プレリュード」や初代「シビック」などが押し寄せるというわけだ。（上写真右から）小林広典さん、桑原智章さん、船橋伸也さんら、会長から学びたいと門を叩く整備士もまた数知れず。ホンダの魅力と職人技術を次世代に伝えている。

'70年代の「ライフピックアップ」や'90年代の黄色い「ビート」が。自然と胸が高鳴る。

ちょうど整備を終えたワインレッドの初代「シビック」。見惚れてしまうカッコよさ。

夕日を浴びて輝く初代「プレリュードXE」。シルバーの色味とフェンダーミラーが渋い。

埼玉県さいたま市桜区下大久保1261 ☎048·852·0768 日休

SILVER REST

VOLKSWAGEN TYPE III
SQUAREBACK WAGON

シルバーレスト

溢れ出るワーゲン愛。ウチの子頼みます！

数ある車の中でもビートルの愛称で親しまれるフォルクスワーゲンの「TYPE 1」は特別だ。移動手段というより家族の一員。世界中に熱狂的なファンがいて、ほとんどのオーナーが念願叶って購入しているから溺愛レベルがスゴい。だから川口市の「シルバーレスト」へ整備依頼が後を絶たないのだろう。とにかく代表の野々下智之さんのワーゲン愛がすさまじく、ネジ一本一本を磨いてメッキをかけ、ボディも塗装を全部剥離してから下地を再塗装、という途方もない緻密な修復を早朝からぶっ続けで行い、夜になると自身が所有するワーゲンの改造に取り掛かる毎日。「朽ちた状態から蘇らせた」という「'72年式TYPE2」にはスバル「インプレッサ」のエンジンを積み、「'57年式カルマンギア」はシャーシからレストア中で、「巨大プラモデルみたいでしょ？」と少年のように話す。趣味も仕事もワーゲン。朝から晩まで365日ワーゲン。我が子同然のビートルを任せるならココ以外ない。

倉庫前で整備を待つビートル。年代によってフロントガラス幅やテールの形状が異なる。

'78年式の真っ赤なビートル。高齢のおばあちゃんが新車から大事に乗り続けているそう。

スモーキーなグレーが相当渋い'63年製「TYPE1」。オーナーの愛着ぶりが細部に窺える。

埼玉県川口市石神715 ☎048·424·4071 無休

好きな車に長く乗るにはどうすればいいですか?

「買った車に一生乗り続けたいんです！」と伝えたら、「なんでも教えるよ」と重鎮はタバコに火をつけて笑った。崎山和雄さんに聞く、寿命を延ばす10のカーメンテ術。

photo: Kazufumi Shimoyashiki　illustration: Telly Sahara　edit: Kyosuke Nitta

発売から20年以上たっているのに、『10万キロ走っても故障しない本』と『クルマの寿命がどんどんのびる!!』（ともに三推社・講談社）が車好きの教科書であり続けている著者の崎山和雄さんは、キャリア60年という整備の達人。車を健康な状態に保つ秘訣を聞くなら、この人しかいない！

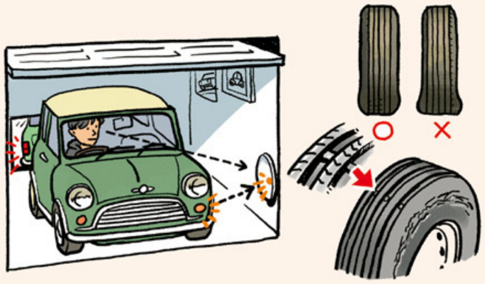
Q1. 車を長生きさせるために、まず大切なことって何ですか?

A 最近の車は壊れない。旧車は壊れやすい。なんていわれるけど、そもそも**車は壊れるものだと思え**ってことだね。年式は関係なく、メンテナンスフリーの乗り物は世の中に存在しない。あと、**車検を通っていればいいと思うな！**　と声を大にして言いたい。車検はあくまで検査した日の一時的な安全性を確認するだけのものであって、以後2年間の安全を保証するものではない。整備不良が原因で事故を起こしたとすれば、それは検査官ではなく、所有者であるキミの責任なんだということをわかっていてほしい。だからといって、車は急に壊れるかというとそうじゃない。不具合があれば、車は音や匂いで必ずサインを出す。それに気付くためにも**暖機運転がかなり重要**。エンジンをかけてすぐ出発しちゃう人が多いけど、あれはよくない。アイドリング中に耳を澄まして音を聞くこと。いきなりスピードを出すとエンジンに負担がかかるので、2つ目の信号ぐらいまでは時速30㎞走行が原則。音楽をかけず、車の声を聞いて、絶好調なとき、不調なとき、その両方の状態を知ってあげる。そのためにも、オーナーは**日頃から五感を磨くことが大事**なんだ。

叩き起こされて急に走れと言われると、車だって体調を崩す。暖機運転は車にとってのウォーミングアップと心得よ。

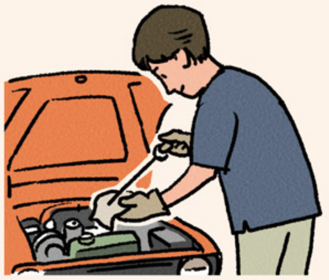
Q2. 日常的にやってあげるといいことってありますか?

A **30秒の目視を面倒くさがらずルーティンにすること**。まず車の周りをぐるっと回ってタイヤをチェック。溝の減り具合はどうか。空気圧は大丈夫か。側面に亀裂や傷はないか。そして、運転席に座ったら、ハザードをつけてブレーキペダルを数回踏み、点滅に問題ないかを確認する。一人だと四隅を見られないから、駐車場の前後にミラーや反射板を置くとわかりやすいね。


タイヤの溝の深さが1.6㎜未満になると法的使用限度のスリップサインが現れる。側面の傷やヒビはバーストの原因になるので要注意。空気圧は過多でも不足でもどちらもよくない。ベストな状態を知っておこう。

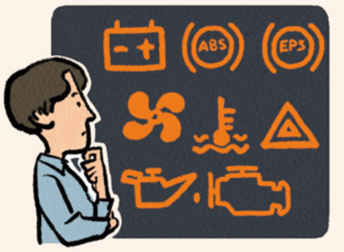
Q3. 定期的にやるべきことは何ですか?

A ボンネットを開けたことがないという人がいるけど、**エンジンルームは最低でも週1回は見てほしい**。冷却水が極端に減っていたり、ファンベルトが切れそうだったり、というのを知らぬまま走ればオーバーヒートに直結し、エンジンに深刻なダメージを与えることになるから、オイルと液量は把握しておくべきだね。仕業点検はすごく簡単。ブレーキフルード、冷却水、ウィンドウウォッシャー液、バッテリー液、この4つは、タンクにある適正値ラインを見ながら減り具合を確認するだけ。エンジンオイルは、スティック状のオイルレベルゲージを引き抜いてチェックするだけ。その他、オイル漏れや水漏れの形跡があるかどうかも見渡せばわかること。ファンベルトが緩んでいるかどうかは、素手でできる。


エンジンオイルのレベルゲージチェックでは白いウエス（雑巾）があると便利。引き抜いて先端のオイルをさっと拭き取り、また差し戻してから引き抜き、オイル残量を確認する。

Q4. 車の不調に気付いたら何をすべきですか?

A メーターパネルにずらっと並んでいるインジケーターランプのどれかが点滅しているのに、放っておくのはダメ。あれは警告灯であり、車からの重要なメッセージなんだ。色によって緊急度が変わり、黄色は注意、赤は重大なトラブルが起きていてヤバいってこと。だから、警告灯の意味をまず知ることだね。あと、自分だけにしかわからない「なんか違う」という違和感にも要注意。どこがどう違うのか、事象の時系列や前後関係、匂いや音、**整備士にしっかり伝えられるようスマホにメモする**といいよ。


警告灯が出る前に未然に防ぐのが理想。だから、エンジンルームを覗く習慣をつけるべき。エンジンオイルの残量を頻繁に見ていれば、油圧警告灯が急に点滅することはない。

Q5. 車の体の中を労るにはどうすればいいですか?

A 僕が面倒を見ていた車の走行距離は20万㎞、30万㎞が当たり前。何か特別なことをしていたわけでもないけど、**エンジンに適したエンジンオイルを使う**、**オイルをケチらず頻繁に替えてあげる**、この2つは徹底していた。オイルは、潤滑・冷却・洗浄の作用をして、燃費や加速の滑らかさを大きく左右する、いわば車の血液。汚れと減り具合を見れば、健康状態もわかるんだ。メーカーもたくさんあって、「15W-40」などの粘度を示す数字も難しいし、どう選べばいいの？　と最初は迷っちゃうけど、それなりの知識が必要だから、見極められるまでは、かかりつけの整備工場に従うこと。

オススメなのは「MOTUL」。硫黄分が少なくて酸化しにくく、洗浄作用が高くて滑らかに回る。ちなみにエンジンオイルフィルターが汚れていたら、オイルが新品でも効果が半減してしまうから、最低でもオイル交換2回に1回はフィルターを替えてほしい。

異臭は音よりも深刻。どこから、どういう匂いなのかで危険度が変わる。ガソリン臭が車内に充満したら火災につながる可能性も。停車し、整備士に電話で判断を仰ごう。

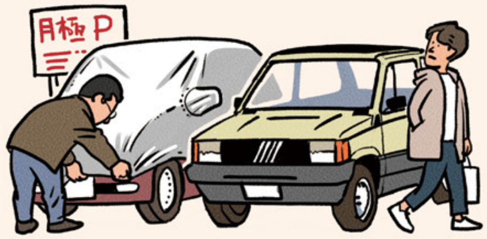
Q6. 消耗品の替え時っていつなんですか？

A 使い切る前に8割の状態でスパッと替えるべき。例えば、ブレーキパッド。車検通ったし、まだパッド残量があるから大丈夫でしょと、キーキーという異音を無視して走り続けちゃう人がいるけど、いいはずがない。経年劣化したパッドは使えないし、ブレーキの踏み方次第で摩耗具合は変わるから、交換目安も信じ過ぎないほうがいい。まだまだイケるという精神が命取りになることもあるからね。エンジンの命綱でもあるタイミングベルトもそう。平均寿命が10年10万kmといわれるけど、これも乗り方次第で変わる。ゴムやプラスチックの消耗品パーツは頃合いを見極めて潔く替えよう。

ブレーキパッドは限界を超えると鉄板が擦れてガリガリという音を立てる。タイミングベルトはキュルキュルと鳴る。消耗品は、替えた日をメモする習慣をつけよう。

Q7. 屋根なしの駐車場の場合、車を守るためにカバーは必要？

A 車を長くきれいに乗るために必要といわれているけど、正直言ってボディカバーは逆効果。なぜかというと、裾から吹き込んだ砂埃と、風でなびいたカバーが擦れ合って車体に傷をつけるから。出先から帰ってきてすぐにかぶせるのもNG。埃をいちいち落としてからじゃなきゃいけない。長期保管するときの盗難防止には得策だけどね。



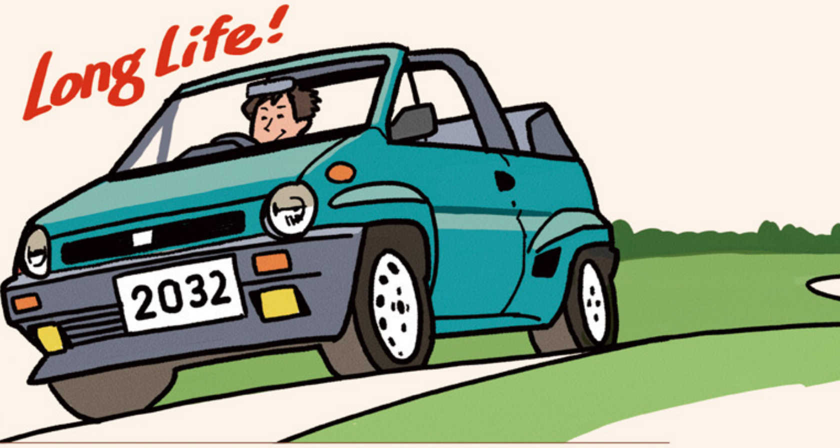
最近は、隙間なくしっかり覆ってくれるものが増えているみたいだけど、足回りまでカバーしてくれるものはない。未舗装の駐車場だと、地面からの湿気が上昇してカバーの内側に溜まり、サビの原因になることもある。

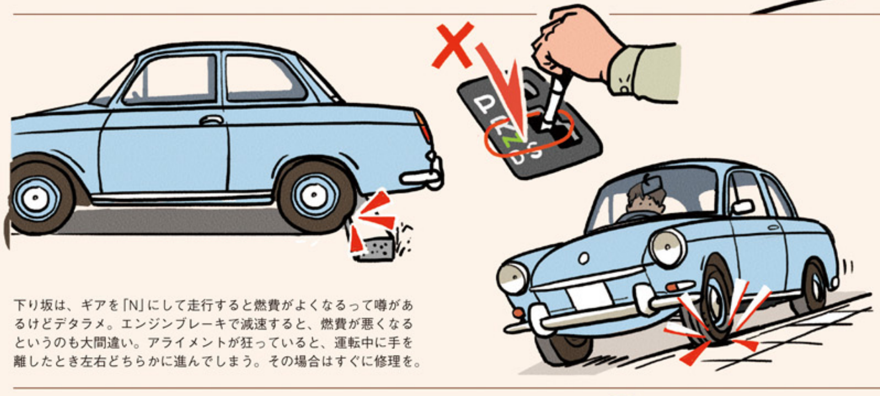
Q8. 車を長持ちさせるためにやってはいけない運転って？

A 言うまでもなく、急発進、急加速、急ブレーキ、急旋回など、「急」がつく運転はしないことだね。だから、「慌てない」「急がない」「慎重」「丁寧に」が原則です。レース用じゃない限りベタ踏みなんてもってのほか。オフロード仕様ではないのに悪路でスピードを出すなんていいはずがない。車の基本設計と特性をわきまえた、相応の運転を心がけることが肝心。あと、信号待ちのたびに、ドライブモードから「N」や「P」にレンジを変える人がいるけど、今すぐにやめたほうがいい。AT車の場合、その都度クラッチ板が摩耗し、潤滑油であるATフルードも劣化が進み、ミッションにとっていいことがひとつもないんですよ。高速道路で渋滞に引っかかってしばらく動けないときは安全を考えて「P」にしてもいいけど、普段は変えないことだね。タイヤに関していうと、車止めに当てっぱなしの状態で1週間とか長期間駐車すると、1か所に圧がかかって、タイヤが変形する可能性がある。だから、車止めからほんのちょっと離して駐車するクセをつけてほしい。あと、縁石や段差に対して斜めに入って、無理に乗り越えようとしてガクンガクンとなるときあるでしょう？ あれもアライメントっていう車輪の整列を狂わせる行為。同じように、車庫入れのときに、これ以上回らない"据え切り"までハンドルを切ってしまうことがあるけど、これもアライメントに悪影響を及ぼしかねないし、足回りへのストレスが大きい。これらの運転を何回かやったぐらいで寿命が縮むことはないけど、5年、10年とやり続ければ、いつか車は悲鳴をあげるから、できるだけやらないように心がけることだね。あと、車も人と同じで、常に運動しているほうが元気。休めば体力が落ちるでしょ？ コンスタントに乗ってあげることが一番の長持ちの秘訣だね。

教えてくれた人 崎山和雄 整備士

さきやま・かずお｜1943年、東京都品川区生まれ。弱冠16歳で赤坂にあった整備工場の草分け「ジャックスガラージ」に入社し、71年に「崎山自動車サーヴィス」を設立。2020年末に工場を閉めるまで、年間600件を超える顧客の車を担当し、「外車といえばサキヤマ」と全国に名を轟かせた。引退した現在は20年以上出場しているレースイベント「アバルトカップ」用車両「FIAT SPORT 850」を気ままにメンテナンスする毎日。





下り坂は、ギアを「N」にして走行すると燃費がよくなるって噂があるけどデタラメ。エンジンブレーキで減速すると、燃費が悪くなるというのも大間違い。アライメントが狂っていると、運転中に手を離したとき左右どちらかに進んでしまう。その場合はすぐに修理を。

Q9. 冬が終わったらタイヤ回りがサビてきちゃったんですけど……。

A 雪道を走らなかった？ 原因は何かというと塩害です。海の近くじゃないのに？って思うかもしれないけど、道路の雪を溶かすために撒かれる凍結防止剤の主成分は塩化カルシウム。それをタイヤで巻き上げたままでいると塩害でサビるんだ。だから、雪道を走ったらその日のうちに足回りを真水で洗おう。ホースで細部まで入念にね。

いくら寒かろうが、雪道を走ったら即日洗車。タイヤや足回り全体にいろいろな角度から放水しよう。潮風に長時間あたった日も同じように洗い流そう。

Q10. 室内を快適にキープするためにやっておくといいことは何ですか？

A 車内って掃除していないと雑菌が増え続けるし、シートやフロアマットはダニだらけ。ジメジメと湿気の多い梅雨時の密閉した車内はカビが繁殖するには好条件だから、天気のいい日にはドアを全開にして虫干しをしてあげること。ゴミを捨てて、除菌スプレーをしゅっとするだけで環境は劇的に変わる。ボディを磨くことも大事だけど、同じぐらい車内も清潔にしておきたい。

虫干しは3時間ほどでOK。5〜7月は、車の中に湿気取りのパックを3個ほど忍ばせておくといい。衣類用の防虫フックをかけておくのも効果的。

THE TIMES OF PIKE CAR

パイクカー3部作の時代。

今から30年以上も前に生まれた、日本独自のハイブリッド・ポップなクルマたち。その誕生の背景に迫る。

photo: Taro Hirano, Tomoo Ogawa (books)
text: Kosuke Ide

ジョルジェット・ジウジアーロがデザイン提案した1000ccエンジン搭載の初代マーチ（K10型）をベースにしながら、どこか懐かしさを感じさせる愛くるしいスタイリング。シンプルなデザインの衣服や日用品の感覚で受け入れられる「生活雑貨としてのクルマ」として高感度の消費者に訴え、社会現象的ブームを巻き起こしたエポックメイキングなクルマ。限定1万台で発売されたが、受注殺到により購入者を抽選で決定する事態に。パオ、フィガロへ続く日産パイクカーシリーズ誕生のきっかけとなった。オリジナルグッズやアンテナショップなど、斬新なプロモーション戦略も話題になり、大きな売り上げを記録。当時作られたコンセプトブックからもその高いデザイン性と強力なコンセプトがビシビシ伝わってくる。

Be-1 1987

パイクカーの先鞭をつけた
画期的レトロモダン・デザイン。

当時青山に作られた「Be-1ショップ」には多種多様なオリジナルグッズが次々と入荷した。

'80年代が生んだ3台の車は、自動車業界の"シティポップ"だった。

PAO 1989

徹底したこだわりが詰まった
デイリー・リゾートカー。

1980年代の「日本産〝洋楽〟」としてのポップミュージックが「シティポップ」なるカテゴリーを得て再注目され、国内のみならず海外からも超人気となって久しいけれど、ひとつ言えることは、それらの音楽が、世界のどこにもあり得ない、独自のスタイルを持っていた、ってこと。戦後、'60〜'70年代の高度経済成長期を経て、欧米をはじめ諸外国のハイからローまであらゆるカルチャーを吸収し咀嚼し尽くした〝雑食〟文化大国ニッポンが生んだスーパーハイブリッド音楽、それがシティポップだとすれば、まさしくそれと同時代、この国が誇る自動車業界にも、世界中探してもここにしかないオリジナリティを備えたポップ・アイコンが生まれていた。それが、日産自動車が'80年代後半〜'90年代初頭にかけて発売した「Be-1」「パオ」「フィガロ」の3モデル、通称「パイクカー3部作」である。「パイク」は英語で「槍」のこと、つまりはそれだけトンガったクルマだというわけだ。

その3台のクルマを改めて眺めてみれば、まさしく「ポップ」で「カワイイ」、それでいて「クール」なんて言葉が浮かんでくる。時折、街で走っている姿を見かけると、思わず目で追って観察したくなるほどに、今見てもまったくイケてるデザイン。後にも先にも似た存在のないこのユニークなクルマたちは、一体どうやって生まれたのか。その謎を探るために向かった先は、この3作すべての企画からデザインまで深く関わった工業デザイナー、古場田良郎さんの元。「パイクカーの父」に伺った物語は驚くべきものだった。

「'77年に日産に入社し、ひととおりクルマづくりを覚えたくらいの'83年頃、当時の日産は販売不振で閉塞感にもがいていた。それで、社内で『このままじゃ駄目だ、新しい挑戦を』という声が上がり、初代マーチのモデルチェンジのプロジェクトが発展して、私を含め数人だけで実験的な先行開発を始めました。先行開発にはA案、B案、C案があり、新企画のため

「パイクカーの父」を訪ねて、北陸・加賀のガレージへ。

上／Be-1、パオ、フィガロすべての企画とデザインを手掛けた古場田さんはまさしくパイクカーの生みの親。それぞれのクルマが生まれるまで、大量のスケッチを描いた。中／古場田さんのオフィスに残る、当時作られたBe-1グッズの数々。これはあくまでほんの一部で、数百に及ぶアイテムが制作された。下／石川県にある古場田さんのオフィスのガレージにはフルオリジナルに近い状態のBe-1とパオが並ぶ。

YOSHIRO KOBATA

古場田良郎｜プロダクトデザイナー、デザインコンサルタント。1955年石川県生まれ。'77年金沢美術工芸大学産業美術学科卒業。日産自動車デザインセンターに在籍した後、'89年退社。'91年「古場田デザインスタジオ」設立、日用品、情報機器、車両、産業機械など幅広いプロダクトの商品開発・デザインを中心に、国内外の地場産業振興を行う。

FIGARO 1991

小粋でエレガント、クラシックな小型高級車。

Be-1、パオ（と同時に発表された商用パイクカー「エスカルゴ」）に続いて発表された「最後のパイクカー」。こちらも初代マーチがベースの2ドアパーソナル・クーペで、シリーズ唯一のターボエンジン搭載車。「装飾性のある生活用品」をコンセプトに掲げ、クラシックかつ小粋で上品なスタイリングにデザインされた。「エメラルド」「ペールアクア」「ラピスグレイ」「トパーズミスト」の柔らかい中間色のボディカラーの美しさも含め、シリーズで最も女性ユーザーを意識した一台となった。プロモーションとして、「濱マイク」シリーズなどで知られた林海象監督らを起用し、フィガロをフィーチャーした短編オムニバス映画『フィガロ・ストーリー』の製作・公開など、異例のマーケティング活動が展開された。

右はパオのイメージソースとなった〈バナナ・リパブリック〉のカタログ。左は'80年代らしいポストモダンなデザインの当時のパーツカタログ。

日産パイクカーシリーズ第2弾。「パイクカー」とは、少量生産を前提とした遊び心のある「尖った（鋭い）」感覚のクルマ、ニッチ市場を狙った高感度戦略商品として日産の商品企画部が作った新カテゴリーだった。車両ベースはBe-1と同じくマーチ（K10型）。トラベル、サファリ、冒険など非日常な世界観でありながら日常の生活シーンにフィットするデザインはレトロモダンなテイストで、Be-1以上のこだわりを詰め込んだパイクカー随一の名車。プロモーションとして、当時盛り上がり始めていた東京ウォーターフロントエリアの倉庫街にコンセプトショップ『パイクファクトリー』をオープン。オリジナルPVも制作、パオのコンセプトを理解し体現する「パオイスト」としてすぎやまこういち、立花ハジメ、野沢直子、しりあがり寿らが起用された。

には、クルマの世界だけを見ていたのではいけない、社外の人間を巻き込んでデザイン提案しようということで、B案では当時アパレルのマーケティングなどで注目されていたコンセプト企画会社『ウォータースタジオ』の坂井直樹氏に参加を求めました。そのB案の2つのうちのひとつ、『ノスタルジック・モダン』をテーマにした『B-1案』が、後に『Be-1』の名で世に出ることになるモデルでした」

何と、「Be-1」とは企画書の「B-1案」のことだった！　そんな由来だけでもユニークだが、このクルマはとにかく当時の常識を超えた、画期的なものだった。「心地よさ優先のナチュラルカー」と銘打ち'85年の東京モーターショーに出展されたBe-1は、明るいパンプキンイエローのカラーとどこか懐かしさを感じさせる小さく丸っこいボディを持った、何ともポップで愛くるしいクルマ。こんなレトロ感覚のクルマが新しく開発されるということ自体が、異例中の異例だった。

「当時のカーデザイナーや設計者からは批判を浴びましたよ。何だこれは、こんなのクルマじゃない、と。『クルマは常に進化し続けなければならない』というセオリーを覆してしまったわけですから」

しかし、Be-1は新しい時代の空気に敏感な消費者たちに諸手を挙げて迎え入れられた。'87年1月に発売されると予約が殺到、1万台を予約完売し、3月には前代未聞の「社長による予約完売御礼広告」を全国紙に出稿するまでの事態に。

「1万台というのは、金型の減価償却ができるギリギリのラインだったんです。新型車をたった1年で造るには、プレス部品を少なくして、樹脂材料をフルに使って少量生産するしかない。プラスチックを大胆に導入することで、コストダウンとともに形状の自由さも高まりました」

車両設計はもちろん、広告や販売戦略も少数精鋭のチームが自ら手掛けたという。

「デザイン、製造、プロモーションまですべてにおいて、誰もやっていないこと

PAO　Be-1

細かく作り込まれたディテールは、何から何まで常識外れ。

1

2

3

4

5

6

7

1. クラシックな開閉式の三角窓。2. あえて隠さず剥き出しにしたドアヒンジは、パオの「らしさ」を最も象徴する部品。3. レトロフューチャーデザインを象徴するアルミボディの専用オーディオ（カセットデッキ＆電子チューナー）。受注生産の専用キャリングケースにセットして車外にも持ち出せる仕組みになっていた。4. 樹脂製よりも経年変化に味わいが生まれるアルミ板のエンブレム。5. オプションパーツである荷物隠しのトノカバー。シルバー色のスチールフレームにオリーブグレーのビニールレザーをロープで編み込んだリゾート＆サファリ感覚。6. 華奢な形状のステアリングホイールは車体色がアイボリーホワイトの場合は黒で、それ以外はアイボリーホワイト。7. 大量生産車ならば一体式になってしまうところを、3個独立させて配置した印象的なテールランプ。

1

2

3

4

5

1.シンプルなロゴマークと深みのあるパンプキンイエローはBe-1のイメージを決定づけた重要な要素。2.このアルミホイールは東京モーターショー仕様を再現したもの。通常のパンプキンイエローの生産車は車体と同色のスチールホイールに黒のセンターキャップ、それ以外は白のホイールだった。3.長楕円形のランプは内側から取り付けられ、小ぶりなトランクリッドはカンチレバー機構で跳ね上がる。4.バイクのような丸形のスピードメーターとタコメーター。5. 丸形ヘッドライトをはじめ、フェンダーやボディパネル、メーター、ドアハンドルなど随所のデザインに「丸」が取り入れられている。前後のエプロンとフロントフェンダーには、鋼板と同時に焼き付け塗装が可能な樹脂「フレックスパネル」を世界で初めて採用。生産は自社工場でなく、手作業による生産が可能な「高田工業」に委託した。

をやろうと。アンテナショップからブランドビジネスまで、次々と企画を打ち出した。こうなるともう社内の広報部では対応できないということで、僕らが直接メディア対応するようになりました」

話題性あるコンセプトカーの登場に、マスコミの取材は殺到。たった1万台だけのクルマが世間を賑わす一大ブームになり、中古車は新車価格を上回って2倍強の300万円に。青山にオープンした『Be-1ショップ』では同車のロゴを使ったアパレル、雑貨、食品が並び、果てはBe-1スキーツアーやレンタカービジネスまで展開。「Be-1現象」とまで呼ばれたその狂騒の一方で、その存在を「新奇性を売りにした軽薄なファッション的商品」と蔑む声があったのも事実だった。「『車をキティちゃんにしてしまった』とかね。社内にも反対勢力があったくらい。日産はフェアレディZやスカイラインの硬派なメーカーでしたから、こうした〝遊び〟を認めない人たちもいました。だけど、普段は接触のない部署の社員や、一般の方々から激励の手紙や提案が届いた。みんな楽しいことに飢えていたんですね。色々な人たちが部署や会社の枠を超えて、企画に乗ってきてくれました」

勢い衰えぬ中、'86年には同チームで「ポストBe-1」プロジェクトが始動する。新たなモデルのコンセプトは、「非日常のデイリー・リゾートカー」。イメージソースになったのは、当時アメリカでトラベル&サファリをテーマにアパレル展開して人気を集めていたブランド〈バナナ・リパブリック〉だった。ブランドの世界観を体感するため、古場田さんらはアメリカに視察旅行を敢行、旅行や冒険に対する想像力を掻き立てる、新たなクルマのデザインを模索し始めた。「映画『インディ・ジョーンズ』の世界」「助手席にワインとバゲット」「女優ならメリル・ストリープ」「車内でラテン系のジャズがかかっている」などイメージを膨らませて大量のスケッチを描き、その結果生まれたのは、小さくてスマートなリゾート気分のクルマ。三角窓、スチール製のインス

FIGARO

免許より先にPAOを手に入れた、若きパイクカーオーナーと話す。

OWNER

小池一博_21

会社員

バブル期に産声を上げたパイクカーは、にもかかわらずその多くが大切に乗り続けられている。18歳で免許より先に愛車のPAOを迎えたという小池さんは、おそらく最も若いパイクカーオーナーのひとり。弱冠21歳の彼はなぜ、30年以上昔の車に心惹かれたのだろうか。「小6のときに『Be-1』のミニ四駆を見て、こんなに可愛い車があるのかと衝撃を受けました。PAOもフィガロも中身はマーチなのに、外側が変わるだけでこんなに魅力が増すのかって。“デザイン”というものに興味を持ったのもこの車がきっかけでした」。その衝動のままにデザイナーを志し、高専に進学。バイト代を貯めて教習所に通おうと思った矢先、メルカリに17万円で出品されていた現在の愛車に出合う。「逃したらもう次のチャンスはないと思って、翌々日には実車を見るため静岡へ。免許を取るまで無駄に駐車場代を払ったりもしましたが、思っていたよりずっと実用的に乗れています。整備はYouTubeを参考に、できることは自分で。古い車ですが、非力なところも含めて愛おしい。エンジン音がやかましいのも、風切り音がすごいのも全部が魅力になる。これを売ってまで他に欲しい車はないですね」

夢だったプロダクトデザイナーの道へと進んだ小池さんは2000年代生まれ。ダッシュボードに並ぶミツメやベニー・シングスのカセットとの出合いもこの車がきっかけだ。リアウィンドーにはオカタオカさん作の「YOUNG TIMERS CLUB」ステッカーが。

1. インストルメントパネル、シート、ステアリング、ピラー内装からルーフ内張りまでホワイトで統一されているのがフィガロ最大の特徴。**2.** レトロフューチャーなイメージたっぷり、機械感のあるトグルスイッチ。**3.** リングに挿した花のつぼみをイメージしたデザインのエンブレム。植物をモチーフにしたマークのクルマは非常に珍しいという。**4.** ATノブまで白色に。細部までこだわった高級車の趣。**5.** エメラルドカラーに映える、随所に使われたメッキパーツも美しい輝き。**6.** ルーフ前端からリアウィンドー下まで開くオープントップ機構。ちなみに幌の内側まで白い内装生地が張られている。**7.** ラジエーターグリルは宝飾品のように複雑で装飾的な形状。

トルメントパネル、剥き出しのドアヒンジ、麻風生地のシート、庇つきメーター、補強ビードからトグルスイッチまで、オリジナルのデザインによる内外装は、コンセプトが頭のてっぺんから爪先まで完璧に貫かれていた。車名はモンゴルの遊牧民の移動式住居の名でもあり、軽快な響きを持つ「パオ」。四輪駆動でもない、ボディ形状の空力なんて気にも留めない。性能よりもムード、気分、空気感を大切に考えた「生活を演出するためのクルマ」。クルマだけでなくファッションやライフスタイル全般に幅広い興味を持つ人たちへ向けた、小さくも「パイク」な一台は’89年、限定生産として受注期間3か月で発売され、3万台以上を生産した。

パオの開発と同時進行で始められた次なるプロジェクトは、恋愛至上主義を謳う「東京ヌーベルバーグ」をテーマにした非日常の小型高級車「フィガロ」。ノスタルジックなオープントップ仕様と白い革張りシートがエレガントな大人の雰囲気を醸した同車は女性にも人気を博し、2万台限定で発売されたが、応募が殺到したため3回に分けて抽選が行われた。

異例ずくめの3部作が開発された時代は、丸ごと日本の「バブル経済」の時期とそっくり当てはまる。しかし、この未曾有の大好況が生み落とした文化の多くが、今から見れば「時代の徒花」でしかなかったことに比べ、この3部作の魅力がまったく衰えないのは、やはり古場田さんら開発関係者の熱い思い入れと徹底したこだわりが詰まっているからに違いない。この3モデルの現在の残存率は、一般的なクルマのそれを遥かに上回る、これまた〝異例〟の数値だという。近年では海外にまでその魅力が伝わり、世界各地に熱狂的なファンが存在し、カーミーティングも行われているのだとか。

「ディテールだけを見てどのクルマだかわかる、現代ではそんなクルマは他にほとんどありません。大量生産、大量販売が当たり前の時代に、こんなオーダーメイド感覚のクルマが造れたこと。今考えてみても、奇跡に近いと思いますね」

未来のクルマの話。

Luxury Saloon

NIO

2014年に創業したニオこそがテスラの最大の対抗馬。中国ではトップシェア、そして開発拠点のミュンヘンからヨーロッパへ進出中だ。この**eT7**は2022年発売のセダン車で、液体電解質を使わない固体電池を搭載するとか。安全面・充電時間・航続距離（1000km超え！）がグッと改善された代物で、これで「技術の中国」の時代到来なるか。

テスラの2台目の車種として2012年に誕生した**Model S**。これがメーカー最上位の高級セダンだ（世界中で最も売れているEV・Model 3がコレのエントリーモデルなのだ）。ポルシェのタイカンやアウディのeトロンといった大手のEVが、このModel Sの存在をベースに造られているというからまさにEVのザ・スタンダード。

VS

SLA

1

TESLAを包囲せよ！

SUV

2020年に5番目のEVとして納車がスタートしたこの**Model Y**が、テスラのこれからの主力モデル。最近のSUV人気に乗って、トップセールスだったModel 3の売り上げをついに抜き、世界のベストセラーモデルになった。日本でも2022年秋頃から納車がスタート。価格は約600万円。航続距離は約605km。

VS

NIO

テスラに追随するニオが最初に発売したモデルはSUVで、すでにノルウェーでの展開もスタートしたeS8だ。そして、2020年に中国で発売されたのがこの**eC6**。クロスオーバー・クーペ、つまり都市でも快適で、洗練された流線形のフォルムというのが特徴。元BMWのデザイナーもいるミュンヘン支部が開発したそうだ。約650万円〜。

Fisker

BMWのZ8、アストンマーティンのDBSという名車（共にボンドカー！）をデザインしてきたヘンリック・フィスカーによる、LAのフィスカー。ジェフ・マクフェトリッジもコラボしてアートカーを造った**Ocean**が2023年から納車スタートだ。"カリフォルニアモード" を選択するとフロントを除くすべての窓とサンルーフがオープン！

僕たちは知らなすぎてもったいないぞ！
いま起きている世界最先端のアツい戦い、
そして京都から未来を作る男のことを。

めくるめくEVと

Sports Car

Rimac

EVの原点はピュアでギークなガレージカルチャーだ。発展途上のクロアチアで、創業者のメイト・リマックが自身のBMW E30をDIYでEVに改造したのがリマックの始まり。納車開始となったハイパーカー・**ネヴェーラ**は0-100㎞/hの加速がなんと1秒台。ポルシェでも3秒台だからね……。漫画みたいなこの車は150台限定。2億円ナリ！

VS

2003年に設立したテスラの最初のEVは、実は2008年に発売したこの**Roadster**だ。当時はあのレオナルド・ディカプリオがプリウスから乗り換えた、などと話題に。2024年生産開始予定の第2世代のスペックは、0-100㎞/hの加速は2.1秒、最高時速400㎞以上、航続距離1000㎞というすごさ。価格は2000万円以上とも。

TE

Truck

2017年に発表された、世界初のEV・トレーラーヘッドがテスラの**Semi**。電気のトラックはどこもアスリート寄りな開発がなされていて、これもブガッティのハイパーカー・シロンより空気抵抗が少なく、0-100㎞/hの加速がたった5秒。36tを引っ張っても20秒。上位型なら航続距離は800㎞超えで、開発中の急速充電器なら30分充電で640㎞の走行が可能。発売延期が続いていたが2022年には遂に納車が開始。

この**Cybertruck**の登場は衝撃のなかの衝撃。テスラが2019年に発表し、'23年納車開始予定の量産車もほぼこのまま。米国最大であるピックアップトラックの市場に、まさか子供が定規で描いたようなサイバーパンクなデザインをぶっ込んでくるとは。9㎜の弾丸に耐えるボディ、航続距離800㎞、0-100㎞の加速が約3秒で、約430万円〜。

Einride

VOLVOでキャリアを積んだロバート・ファルクが2016年にスウェーデンで創業したエンライド。すでに国内では輸送のために走っているというこの**Pod**は、果たしてどこから乗るのか……というと、運転席はナシ。遠隔操作の自動運転で、トレーラーヘッドが信じられないほど薄いのである。アメリカでの発売もすでにスタートしている。

VS

RIVIAN

2021年、リヴィアンが自動車メーカーの時価総額・世界第3位になったのは('22年には少し下落)、米国で早々にEVのピックアップトラックに注力したから。同年生産をスタートした市販第1号の**R1T**は、まず見た目がいいし、収納や気の利いた機能満載のアドベンチャー・ビークル。Amazonと提携し、配達用の電動式バン10万台を契約済みなのも強みだ。

photo: Kunihiro Fukumori (P64~65)　coordination: Shogo Jimbo (DRIVETHRU)　text: POPEYE

2
米中の覇権争い。

政府の強力な奨励もあり、中国はEV市場が急成長中。北京のリ・オートは2015年に設立され、2019年には初の量産モデルであるこのSUV・**理想ONE**が納車開始に。2021年には販売台数がテスラのModel 3を一瞬抜いたし、ニオの車種も超えて中国で売れているEV(正確にはPHEVにあたる)。親しみやすいデザイン、490万円というリーズナブルさも人気の所以か。Tik Tokの運営元が出資している。

Li Auto

Xpeng Motors

VS

2014年に創業し、広州に本社を置き、2020年にNYの証券市場に上場したシャオペン モータース。同年に発売した**P7**はオーソドックスなラグジュアリーサルーンで、現地価格は約490万円。テスラのModel 3と真っ向勝負といったところか。「中国のAmazon」ことアリババの出資を受けて、販売網は世界中に広がりつつある。

世界中で火花散るEVバトルを、
僕たちは知らなすぎ！

ARRIVAL

Canoo

元BMWの幹部であり、ファラデー フューチャーを抜けたメンバーが2017年に創業。カリフォルニア州に本社を置くカヌーは、デザインがクールだ。この多目的商用車**MPDV**は運転席の足元まで広がるフロントガラス、細くシンプルな前後のライトなど、実用性と武骨さがビンビン。そして約400万円〜という、配達業者も喜ぶ良心価格。

「茶色いボディに黄色いロゴの輸送バン」といえばピンとくるだろう、米国のグローバルな物流企業・UPSが、配達用EVを1万台契約したのがロンドンを本拠地とするアライバル。この**Generation2**というバンはボディの軽量化、約420万円という低コスト化に成功。ディズニーランドがあるアナハイムの市営EVバスの製造も！

VS

3
働くクルマ対決。

Lucid Motors

テスラのModel Sを開発したピーター・ローリンソンがCEOを務めるルーシッド・モーターズは、中国の資本家の支援を受けているカリフォルニア州のスタートアップ。発売されアメリカを走っているこの**Air**は平べったく独特な存在感のあるフォルムと、約480km分を20分でできる充電機能・バッテリー効率の優秀さがいいね。

VS

Faraday Future

NYの証券市場でSPACによる買収・上場を経て10億ドルをゲットし、2017年に発表した**FF91**の市場投入も間近？　なファラデー フューチャー。CESというラスベガスの家電見本市でお披露目したこのSUVは、1050馬力、全長5250㎜という巨体、11面ディスプレイ＆豪華なインテリア、自動運転という富裕層が喜ぶ盛り盛りの仕様で、2200万円ほどの見込み。

NOBE

こんなにクラシックな顔をして未来のシティコミューターなのだ。エストニアのノベによる**100GT**は、前2輪・後ろ1輪の3輪駆動。2人乗り・街乗りだと走行性やバッテリー効率の面で3輪が適しているとか。車重は約590kgと超軽量（全長3650×全幅1560×全高1370㎜）。500万円ほどで予約販売中だけど、量産開始はいつになる……!?

VS

五菱

45万円からという驚異の安さ！　中国国内でブッちぎりで一番売れてるウーリンの**宏光ミニ**は、'23年1月にはテスラ Model 3に次いで世界のEVセールス第2位に。最高時速100km /h、航続距離120kmだけど、政府の補助金も手伝い、中国人にとっては「車は買えないけどコレは買える」な街の足に。全長2917㎜、全幅1493㎜で、まさにミニ。

Micro

スイスのマイクロによる**Microlino**は横並びのかわいい2人乗りで、全長2519×全幅1473×全高1501㎜。'50年代の名車・イセッタによく似た形で、フロントドアがガバッと開いて乗り込む仕様も同じだ（ただし電動式！）。サイドミラーの前部分がヘッドライトだったり、細部にワクワク。最高速度90km /h、航続距離95kmから、価格は約170万円〜。

VS

4

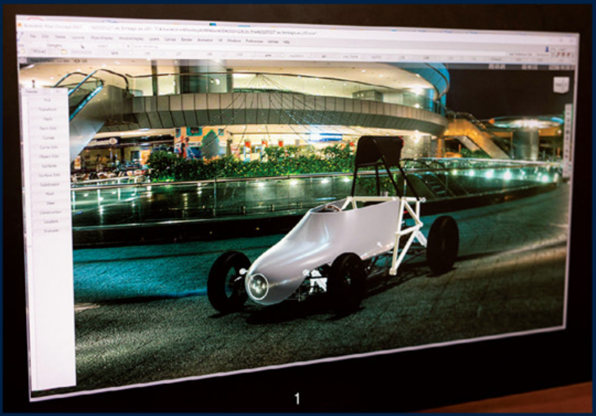
小さいEVは競争激化！

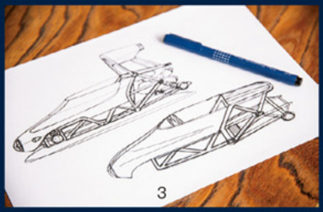
自由な創造とより優れた技術。EVのスタートアップはスゴい。

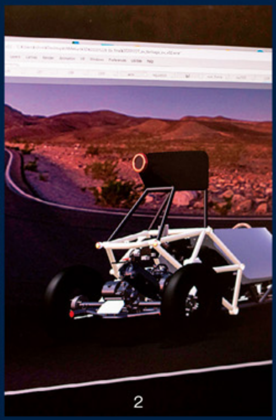
いろんな先輩たちがテスラテスラと言い始めたり、2021年末にはトヨタが一気に16台も発表したりするもので、車のことを考えるとEVがもはや自然と視野に入ってくる。でも、恥ずかしながら知っているのはテスラと日本のことをチョットだけ。EVの世界は広い、というよりも、いま世界中でスタートアップ企業が次々に起こり、デッドヒートを繰り広げながら遥か彼方の未来へと猛進しているのである。

その中心にいるのは、間違いなくアメリカのテスラ。2021年の世界販売台数は前年比1・8倍という94万台近くで、EVにおいては当然No.1。本国では高級車部門でメルセデス・ベンツを抜いて販売台数第3位だとか。まだ富裕層向けなのは否めないけれど、EVの世界を切り拓く突破口を作っているのは確実。そして、そのテスラを取り囲むようにして、車種別に、手強いベンチャーたちが続々と戦いを挑んでいるというのが今の業界の構図だ。前のページを見てほしい。中国、クロアチア、スウェーデンなど、僕たちが知らないメーカーたちがすごいEVを開発している事実に驚くはず。

さらに、実はアメリカと中国では次々にニューフェイスが生まれては淘汰もされ、中国の会社が米国の株式市場にどんどん上場したり、中国資本でアメリカのメーカーが生まれたりと混沌状態。視点を変えると、配送車両や公営バスなどの働く車の分野でも電動が次々に開発されている。そしてとにかく面白いのが「小さいEV」。電動自動車の特性を考えると近所や街でちょい乗りする使い方が理にも適って楽しい、ということでこの分野は今回挙げた3つどころじゃない超激戦の様相を呈している。どのバトルも、テクノロジーの進化と自由な創造にワクワク！







1, 2. 石丸さんが、今まさに自身のプロジェクトとして造っている車というのがコレ。ゴーカートみたいな1人乗りで、全長は2500㎜弱。「この事務所からエンジニアのアトリエに行くためだけの、自分のための車です」とのこと。PC内で世界のいろんなところに置いてみてもらったけどカッコいい！　「法律上、高く付ける必要があって」というテールランプと後ろ姿がクール。3. スケッチはパイロットのドローイングペンで。4. 車のデザインはいつもVRで、実寸で360°チェックしている。

車の未来を描き続ける若きデザイナーが、京都にいた。

Car Designer 石丸竜平

いしまる・りゅうへい｜1988年、福岡県生まれ。九州大学芸術工学部を卒業後にイタリアに渡り、ヨーロッパデザイン学院トリノ校トランスポーテーションデザイン学科で学ぶ。2015年、フィアット・クライスラー・オートモービルズにインターンとして入社。2016年に帰国し京都のEVベンチャー・GLMに入社、チーフデザイナーを務める。2018年に独立し、デザインオフィス「Fortmarei」を設立。@fortmarei

愛される乗り物を造るため、今手掛けるのはミニカート。

海外のスタートアップが元気で革新的だというのはわかったけれど、日本にも面白いEVを造る若い才能がいるはずだ。向かったのは京都。イタリアでキャリアをスタートし、今は個人でデザイン事務所を構えている34歳のカーデザイナー、石丸竜平さんを訪ねた。

ジョルジェット・ジウジアーロのイタルデザインにいた九州大学の教授を追い、ピニンファリーナで働いた教授を追ってトリノの大学に入り直し、フィアットのインターンとして第一歩を踏み出したというのが石丸さんだ。

「でもフィアットにいると、決まったキャリアプランが見えてしまって。先がわかるのが嫌いだったんです」

いい経験をしたけれど、1年で帰国。「少人数にもかかわらず、EVの量産にまでこぎつけた面白い会社」という印象を持った京都のGLMに入社し、ここから石丸さんは日本の大手のカーメーカーとはまた違う道で、EVのコンセプトカーを造っていくことになるのである。

石丸さんの事務所は京都の嵐山の少し南くらいにあった。見せてくれた最新の車は、1人乗りのミニカート。昔のF1の葉巻型のようなボディに、'70年代のフェラーリ 312Tのインダクションポッドのように上に突き出た

石丸さんの普段の足は、1981年式の日産フェアレディZ。丸目がナイスな2代目・S130を「自分の車には無頓着で」と言うけど、40年乗られて、これこそサステナブルで愛される車でしょ。エンジンなどの中身をよく手入れして、ずっと大事にしたいそう。

石丸竜平が造ったEVたち。

2022

旭化成 AKXY2

'22年に公開された最新作。ここで初公開になった、AKXYのコンセプトカー第3弾である。もはやこれはクルマ……？　カラフルな円環のグラフィックに、今回のAKXYも自然や環境の意識が掛け合わされてくる予感。「小さな子からお年寄りまで親しみやすいはず。乗り込み方も今までにない、面白い車になったと思います」

2020

GLM モビリティスクーター

シニア世代に向けたコンセプトカー。なんだけど、高齢者向けという既成概念を捨て去り「自動車免許を返納してでも乗り換えたくなる」ことを目指してデザイン。テーマは「究極に優しい形」で、ここでも球体がイメージソース。柔らかいフォルムとクールな目。乗ってみたい！

2020

京セラ MOEYE

京セラの「おもしろい未来を作っていきたい」という考えと光学迷彩技術を踏まえて、「時間」をテーマにデザイン。遠目に見る外装はクラシック、近づけばモダンなディテールに気付き、乗り込むと先進的な車内のインパネに外の景色が映し出され、中と外が繋がる。一連の動作で車の過去から未来まで感じられる、すごいコンセプトカー。

2019

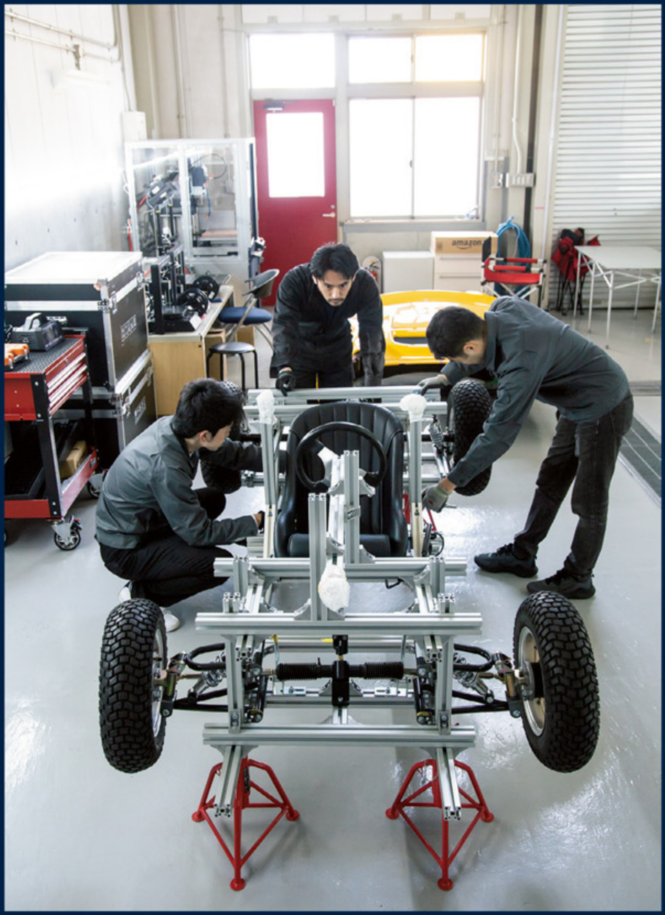
旭化成 AKXY POD

「自動車の安全・快適・環境への貢献」をテーマに、AKXYはプロジェクト化。この第2弾は石丸さんがGLMから独立した後に手掛けたもの。車の室内空間のコンセプト提案で、カプセルのような輪のフォルムは自然の循環を想起させる。側面には木、足元には揺れる水面と芝生が。

2017

旭化成 AKXY

旭化成とGLMが共同開発した、SUVのEVコンセプトカー。GLMに入社してすぐ、この話が石丸さんの元に飛び込んだ。「いのちとくらしに貢献する」「環境との共生」という旭化成の未来への理念を踏まえ、球体をイメージし、優しく柔らかいラインで快適さを表現した。



エンジニアとの制作現場に潜入！

6

5

8

7

5, 6. デザインを見せてくれた車の制作現場、3rd Carsにて。GLMから独立した、少量生産での車の研究開発を行うベンチャーだ。古巣の仲間たちと楽しそうに真剣に車と向き合いながら「これが僕の強みです」と言う。デザイナーがエンジニアと同じ現場で車造りを進めることは、普通はあまりないそうだ。7. 石丸さんは信頼できるメンバーたちと独自のチーム「JAM」の中の、石丸さん主導のプロジェクトだ。8.「構造を参考にすれば、法規を満たせるので」と、車体のベースは公道を走れる既存のあのカートだった。

被視認性部品が付いた、レトロでフューチャーなデザインだった。そのまま今度は20㎞ほど離れた制作現場、宇治の3rd Carsへ。つなぎを着て、エンジニアたちと手描きのラフを見せながら細部を煮詰め始めた。そもそも、この車はいったい何なのか？

「実はガソリン車なんですが、『車を自分で動かす』感覚や喜びを、より原点に返って知るためのものです。これと、最先端のEVを同時に造っていることが、僕にとって意味のあること。きっとまだ、今この世にあるデザインはEVが本質的にあるべき形に辿り着いていない気がします。エネルギーの循環など環境への意識、人と社会が乗り物に求める様々なことを、もっといろんな経験をしてよく知って、その知見を起点にデザインを考えたいんです。そうして、時代を超えても人に愛してもらえる、一つ一つ個性がある楽しい車を造りたいと思っています」

オレの愛した車。

一途に乗り継ぐか、たくさん試してみるか。車と男の関係はどっちもなかなかいいもんだ。

illustration: Anri Yamada text: Kosuke Ide（P67）
edit: Koji Toyoda

3台のジャガーとの20年。エロい車との別れ。

文・大根 仁

20代から40代にかけて3台のジャガーに乗ってました。最初のジャガーは秋元康さんから100万で買った、1990年製のソブリン。麻雀をやっている時に「お前、あのジャガーいる？」みたいに軽く言われて「あ、欲しいっす」ってカンジで。でもその時（1995年頃）はまだディレクターになりたてでそんなにお金がなくて、その100万をずっとバックレてたんですよね（笑）。だからタダでもらったジャガーをしばらく乗ってました。2年くらい経って、秋元さんから「いい加減に払えよ」と言われたんだけど、そのジャガーやたらと故障が多くて。確かジャガーにコンピューターが搭載された最初の型だったと思うんだけど、2年間で200万くらい修理代がかかったので、結局あんまり良い買い物じゃなかったな。角目の顔もそんなに好きじゃなかったし。それでジャガーのディーラーに出入りするようになって、渡辺さんていう人と知り合って、その人が「古いジャガーで程度の良いヤツがあるから乗れば？」って言われて、140万で買ったのが2台目の【1986年製ジャガーXJ6シリーズ3・最終型】、いわゆるクラシックなジャガーのルックスで、しかもワンオーナー・走行距離4万キロっていう好条件。1台目のジャガーは、やたらと金がかかるバブリー女だったけど、こいつは故障もほとんどなくて〝バツイチのすげえ良い女〟ってカンジで最高でした。何より型が色っぽくて完全に惚れましたね。28歳から35歳になるまで7年間乗り続けたんだけど、これまで乗ってきた車の中で一番好きだった。それはたぶんいちばん働いて、いちばん遊んでいた時期だったからだと思う。結局エンジンがボロボロになって手離すことになったんだけど、当時の自分のブログにこんなことが書いてある。

7年間、このジャガーと仕事もプライベートもほとんど一緒だった。楽しい現場も辛い現場も、この車で行ってこの車で帰った。デートの時もフジロックフェスの時もこの車だった。海も行った山も行った。何回もこの車の中でメシを食った。何回もこの車の中で寝た。いつも煙草を吸うから匂いが染み付いたけど、それが皮シートの匂いと混じってその匂いが好きだった。嫌なことがあって意味なくハンドルを叩いたこともあった。友達とくだらない話で馬鹿笑いして盛り上がった。デートの途中、高速道路のど真ん中で突然エンストしたこともあった。女の子に酷いことを言われて振られたこともあった。朝、いつも駐車場でカッチョ良く停まっていた。テールっつーか後ろ姿がキレイでほんと【いいケツ】してた。スピーカーがめちゃくちゃ良くて、どんなに爆音にしても音が割れずいつでも…うう、泣けてきた。あー、俺、この車手離したくないよお。別れたくないよお。

もうほとんど女との別れ際の泣き言ですね（笑）。今でも、道でこの車種のジャガーを見かけると、胸がキュンとします。間違いなく付き合っていたんでしょうね、このジャガーと。その次に乗ったジャガーは1998年製のソブリンで220万くらいだったかな。これも渡辺さんに「新しいジャガーも悪くないよ」って薦められて。最初に乗ったソブリンと比べて、ルックスも性能も洗練されていたし、故障もほとんどなかったけど、やっぱりその前のXJ6が何もかも自分に合っていたので〝好きでもないのにお見合い結婚した女〟ってカンジで関係は冷めきっていました（笑）。それでも5年くらい乗ったのかな。その頃、実生活でも結婚をして、嫁が運転するにはジャガーは大き過ぎるので国産車に買い替えたんです。それで20年に亘るジャガーとの蜜月の関係は終わりました。でもいつかお金に余裕ができて、セカンドカーが買えるようになったら、もう一回ジャガーに乗りたいと思っていますね。やっぱり型が好きなんですよ。あと言葉の響きも。〝ジャガー〟って口にする時の、なんともエロいカンジ。車って男っぽい車と、女っぽい車があると思うんだけど、ジャガーは間違いなく女です。20年間付き合ってきたオレが言うんだから間違いない。

POPEYE MY LOVIN' CAR No.1

JAGUAR XJ6 MOSS GREEN
Made in 1986

JAGUAR SOVEREIGN LIGHT BLUE
Made in 1998

JAGUAR SOVEREIGN NAVY
Made in 1990

おおね・ひとし｜映像ディレクター。1968年、東京都生まれ。2022年に監督を務めたドラマ『エルピス』が数々の賞を獲得。大根さんが原稿で引用したブログは、2005年11月13日のもの。検索すると出てくるので、ぜひご一読を。

どこか良いところがひとつあればそれでいい。

談・岩城滉一

「愛した車」について話せと言われても、今まで乗ったのを合わせると100台じゃきかないからね。飽きるんだよね、車は女と同じだから。だから、車好きの奴は浮気者が多いですよ。

ミニだけでも30台くらい買ったかな。モークなんか好きでしたね。俺たちの世代にとってミニは、モンテカルロラリーで優勝したりとか、あと当時『ミニミニ大作戦』なんて映画があって、ジャンプしたり土管の中走ったりとか、そういうかっこいい車というイメージ。アクセル全開にしてもスピードが出すぎないから、乗ってて楽しいし、何というか〝味〟があるんだよね。何から何まですべてよくできてるというわけじゃないんだけど、逆にそこが自分でいじったりメンテナンスする楽しみになる。シリンダーも鉄で、キャブレターひとつ替えただけで速くなる。マフラーの種類も多いし、ホイールだって10インチから13、14インチまで替えられる。そういうのを少し替えるだけで、古い車になったり最新の車になったり。自分の色にしやすいというのかな。

時代ごとに安全基準が変わって、車体が重くなったり、ドアが固くなって根元のヒンジが壊れるのが早くなったり、まあ色々あるんだけど、それを自分で直して良くするとか、そういうことも含めて〝味わう〟のがいい。今は持ってないんだけど、時々、ミニのショップの前を通りかかるとやっぱり、ちょっといいなあ、あれ買っちゃおうかな、なんて気になったりしますね。

俺は四輪免許を取ったのは遅かったんですよ。それまではバイクばっかりで、車はぜんぜん興味なかった。今もバイクのほうが好きですし。ただ移動の手段として必要になって、最初に買ったのがベンツのSL。あとレースに出ないかと声をかけられて、シビックの初代のRSを買った。免許証をもらったその日に、1戦目のレースに出ました。

憧れて乗ってみたいなあと思ったのは、やっぱりACコブラかな。10代の頃に観た『マッハGoGoGo』なんかの影響もあるんだろうけど。今は427と289の2台を持ってます。ただ、街でレーシングカーに乗る気はぜんぜんないですよ。辛いだけでしょう。たまに街なかでそういう車でブイブイやってる奴を見かけるけど、バカだなあって（笑）。「この一台に命懸けてます」みたいな必死さばかり伝わってくるしさ。そこへ行くと、やっぱりミニなんかはお洒落じゃない。「この人、もう一台マセラティあたり持ってんだろうなあ」って思うような、余裕ある感じの人が乗ってたりするよね。

キャンピングカーもずっと好きで、持っていなかった時期がないくらいですね。ワーゲンとベンツを数年おきに買い替えて、今はT5のカリフォルニア。人様にご迷惑がかかるような巨大なのとか威嚇するような雰囲気の車は嫌だから、ちょうどよいサイズのをね。

シトロエンのSMは若い頃、アラン・ドロンの映画を観てかっこいいなあと思って買いました。すぐオイル系統がダメになって、ブレーキもクラッチも壊れてしまったな。後は、ケータハムセブンからホンダシティまで。本当に色々なのに乗ったね。それぞれの良いところがあるから。みんな、たまたまお店でいい出合いがあったり、他人から譲ってもらったり。計画性はぜんぜんなくて、行き当たりばったりですよ。俺の人生そのもの。

色々な車に乗ってきたけど、今はアウディですね。子供たちが実家に来たときにみんなで乗るために、RS Q3とR8を持ってます。アウディが好きになったのはきっかけがあってね。フィンランドで有名な氷上レースがあって、タイムトライアルに参加したんですよ。そこでアウディS5に乗ったら、あまりにもよくできているのに驚いた。足回りが素晴らしいんです。ただ硬いだけじゃなくて、ロールするんだけど、ちゃんと踏ん張る。氷の上でもコントロールできるから怖くない。「これ、めちゃくちゃいいわ」って。あっという間にアウディ党になっちゃった。

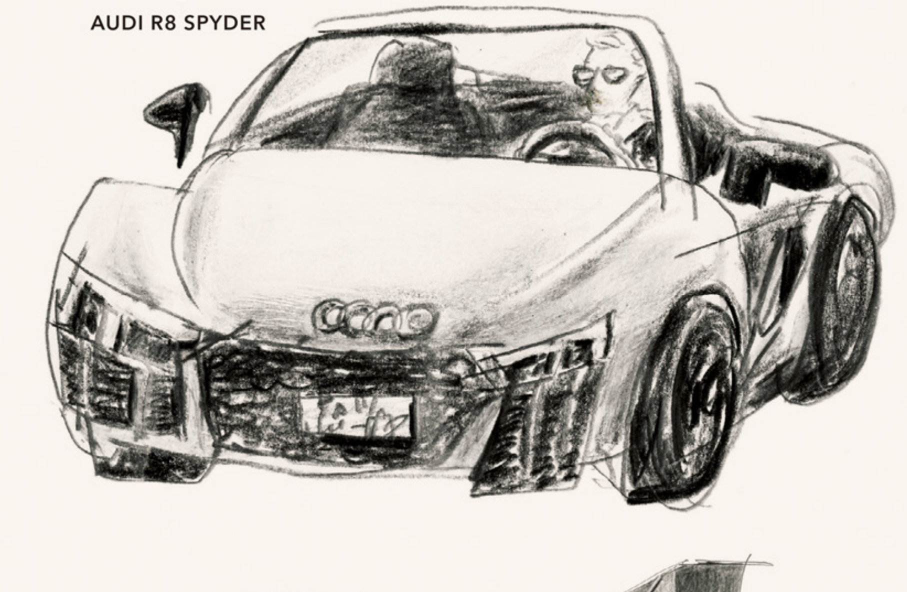
あとアウディの良いところは、品があるところかな。品って大事だと思うんで。ただ高い車、有名な車を買うだけみたいなのじゃなくて、本当にいいものを買って乗りたいよね。〝ニワカ〟でなく、本物志向になったほうがいいですよ。

よく「車へのこだわりは」なんて聞かれるけどさ、こだわるほど俺はキンタマ小さくねえよ、と思うね。こんなモンにこだわってんじゃねえよ、って。車なんて、どこかひとつ良いところがあればいいじゃない。いい女もらったら、わがままなのはしかたねえじゃん。そこが受け入れられなきゃ、その女と一緒になれない。だからこそ、いじったりして付き合っていく楽しみもあるんだしね。

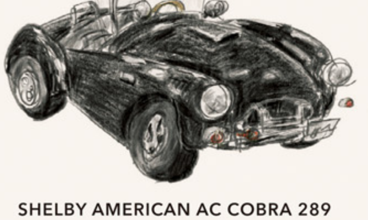
例えばACコブラだって、すごい車かもしれないけど、それを自分が持ったときに、子供の頃に憧れて見ていたのと同じだけの情熱があったかというとね。結局、それを手に入れる達成感だったり、そこに込める気持ちが大事なんだよね。ただ所有しているということに大した意味なんてないですよ。

そういう意味でも、もう物欲もなくなってきてるからね。昔からそうだけど、今も「予定」はまったくないですね。アウディがいい。満足してますよ。

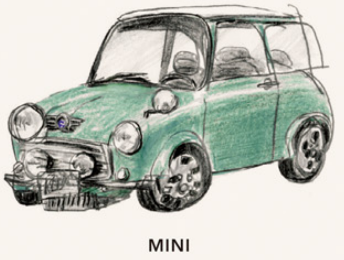
POPEYE MY LOVIN' CAR No.1



AUDI R8 SPYDER



SHELBY AMERICAN AC COBRA 289



MINI

VOLKSWAGEN T5 CALIFORNIA

いわき・こういち｜俳優。1951年、東京都生まれ。'75年に映画『新幹線大爆破』でデビュー。自動車免許取得は30歳。YouTubeチャンネル「♯51TV」では乗り物愛に溢れる動画を公開中。

3

僕らの熱き車の41年史。

41 YEARS ARCHIVE

1

起点は『ポパイ』創刊の1976年。ノンジャンルで車にまつわるトピックを集めてみた。時代時代に、人々を興奮させたり、泣かせたり、笑わせたり。車はやっぱり面白い！

1976 『ポパイ』創刊。「20世紀の幌馬車、それはスポーツバンだ」という企画で、ボディをエアブラシ・アートで飾ったアメリカ西海岸の**サーファーのバン**を紹介。

富士スピードウェイで『**F1世界選手権イン・ジャパン**』開催。第1次F1＆スーパーカーブーム到来。

photo: AFLO

自動車評論家・徳大寺有恒が『**間違いだらけのクルマ選び**』を発表。当初は匿名本として騒ぎに。

1977 山田洋次監督、高倉健主演『幸福の黄色いハンカチ』公開。武田鉄矢が**真っ赤なファミリア（4代目マツダ ファミリア）**で北海道へ行き、網走で出会った桃井かおりと高倉健を乗せるロードムービー。撮影当初、武田鉄矢は運転免許を持っていなかったとか。

小池一夫原作・叶精作画による劇画『実験人形ダミー・オスカー』連載開始。主人公は**フォルクスワーゲン社**で事故対策実験用ダミー人形を作る男という設定。

表紙にこんな車が！
POPEYE ISSUE 18
VOLKSWAGEN BEETLE

1978 和製スーパーカーと呼ばれた**マツダ サバンナRX-7**発売。

山口百恵の「プレイバックPart2」リリース。NHKで歌うときは、歌詞に出てくる**"真っ赤なポルシェ"**が"真っ赤な車"に置き換えられた。

矢沢永吉の自伝『成りあがり』発売。「**キャデラック**に乗って10メートル先のタバコ屋へハイライトを買いにいくのが夢」は矢沢の名言。

1979 テレビドラマ『西部警察』スタート。**特別機動車両サファリ4WDやスーパーZ**に、大人も子供も釘付けになる。

© 石原プロ

メル・ギブソン主演の映画『マッドマックス』がヒット。主人公マックスの乗る黒い**V8インターセプター**は、オーストラリア製フォードのファルコンXB（角目2灯）。

長谷川和彦監督、沢田研二主演の『太陽を盗んだ男』公開。マツダ全面協力のもと、発売されたばかりの**サバンナRX-7とコスモAP**の豪快なカーアクションが話題に。

©TOHO CO., LTD.

宮崎駿監督『ルパン三世 カリオストロの城』公開。ルパンの愛車、**フィアット 500F**が人気を呼ぶ。

村上春樹が小説『風の歌を聴け』で作家デビュー（「群像新人文学賞」受賞）。作中、主人公「僕」の友人「鼠」の愛車として**フィアット 600**が登場する。

1980 鳥山明の漫画『Dr.スランプ』連載開始。ペンギン村に登場する**デフォルメされた丸っこい車**（主にイタリア車やフランス車がベース）が子供たちの潜在意識に刷り込まれる。

アーケードゲーム「**ラリーX**」をナムコ（現・バンダイナムコ）が発表。

『日本カー・オブ・ザ・イヤー』がスタート。第1回の受賞車は**東洋工業（現・マツダ）ファミリア**。1

1981 **ホンダ シティ**のCMにマッドネスが出演。曲（「IN THE CITY」）も大ヒット。2

2

ジャッキー・チェン出演の映画『キャノンボール』がヒット。劇中ジャッキーとマイケル・ホイが日本人ドライバーコンビを演じ、**スバル 1600スウィングバック4WD（スバル レオーネ）**を駆って活躍。

1982 タミヤから**ミニ四駆シリーズ**発売開始。

次原隆二の漫画『**よろしくメカドック**』連載開始。車のチューニングショップ『メカドック』が舞台。

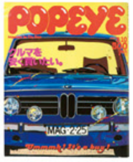
1983 軽自動車、**スズキ マイティボーイ**が45万円からの低価格で発売。CMでも「お金がないけどマイティボーイ」と歌われた。

1984 松任谷正隆がMCのテレビ番組『**カーグラフィックTV**』放送開始。

表紙にこんな車が！
POPEYE ISSUE 178
HONDA CITY

1985 ロバート・ゼメキス監督『バック・トゥ・ザ・フューチャー』でマイケル・J・フォックスが乗るタイムマシン、**デロリアン（DMC-12）**が大人気に。

バブル到来。メルセデス・ベンツやBMWの正規代理店ができたことにより、東京に**ベンツ190EとBMW3シリーズ**が溢れ、「小ベンツ」「六本木カローラ」とよばれた。



表紙にこんな車が！
POPEYE ISSUE 194
BMW 2002

1986 楠みちはるの漫画『**シャコタン・ブギ**』連載開始。当時の暴走族たちは、こぞって愛車をシャコタンに。

ドラマ『あぶない刑事』スタート。柴田恭兵と舘ひろし演じる二人の刑事が乗る覆面パトカーは**日産 レパード**。ちなみに、出動時、運転手は柴田恭兵、助手席に舘ひろしがデフォルト。

アメリカのドラマ『ナイトライダー』がスペシャル番組としてオンエア。探偵マイケルと言葉をしゃべり考える知能を持つ車「**ナイト2000**」の活躍で事件を解決。翌年、定期放送へ。

photo: AFLO

雪が降るスキージャンプ台を上っていく、**アウディ 100CSクワトロ**のCMに驚愕。

photo: AUDI AG

1987 **日産 Be-1**発売。マーチをベースにレトロなデザインで大人気。その後、**パオ**('89年)、**フィガロ**('91年)とシリーズ展開。パイクカー3部作と呼ばれた。

原田知世主演映画『私をスキーに連れてって』で女性が運転し、雪山を走る**トヨタ セリカGT-FOUR**が登場。

「男は車がないと女にモテない」といわれるほどデートに車は欠かせないものに。**トヨタ ソアラ**、**ホンダ プレリュード**、**日産 シルビア**などの2ドアクーペは"デートカー"と呼ばれた。

中嶋悟がアイルトン・セナのチームメイトとしてF1デビューし、フジテレビがF1中継をスタート。子供からOLまでを巻き込む空前の**F1ブーム**が到来。中森明菜も飼い犬に「セナ」と名付ける。

1988 バブル真っ只中、女子を車で送り迎えする都合のよい男子が**"アッシー"**と呼ばれる。

W浅野主演のトレンディドラマ『抱きしめたい！』で、スタイリスト役の浅野温子が劇中で**真っ赤なプジョー 205カブリオレ**に乗る。当時、代官山近辺に住むおしゃれギョーカイ系にカブリオレがブーム。

日産 セフィーロのCMで、車窓から「みなさんお元気ですか？」と井上陽水がお茶の間に語りかける。

清原和博、21歳にして**フェラーリ テスタロッサ**を買う。

1989 ティム・バートン監督『バットマン』公開。**バットモービル**が人気に。

edit: Izumi Karashima assist: Minami Tazawa
special thanks: Kazuyuki Ozawa, Kohei Kawakami

4

photo: AFLO

ホンダ インテグラ（2代目）発売。マイケル・J・フォックスがCMに登場、「カッコインテグラ！」と叫ぶ。

1990 **マツダ ユーノスロードスター**発売。世界的な小型（オープン）スポーツカーブームのきっかけを作る。

F1で**セナvsプロスト**対決激化。優勝をかけた一戦、日本GP（鈴鹿）最初のコーナーで両者接触、リタイア。粘って完走した鈴木亜久里が3位となり、日本人初のF1表彰台に立つ。

フェラーリを超える高級高性能スポーツカー、**ホンダ NSX**発売。アイルトン・セナも走行テストなどで開発に協力。

フジテレビの月9ドラマ『世界で一番君が好き！』のオープニングで、渋谷のスクランブル交差点で、新旧の**トヨタ MR2**に乗った浅野温子と三上博史がすれ違いざまに熱烈なキスを交わす。

1991 **マツダ 787B**が、国産メーカーで初めてル・マン24時間レース総合優勝を果たす。

1992 '89年のスタート当初より過激なカースタントクイズが売りだった『ビートたけしのお笑いウルトラクイズ!!』。第9回にして伝説の「**溺死寸前、バス吊り下げアップダウンクイズ**」が行われる。

スーパーファミコン用ゲームソフト『**スーパーマリオカート**』発売。

©1992 Nintendo

表紙にこんな車が！
POPEYE ISSUE 356
F1 McLAREN HONDA

1994 舘ひろし主演の映画『**免許がない！**』公開。教習所での決め台詞は「ハンコくれよ」。

小沢健二が歌う、**トヨタ カローラⅡ**のCMソング「カローラⅡにのって」がヒット。

トヨタ RAV4が発売。CMキャラクターに木村拓哉を起用しRVカーブームの先駆けに。

1995 しげの秀一 の漫画『頭文字（イニシャル）D』連載開始。天才ドライバーの主人公・藤原拓海が乗るのは「藤原豆腐店」のロゴ入り**トヨタ スプリンタートレノ（ハチロク）**。

日産車好きのイチロー、日産のCMに登場。当時の愛車は1000万円以上かけて**フルチューンしたマーチ**、**インフィニティG35クーペ**、**スカイラインGTR**など。

1996 後藤久美子、F1ドライバーのジャン・アレジと事実婚夫婦に。クルマ好きのゴクミ、二十歳の誕生日には希少車、**フェラーリ ディーノ206GT**を購入。

表紙にこんな車が！
POPEYE ISSUE 506
FORD MUSTANG

1997 ダイハツの「アメリカンカスタムフェア」の広告キャラクターを、なんと我らが**ブロンソンズ**が務める。3

篠塚建次郎、**三菱 パジェロ**でパリダカールラリー日本人初総合優勝。

プレイステーション用ゲームソフト『**グランツーリスモ**』発売。

反町隆史＆竹野内豊主演のドラマ『ビーチボーイズ』に名車、**ルノー4（カトル）**が印象的に登場。

1999 **カルロス・ゴーン**が日産のCOOに就任。

ミレニアム前後、藤原ヒロシをきっかけに裏原宿界隈のクリエイターがこぞって**ゲレンデヴァーゲン（通称G）**を乗り始める。

2001 映画『**ワイルド・スピード**』公開。後の人気シリーズの第1作。登場する故ポール・ウォーカーの愛車はシリーズを通して日本車。

メジャー移籍を決めた新庄剛志選手が愛車の**赤いフェラーリ**をオークションに出品。4200万円で落札されるも、落札者が現れず、結局お流れに。

photo: Mainichi/AFLO

2002 クレイジーケンバンドが「GT」をリリース。PVに登場する**真っ赤なマスタング**は横山剣さんの愛車。

トム・クルーズ主演の映画『マイノリティ・リポート』公開。劇中には**2054年の赤い未来のレクサス**が登場。

2003 ハイブリッドカー、**トヨタ プリウス（2代目）**が大人気。レオナルド・ディカプリオらハリウッドセレブの間でプリウスが流行る。

©amanaimages

表紙にこんな車が！
POPEYE ISSUE 667
FORD ANGLIA

2006 ピクサー作品『カーズ』公開。車を擬人化したアニメーションで、**マツダ ロードスター**、**日産 シルビア**、**トヨタ bB**、**ホンダ S2000**なども登場。

2007 マイケル・ベイ監督『トランスフォーマー』公開。劇中に登場する**黄色いバンブルビー＝カマロ**の存在は、国内では不人気のアメ車にとっては希望の星に。

Googleストリートビューのサービスが開始。世界各地で**ストリートビューカー**が目撃される。

photo: Reuters/AFLO

2008 クリント・イーストウッド監督の映画『グラン・トリノ』公開。**グラン・トリノ**はフォードが'68年から'76年まで生産していたマッスルカー。4

©amanaimages

クリストファー・ノーラン監督『ダークナイト』公開。**バットモービル**がまた新たな次元へ。

2011 BS日テレで『**おぎやはぎの愛車遍歴 NO CAR, NO LIFE!**』開始。

2012 007シリーズ23作目『スカイフォール』公開。ボンドカーの象徴的存在として**アストンマーティンDB5**が登場。

新宿歌舞伎町に総工費100億円をかけて『ロボットレストラン』がオープン。**巨大なロボットを乗せた街宣車**が都内を巡回。

photo: AFLO

2014 マーティン・スコセッシ監督『ウルフ・オブ・ウォールストリート』でレオナルド・ディカプリオが**カウンタック**をボコボコにする。

©amanaimages

2015 矢沢永吉が出演するCM「**やっちゃえNISSAN**」がスタート。

2016 サチモスの「STAY TUNE」が**ホンダ ヴェゼル**のCM曲となり、注目される。

日本ハムファイターズ・中田翔選手の**ランボルギーニ アヴェンタドール**がヤフオクに出品される。サイン入り。

2017 マリオに扮して公道を走るカート、通称**マリカー**をレンタルする会社を任天堂が提訴。裁判になる。

©The Asahi Shimbun/amanaimages

サウジアラビアのサルマン国王来日。**国王専用のメルセデス**を空輸。約1000人のお供の移動用として東京中の高級ハイヤーを押さえた。

©The Asahi Shimbun/amanaimages

僕の車。

THIS IS MY CAR !

最高の気分で「コレだ」という一台を持っている46人の話。どうやって選んでいるのか、心の内側も覗き見ながら、彼らの視点とグッドな車をカテゴライズ。

#01

TOYOTA SCEPTER WAGON *1995*

トヨタ セプターワゴン　1995年式

グンと車高をローダウンし、ホイールは〈アンティーラ〉の3本スポークに変更。

OWNER

BIM ／29
● ラッパー

ボンネットに腰掛けて、気持ちよさそうにラップするBIMさんの車は、トヨタのセプターワゴン。カムリワゴンの北米仕様を逆輸入した一台だ。日本では珍しいシャンパンゴールドカラーに、垢抜けたルックスは、確かに帰国子女風！　「無駄にデカい車体が馬鹿馬鹿しくて好き」と手に入れて以来、アルバムのジャケに度々登場。トヨタとコラボした曲「What more can I say」では、「ビムが乗るぜ、セプター」とラップで愛を語る。「新曲ができるとチェックも兼ねて、第三京浜をドライブするんです」。荷室に「ロックフォード・フォズゲート」のウーファーを搭載したこのセプターは、さながら専用スタジオ。もはやBIMという音楽家に欠かせない相棒だね。

左／荷室には、出演ドラマの台本やコストコで買ったペーパータオル、ゴルフパターが転がる。右／運転席のヘッドレストに掛けられたトートバッグは、友達のブランド〈スペシャルゲスト〉のもの。

同い年くらいのクルマ。

もし「車が欲しい！」と望むならば、’80〜’90年代の“ヤングタイマー”と呼ばれる車たちはどうか？　価値あるクラシックカーと新車の狭間で、業界では不人気車とされていたけど、その分まだお手頃なものも。もちろん中古で100万円を超える名車もあるものの、セプターワゴンや初代マーチにシビック セダンなど、隠れたグッドデザインカーがキミを待っている。今回は既存の価値観に囚われず、このあたりに目をつけて、自分だけの視点でマイカーを手に入れたシティボーイたちをたくさん見つけた。さらに言うと、この年代のものは、20〜30代にとっては同世代。親近感と愛情たっぷりに車と向き合える、っていうのがなんだかんだで重要なんだ。

DATA
排気量
購入価格
走行距離
燃費
ミッション

THIS IS MY CAR.

#02

MINI ROVER MINI 1995

ミニ ローバーミニ 1995年式

サイクリングウェアショップ『Rapha TOKYO』で働く浦山さんが乗るのは、本人と同い年の'95年式ローバーミニ。ロードバイクが2台積まれた姿がなんとも可愛らしい。BMWの傘下になった2001年以降のミニは車体が大きく全然ミニじゃないが、この年代のものはとにかくコンパクト。浦山さんが4代目のオーナーとなるこの車、手にしたときにはすでに様々なカスタムが施されていたという。「昔の仕様に近づけるためホイールが10inchの小さなものになってたり、フェンダーレスになってたり。あと、キャブが2つ付いているのでめちゃくちゃレスポンスが良いんです。時速40kmくらいで走っていても迫力がすごくてゴーカートに乗っているみたいです(笑)」

1,330mm
1,440mm
3,070mm
1,300cc
¥1,200,000
64,000km
12km/L
MT

小柄ながら、車内は意外とゆったりとしたスペースが。もともとはオートマ車だったものを、初代オーナーがマニュアル車にカスタムしたという特別仕様。給油口を開ける鍵の差し込み口も可愛らしい。

OWNER

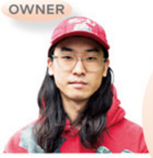
浦山裕太郎 ／27

● 『Rapha TOKYO』スタッフ

photo: Kazuharu Igarashi (#01, #02), Jun Nakagawa (#03) text: Hikaru Abe (#02), Ku Ishikawa (#03)
text (#01) & edit: Koji Toyoda special thanks: Shogo Jimbo (DRI VETHRU), Kyosuke Nitta

上／リアシートを折り畳めば、組み立て式の自転車とスケボーが余裕で入る荷室。下／各部品が規則正しく収まり、確かにラジカセっぽい。榎本くんは'90年代のアシッドテクノやヒップホップをよく聴くそう。

OWNER



榎本健人 ／28

● 〈Supreme〉スタッフ

1,660mm
1,695mm
4,105mm
1,998cc
¥800,000
100,000km
10.4km/L
MT

当時のCMでは22歳のキムタクが都会を走る。キャッチフレーズ「ラヴフォーという名のスポーツ！」が、この車のイメージを決定づけた。

#03

TOYOTA RAV4 1996

トヨタ ラヴフォー 1996年式

時代はSUV全盛。でも'90年代前半までは、あくまでも悪路を走るためのオフロード車というイメージだったそう。そんな常識を一変させたのが1994年に発売されたラヴフォーだ。「それまでトラックと同じラダーフレーム構造だった車体を、乗用車と同じモノコック構造に変えて、サイズも一回り小さく。"街を走るSUV"を初めて打ち出して、今も人気のクロスオーバーSUVというジャンルを作ったのが日本車ってすごくないですか」と子供の頃からラヴフォーに憧れていた榎本くん。「街乗りが当たり前の今、ルーツとなった一台に乗りたい。横開きのバックドアやラジカセのようなインパネなど、この時代らしいデザインも好きなんです」

POPEYE CITY BOYS CAR CLUB

Refueling Column 車があって「あの店の前に駐車枠がある！」って知識も豊富なら、ゴハンの自由を手にしたようなもの。例えば青山の町中華『ふーみん』の前にも枠が。ランチ営業が16時までだから遅い昼飯でも安心。

#04

VOLKSWAGEN GOLF II *1988*

フォルクスワーゲン ゴルフ2　1988年式

ドイツの国民車ビートルからバトンを受け取り、小型車のスタンダードを確立した初代ゴルフの後継がゴルフ2。初代の革新的なスクエアデザインを踏襲し、玉数もあって維持しやすいと聞けば誰だって欲しくなる。幼い頃の夢はF1レーサーで今もサーキットにもよく通う中村さんも、スポーツカーと比べた上で、街乗りしやすいゴルフ2を選択。「ベーシックグレードのCLiをレース仕様にカスタムしています。トラックでは100km/h以上でカーブを回るのも楽々。最新のインプレッサより速いですよ」。思えばP34でBOSEさんが僕らの愛車に薦めてくれたのもこの車。シティボーイのスタンダードカーもまた、ホットハッチのスピリットを秘めていた！

右／レースのためのカスタムは2点。サスペンションを上げるべくエンジンルームにタワーバーを装着し、マフラーの中身も調整。左／後部座席に消化器！　聞けばタフなサーキットでの走行には必須のアイテムなんだそう。

OWNER

中村大輝 ／24
● 会社員

「ハッチバックで荷室が独立してないからか、走行中の音が少し気になって。制振材を貼ろうかな」とまだまだカスタムは続く予定。

GOLF II

206

SUPER 5

GREMLIN

キビキビ走る、ホットハッチ。

聞き慣れない名前だけど、ぜひ覚えてほしい。跳ね上げ式のバックドアを持つ街乗り仕様のハッチバック車に、ホットなパワーエンジンを積んだら、それはホットハッチ。なんてことない見た目なのに、実は超速いっていう痛快な車の出来上がりだ。ルーツは小型車の需要が多い欧州といわれ、火付け役はフォルクスワーゲン ゴルフ2のGTIモデル。何が良いって、乗用車としての足取りの良さは保ったまま、同時に走る楽しさも感じられること。小さな体で世田谷の住宅街もキビキビ走れて、ひとたび首都高でアクセルを踏み込めば、唸るエンジン音とともにグングン加速。街を駆る臨場感が路面からダイレクトに伝わってくる。この興奮、一度知ったら戻れない！

角ばった前身の205から変わり、丸みを帯びた可愛らしい見た目に。

1,440mm
1,670mm
3,830mm
1,360cc
¥160,000
68,000km
13km/L
AT

#05

PEUGEOT 206 *2003*

プジョー 206　2003年式

吊り目型のヘッドライトが猫みたいで可愛らしい206は、フランス車ならではの洒落たデザインが人気となり、1998年から2012年まで生産されたプジョーのトップセラー。ラリーカーである206WRCのベースにもなったこのモデルは、乗用車ながらスポーツカー並みのスペックを備え、力強い走りが魅力の一台だ。HIMIくんは、休みの日にはコレでガールフレンドとよくドライブするという。「心と体を休めるため、自然を感じに遠出したり、近場のスーパー銭湯までちょろっと走らせたり。小回りが利くから、都内の狭い道でも走りやすくて。小柄な割に、意外と荷物も載るから便利なんだよね。リハのときとかもギターを載せて車で行ってるよ」

OWNER

HIMI ／23
● シンガーソングライター、俳優

右／内装は深い色味でシック。左／容量も十分。どこでもピクニックできる道具を常備。

DATA
排気量
購入価格
走行距離
燃費
ミッション

THIS IS MY CAR.

GTターボは前後に張り出したオーバーフェンダーを装着。すっきりとしたボディとのコントラストが面白い。

photo: Jun Nakagawa　text: Ku Ishikawa（#04, #06, #07）, Hikaru Abe（#05）
coordination: Shogo Jimbo (DRIVETHRU)

#06

RENAULT SUPER 5 GT TURBO *1989*

ルノー シュペールサンク GTターボ　1989年式

上／運転席はスポーツカー仕様。シートはドイツの〈レカロ〉のスポーツ用のものに替えてある。右／純正の細いハンドルはスポーティでクール。手元が滑らないように、運転するときはグローブをつけるのがマイルールだそう。

1,397cc
¥0
100,000km
14.5km/L
MT

OWNER

綿谷慎太郎 ／20
● 学生

弱冠20歳の綿谷さんが車好きの父から譲り受けたのは、'80年代に欧州全土で愛されたルノー 5の2代目、シュペール5のGTターボ。名車カウンタックを手掛けたイタリア人デザイナー、マルチェロ・ガンディーニによる洒脱なボディにターボエンジンを積んだ、欧州ホットハッチの代表選手だ。「小さい頃はこれに家族4人で乗って出かけていました。なんでこんなに小さな車？　と思っていたけど、いざ運転すると、見た目に反して曲がりの良さや加速感が心地よくてクセになる。父の気持ちがわかりました」と、今や多いときは週5でツーリングするほど走りに熱中。「この車で知った走りの楽しさを、父親になったら自分の子供にも伝えたいなって思います」

OWNER

浅岡亮太 ／31
●「RENDES-VOUS」Founder / CEO

3,800cc
非公開
81,400km
4.5km/L
MT

#07

AMERICAN MOTORS CORPORATION GREMLIN *1972*

アメリカンモーターズ コーポレーション グレムリン　1972年式

GM、フォード、クライスラー。アメリカ自動車メーカー BIG3の陰に隠れ、当時No.4だった通称アメリカンモーターズは、低予算ゆえのアイデア勝負で前衛的な車を数多く生み出した。今はなきこのメーカーの車は現在も一部で超人気。海外の旧車を中古販売する浅岡さんでさえ、グレムリンはこの1台しか見たことがないという。「アメ車らしいロングノーズなのに、リアはぶった切られたようなデザイン。一目惚れでした」。これもまた、多くのレースで活躍した、変わり種のアメリカ製ホットハッチ。「仕事が煮詰まるとよく乗ります。速い小型のアメ車ってユニークだから、なにか閃きそうで（笑）」

左／前オーナーから引き継いだ際に、オーディオとカーナビは取り、現状はフルオリジナルの内装に。右／給油口にはグレムリンのマークが。

見よ、この不思議なバランス感を！　ちなみに2011年公開のディズニー映画『カーズ』ではグレムという名で敵役として登場。

POPEYE CAR CLUB

Refueling Column　みんな事故に遭わないように、安全祈願ステッカーを貼ったりするが、その究極は車祓い。神楽殿に乗り入れた車に、神職の方が祝詞を上げ、幣を振ってお祓い。「明治神宮」でやっているから一度試してみない？

#08

SUBARU FORESTER 2.0 L.L.BEAN EDITION *2005*

スバル フォレスター 2.0 エルエルビーン エディション　2005年式

#09

TOYOTA LAND CRUISER 70 *2004*

トヨタ ランドクルーザー 70　2004年式

#10

MAZDA PROCEED MARVIE *1998*

マツダ プロシードマービー　1998年式

FORESTER

LAND CRUISER

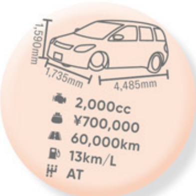
MARVIE

DATA

- 排気量
- 購入価格
- 走行距離
- 燃費
- ミッション

THIS IS MY CAR.

OWNER

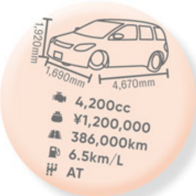


梅原大輝 ／28
● 〈Patagonia〉 スタッフ

「バックカントリースキーに出かけられる4WD」。それが〈パタゴニア〉で働き、毎週末アウトドアへ出かける梅原くんの車選びの基準。行き着いたのは、4WD乗用車というジャンルを切り拓いた四駆の名手スバルが、1997年に開発した走れるSUV、フォレスター。それも北米用に企画された〈L.L.Bean〉コラボの特別仕様車だ。「外見に大きく違いはないけれど、シートは本革、ステアリングも革巻きと、インテリアが充実してるのがいいんです。アメ車のオフローダーを考えた時期もありましたが、メンテナンスを考えると国産車だなって」。納車2日後にはスキー板3組を積んで野沢温泉へ。パワフルな四駆は目論見どおり、雪山もばっちり走破したそうだ。

上／シートはベージュで統一、ステアリングは革と木目の切り替えとやりすぎてない格好よさ。6連奏CDプレーヤーも標準装備だ。下／クーラーをつけるとセンタークラスターの後ろに冷気が回り、便利なドリンククーラーに。

OWNER

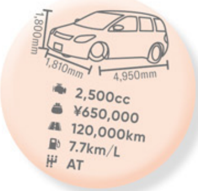


南部松治 ／32
● 〈DROOPY EAR〉 主宰

多くの人がそうであるように、南部さんにとって"ランクル"は憧れの車だった。「実家が中古車ディーラーで、車を探していたとき偶然入ってきたんです。それも一番好きだった70系。これは運命かなと」。数あるモデルの中でも、70（通称ナナマル）は前身のトヨタジープBJ型、初期の20系、40系のヘビーデューティ路線を受け継ぐ本格派。出かけるときは愛犬と一緒。自然が好きだからオフロードも走りたいし、車中泊もしたい。それに地震のときはシェルターとしても使いたい。そんな願望をすべて叶える、ランクルの懐の深さったら！「丈夫な道具って感じです。メンテナンスすれば100万km走れるとも聞きました。スピードは出ないですけどね（笑）」

上／車高は高く、角度がついた窓も広く、見晴らしは最高。運転席周りは武骨なほどにシンプル。下／リアドアはモデルによって上下開きや1枚扉があり、70式は観音開き。南部さんはコーヒーを淹れられるようにカスタム。

OWNER



佐野彰彦 ／32
● 『BULLPEN』 オーナー

全長およそ5m！『BULLPEN』オーナーの佐野さんが乗るビッグなSUVは、北米で市民権を得たピックアップトラックのプロシードを基に生まれた、マービーだ。「お世話になっている〈モーブレーワークス〉の鮒岡力也さんがプロシードに乗っていて。家族もいるなら、と薦められたのがこの車でした」。アメリカンな巨体に、小さな丸目のフォグランプの取り合わせもささることながら、湘南の自宅から幡ヶ谷の店舗までの通勤に、家具の運搬、休日のレジャーとよく働く。「7人乗りの3列シートはアレンジしやすくて助かります。座席を倒せば2mものスペースが作れて什器も楽に入るんです」。都内の道幅はギリギリらしいが、それも含めて規格外の格好よさだ。

上／キャンプの積み荷や、インテリアを運ぶことに使うキャリアは悩んだ末に、アメリカの〈YAKIMA〉の丸みがある形状のものに。下／オリジナルの3連メーターはコンパスが付いていて、方角がわかるアウトドア仕様。

photo: Jun Nakagawa text: Ku Ishikawa

SUVは国産のグッドレギュラーを。

現行ランドクルーザーが4年待ちともいわれるSUV時代。そんな中、僕らが狙いたいのは'90〜'00年代の国産車、古着で言えば"グッドレギュラー"なSUVだ。今と遜色ない走行性に、オフロード車の機能美が残るのがこの年代のユニークさ。一説にはSUVのルーツは'80年代のアメリカとされ、'00年代までの日本車も輸出向け中心だったというから、国産車らしからぬヘビーデューティな風貌が多いのも頷ける。スポーティすぎない顔つきに愛嬌が滲むのは、同年代のアウトドアウェアに通じる感覚かも。おまけに値頃なものもまだ多いとくれば、選ばない手はなし。心配無用、きっとどんなワガママな使い道にも応えてくれる。その器の広さがSUVなのだ。

POPEYE CAR CLUB

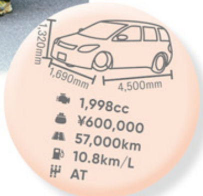
中央道で山梨県を走ると吉田のうどんが食べたくなる。富士吉田市の名物、太くてコシがあり食べ応え最高のアレだ。下り線、談合坂SAの次の初狩PAにそれはある。こぢんまりとして落ち着くし、富士山の絶景も！

#11

TOYOTA CARINA ED *1990*

トヨタ カリーナ イーディー　1990年式

トヨタのセダンといえば、ぽってりとしたカローラに重厚感のあるクラウン。けどカメラマンの成田さんが乗るカリーナEDは、どちらとも違うワイド＆ローのエレガントなシルエット。その新鮮さがバブル絶頂期の若者にハマり、「4ドアでありながら、クーペのフォルム」というコピーで大人気に。今見ても渋さと上品さのバランスが絶妙だ。ベースはセリカで加速力も俊敏性も申し分なく、車移動の成田さんには仕事柄欠かせない相棒。「初代は少しカクッとした形ですが、この2代目はなだらかな流線形。スポーツカーとセダンの真ん中って感じが気に入っています。今や希少な前後のドアの間に柱を入れないピラーレス仕様など、ディテールも格好いいんです」



純正のレースのハーフシートカバーもアンクル感に溢れている。

OWNER

成田英敏 ／34

● カメラマン

叔父さんみたいなセダン。

山下達郎の「ジャングル・スウィング」をBGMに、木立の中の一本道をゆったりと流すシルバーのセダン——。1994年の日産スカイラインのCMを見たら、古くさいと思っていた国産セダンが、なんだか……素敵じゃないか！　そもそもセダンとはエンジン、車室、トランクの3つの箱を組み合わせた合理的な車の基本形。室内もゆったり、重心が低くて走りも安定しているから、遠くの目的地にも快適に連れていってくれる。特に1990年前後に登場したトヨタ カリーナEDや、先述のスカイラインGTSは、往年のオールドスクールなフォルムにスポーツカーの雰囲気が合わさって、例えるなら趣味のいい親戚の叔父さんの愛車のような品の良さ。セダンって、いいじゃない。

1,360mm
1,720mm
4,720mm
2,498cc
¥300,000
70,000km
8.9km/L
AT

お馴染みの丸目の4灯テールランプ。ボードのフィンの色ともマッチ。車高が低いからボードを上に積みやすい。

#12

NISSAN SKYLINE GTS *1997*

日産 スカイライン GTS　1997年式

スカイラインにサーフボード？　一見不釣り合いな組み合わせは、編集者のトロピカル松村さん曰く「'60年代のサーファースタイル」。レースで勝つために誕生したスポーツカーだが、トロ松さんは長距離を快適にドライブするためのGTSというモデル、それもボディの大きさゆえに人気のないR33型をリーズナブルに入手。「昔はバンに乗っていたけど、外国人から見て格好いい日本人でいたくて、世界に冠たる名車スカイラインを選びました。海や山へ毎週行ってたら乗り始めて2年で3万5000㎞を突破。国産車だと壊れてもすぐパーツが手に入るから安心ですね。車体もデカいので、サーフボードやスキー板と一緒に家族もゆったり乗り込めます」。乗り方次第で、車の表情はこんなに変わるんだ。

〈TERZO〉のキャリアにはヤフオクで購入した同年代のパッドを。絶妙なダサさがNICE。

OWNER

トロピカル松村 ／35

● 編集者、『トロピカルレコード』店主

DATA

排気量

購入価格

走行距離

燃費

ミッション

THIS IS MY CAR.

OWNER

阿部 健 ／43
●写真家

「小雨の降る鎌倉でお婆さんが運転する姿を見かけて素敵だと思ったんです」。写真家の阿部健さんの車は、眩しいブルーのミニバン、日産ラフェスタ。発売当時からのマイナーカーゆえ、エンジン交換済みで走行距離3万㎞にもかかわらず、価格も手頃だった。「後部シートが片方ずつ倒れるので、長い機材を積むときに重宝します。バックドアが雨を凌ぐ屋根になるのも地味に助かりますね」。3列シートで広々とした室内だが、全幅はコンパクト。狭い路地もスイーッと進めて、頑丈さも兼ね備えたラフェスタは、毎日車に乗る阿部さんのライフスタイルに合致。「車で自分の色を出したくなくて。いろんな意味で"普通"なところが気に入っています」

1,997cc
¥400,000
38,000km
15km/L
AT

#13

NISSAN LAFESTA 2009

日産 ラフェスタ　2009年式

上／機材を積んでもこの余裕！　右／ドライブのお供は『ゴースト・ドッグ』と、『世界の車窓から Next Journey』のサントラ（「石の記憶」がお気に入り）。

photo: Yutaro Tagawa (#11, #14), Naoto Date (#12, #13)
text: Shintaro Kawabe (#11), Nozomi Hasegawa (#12, #13, #14)

#14

TOYOTA COROLLA FIELDER 2008

トヨタ カローラフィールダー　2008年式

1,496cc
¥0
80,000km
15km/L
AT

上／登山口の近くまで車で行き、そこから自転車に乗り換えることも。下／前オーナー時代に雨や太陽でできた色褪せ。「ヤケや傷さえも可愛く思えてきます」

OWNER

浅野嘉輝 ／27
●『DRIVETHRU』
アシスタント

車屋の息子にして、自動車メディアで働く浅野嘉輝さん。サニートラックやジェッタなどの旧車を乗りまわした彼が行き着いたのは、トヨタのカローラフィールダー。「次の車が見つかるまで……のつもりが、気づいたら乗り続けていました」。乗用車の代名詞カローラのステーションワゴンにして、車高低めで小ぶりだが室内は広い嬉しい設計。「とにかくタフ！　自転車やキャンプギアもヒョイッと積み込めて、走りもいい。アクティブに遊ぶ僕には一番合う車だと思います。使った道具を洗わず積み込んだり、靴がドロドロの友達に『早く乗って！』と言えるようにもなりました。いい意味で雑に扱える。少し汚れてるくらいがちょうどいいんです」

POPEYE CAR CLUB

親近感しかない'00年代のファミリーカー。

　家族で遊園地へ行くときに乗ったあの車。そう、'00年代にかけてファミリーカーとして流行ったミニバンやステーションワゴン。自然とチェックボックスから外していたけれど、考えてみれば、安定した走りで燃費もよし。遠くへ行くにもへこたれず、大人数も大荷物も受け入れてくれる。もしかしてオールマイティな車？　カローラフィールダーで山へ海へと出かける浅野嘉輝さんは「かっこいい車に乗らないと楽しいカーライフが送れない、なんてことはない」とキッパリ。青のラフェスタで仕事へ向かう阿部健さんも「機能も見た目も飽きることはなさそう」となる！　普通にいい、いや、普通がいい。きっと乗り続けるほど可愛く思えてくるんだろうな。

Refueling Column　日比谷公園の地下駐車場、「日比谷自動車駐車場」では、駐車料金を払うだけでホース付きの手洗い洗車スペースを借りることができる。しかも24時間営業。日中は混んでいることもあるので、深夜が狙い目。

#15

MERCEDES-BENZ 280SE 1970

メルセデス・ベンツ 280SE 1970年式

この三角窓を開けて夏の空気やエンジンから漏れる香りを感じながら、ドライブするのが好きだそう。どこをとってもロマンが溢れる車だ。

本物のウッドで作られたダッシュボードや助手席と後部座席のドアについた灰皿など、現行車では見られないディテールがお気に入り。

2,778cc
$10,000
167,000km
5km/L
AT

OWNER

Ellie Kitman /27
● Camera Club Producer

「自分で買う初めての車はコレ！」と18歳で思い切って購入し9年間乗り続ける相棒が280SE。メルセデス最後のハンドメイドモデルで、縦並びの丸目・4灯に、現代ではなかなかお目にかかれないフルメッキバンパーなど実に優雅。ウッド製のダッシュボードや本革のシートがあしらわれた内装、そして振動が少ないことから'60〜'70年代の高級車に使われていた直列6気筒のエンジンを搭載するなど、紛れもなく当時の最高クラス。だけど本人は気負わず、普段から路駐で雨晒し、仕事もよく遊びに行くビーチでもガシガシ使っているとか。

CAR COLUMN #01

NYとベルリンの車事情。

メルセデス・ベンツとBMW、共にその50年を超える素晴らしいクラシックカーを若くして愛車にするなんて、東京じゃ簡単じゃないけれど、NYとベルリンのカーオーナー事情はお国柄も見えて面白い。

まずはドイツの「Hナンバー」。2年に一度の車検で、①生産されてから30年以上、②ノーマルの状態が保たれている、③走行に支障がない、という条件をクリアすると国が「クラシックカー」と認定し、ナンバープレートの最後にhistorishのHがつく。ニコも当然Hナンバーだ。素敵な文化でちょっと羨ましい。自動車税は年間一律191ユーロになって、場合によってはお得だそう。一方、NYの車検は1年ごとだけど、エリーは毎回40ドルくらいで激安。整備工場に出すだけだし、通るのもイージーな印象のようで、それもまた羨ましい。

安いといえば、NYの駐車場の話。ストリートパーキングが常識だから、みんな基本タダのつもりでいる。エリーも毎日路駐。クラシックカーがカジュアルに道端で保管されている現場もよく目撃するとか。ベルリンも似たような路駐文化らしいけど、どちらの街も雪が厳しい冬は例外。二人ともガレージで「冬眠」させるそうだ。ストリートには融雪剤がバンバン撒かれ、その塩分で車が錆びてしまうからね。

肝心の車探しについては、ドイツでは「mobile.de」「AutoScout24」などの自動車専門サイトが頼りになるそうで、日本と同じ印象だ。車の扱いが比較的カジュアルなNYでは、クラシックカーで状態のいいものはなかなか出てこないそうだけど、一般的な若いニューヨーカーはクレイグスリストやFacebookのマーケットプレイスで車を買っているらしい。感覚的には予算の上限は4000ドル前後。「大切なペットを飼う」みたいな気持ちらしいけど、その感覚はいいなと思った。お金の苦労はそれとして、日本でも車を持つということに臆せず、もっといい気分で向き合いたいよね。

#16

BMW 1600-2 1969

BMW 1600-2 1969年式

透き通るようなブリストル・グレーが美しいBMW 1600-2を、ニコが手に入れたのは9年前。「正直状態は悪かったけど、ノーマルだったことに惹かれて購入したんだ。1968年にポルトガルで生産された車だから、愛称もポルトガル名のフーゴ。2ドアでボクシーな形や、バウハウスを彷彿とさせるミニマルで実用的なデザインが気に入ってるよ」。車高を低くして、ホイールの色をボディと合わせるなど、できるだけオリジナルを生かして改造。車内はほぼそのままで、あえてカーオーディオ機器も付けないというこだわりっぷりだ。「レース用に開発されたM10エンジンがとにかく優秀で。アルプス山脈を走っても壊れないほどタフで頼れる相棒だね」

1,600cc
€12,000
105,000km
6.7km/L
MT

自慢の木製ハンドルには、滑り止めとして〈チェスター・ジェフリー〉のオーダーメイドレザーグローブを着用するのがお決まり。

OWNER

Nico Wohlgemuth /36
● 「DAYONE」共同創設者

DATA
排気量
購入価格
走行距離
燃費
ミッション

THIS IS MY CAR. POPEYE CAR CLUB

photo: Patrick Woodling (#15), Rie Yamada (#16), Yutaro Tagawa (#17), Naoto Date (#18)
text: Shimpei Nakagawa (#15), Yukiko Yamane (#16), Shintaro Kawabe (#17, #18)

OWNER

益子隆人 ／24
● 会社員

イーサンマルことBMW E30は、'70年代中盤以降のBMWに新しい風を吹かせたドイツ人デザイナー、クラウス・ルーテによる小ぶりなスポーティセダン。当時のブランドを象徴する4灯ライトと、低いフロントは今見てもシャープで古びない。会社員の益子さんは「ファッションもシンプルが好きなので、このシックなBMWは服との相性もいいんです」と軽やかにこの車を乗りこなす。かつてバブル期に大手企業の若者がこぞって買い求め、「六本木のカローラ」と呼ばれたなんて逸話も、見方によってはエントリーモデルとしての完成度の高さの裏返し。「高級車らしい乗り心地で安定感も良くて、毎日の通勤もノーストレスです」とイージーに普段使いする様子が楽しそうだ。

左／現行のモデルに比べ、スイッチ類がアナログ仕様。時計もデジタルではなく、針式なのがレトロでいい。右／益子さんもメンバーの一員というカークラブunderlineのキーホルダーが車内の部品の一部のように馴染んでいた。

#17

BMW E30 *1991*

ビーエムダブリュー E30　1991年式

等身大のメルセデスとBMW。

「最善か無か」を合言葉に完成度の高い車づくりに情熱を注いできたメルセデス・ベンツと、「駆けぬける歓び」をスローガンに走る楽しさを追求してきたBMW。異なる哲学を持ちながらも切磋琢磨してきた伝統のドイツメーカーを愛車にするなら、一体何がいい？〈ビームス〉バイヤーの小林さんは、'90年代のメルセデス黄金期に造られた初代EクラスのW124ステーションワゴン、会社員の益子さんは、バブル期の入門車として大流行した「六本木のカローラ」BMW E30。ともにクラシックすぎない'90年代の名車を、洋服のようにデザイン重視でチョイス。ブランドのアイデンティティを頭に置きつつも、肩肘張らない選択が今の時代の考え方なのかも。

#18

MERCEDES-BENZ E320 W124 *1995*

メルセデス・ベンツ E320 W124　1995年式

OWNER

小林景太 ／33
●〈ビームス〉バイヤー

「このアズライトブルーは'95年から2年ほどしか造られなかった限定色。大好きなヤンキースカラーなところがいいんです」と嬉しそうに話す小林さん。コストを惜しまず最高の車を造る「最善か無か」を掲げた'90年代より後、メルセデスは厳しい経済情勢からコストダウンを余儀なくされていくわけだけど、その黄金期の最後に造られていたのがこの'95年式のW124ステーションワゴン。現在のEクラスにあたるその車体には、ウッドパネルの高級感と、当時の流行とは逆を行く簡素なボディのモダンさが混在。「車も古着も、'90年代くらいの古すぎないものがちょうどいい。見た目も良くて長距離でも疲れないこの車が、今の生活にはよく馴染むんです」

左／内装もアズライトブルーで統一。右／サイドミラーも車体のようにスクエアなフォルム。

名店のそばには、意外と駐車枠があるもんだ。新橋の立ち食い寿司『鮨処みやこ』や浅草の『馬賊』。桜新町の『餃子荘 紅蜥蜴』に、神保町の老舗『欧風カレー ボンディ』も。枠を制する者がうまい飯にありつける！

右／運転席にはレース用のバケットシートを装備。助手席や後部座席には、カレッジという名にふさわしい爽やかな柄の純正のシートが。左／イタリアの自動車メーカーアバルトのステアリングが、よりスポーティな印象を演出。

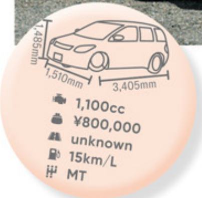
ゴルフとパンダ。

そう思わずセットで呼びたくなるのは、この2つの車こそ、東京に住む僕らのベーシックカーと呼ぶにふさわしいと思うから。ともに自動車大国ドイツとイタリアを代表する大衆車ゆえ、ビルの合間をスイスイ運転できるコンパクトな乗り味も、欧州車らしく品行方正で洒落たデザインも、都市生活には必要十分。エポックメイキングなデザインの初代パンダでサーキットに通う日比さんのように、初期モデルを自分らしく乗りこなす手もあれば、日常の道具としての使い心地にこだわって、現行に近い第7世代のゴルフで愛犬と出かける依田さんのような選択も。デザインで選ぶも機能で選ぶもスタイル次第。まずはこの2台を基準に車を選ぶのも悪くないかもね。

#19

FIAT PANDA 2002

フィアット パンダ　2002年式



OWNER

日比豊人 ／23
● 会社員

名匠ジウジアーロをして1980年の発表当時、最高傑作と言わしめた初代パンダは、平らな板ガラスや直線的なボディといったスクエアデザインが今見ても都会的で超クール！　現行車はイタリアで年間10万台以上売れる人気者で、現在は5ドアの丸いフォルムだが日比さんの初代は3ドア。しかもこのアズールカラー、イタリアでも希少なカレッジというラインの限定色なのだ。出合いは'20年、蒲田の中古車屋『バーンガレージ』で。「前の持ち主がサーキット用に足回りをチューニングしていて、僕もレースに参加するようになりました。この車に乗る人は穏やかな人が多くて、パンダが集まるイベントは居心地がいいんです」。人も車に似るってことかな。

#20

VOLKSWAGEN GOLF7 2013

フォルクスワーゲン ゴルフ7　2013年式

左／愛犬がメインに座る後部座席には、「この車種を買う決め手の一つにもなった」という、ゴルフ純正のペットシートを装着。右／運転のお供は、依田さんの友人でもあるアーティストSHINKNOWN SUKEのエアフレッシュナー。

「車も洋服と同様、サイズ感が大切。僕のように身長が高くない人にはコンパクトな車が似合うと思うんです」。そう話す〈カップアンドコーン〉の依田さんの選択は、最新型のひとつ手前。初代誕生から約40年後に生まれたゴルフ7。そもそも実家の車だったゴルフ2を考えていたが、「愛犬を乗せるための車としての使い勝手で見れば、ほぼ現行のこのモデルが最適かなと」。利便性は現行とさほど変わらず価格は手頃。ゴルフ2から形は丸く、顔立ちも精悍に変わったが、乗り心地や静粛性はぐんとアップした。「後部座席は愛犬の特等席。汚されることや故障のリスクも気にせず、運転初心者の僕も快適に動かせる。今は愛犬との旅行が楽しくて仕方ないんです」

OWNER

依田 亮 ／37
●〈カップアンドコーン〉デザイナー

PANDA

GOLF7

117 COUPÉ

DA N 1200

DATA
排気量
購入価格
走行距離
燃費
ミッション

THIS IS MY CAR.

OWNER

G.RINA
●ミュージシャン

1,325mm
1,600mm
4,320mm
2,000cc
¥2,200,000
143,758km
8.9km/L
AT

純正のウッドステアリングや、ベージュ×ターコイズブルーのシートもそのまま、前の持ち主から引き継いだそう。

四角いヘッドランプは後期の印。前・中期は丸目。唐獅子がモチーフのエンブレムも凝った作りでかっこいい。

#21
ISUZU 117 COUPÉ *1980*

いすゞ 117クーペ　1980年式

G.RINAさんが人生で一度は乗ろうと決めていた車。それが「走る芸術品」と呼ばれる、いすゞの117クーペ。国産ながら異国情緒を感じる所以は、ホイールアーチに沿ってうねるフェンダーライン。ジョルジェット・ジウジアーロがデザインを手掛けた、'60年代イタリアのスポーツカースタイルだ。手に入れたいと思ったものの「運転しやすいオートマで、パワステとパワーウィンドー付きが絶対条件」のため捜索は難航。「結局、いすゞ車専門店の『ISUZU SPORTS』で見つけて。納車まで半年以上かかりました。40年以上前の車だからこそ、あえて日常使いを楽しみたい。犬用シートベルトを手に入れたので、愛犬とドライブに行く準備もできています」

クーペ！　クーペ！

シャープなフロント。リアにかけて弧を描く流線形の美しいフォルム。低く唸るエンジン音とともに、すべるように走る姿を見かけたら、どうしたって目で追ってしまう！　2ドアで、後部座席がないこともあるクーペの形は、走りを優先した証し。友達との旅行には向かないが、「自分のための車」を考えるなら最高の選択だ。ミュージシャンのG.RINAさんが風を切って東京を走らせるのは、スポーティさと気品を兼ね備えた117クーペ。会社勤めの三輪将平さんが週末に海沿いを流すのは、簡素で武骨な'72年式ダットサン。どちらも国産だがまったく違うムードが漂い、その形状の奥深さを感じる。クーペのハンドルを握った瞬間、誰もが主人公になれるのだ。

「ギギギ……」と開くトランクも可愛い。車高が低いと運転も楽しいんだとか。

ダッシュボード内、メーター類の配置を見直して、インテリアパネルを自分仕様に。車内のカスタムも進行中！

POPEYE CAR CLUB

1,390mm
1,495mm
3,830mm
1,500cc
¥3,400,000
28,604km
8km/L
MT

OWNER

三輪将平 ／26
●会社員

#22
NISSAN DATSUN 1200 *1972*

日産 ダットサン 1200　1972年式

武骨さを漂わせた厚みのあるフロントから、リアに向かうとキュッと引き締まっていくコントラストの面白さ！　'66年に初代がデビューし、価格以上の実用性と安心感から、大衆車として愛されていた日産サニーをベースに、海外向けに作られたのが左ハンドルのハッチバッククーペであるダットサン。輸出用ゆえかなり希少で、三輪将平さんは大学時代に手伝っていた車屋で偶然巡り合ったという。「このダットサンでカーショーに出ない？　と誘われたんです。幼少期から憧れていた車をアメリカから逆輸入するとは思いませんでした。白い車体をブルーに塗り替えて、車高も落として。結果、賞をいただけました。僕の倍生きている車なので、手をかけながら乗り続けたいです」

photo: Naoto Date (#19), Yutaro Tagawa (#20, #21), Jun Nakagawa (#22)
text: Shintaro Kawabe (#19, #20), Nozomi Hasegawa (#21, #22)

Refueling Column　あの〈サンタ・マリア・ノヴェッラ〉の香水に、車モチーフの香りがあるって知ってる？　名前は「ノスタルジア」。愛用者によれば、高級外車の新車の匂いに近いらしいので、車内用にしてみるのもいいかもねー。

英国の伝統車に憧れて。

いつかオーダーしたいと願うサヴィルロウのスーツのように、乗る車にもロマンを持っていたいもの。なかでも数々のメーカーが統合と再編を繰り返してきた激動の英国自動車史には、そんな憧憬を託したくなる数々の名車が存在する。ここで紹介する2台。ベビーロールスと呼ばれ、上流階級に愛されたバンデン プラのプリンセスと、名門スポーツカーメーカーMGの代表作MGB GTも、まさにそんな車。アンティーク家具のように造り込まれた車体はクラシックそのもので、ミッションで操る喜びは何物にも代えがたい。もちろん維持は大変だけど、車を長く乗る文化が根付く英国では様々な業者から部品が調達できるそう。憧れはますます深まるばかり。

1,240mm　1,520mm　3,890mm
1,800cc
¥2,500,000
72,000km
8km/L
MT

#24

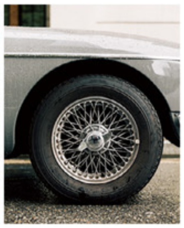
MG MGB GT *1967*

エムジー エムジービー ジーティー　1967年式

創業1910年、もとはトライアルレース向けの車を造っていた名門スポーツカーメーカー、モーリス・ガレージ（MG）。その代表モデルがMGBだ。'60年代から'80年代にかけて世界で最も売れたオープンカーとしても知られるが、車の情報を発信するメディア「カー・シティ・ガイド」を運営する佐々木さんが選んだのは、同じモデルで、屋根が付いたハッチバッククーペ型のMGB GT。「ビートルズが好きで、当時のイギリスの空気感が詰まった車を探している中で見つけたのが、雨の日にも映えるグレーの車体の'67年式。形はボンドカーのような男らしさがある半面、乗り心地は軽快なのがいいんです。この車があるお陰で、少し大人に近づけた気がします」

OWNER

佐々木穂高 ／26
●「カー・シティ・ガイド」メンバー



左／「ブラックとシルバーの色で統一されたハンドル周りはイギリスらしい美的感覚でかっこいいですよね」と佐々木さん。シートのレザーは2代前のオーナーが黒からワインレッドに張り替えたそう。右／往年のスポーツカーによく使われていたワイヤスポークが、エレガントな印象を演出。

1,340mm　1,530mm　3,760mm
1,275cc
¥1,000,000
65,000km
15km/L
MT

#23

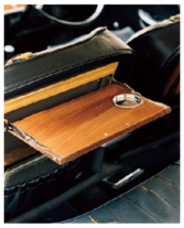
VANDEN PLAS PRINCESS *1973*

バンデン プラ プリンセス　1973年式

かつてベントレーなどのボディを製造していたバンデン プラが生んだ高級コンパクトカー、プリンセスは、ミニクーパーの生みの親であるアレック・イシゴニスが手掛けた車。そう言われれば、確かにミニを思わせる愛嬌ある顔つきだ。当時はロールス・ロイスを所有する家族のセカンドカー的な位置づけによりベビーロールスと呼ばれただけあって、内装のウォールナットパネルなどの贅沢なディテールが、小ぶりな車に詰め込まれている。その華麗さとは裏腹に、持ち主の斗沢さんは「新潟から長野へ、山越え谷越え800km旅行もこの車で行きました」とハードに乗りこなす。「中身がほぼミニと一緒なので部品には困らない。不備があっても自分で直せるんです」

OWNER

斗沢一憲 ／30
● 会社員



左／ダッシュボードはウォールナット素材だから高級感とレトロな雰囲気が車内に漂う。右端のスイッチは、本来7つのところハザードなども組み込んで9つにDIY。右／後部座席には、来客者用の折りたたみ式のピクニックテーブルが完備されている。こちらも純正のウォールナット素材。

タイヤも当時と同じ性能にするために、悪路に強くクラシックなバイアスタイヤに。

DATA
排気量
購入価格
走行距離
燃費
ミッション

THIS IS MY CAR.

photo: Naoto Date (#23, #24), Jack Orton (#25), Kazuharu Igarashi (#26) text: Shintaro Kawabe(#23, #24), Koji Toyoda (#25, #26) coordination: Kyosuke Nitta (#23, #24), Keita Hiraoka & Narumi Nara (#25)

#25

LAND ROVER RANGE ROVER P38A *1994*

ランドローバー レンジローバー P38A 1994年式

OWNER

Louis Ganellin ／28

● クリエイティブ・ストラテジスト

彼は、〈モンベル〉や〈カーハート〉を愛するアウトドアマン。トランクには、自慢のギアがたくさん。分割テールゲートも便利で、時には作業台に。

ロンドン在住のクリエイティブ・ストラテジスト、ルイス・ガネリンくんの愛車は、2代目レンジローバーだ。「4×4に乗りたいと思ったときに、100台に及ぶ候補車の平均的な年間コストを算出した結果、セカンドレンジがもっとも現実的な車だったんだ」。初代からグッとモダンな顔つきになった2代目は確かにお手頃。でも、エアサスと革張りシートがもたらす快適な乗り心地に、大きな窓による視界の良さ。そして、頼もしきV8エンジンの馬力は、レンジローバーの良さをまず知るにちょうどいい。「サンルーフを開け、ジャズを流しながら、自然へ分け入っていくのはいつでも最高の時間だよ」。いつの時代もカントリージェントルマンの隣に、レンジの姿あり。

#26

LAND ROVER DEFENDER *2020*

ランドローバー ディフェンダー 2020年式

それまでの鉄の塊のような外観から一変、デジタルガジェットさながらにアップデートしたおニューなディフェンダーに乗るのは、『ミンナノ』の店主・中津川吾郎さん。オリジナルディフェンダーに憧れがあったそうだけど、さすがにあれは生半可な気持ちじゃ持てん、と2020年式をチョイス。「初代を彷彿とさせる白ルーフ×緑ボディのカラーリングも、チェーンソーでぶった切ったようなリアデザインもお気に入り。ルックスどおり、デジタル機能も満載かつ車内も広いので乗り心地も申し分なく、家族の評判も上々です」。オリジナルへの未練はまだあるが、なんだかんだ最新のスニーカーとXXLのTシャツを愛する吾郎さんにぴったりな一台だ。

OWNER

中津川吾郎 ／45

●『ミンナノ』店主

ランドローバー伝統のコマンドポジションのおかげで、見晴らしは良好。四隅が確認できて、壁に擦る心配もなし。

POPEYE CAR CLUB

CAR COLUMN #02

僕らがランドローバーに無性に惹かれる理由。

マイケル・ジョーダンが乗っているから？ それとも英国王室御用達のSUVだから？ 理由はともあれ、僕らのランドローバーへの憧れは衰えることはない。その魅力を「スニーカーに例えるならば、〈ニューバランス〉の『990』みたいなもの」と語るのは、3代目レンジローバー（ランドローバーの上級ライン）のヴォーグ、ランドローバーのニューディフェンダーを乗り継いできた『ミンナノ』の店主、中津川吾郎さん。「安定感は抜群ですし、ロゴやデザインも含め控えめな存在感が、ランドローバーという車の持つ魅力だと思います」。そういえば、〈エメレオンドレ〉や〈ベターギフトショップ〉のムードボード代わりのインスタでは、マレンコのソファや〈アークテリクス〉のゴアテックスジャケット、それこそ〈NB〉のランニングシューズと同列に並んでいたっけ。要するにそのどれもに目がないシティボーイにとって、どれだけ高嶺の花だろうと、できれば身近に置いておきたいパーマネントデザインのひとつってこと。吾郎さんのおかげで、なんとなく放置していたナゾが一気に解けたような気がする。本場イギリスの若者たちも同じ気持ちらしく、クリエイティブ・ストラテジストのルイス・ガネリンくんは若くして、セカンドレンジのオーナー。「僕たちにとっても普遍的なSUVだよ。ぬかるみや急斜面を物ともしない本格オフローダーながらも、古き良き建物が並んだ英国の街並みにも品よく溶け込む。まさに自然を愛する英国紳士みたいな車だね。それでいて、近年は中古市場が底をついているから、比較的手に入れやすいんだ」。吾郎さんの乗るニューディフェンダーにオリジナルディフェンダー、初代レンジローバーはまだまだお高いけれど、セカンド&サードレンジは、日本でも180万円ほど。つまり、〈ニューバランス〉の新作を90回我慢すれば、英国きっての名オフローダーの運転席に座れちゃうってわけだ。意外と実現可能？

Refueling Column

吾郎さん曰く、「故障も多いので、中古のランドローバーは専門店で買え！」が鉄則。おすすめは調布の『ベルデ』。本国ランドローバー社公認のマスターテクニシャンが運営する頼もしきプロショップだ。

#27
NISSAN CEDRIC WAGON *1993*
日産 セドリックワゴン　1993年式

品の良いご老人のようなベロアシートは、新庄さんのお気に入りポイント。そんな渋すぎる座席のヘッドレストには、〈エンダースキーマ〉の壁掛けティッシュケースをS字フックでぶら下げる。今すぐ真似したい技である。

#28
NISSAN GLORIA VAN *1998*
日産 グロリアバン　1998年式

ハードボイルドな革張りの車内。ハンドルは、〈カーサービス〉のメンバー、NEONSYRUPさんに譲ってもらった〈ナルディ〉のものに付け替え、リアガラスには、友人のブランドのステッカーがベタベタと貼られる。

OWNER

#27

新庄“パウロ”翔太 ／38
●〈エンダースキーマ〉営業

国産バンの代名詞、日産 Y30型のセド・グロ。この2台は兄妹車なんだけど、実はほぼ中身が一緒で、その違いはフロントグリルの顔つきくらい。縦ストライプの兄貴分、セドリックワゴンに乗るのは、〈エンダースキーマ〉の営業、新庄翔太さん。「最初は、千原ジュニアさんの330型セドリックに一目惚れして。でも、ウチは5人家族だからバンかな？　くらいの軽い気持ちで手に入れました」。結局、選んだのは330型じゃなくて、手に取りやすいY30型。’90年代はサーファー人気が高かったが、ガンメタグレーの配色も相まって老成した紳士のような佇まいがステキ。「バンといっても当時の高級車ですし、祖父だと思って大切に乗っていきたいですね」

タフに行くならセド・グロか、クラウンか、マークⅡか？

’80〜’90sのヤングタイマーな国産車、その中でもアメ車ライクな角張ったフォルム、なんならサーフボードも入るロングボディなこのあたりの車は実に渋い。厳密にいうと4ナンバーの貨物車をバン、3＆5ナンバーの乗用車タイプをステーションワゴンと分類するが、難しいことは置いておく。ハードボイルドな見た目に敬意を表しつつ、かすり傷も“味”だと思えるタフな一台をマイカーにしたら、男の格が上がるってもんだ。選ぶべき4台は、貫禄ある絶対王者のY30型、同じ日産で兄妹とされるセドリックとグロリア。気品溢れるトヨタのクラウンと、’90年代の若者にとって等身大の存在だったマークⅡ。どれなら板につくのか。車と自分の個性と相性をしっかり見定めて乗りたい。

DATA
排気量
購入価格
走行距離
燃費
ミッション

THIS IS MY CAR.

photo: Kazuharu Igarashi (#27, #29, #30), Jun Nakagawa (#28) text: Koji Toyoda

矢口さんのクラウンは、最上級グレードの"ロイヤルサルーン"らしく、モケットのベンチシートに包まれた車内は、まさに"応接室"のごとし。荷室も広々としていて、ご覧のとおり、スツールなど家具もばっちり積み込める。

#29

TOYOTA CROWN STATION WAGON 1989

トヨタ クラウン ステーションワゴン 1989年式

「ロズウェルUFO博物館」でゲットした宇宙人のボブルヘッド人形は、いつもダッシュボードに鎮座。シガーソケットに差し込まれるのは、「U-HAUL」のUSBチャージャーアダプター。車内も『サンデイズベスト』節全開！

#30

TOYOTA MARK II WAGON 1992

トヨタ マークII ワゴン 1992年式

POPEYE CAR CLUB

OWNER

#30

横瀬裕貴 /42
●『サンデイズベスト』オーナー

'80年代、ハイソカーブームのはしりだった5代目マークII。5ナンバー（小型車）の枠内で、限界まで豪華な内装や贅沢なメカニズムを盛り込むことに挑戦した名作モデルのステーションワゴンに『サンデイズベスト』の店主・横瀬裕貴さんは乗っている。「'80年代のトヨタを代表する直6エンジンを搭載したモデルで、30万km以上走る国産車の鑑。やたらとスペックが高いという安心感がいいですよね。でも、僕の場合、いかにもロスのおじさんが乗っていそうなアメリカの普通車っぽいルックスが決め手。アメリカっぽいシャンパンゴールドカラーも最高で」。トランクも、洋服や雑貨の搬入に趣味のキャンプと大活躍。ノーマルな"マーバン"が世田谷の先輩の相棒だ。

OWNER

#29

矢口周太郎 /37
●『YOU ARE WELCOME』店主

家具店『ユーアーウェルカム』の店主、矢口周太郎さんの愛車はお店のテイストに合うようなポストモダンっぽい欧州車かと思いきや、'80〜'90年代にかけてロングセラーモデルだったクラウン ステーションワゴン。珍しいマルーンカラーのボディに、同系色のモケットシートで統一された車内はお淑やか。昭和のハイライフの象徴、クラウンらしく、気品に満ち溢れたバンである。「まるで純喫茶のような昭和の高級感がありますよね。丁寧に乗るのもいいですが、あえて日々の作業で使い込んでガシガシ乗りたい。やっぱり、家具でも車でも、日常生活でしっかりと使われているものに魅力を感じるので。僕のは、まだまだ序の口ですが（笑）」

OWNER

#28

橋本 奎 /28
●〈カーサービス〉デザイナー

セド・グロの妹分。格子状のグリルが特徴のグロリアバンのハンドルを握るのは、〈カーサービス〉のデザイナー、橋本奎さん。その角張ったフォルムとビッグなサイズ感に「カリフォルニアを感じる」らしく、西海岸のファッションやカルチャーを愛する橋本さんのライフスタイルにとても馴染んでいる。他の3台と異なるのは、4ナンバー登録の貨物バンってこと。Y30型でも、厳密にはVY30型と呼ばれるモデルとか。「商用目的に造られているからか、すでに26万kmも走っているのに大きな故障とは無縁な頼もしき一台ですね。傷も凹みも味だと思えるから、アメリカ映画に登場する名もなき平凡な車のような感じでガシガシ乗っていきたいですね」

Refueling Column　プロのスタッフに手洗い洗車をやってもらっている間は、正直暇。でも、中野の『東京AUTO洗車』は、『桃太郎すし』併設。寿司をつまんでいるといつの間にか洗車完了。この一石二鳥感は都内随一。

上／狭いスペースの駐車も、バックの操作も楽々！　左／学生時代に買ったCDがBGM。ブライアン・イーノの『Thursday Afternoon』＆めぐりズムのコンボでよく昼寝をする。

#31

SMART FORTWO CABRIO *2014*

スマート フォーツー カブリオ　2014年式

OWNER

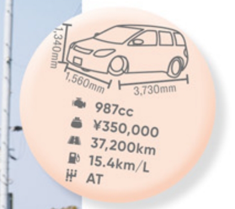
クマタイチ ／37

● 建築家

迷路のような神楽坂の路地裏も、狭い駐車場もなんのその。建築家のクマタイチさんがファーストカーに選んだのは、全長2.7mの“マイクロカー”、スマート。1994年に「スウォッチ」と「ダイムラー・ベンツ」の合弁会社「MCC」から誕生した車で、軽自動車よりも小回りが利く。「学生時代の留学先がドイツだったんですが、日本と比べてたくさん走っているんです。その光景を見て以来、ずっと欲しいと思っていて。2020年にNYから日本へ帰ってきたタイミングで買いました。ギアチェンジするときに少し唸るので、運転してる感があって楽しいんですよね。季節を問わずルーフを開けて走るのですが、銭湯帰りには外気浴になるので最高ですよ」

小さいクルマ。

無駄なく気軽に楽しめる。都会で小さい車を選ぶ人たちのカーライフは足取りよく快活な感じだ。この「無駄がない」というストレスの少ない感覚がいいね。あるカーデザイナーに「日本の平均乗車人数は1台に1.3人くらい」と聞いて、もっと省スペースで十分じゃない？っていう気がリアルに湧いてきているし（1kmの間に全長4000㎜の車とスマートを並べると100台以上差が出るよ）、ジムニーやレックスのような軽自動車を選べば車検も安い。あと「車の魅力は身体の拡張だ」なんて話があるけど、小さい車はその点まさに身近で、相棒というか自分自身。『Dr.スランプ』で描かれるコンパクトカーみたいに“人車一体”でウキウキと走れば心が弾むよね。



上／車好きの家族で、お母さんが持っていたという初代マーチの純正の時計をダッシュボードに。動いてないけどね。下／前のオーナーがナイスなカスタムをしていてラッキー！　ステアリングはレースでも活躍するイタリアの老舗〈momo〉の木製だ。

#32

NISSAN MARCH i·z *1990*

日産 マーチ i·Z　1990年式

OWNER

深井綾郁 ／25

● 〈Tento〉デザイナー

日産のマーチといえば使い勝手のいいコンパクトカーのど真ん中。丸くてファニーな現行モデルと対照的に、1982年から1992年の初期型はカクカクッとしたフォルム。これもまたイタリアの巨匠、ジョルジェット・ジウジアーロの美しいデザインだ。初代・後期型i・Zを'21年にヤフオクでゲットした深井さんは大阪のファッションブランド〈Tento〉のデザイナーで「縁がなかった車好きの友人が一気に増えました」と楽しそう。「初めての車で激安で不安だったけど、先輩や整備士さんたちにウェブの写真を見てもらって慎重に検証してポチりました。乗り始めは急に止まったりして苦労もして。でもこれまで整備費用は10万円くらいだし、車のクセがわかってきて今は快適ですよ」

DATA
排気量
購入価格
走行距離
燃費
ミッション

THIS IS MY CAR.

#34

SUBARU REX 1982

スバル レックス　1982年式

地元の大阪・和泉市で古着屋さん『ビッグブリッヂ』を営む大橋さんは、「ザ・ビッグミニ」の愛称で登場し、入団2年目の読売ジャイアンツ・原辰徳のCMで話題だった2代目・レックスを駆って自宅と店を往復。「これに乗るのは近所くらい」というけど、2019年に走行距離7万kmで購入し、今9万5000km。まさに日々の相棒だ。大橋さんもまたヤフオクで買ったそうで「もともとジウジアーロが好きで、このレックスは彼の角張ったデザインに似ているし、売り手が車屋さんだったこと、今も乗っているというコメント、何よりボンネットの裏にこれまでの整備記録を緻密に書き込んでいた前オーナーのマメさを信頼して即決。気づけば軽は4台目です。手を加えずノーマルで乗り倒します」。

1,350mm / 1,390mm / 3,190mm
550cc
¥200,000
95,000km
18km/L
MT

上／シブい車内。下／2代目は積載性も十分。スイングバックもかっこいい！

OWNER

大橋拓王 ／36
● 『big bridge』店主

#35

NISSAN PAO 1989

日産 パオ　1989年式

革小物職人の樋下田さんは、日本の古道具でキャンプをするのが休日の息抜き。1989年に初期型のマーチをベースに「サファリ」「冒険」をコンセプトに生まれたパオだから、アウトドアにもよく似合う。一見レトロで可愛らしいけど、ヒンジが外に出ていたり、バンパーがパイプ状だったりと随所にインダストリアルで力強い雰囲気もある。「そんな見た目に中学2年生で一目惚れをして、25歳で初めて買って以来、これが3台目。乗れば乗るほど、カシャというドアの開閉音や、三角窓から爽やかに吹き込む風など、細かいところまでこの車の虜に。純正のパーツがなくなってきて、維持に手間もお金もかかりますが、それ以上に小さな幸せが積み重なる一台です」

OWNER

樋下田 歩 ／39
● 革小物職人

木の棚を入れて積載性をアップ。テント、コット、寝袋など、この日は1泊分のキャンプ道具がぎっしり。

1,475mm / 1,570mm / 3,740mm
987cc
¥900,000
69,000km
12km/L
AT

1,715mm / 1,475mm / 3,395mm
658cc
¥800,000
64,000km
15km/L
MT

#33

SUZUKI JIMNY TURBO 2005

スズキ ジムニー ターボ　2005年式

藤沢市に住む湘南ボーイ・廣瀬くんは海沿いのパークに滑りに行くときも、夜の海にギターの練習をしに行くときも、いつだって車移動。そんな彼が乗るのは、最近かなりの人気で新車は手に入りにくいと噂のジムニー。廣瀬くんのJB23型は、1998年から20年間も生産され続けたロングセラーモデル。コンパクトで可愛い見た目だが、足元には強靱な四輪駆動システムを備えた軽自動車最高峰のオフロード車だ。「キャンプに行くときとか、路面が悪くてもガシガシ走れるからいいんだよね」。最近はひとり旅にハマっているらしく全国各地を回っているようで、その際は宿を借りず車中泊が基本。「移動の足としても便利だけど、寝床としても優秀です（笑）。宿代も浮くし一石二鳥！」

シートを倒して読書したり。車内は自宅の部屋より落ち着くんだとか。

OWNER

廣瀬颯翔 ／24
● イラストレーター

CITY BOYS CAR CLUB

photo: Naoto Date (#31), Kunihiro Fukumori (#32, 34), Kazuharu Igarashi (#33), Jun Nakagawa (#35)
text: Nozomi Hasegawa (#31), POPEYE (#32, 34), Hikaru Abe (#33), Ku Ishikawa (#35)

Refueling Column　コインや枠が埋まってて駐車難民になるのは本当にサイアク。駐車できる個人宅や空きスペースが見つかるアプリ「akippa」「特P」は予約できるから、ライブとか決まった予定に使える。しかも比較的お安め。

〈ニーモ〉のテントに〈コールマン〉の寝袋、〈エディーバウアー〉のランタン……、1年かけて集めたキャンプ道具でぎっしり。

658cc
¥1,280,000
230,000km
12km/L
AT

OWNER

町田ヒロチカ ／30
● イラストレーター

「小さいながらも荷物もたくさん積み込めて、個展の搬入はもちろん、そのままキャンプにも行けちゃう。後部座席はフラットシートなので車中泊もできちゃうんです」。アウトドア好きなイラストレーターの町田ヒロチカさんの願望を叶えたこの車両は、スバル サンバーディアス クラシック。長崎の「ハウステンボス」の園内用車として、産声を上げたワゴン車だ。ただ、そのままだとキュートすぎる。自然の中でも、キャンプ場でも、しっかり馴染む一台になるよう、フロントにはスペアタイヤを嵌め、足回りをリフトアップしたアウトドア仕様にカスタム。「荷室にはキャンプ道具を常備しているので、いつでも出かけられます。といっても、まだ初心者なんですがね（笑）」

#36
SUBARU SAMBAR DIAS CLASSIC 1997
スバル サンバーディアス クラシック　1997年式

発売当時のキャッチコピーは、「懐かしいのに、新しい」。30年以上たった今もなお、その言葉がまったく色褪せないエポックメイキングなモデル。後ろ姿もいいね。

ワゴンのロマン。

ワゴン車ってジャンルは、男子のハートを武者震いさせる。なぜって丸みを帯びたワンボックス型は、昭和レジャー文化の代名詞。家族や仲間とわいわいやりながら、キャンプに海水浴に向かうときの楽しげなムードというか、ささやかなロマンに満ちている。真っ只中に生まれたトヨタのマスターエースサーフとか、先輩たちのDNAを受け継ぎ、キュートにデフォルメしたスバル サンバーディアス クラシックとか。本格オフローダーほどマッチョでもなく、それでいて、ちゃんと4WDで、積載量も十分。俗にキャブオーバースタイル（エンジン上にキャビンを積んだもの）と呼ばれる、'80〜'90年代のレトロワゴンは、趣味を載せて海や山へ走るのにちょうどいい車かも。

#37
TOYOTA MASTERACE SURF 1982
トヨタ マスターエースサーフ　1982年式

"ツインムーンルーフ"と呼ばれるルーフトップは開閉式。野山の風や月明かりを浴びながら、ドライブできるのはもちろん、こうやって顔も出せる（笑）。

セカンドシートを回転した状態の車内。天井にぶら下がるエクアドル製の紐は、サーフィン後の洗濯物を引っ掛ける用。高橋さんの自作だ。

1,955mm
1,670mm
4,445mm

1,812cc
¥1,000,000
112,000km
10.6km/L
AT

OWNER

高橋政道さん ／37
● ウェブデザイナー

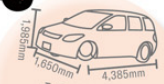
ワゴン車といったら、このフォルム。1982年式のトヨタ マスターエースサーフ。トヨタの商用車、タウンエースの姉妹車として、レジャーブーム真っ只中の'80年代初頭に誕生。「だから、車内の作りは至れり尽くせりで、コンソールはクーラーボックスが常設。セカンドシートは回転式で、新幹線みたいにサードシートと向き合うようになっているんです。窓はカーテンレール付き！」。そんな昭和のファミリーのロマンが詰まったワゴン車はウェブデザイナーの高橋政道さんにとって、サーフィンの伴侶。「ブロロッとアメ車ばりにいい排気音を響かせ、海沿いをクルージングするのは最高です。故障も多いのが玉に瑕ですが、つぎはぎしながら添い遂げますよ！」

DATA
排気量
購入価格
走行距離
燃費
ミッション

THIS IS MY CAR.

#38

TOYOTA DELIBOY *1989*



1,486cc
¥1,000,000
140,000km
8.72km/L
MT

トヨタ デリボーイ 1989年式

郵便車？ と見紛う鮮烈な赤い塗装が施されているのは、1989年から1995年の7年のみ販売されていたトヨタ デリボーイ。ヤマト運輸の配送車をベースに改良し、運転席と荷室の間をスムーズに行き来でき、荷室では立ったまま作業ができるようにした、日本初の大衆向けウォークスルーバンだ。その特徴からサーファーやキャンパーにも愛され、ハンバーガー店を営みながらBMXライダーとして活動する橋谷さんは、自転車を10台以上積んで地方の大会にせっせと出かける。「先輩に譲ってもらったとき、すでに車体は赤く塗られ、荷室は板張りに。完成されていたので、ハンドルを替えたりステッカーを貼ったり自分なりの小さなアレンジを楽しんでいます」

OWNER

橋谷大夢 ／39
●『Bashi Burger Chance』オーナー

左／スケートボードの廃材を使ったハンドルは友人につくってもらった。右／内装は全面板張り。合わせて木製パレットを敷き収納性を上げている。

photo: Kazuharu Igarashi (#36, #37), Jun Nakagawa (#38, #39)
text: Koji Toyoda (#36, #37), Ku Ishikawa (#38, #39)

#39

NISSAN NV200 VANETTE *2011*

1,600cc
¥500,000
130,000km
10km/L
AT

日産 NV200 バネット 2011年式

目の前には、標高1500m超えの丹沢山。ハードな登山の相棒に、商用車を使うのがブルワーの大庭さんだ。「ハイエースだと狭い道は運転しづらいし、軽バンだと車中泊ができない。その中間くらいのサイズ感で探していたんです」と選んだのは、ダットサンシリーズに端を発し、戦後の日本を商用車で支えた日産のDNAを受け継ぐNV200バネット。「山に向かう前日は車中泊をすることが多いので、荷室で快適に過ごせそうなのが決め手でした。タイヤハウスの張り出しが小さく、床はリアシートを倒しても段差ができないからエアマットが敷きやすい。キャリアは付けていますが、最大積載量600kgの荷室は余りあるほど。だから一度も使ったことがありません（笑）」

OWNER

大庭 陸 ／30
●「Passific Brewing」オーナー

左／エアマットを敷けば、部屋のベッドでくつろいでいるような快適さに。右／鉄板剥き出しの内装で磁石がくっつくのが意外と便利だそう。

商用車を自家用車に。

運転席の後ろの広大な空間には可能性しかない！ そう、モノを運ぶという目的のためだけにつくられた商用車は、使い方一つで自分だけの一台となる。基本は2人乗り。後部座席があってもクッション性やリクライニングは貧弱だけど、その分、スペースの自由度は高まり、荷物の出し入れも楽々。BMXを山のように積み込みその積載量を最大限に生かすバーガーショップ店主の橋谷大夢さんのような人もいれば、ブルワーの大庭陸さんのようにエアマットを敷き、自分の部屋のように車中泊での寝心地を追求する人もいる。あと、長距離移動が宿命だから運転もしやすいんだよね。言うなれば動くデカ箱。このまっさらなキャンバスを、君ならどう使う？

POPEYE CAR CLUB

Refueling Column　コインパーキングを探すのに便利なアプリは「PPPark!」。駐車したいなー、安いといいなー、っていうときに、近隣の空き状況と料金を地図と一緒に出してくれて、比較して選べるよ。

通称クラシック900と呼ばれる初期型を、親子でシェアする会社員の伊東さん。スウェーデンの航空機メーカーを母体とするSAABならではのグインと湾曲した窓や張り出したリア部分の独特なフォルム。それに映画と似た赤い車体が東京の街によく似合う。「『ドライブ・マイ・カー』に登場するのは最もグレードが高い900 turbo。GMグループの傘下になった後の最終モデルで内装は黒やグレーがメイン。僕のはもう少し低いグレードのGLEで、初期型だから内装とボディが同色なんです」。その魅力は万国共通で、『ジェイ・Zの『song cry』やモブ・ディープの『Shook Ones』のMVにも出てきたり。SAABは東海岸のヒップホップカルチャーとも繋がりのある北欧車なんですよ」

#40

SAAB 900 GLE *1979*

サーブ 900 GLE　1979年式

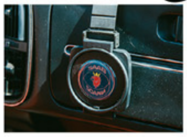
OWNER

伊東時生 ／28

● 会社員

1,440mm　1,690mm　4,690mm

1,980cc
¥1,200,000
44,000km
8km/L
AT



左／小洒落たドリンクホルダーも純正品。右／シートはボディと同色のワインレッド。座り心地はフワフワ。

映画の車、漫画の車。

空港に続く幹線道路を、瀬戸内海にかかる大きな橋を、あの赤い車が駆け抜ける姿が頭から離れない。映画『ドライブ・マイ・カー』を見てSAAB 900が欲しくなるように、物語はコスパや使い勝手なんて言葉を超えて車を特別なものにする。漫画も然りで、走り屋漫画の金字塔『頭文字（イニシャル）D』のページをめくれば、主人公拓海の愛車ハチロクや、そのハチロクと死闘を演じるミッドシップ車のトヨタMR2に心揺さぶられ、低い車高で峠を攻める自分を想像せずにはいられない。それに登場人物と常に苦楽を共にする愛車は、ときに車以上の存在に見えてきたり。そんな関係を築きたいと願うなら、愛を注ぐに足るアイコニックな車を選ぶのもいいかもね。

#41

TOYOTA MR2 *1985*

トヨタ MR2　1985年式

車好きのバイブル『頭文字D』にも登場したトヨタのMR2。漫画に出てきたのは2代目のSW20型だが、福山くんが乗るAW11型は'85年式の初代モデル。バブルの時代に国内初の量産型ミッドシップ車として発売され、そのスポーツカーのような見た目からお金持ちのオーナーが多かったようだ。もともとはハチロクが欲しかったという福山くんだが、近所の中古屋でたまたま見つけたMR2に惹かれ購入。フルノーマルの状態でゲットした車を、サーキットでも走れるようカスタムしたという。「以前まではカートに乗ってたんですけど、ハコ車の世界に憧れちゃって。なるべく車重を軽くするために内装を取っ払ったり、とにかく速く走れるように色々改造してます（笑）」

OWNER

1,250mm　1,655mm　3,925mm

1,587cc
¥1,200,000
100,000km
10km/L
MT

福山春輝 ／26

● 配達員

左／重いGにもしっかり耐えられるようバケットシートに。右／格納式のヘッドライトもカッコいい。

DATA
排気量
購入価格
走行距離
燃費
ミッション

SAAB 900 GLE
MR2
AVANTIME

photo: Yutaro Tagawa (#40), Jun Nakagawa (#41), Kunihiro Fukumori (#42), Naoto Date (#43)
text: Shintaro Kawabe (#40, #43), Hikaru Abe (#41), Hiroko Yabuki (#42)

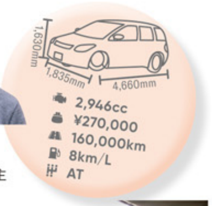
#42

RENAULT AVANTIME *2003*

ルノー アヴァンタイム　2003年式

京都・岩倉の履物職人・関塚真司さんの愛車は、のどかな里山の雰囲気をいい意味でぶち壊す前衛的な一台、アヴァンタイム。窓のBピラーを取り払った直線的なフォルムに、カクッと垂直に落ちる後部のライン。21世紀初頭の近未来感を体現したような3ドアクーペだ。「ジェンダーレスな感じに惹かれたのと、濃い紫色が京都っぽいなと。後部座席からの見晴らしが最高な上に、サイドとルーフの窓が同時に全開になる謎のボタンも搭載してて、実はエンタメ性も高いんです。虫はめっちゃ入ってきますけど（笑）」。生産は2001年からの2年間のみで、国内の流通は約200台というレア車だが、ヤフオクで27万円で落札したんだとか。

OWNER



関塚真司
●『履物関づか』店主

色名は「ノクターン」。ピラーがないからバックも楽ちんだ。

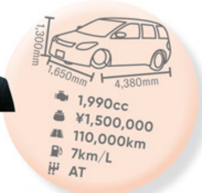
#43

ISUZU PIAZZA NERO *1989*

いすゞ ピアッツァ ネロ　1989年式

いすゞ117クーペ（P81）の後継として、1981年に発売されたスポーツカーがピアッツァ。滑らかなフォルムが主流だった'70年代までの国産車の中に、直線的なラインを多用したデザインでセンセーショナルに登場した。ヘアメイクの向井さんが乗るのはヤナセから販売された"ピアッツァ ネロ"。その特徴である4つのフロントライトや黒で統一された内外装はレーシーでモードな雰囲気だ。しかもドイツの部品メーカー「イルムシャー」がチューニングしたモデルゆえ、速度を出しても安定感抜群。「7年前、いすゞ専門店『イスズスポーツ』で一目惚れ。思えばNikonのカメラF3を衝動買いしたときもデザインはジウジアーロでした」

OWNER



向井大輔 ／42
●ヘアメイク

お尻にはリアウィング。デロリアンのようなハンドル周り。

デザイン重視。コンセプト重視。

来るべき車の未来とは？　各メーカーのそんな思いが形となるのが、モーターショーで発表されるコンセプトカー。必然的にデザインは前衛的になり、大半は販売されない儚い運命。しかし中にはショーモデルがほぼそのまま商品化された稀有な車も存在する。宇宙船を思わせるSF的フォルムのピアッツァもそのひとつ。名匠ジウジアーロが'79年に発表した「アッソ・ディ・フィオーリ」を基に、市販に漕ぎ着けたいすゞの勇敢さに感謝したい。ミニバンでクーペという新しすぎるコンセプトで'99年ジュネーブショーを沸かせたルノー アヴァンタイムもまた歴史的一台。売れることを宿命づけられた車にはない遊びに溢れたディテールは、今でも僕らの胸を躍らせる。

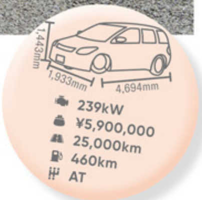
Refueling Column　京都の「アウトニーズ」ではクラシックシトロエンをレンタルできるよ（1日利用¥16,800〜）。宇宙船で雲の上をフワフワと進むような乗り味のDSや、フランスの国民車とも評される2CVで、古都をドライブ！

上／付属のエアコンプレッサー。中／ロックの開閉をはじめスマホでいろいろ操作可能。下／搭載されたモニターではゲームもできる。

若木さんが乗るモデル3は、1000万円クラスが中心のテスラの中でもっともリーズナブルなセダン型のシリーズ。モデル3の中にも機能別に3種類あって、若木さんの愛車はロングレンジというタイプだ。「とにかく加速の調子がよく、定期的に訪れている浜松にもストレスなく行けます」と若木さんも語るこちらは、航続距離がシリーズ随一。また、ちょっとしたメンテナンスは、簡単にDIYできるのもテスラの特徴だそう。「タイヤの空気圧が気になったときなんかも、付属のエアコンプレッサーでやりました。YouTubeでメンテナンス法を見ながら（笑）」。さすが新しさを追求するテスラ、"車のある暮らし"の風景自体も一変させようとしているらしい。

OWNER

若木信吾
● 写真家



EV って、実際どうですか？

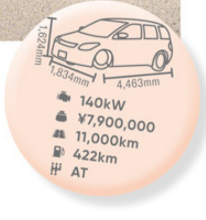
EVが気になる。環境に優しいし、未来的なデザインもイケているし、乗り心地もよさそうだ……けど、お高いんでしょ？　と思いきや、「ポルシェ並みの加速度であることを考慮すると、かなり安いですよ」と教えてくれたのは、テスラに乗る写真家の若木信吾さん。実際、エコカー減税や各種補助金により、定価の約80万円オフで買えたそう。加えて、月の燃料費はガソリンのほぼ半額。アートディレクターの神戸太郎さんが乗るメルセデス・ベンツのEVに関しては、購入後1年の燃料費がなんとタダ！　エンジンがないから車検費も桁違いに安い。「いろいろ考えると、今買うならEV以外の選択肢ってないのでは」と神戸さんは語るが、実際そうなのかもね。

上／充電時はこんな感じで読書。中／食事のときはハンドルにトレーをつけることも。下／ルームミラーにはインドの神様の飾り。

メルセデス・ベンツが2030年までに全車種をEVオンリーにすると宣言したのは2021年のこと。神戸さんが「まるっこい形に惹かれました」と語るEQA250は、2019年に発表されたEQCに続く、メルセデスの2台目のEVだ。エネルギー効率を向上させる「回生ブレーキ」の強度を5段階で手動設定できるなど、余計な電力消費を抑えて走行できる工夫が凝らされている。充電は週1程度の頻度で1時間ほど必要だというが、増えているとはいえスタンドの数は少ないし、正直面倒くさくないんですか？　「読書をして楽しんでいます。家にいると他にしなきゃいけないことを思い出したりするので読書時間ってあんまりないんですよ。だから、逆によかったなと」

OWNER

神戸太郎
● アートディレクター

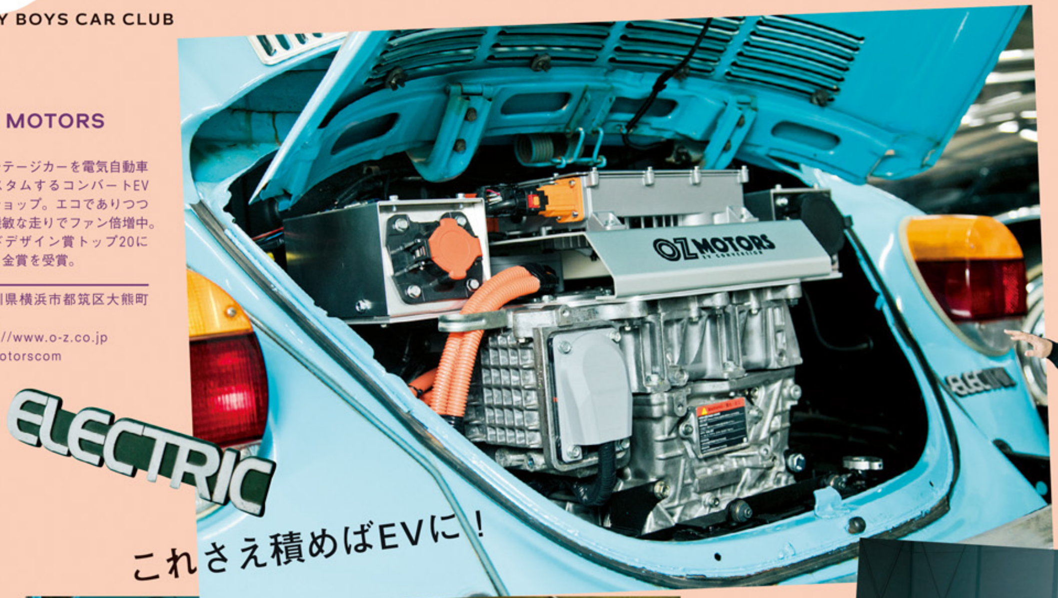


DATA
最高出力
購入価格
走行距離
航続距離
ミッション

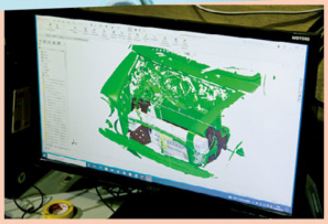
OZ MOTORS

ヴィンテージカーを電気自動車にカスタムするコンバートEV専門ショップ。エコでありつつも、機敏な走りでファン倍増中。グッドデザイン賞トップ20にあたる金賞を受賞。

神奈川県横浜市都筑区大熊町224-5
https://www.o-z.co.jp
@ozmotorscom



フォルクスワーゲン"ビートル"のエンジンルームには、オズモーターズが開発したコンバートEVのキットを搭載。オズモーターズではEV化したビートルに親しみを込めて"e-BUG（イーバグ）"と命名。気さくな代表の古川治さんは日本のコンバートEV界の第一人者。クラシックMINIのキットも発売予定。価格は200万円前後の予定。



e-BUGのフロントにはガソリンタンクに置き換わったリチウムイオンバッテリーを搭載。40kWhを搭載したこのキットモデルの航続距離はおよそ200km。オズモーターズでは、高性能な3Dスキャンと3Dプリンターを駆使して、コンバートEVの設計が行われる新たな自動車開発の現場。

CAR COLUMN #03

コンバートEVという選択も！

クルマが欲しいけど、どうもやっぱり古いのに惹かれてしまう。今回、シティボーイのクルマを見ていたら、これはもはや確信といってもいいかも。とはいえ、故障が心配だし、この先、ガソリン車が乗れなくなるかもだし、どうすべきか!? そうお悩みの方にオススメしたいのが「コンバートEV」という究極のカスタムです。簡単にいうとガソリン車を電気自動車にコンバートするわけですが、世界中で、このコンバートEVが広がりつつあります。日本では横浜の「オズモーターズ」がシーンを牽引するカーファクトリー。数々の名車をEVにしてきた実績を持つオズモーターズですが、これまで一点モノのオーダーメイドが中心だったため、費用が高額だった。そこで、比較的簡単にEV化できる車種別の専用キットを開発。リリース予定なのは、不動の人気を誇るフォルクスワーゲン・ビートルとクラシックMINIのコンバートEVキット。キットといっても公道を走る上で、車検を取得することが大前提なので、DIYでは難しく、ノウハウを持つオズモーターズが先頭に立って、自動車整備のプロに育成プログラムの実施も検討中だとか。そんなオズモーターズは、'21年、グッドデザイン賞のトップ20に贈られる金賞を受賞するなど、未来のモビリティソリューションに期待されている存在。

一般的な最新のEVは、元どおりに修理できても、スマホみたいに最新モデルに乗り換えるしかない。一方、コンバートEVは、一度、ベースができてしまえば、アップデートすることができるため、日進月歩なテクノロジーと共に、マイカーを進化させることができる。これこそ本当にサステナブルだし、今後、EVの普及が進めば価格はさらに落ち着きそう。そうとなれば、今のうちに一生モノのクルマを見つけて、まずはガソリン車のままで堪能しつつも、来るべきタイミングでEVにコンバートするのがベストじゃないかと!?

photo: Kazufumi Shimoyashiki (#44, #45), Kazuharu Igarashi (#46, OZ MOTORS)
text: Keisuke Kagiwada (#44, #45), Shogo Jimbo (#46, OZ MOTORS)

#46

BMW E21 *1980*

ビーエムダブリュー E21 1980年式

キットとは違ってオーダーメイドなカスタムだとガソリンの給油口を充電ポートにするようなことも可能に！ トランクの奥には大容量のリチウムイオンバッテリーを搭載。

OWNER

神保匠吾
● DRIVETHRU ディレクター

学生時代にバイト先の中古車屋さんで見つけたBMW初代3シリーズ「E21」。7万円で譲ってもらったのはいいけど、いつも故障ばかりしていたので、いつかレストアしようと思って、10年以上、保管していたら、オズモーターズの古川さんと出会ってコンバートEVにすることに。EVになってからというもの、クラシックな見た目とは裏腹に、コーナーを駆け抜ける感覚がシームレスになって、毎日の移動が感動の連続です。ボクらのオンラインモーターマガジン『DRIVETHRU（ドライブスルー）』では、一大プロジェクトとして紹介しているので、詳しくはサイト（https://drivethru.jp）やインスタグラム（@drivethru.jp）をのぞいてみてほしい！

森ビルが発行しているクレジットカード「ヒルズカード」を作ると、六本木ヒルズなら2時間、表参道ヒルズや虎ノ門ヒルズなら1時間、駐車料金が無料。入会金・年会費無料だから、持っておくと役立つかも？

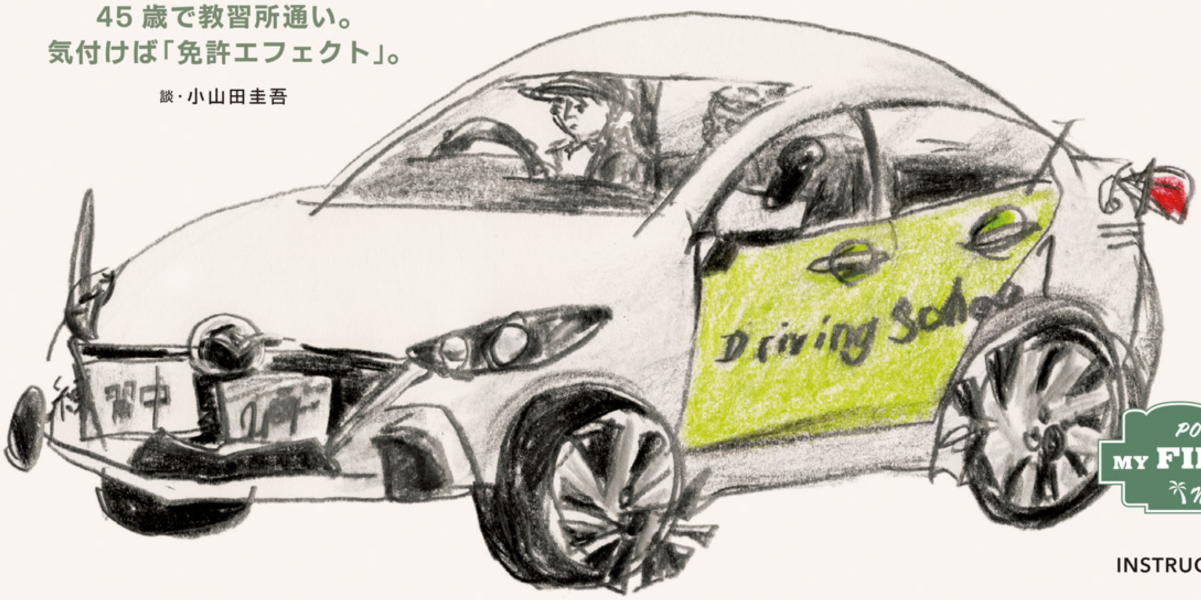
はじめての車。

免許を手にした感激、自分の車が届いた喜び。

photo: Naoto Date（P94） illustration: Anri Yamada
text: Izumi Karashima（P94） edit: Koji Toyoda（P95）

45 歳で教習所通い。気付けば「免許エフェクト」。

談・小山田圭吾



POPEYE MY FIRST CAR No.1

INSTRUCTION CAR

僕が免許を取ったのは8年半前。45、46歳のとき。母が、腰が悪くなったと言って急に歩けなくなって。杖をつかないとダメだって。母は車を持ってて運転するんです。亡くなった父も車が好きだった。家族で僕だけ免許持ってなくて。これはヤバいなと。

ちょうどハタチのとき、免許を取りたいと思ってたんです。そのうち、友達が先に免許取って。初ドライブにつきあって。僕が助手席、もう1人の友達が後部座席。カーラジオからはチェッカーズが流れてた。そしたら突然、後ろからトラックに追突されて。僕は一瞬気を失って、ハッと気付いたらラジオで藤井フミヤがなんかしゃべってて。あのときのフミヤの声は異常によく覚えてる。「ああ、フミヤが……あれ、なんかオレ……脚短くなってるけど?」って(笑)。みんなケガを負ったけど、命は無事。ただ、僕のケガがいちばんひどくて、腰を粉砕骨折して4か月入院することになっちゃった。ちょうどフリッパーズ・ギターでデビューする頃。デビューアルバムが出たとき、僕はベッドに固定されてました。

それからは忙しくなって免許を取る時間もなくなって。運転したいなあと思うことはあったけど、車がなくても不自由しないし、いまさら取りに行くのもなあって。どんどんそういうことに耐えられなくなっていくんです、年を取ると。でも、母がそういう状態になっちゃったら、僕が運転できないと大変なことになる。で、教習所に通うことにして。そしたら、母は元気になっちゃった（笑）。いまは普通に歩けるし車も運転してるんです。

教習所に初めて行ったときは、正直、できる気がしなかった。「学校」という名の場所に行って、「授業」というものを受けるのは高校卒業以来。果たして僕はこれに耐えられるのかなって（笑）。運転するのは楽しいし、一つ一つクリアしてハンコを集めるスタンプラリーみたいなシステムは好きだったけど。

結局半年間、期限ギリギリまで通いました。最後の試験は鮫洲で受けて。試験って10点分しか間違えられないでしょ。引っかけ問題もバリエーションがあるから、知らないパターンでこられるとうろたえる。ネットに過去問があるから、とにかくそれを全部やって。僕は大学に行ってないし、エスカレーター式のぬるーい学校に通ってたから、試験自体に免疫がなくて。ああいうシビアな試験、人生で初めてだったかも。合格したときは嬉しかった。ガッツポーズした、心の中で（笑）。

初めて買った車は小さなイタリア車。ネットで見つけた中古車です。でも、車が到着するまでしばらくあって、それまではボロい軽自動車の代車に乗ってて。だから、免許取って初めて運転した車はそれ。用賀のスターバックス・コーヒーに行きました。免許を取ったその日の夜、息子を乗せて。あそこは駐車場があってドライブスルーもあるから。でも、駐車場に一台も車がないのに全然止められない。教習所みたいにポールが立ってないから、枠内に入れることができなくて。何度も切り返して。息子に超ディスられた（笑）。

いまはどこへ行くにも車。ただ、運転は好きだけど、車に凝ったりはしないかな。小さい車が好きだから、メッサーシュミットとか、旧車への憧れはあるけれど。車好きだった親父はしょっちゅう買い替えてた。サイドカー付きのバイクも持ってて。子供の頃、車よりサイドカーに乗るほうが好きだったなあ。「キカイダー」みたいでカッコよかったから。

車に乗るようになって音楽にも変化は出たと思う。アルバム『Mellow Waves』でも、無意識のうちに「信号」「交差点」「運転」という言葉が詞に入り込んでるし、車窓を流れる夜景をイメージした曲もある。前は家からスタジオまでバスと徒歩で通ってたから、ヘッドホンで音を確認しながら歩いて作る感覚だった。『Mellow Waves』は車の中で音をチェックしてたから、車で聴くとどう聴こえるかという視点が入ってきて。だから効果は地味にあるかも。「免許エフェクト」が（笑）。

え？ 僕の車、すり傷多いですか？ ていうか、ミラーとかバンパーって、こすってもいいものだと思ってるから、僕は（笑）。

おやまだ・けいご｜ミュージシャン。1969年、東京都生まれ。1993年にコーネリアスとして活動をスタート。2023年6月28日にアルバム『夢中夢-Dream in Dream-』をリリース予定。「免許効果」は聴いて確認を！

POPEYE MY FIRST CAR No.2

'60s AMERICAN CAR

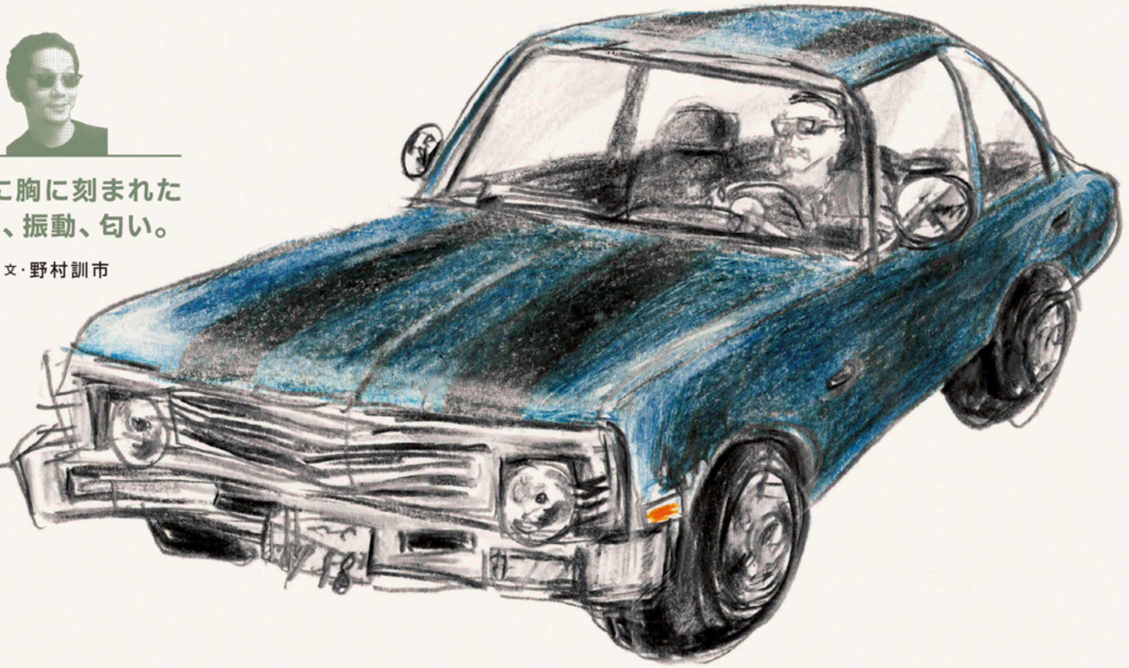
永遠に胸に刻まれた咆哮、振動、匂い。

文・野村訓市

読者がどれだけ若いのか俺にはわからないが、チェリーボーイの子も、チェリーボーイを卒業してすぐの子、覚えてますよビビッドな思い出と共にというキッズたちがきっとたくさんいることだろう。それと車と何の関係があるのか？　そう感じるものもきっと多いと思う。大有り。関係大有りなんですよ。これから話すのは自分が手に入れる最初の車についてだ。都会派を気取るものの中には、車なんていらない、金だけかかるし、どこにでも電車で行けるし、何なら免許もいらないというものもいるだろう。確かに。俺は40超えの、車でいうならば旧車だ。格好が若いじゃん？　と言われることもあるが、それは車で言えば塗装し直してそれなりに新しく見えるが、エンジンはボロボロという旧車なのだ。その旧車である俺が、免許すら勿体ないというキッズたちの気持ちがわかると大見得を切るのは、俺も若い頃同じように思い、かつ実行してきたからだ。これは当時としてはとてもプログレッシブな考え方で、誰一人ついてこれないほどだった。なぜなら20年前は、18歳になると同時に免許を取るのが当たり前で、それと同時に彼女を車で連れ出し、迎えに行き、何ならそれ用にミックステープを作るのが普通のことだったのだ。女の子のために気合の入った恥ずかしい選曲、ムード満点これどこで聴くの？　夜景の綺麗な場所で車を止め、シートの背もたれをマックスに倒す気ね、あなた！　というテープは友達の車には必ずあったものだった。当時のシティボーイが、女性誌に人気の大学生などとおだてられ登場する時は、必ず愛車はなに？　という欄があり、下手すれば愛車と共に登場するやつも多かった。親のベンツやBMW、買ってもらったユーノスロードスター。車なしは論外のこと、いい車に乗っているだけで、ぐっと諸々の確率が上がるというそんな時代だった。そんな男にとって息苦しい時代に、俺は免許なし、車なし、何なら家なしという3拍子揃った好男子だったのだ。免許あったら迎えに行かなきゃいけないし、何なら車付きの女の子に迎えに来て欲しいタイプで、車に乗れば眠くなるし、酒を飲みたいから運転は嫌だ。そう思っていたのだ。そして、それを俺は30代の半ばまで実行した。子供が生まれ、免許を持てという圧力にさらされるまでは……。取りますよ、取ればいいんでしょ、あぁかったるい。実は教習所に3回申し込んだことはあるのだが、時間通りに動くのが苦手なたち、一回通っただけで期限切れとか、一回も行かずに期限切れという無残な結果に終わっていたのだ。

友達が毎日家まで迎えに来てくれて、強制的に通うというヘルプを経て無事に免許を取得した。海外では運転していたけれど、日本で運転することの意味を理解していなかった俺にとってそれは小さなビッグバン、革命とも呼べるものだった。近ければ歩けばいい、中距離なら自転車、急ぎならタクシー。確かにそれで完全にことは足りる。けれど好きな音楽を聴きながらゆっくり目的地に向かう時とか、仕事で疲れた頭を夜、車を流しながら冷やすことがこれほど素敵なことだとは思わなかったのだ。夜中突然に遠出する、若い時なら突然名古屋に煮込みうどん食うためだけに車で向かうとかしたものですが、歳を重ねた分別ある大人としてそんな行動はまず取らない。けれども、もし、もしもそうしたかったらいつでもできる！　そういう心の余裕を車はもたらしてくれるのだ。

で、免許を取るとマイカーが欲しくなる。俺だけの、自由に使える車。最高じゃないか。何を手に入れる？　人生最初の車、これから何台も乗り換えるだろうカーライフの記念すべき1台目。ここでこの話の最初に戻るのだ。記念すべき最初の相手が誰でもいいんですか？好きな人、素敵な女性、できれば最高級に行きたくはないですか？　最初の思い出が美しければ、きっとそれは一生ものとなり、その後の女性観にも大いに影響を与えるのではないですか？　車も一緒、とりあえず動けばいいとか、安ければいいとか、デザインは全く好きじゃないけど取り急ぎとか、それでいいのかジャパン？　最初こそ理想を追求するべきなのだ。たとえ燃費が悪くても、運転しづらくても、すぐに故障するとしてもだ、気に入っていればそれでいいのだ。なぜ俺がそれをここでいうか？　それは、俺もそうしたからだ。最初の車は好きなアメ車、燃費はリッター2キロ、古い、壊れる、乗りにくい、3拍子も4拍子も揃ったジャジャ馬。確かに、心が折れそうになることもあった。乗り始めて1か月で売り飛ばそうとしたこともあった。でも、できなかった。それは俺がそいつを愛していたからだ。調子がいい時、そいつはこの世で最高の相棒であり、それまでの苦労を一瞬で忘れさせてくれる極上の彼女となるのだ。アクセルを踏み込むたびに聞こえるシボレーV8エンジンの咆哮と心地良い振動。運転席にかすかに漂うエンジンオイルの甘い匂い。窓から流れ込む風。代々木公園を突き抜ける道を夜、初めて走った日のことを俺は一生忘れないだろう。最初の車とはお別れしたけど、そいつとあの瞬間は俺の中で永遠のものとなった。そして車の好みを完全に俺の頭に刻み込んだのだ。免許取れ、車をゲットしろ、それがたとえ無理目のものでも。一生は一度、最初の車も一台だけ。そういうことなんだよ、キッズたち。

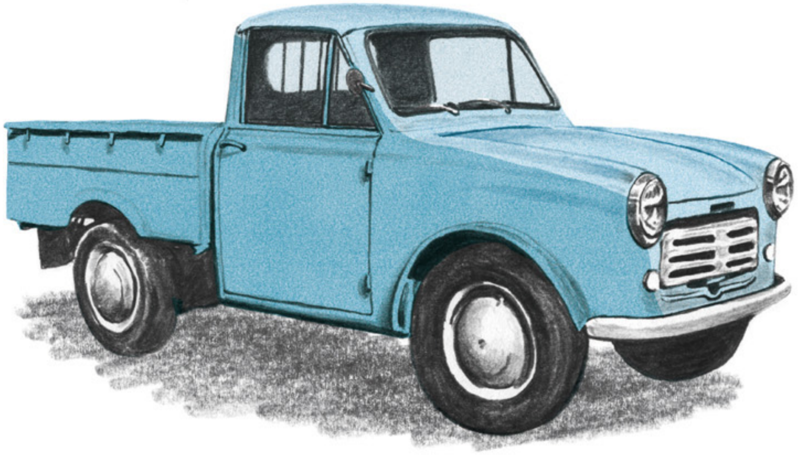


のむら・くんいち｜編集者。1972年、東京都生まれ。「トリップスター」代表。「大田区にある『ポークチョップ』という店は、アメリカのザ・カーライフショップって感じで、すごくいい」

MODEL
UAZ 3909 1958
ワズ 3909 '58 年式

ロシアのメーカー、ワズの3909は共産主義的な薫りがするけど、よ〜く見ると「機関車トーマス」の一員でもおかしくないくらい可愛い。その半面、外装は鉄板っぽいし、エアコンも付かない。かなり素っ気ない感じ。でも僕はそこに、誰の意見にも耳を貸さない“ツンデレ”な女の子の姿を見る。ネットで画像を見るたびに僕がいたわってあげなくちゃ、という気持ちになるんですが、僕は完全なるペーパードライバー。この恋は……、確実に実らない。

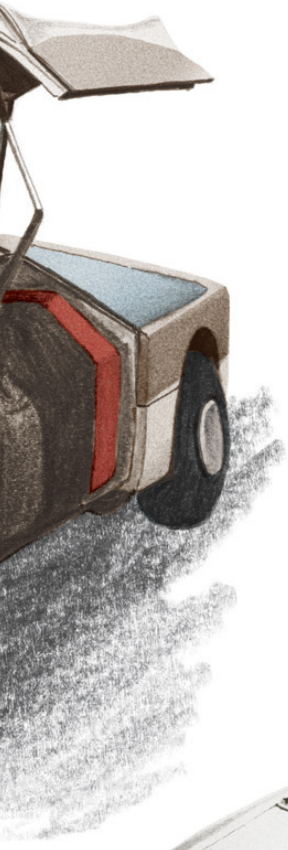
SELECTOR
我妻 亮
『ソフツ』店主



MODEL
NISSAN DATSUN 1957
ニッサン ダットサントラック '57 年式

黒磯に帰ると、ある自動車整備工場の前を通るようにしている。その駐車場には、ずっと気になっている車があるからだ。かなり古めかしいダットサントラック。その昔、地元の消防団で使われていた車体だが、今は日に焼けたブルーグレーに塗り替えらえれ、街のために活躍した輝かしい過去は封印されてしまった。現在は朝の始業と同時に外に出され、終業とともに中に戻されるのみ。寂しげな顔を見ると、いつか僕が引き取ってあげたいなって思います。

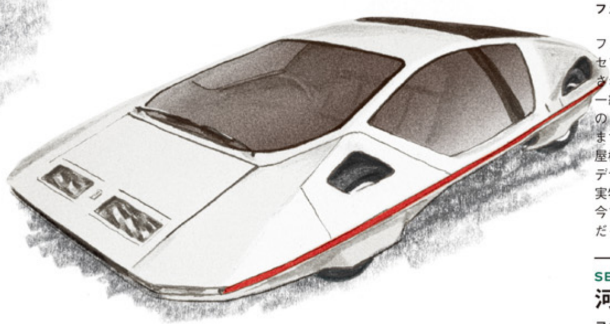
SELECTOR
吉田昌太郎
『アンティークス タミゼ』店主



MODEL
FERRARI MODULO 1970
フェラーリ モデューロ '70 年式

フェラーリが1970年の大阪万博に出品したコンセプトカーです。以前、フランスの美術館で開催されたグループ展に呼ばれたんですが、そのとき一緒に参加した漫画家の逆柱いみりさんがこの車のミニカーを見せてくれて、それで知りました。まず、このフォルムにヤラれましたね。しかも、屋根がスライドしてそこから出入りするっていうデザインなんですよ。で、帰国してからネットで実物の写真を見たら、ミニカー以上に格好よくて。今では一番好きな車です。それまではデロリアンだったんですが、完全に超えましたね。

SELECTOR
河村康輔
コラージュアーティスト



心ゆさぶる あの一台の話。

たとえ持っていなくても、
それでも語りたい車がある。

MODEL
AMC PACER 1975
AMC ペーサー '75 年式

気になったきっかけは映画『ウェインズ・ワールド』の一場面。助手席のドアが運転席よりデカいし、リアとハッチの窓は大きな曲げガラスで存在感がすごい。“世界一ダサい車”っていわれたこともあり、ボロい旧車を直して転売するイギリス発のリアリティショー『名車再生！クラシックカー・ディーラーズ』に出たときは、ダサすぎて珍しく買い手がつかず、修理職人が自腹買取してた（笑）。でもダサいと言われるものが、好きな人って必ずいるでしょ？

SELECTOR
ジェリー鵜飼
アートディレクター

illustration: Shinji Abe
text: Koji Toyoda, Yuichi Samejima, Yu Kokubu, Keisuke Kagiwada

MODEL

CITROEN SM 1970

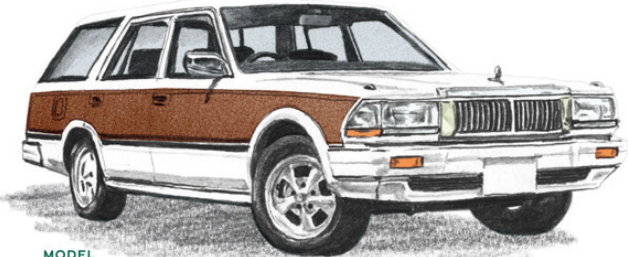
シトロエン SM '70 年式

浮遊感のある近未来的なフォルムにガラスの風防で覆われたエレガントなフロント。やや過剰ともいえるリアデザインは、まるでラッパーのMF DOOMがかぶる古代ローマ人の鉄仮面さながら。DSをはじめとしたシトロエンの過去モデルから継承する優美さと、西部警察に出てきてもおかしくない無茶なディテールが共存する、その洗練と野蛮の綱引き具合が自分にとってSMの魅力の肝であり、いつまでも斬新であり続けています。

SELECTOR

小林和人

『Roundabout』『OUTBOUND』店主



MODEL

NISSAN CEDRIC(WOOD PATTERN)

ニッサン セドリック ウッドパターン

私の小学校の敷地内には『クイズ ヒントでピント』でも紹介された珍しい竪穴式住居があり、その横にはいつも宮本先生の木目調のセドリックが停まっていた。男子はデロリアンのような未来系に憧れていたからダサいと言っていたけど、私はおじいちゃんっぽいその車が大好きでした。外国の俳優のように高身長で目鼻立ちがはっきりとした宮本先生はポロシャツをさらっと着こなすハンサムな男。恋心とは違うけど、先生ってだけじゃない、もう一歩先の"大人の男"だったなぁ。

SELECTOR

しまおまほ

漫画家、エッセイスト

MODEL

ASTON MARTIN BULLDOG 1979

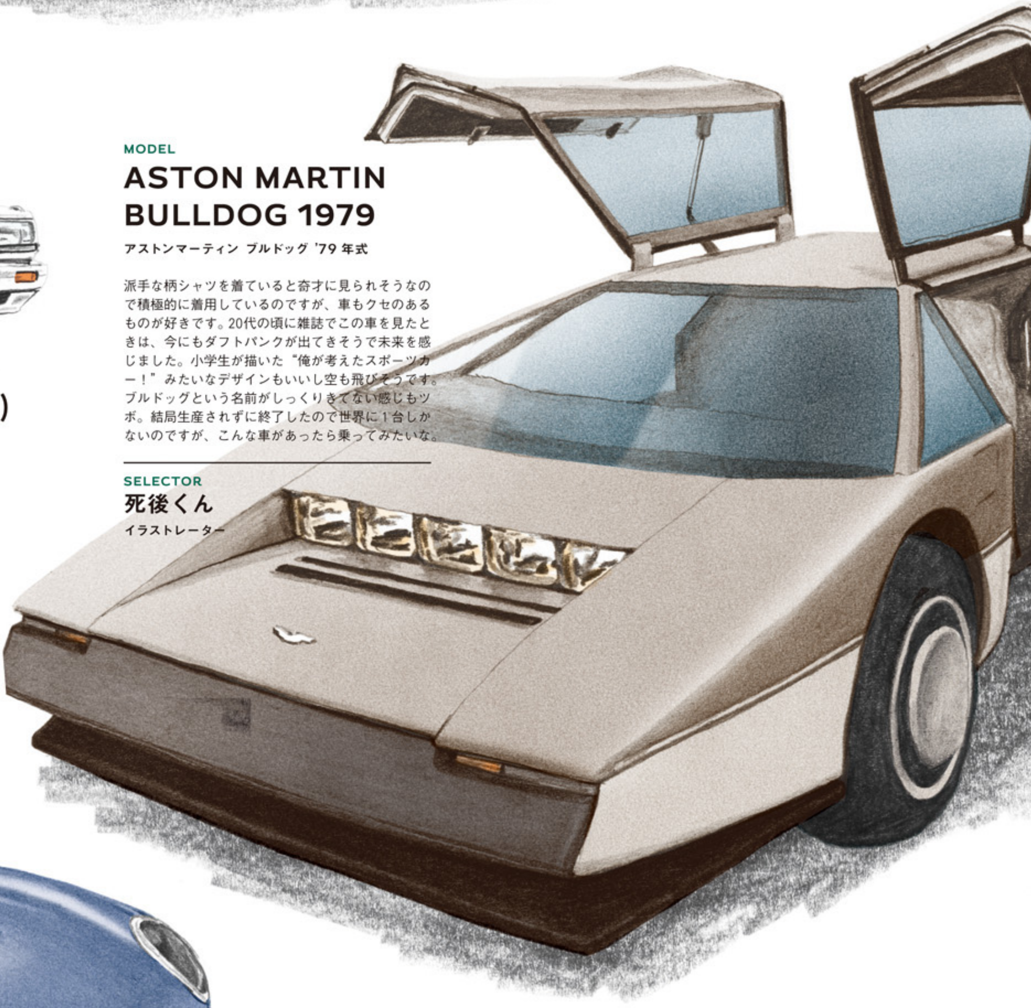
アストンマーティン ブルドッグ '79 年式

派手な柄シャツを着ていると奇才に見られそうなので積極的に着用しているのですが、車もクセのあるものが好きです。20代の頃に雑誌でこの車を見たときは、今にもダフトパンクが出てきそうで未来を感じました。小学生が描いた"俺が考えたスポーツカー！"みたいなデザインもいいし空も飛びそうです。ブルドッグという名前がしっくりきてない感じもツボ。結局生産されずに終了したので世界に1台しかないのですが、こんな車があったら乗ってみたいな。

SELECTOR

死後くん

イラストレーター



MODEL

JAGUAR E-TYPE 1961

ジャガー Eタイプ '61 年式

いつかはジャグワーのEタイプと決めています。ロングノーズのクセの強いボディは、オードリー・ヘプバーン主演の映画『おしゃれ泥棒』で知りました。ジャスティン・ティンバーレイク主演の映画『TIME／タイム』での活躍にも興奮しましたね。なぜ好きかと考えてみたら、レーシングカー譲りの機能性と美しさが、私の愛する〈アンソニー・クレバリー〉のビスポークシューズにそっくりなんです。どっちも"足"ですからね。

SELECTOR

尹 勝浩

ファッションディレクター

MODEL

JAPANESE PICKUP TRUCK

軽トラック

イタリアの街並みに合うのがフェラーリだとしたら、日本の風土に合うのは軽トラックですよね。純正も格好いいけど、幌の部分にグラフィティライターに"ボム"られた普通のおじさんが乗る軽トラを見かけるとそのまま欲しくなってしまいますね（笑）。田舎のイメージがある車種ですが、ある意味"成功の証し"であるゲレンデヴァーゲンよりは田舎者感がないような気もするし、いつも大荷物な僕にとっては一番理にかなった車です。

SELECTOR

加賀美 健

現代美術家

18+

WHAT IS

AVAXHOME?

AVAXHOME -

the biggest Internet portal, providing you various content: brand new books, trending movies, fresh magazines, hot games, recent software, latest music releases.

Unlimited satisfaction one low price
Cheap constant access to piping hot media
Protect your downloadings from Big brother
Safer, than torrent-trackers

18 years of seamless operation and our users' satisfaction

All languages
Brand new content
One site

AVXLIVE.ICU

AvaxHome - Your End Place

We have everything for all of your needs. Just open https://avxlive.icu

先輩はいかに車と付き合うのか。

THE CAR OF ADMIRED

あの先輩たちが選び、乗る車だから、海より深いワケがあるに違いない。長く大事に乗るのも、自分好みに手を加えるのも、偏る愛の証しである。

愛車のジープに手をかけ、寄り添う柳宗理さん。傍らにはフォルクスワーゲンのタイプ1。写真は'90年代後半のものだが、このとき、ジープは50年、タイプ1も2代目だけど併せて同じく50年使っていたのだそうだ。というか、車ってこんなに長く乗れるものなんだっけ？〝長く大事に使う〟柳宗理さんは塗装が剥げたり、床が錆びて抜けても、メンテナンスしながら乗り続けてきた。結果、この素敵な写真。そもそも、ジープというのも意外な感じがしたのだが、88歳で刊行した著作選集『柳宗理エッセイ』を読んでみるとわかる。理由はこう。

戦時中に兵隊としてフィリピンのジャングルにいたときに、日本の軍用車が川や窪みにはまり動けないのに対し、米軍のジープはどんな悪路も疾駆していて、これは敵わないと思ったそうだ。戦後、米軍のジープが日本の自衛隊にも譲渡され、そのうちに国内で生産されるようになり、柳さんはその頃に手に入れた。元来、軍事用だから実用本位でとても丈夫。デザインという意識的装飾においても、ジープは車としての純粋さを宿し、それはいわゆるアノニマスデザインの最たるものであり、民藝精神を最もはらんだものと語ったわけだ。ドイツの国民車として誕生したタイプ1もそういう選び方なのだろう。となると、その存在がデザインへの興

ボンドカーでも知られるアストンマーティンのDBシリーズ。チャールズ国王の乗るロイヤルブルーのこちらはドロップヘッド・クーペの「DB6 ヴォランテ」。

©The LIFE Images/Getty Images

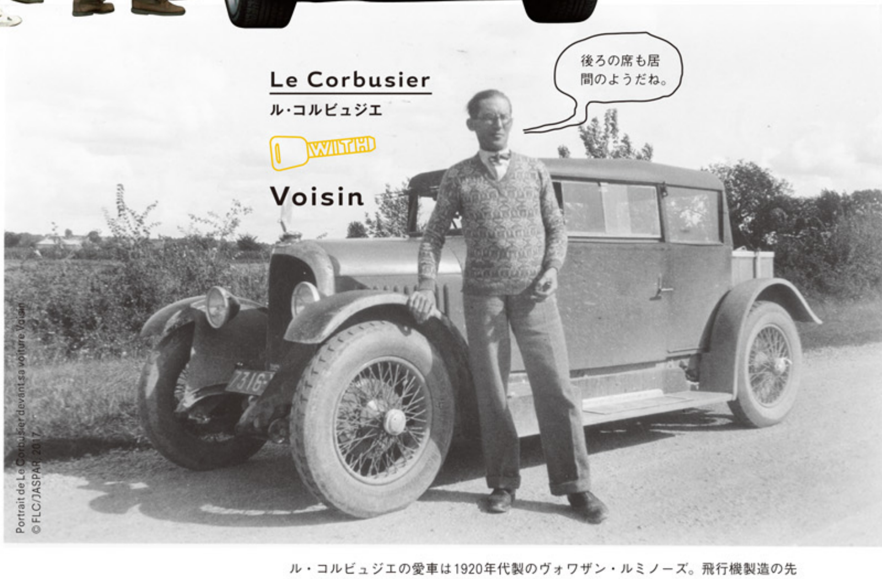
King Charles
チャールズ国王
WITH
Aston Martin

Michael Jordan
マイケル・ジョーダン
WITH
Ferrari

マイケル・ジョーダンは大のフェラーリ好き。愛車フェラーリからインスピレーションを得たエア・ジョーダンのバスケシューズを作ったりしたこともあるくらい。

©Sports Illustrated/Getty Images

Le Corbusier
ル・コルビュジエ
WITH
Voisin



Portrait de Le Corbusier devant sa voiture Voisin
© FLC/JASPAR 2017

ル・コルビュジエの愛車は1920年代製のヴォワザン・ルミノーズ。飛行機製造の先駆者であるヴォワザンは工場で造り上げてトラックで配達する住宅も開発していた。

text: Tamio Ogasawara
coordination: Masae Takanaka（Le Corbusier）

味を与えてくれた、建築家のル・コルビュジエの愛車も気になるわけだが、コルビュジエ財団によるとフランスのヴォワザンとのこと。さながら極小空間の〝走る住宅〟であったに違いない。車も建築も同じ〝機械〟として捉えていたのが面白い。

長く大事に乗るのがシティボーイだとしたら、穴が開いた革靴もメンテナンスしてずっと大事に履き続ける、イギリスのチャールズ国王もそうだ。このアストンマーティンも50年以上も現役である（ウィリアム皇太子キャサリン妃のロイヤルウェディングでも活躍）。21歳の誕生日にエリザベス女王から贈られたものだが、なんといっても変態なのが、100％バイオエタノール燃料で走る車に改造してしまったことである。この燃料の原料は廃棄ワインから蒸留されたものとのことなので、エコでもある。エコ改造車を乗る先輩はアメリカにもいる。ロック界のレジェンド、ニール・ヤングだ。1959年式のリンカーン コンチネンタルをハイブリッドの電気自動車にした。このプロジェクトには相当ご執心で、「ツアーに出るより他に、することがたくさんある」うちのひとつらしい。

ナンバーをどう選ぶかというのも、車への愛情表現と捉えるのはどうか。マイケル・ジョーダンのフェラーリ512TRのナンバーを見よ。堂々と「M・A・I・R・J」を掲げている。スティーブ・ジョブズが乗っていたメルセデスベンツSL55 AMGには逆にナンバープレートが付いてなかった（カリフォルニア州法では新車購入後6か月はナンバーを取得せずに走れた）。ともに、らしい。らしい車を選ぶのか、それとも、だんだんとその人らしくなってくるのか。長く一緒にいる女房と一緒で、車ってやつは、お互い似てくる関係性にあるのだろうね。

Neil Young
ニール・ヤング
WITH
Lincoln

ニール・ヤングが地球環境や世の中のことを考えて取り組むプロジェクト「LINCVOLT」。愛車のリンカーン・コンチネンタルを自家製電気燃料自動車に改造して乗っている。

©PacificCoastNews.com/amanaimages

Sori Yanagi
柳 宗理
WITH
Mitsubishi Jeep & Volkswagen

幌の取り外しや、組み立ては大変だったが、運転するとどっしりしていて頼もしかったと柳宗理さん。三菱のスリーダイヤにかぶせるように“Y”のマークが付いているね。右の1975年式以降のタイプ1は、純正のアルミ削り出しのストーンガードに頑丈さを感じる。

©Harutaka Nodera/CONFORT

DEATH PROOF

デス・プルーフ in グラインドハウス（2007）

DVD

監督：クエンティン・タランティーノ　主演：カート・ラッセル／車を運転している女子を見ると、自身の“耐死仕様（デス・プルーフ）”のマッスルカーでちょっかいを出さずにはいられない変態スタントマンの悪行を描く。で、最終的に女子チームの返り討ちにあう。この女子チームのリーダーであるゾーイはスタントウーマンって設定なのだが、演じた彼女もスタントウーマンなんだとか。

映画の中の車。

THE CARS IN MOVIES

ゴダールのとある名言について、僕らの好きな3人の監督で考えた。僕たちの好きな作品の中には、魅力的な車が欠かせない。

DIR. Quentin Tarantino

マッスルカーの激しいぶつかり合い。

photo: X17/aflo

クエンティン・タランティーノ

1963年生まれ。現在準備中の『The Movie Critic』（原題）を撮ったら監督を引退するらしい。写真でタラちゃんが乗っているフォードのマスタングは、『デス・プルーフ』に登場するのと同色。

illustration: Shigeo Okada text: Keisuke Kagiwada

「男と女と自動車さえあれば映画は作れる」。〝フランス映画界のレジェンド〟ことジャン＝リュック・ゴダールは、ロベルト・ロッセリーニの『イタリア旅行』を見てそう語ったらしい。この意見、共感しかない。だって〝ハリウッドのタラちゃん〟ことクエンティン・タランティーノの『デス・プルーフ in グラインドハウス』を見た僕も同じことを思ったから。

ぶっちゃけ『デス・プルーフ』、物語はめちゃくちゃシンプルだ。なんせ、スタントウーマンのゾーイ率いる女子集団が440エンジン搭載の白い1970年型ダッジ・チャレンジャーを試乗してたら（ゾーイは自ら志願してボンネットにオン。さすがスタントウーマン！）、変態野郎が運転する漆黒のダッジ・チャージャーにガンガンぶつかってこられて、これにキレた女たちがぶつかり返して懲らしめるって話なんだもん。なのに、鑑賞後には体温が2、3度は上がっちゃうくらい興奮してるんだから、映画ってのは奥が深い。車が疾走し、それをイカしたショットで捉えて具合よく編集しさえすれば、重厚な人間ドラマがなくても映画は成立しちゃうってことなんだろうね。

ところで、本作でゾーイたちが試乗しているこのダッジ・チャレンジャーは、劇中でも触れられているとおり、『バニシング・ポイント』で主人公が乗っている車と同型だ。この映画も中身って意味では、中学生時代の僕の財布よりない。車の陸送を生業としている主人公が、15時間で件のダッジ・チャレンジャーをデンバーからサンフランシスコまで運ぶ中、警察をはじめとする追っ手とのチェイスを繰り広げるって、それだけ。にもかかわらず、鑑賞後には……以下省略するけども、とにかく『デス・プルーフ』は本作にオマージュを捧げてるってわけ。

この映画は他にも色々と先行作品にオマージュを捧げまくっている。例えば、変態野郎が乗っている黒いダッジ・チャージャーは、たぶん『ブリット』が元ネタ。前の2作とは段違いに中身の濃い刑事ドラマなんだけど、中盤に主人公と殺し屋のカーチェイスシーンがあって、後者が乗っているのが黒いダッジ・チャージャーなのだ。舞台であるサンフランシスコの坂道を巧みに用いた手に汗握るチェイスシーンは忘れがたく、この作品以降は「映画におけるダッジ・チャージャー＝悪役の車」っていう図式が定着したと言っても過言じゃない。加えて言うと、このシーンで主人公が乗っているのはマスタングで、ゾーイたちがもともと乗っていたのも色は違えどマスタングだ。

オマージュって意味では、もうひとつ忘れちゃいけない車が『デス・プルーフ』には登場する。この変態野郎、実はゾーイたちにちょっかいを出す前に別の女子グループの車に正面衝突して、彼女たちの命を奪っているのだ。そのとき乗っているのが、ボンネットにドクロの紋章を掲げたコルベットのノヴァ。この車が題名にもなっている〝デス・プルーフ〟らしく、スタント用語で、危険なカーアクションにも負けないように頑丈に作られた車をそう呼ぶんだとか。汗にも負けないお化粧を〝ウォーター・プルーフ〟というけど、その〝デス〟版ってことか。

このコルベットのノヴァが我が物顔で往来を走る映画が『カリートの道』だ。コンバースの〝イグナイトファイヤー〟かってくらいメラメラなデザインなんだけど、タラちゃんは本作の監督であるブライアン・デ・パルマの作品をオールタイムベストに選んでいる。だから、そこにオマージュを捧げているに違いない。

CARLITO'S WAY

カリートの道（1993）

DVD

監督：ブライアン・デ・パルマ　主演：アル・パチーノ／暗黒街の顔役として鳴らしたマフィアのカリートは、出所を機に堅気になろうとする。しかし、かつてのしがらみを前に、彼の希望はもろくも崩れ去るのだった。コルベットのノヴァはほんのちょっとしか出てこないが、デザインがデザインだけに印象は強烈。ところで、デ・パルマはタラちゃんが生まれて初めて夢中になった映画監督なんだとか。

BULLITT

ブリット（1968）

DVD

監督：ピーター・イェーツ　主演：スティーブ・マックイーン／サンフランシスコ市警察の警部補であるブリットは、ある裁判の重要証言者の保護を命じられる。この証言者は運悪く射殺されてしまうのだが、事件はそれで終わらなかった……。本文で触れたカーチェイスシーンでマスタングとダッジ・チャージャーが激突するんだけど、前者がボロボロになったのに対し、後者はほぼ無傷だったらしい。

VANISHING POINT

バニシング・ポイント（1971）

DVD

監督：リチャード・C・サラフィアン　主演：バリー・ニューマン／新車の陸送を仕事としている男は、ダッジ・チャレンジャーをデンバーからサンフランシスコまで15時間で運ぶという仕事を請け負う。警察からの追跡もなんのそのとアクセルを踏み続ける男の姿にシビれない人はいないはず。プライマル・スクリームには本作にインスパイアされた『バニシング・ポイント』というアルバムがある。

DIR. Woody Allen 丸っこい車が人間模様を左右する。

ANNIE HALL

アニー・ホール（1977）

DVD

監督・主演：ウディ・アレン／'70年代のニューヨークを舞台に、アレン演じる皮肉屋のコメディアンと、歌手を目指す天真爛漫なアニーの恋の顛末を描いたロマンチック・コメディ。アニーは車の運転がすごい雑っていう設定で、神経質なアレンはいつも助手席でビクビクしている。こういう何気ない演出で登場人物の性格の違いを浮き彫りにしちゃうあたり、さすがアレン。

photo: LFI/Photoshot/amanaimages

ウディ・アレン

1935年生まれ。最新作は『Rifkin's Festival』（日本未公開）。アレンの車映画としては、他にも超レトロなプジョーの177がタイムマシンの役割を果たす『ミッドナイト・イン・パリ』なんてのもある。

ANYTHING ELSE

僕のニューヨークライフ（2003）

DVD

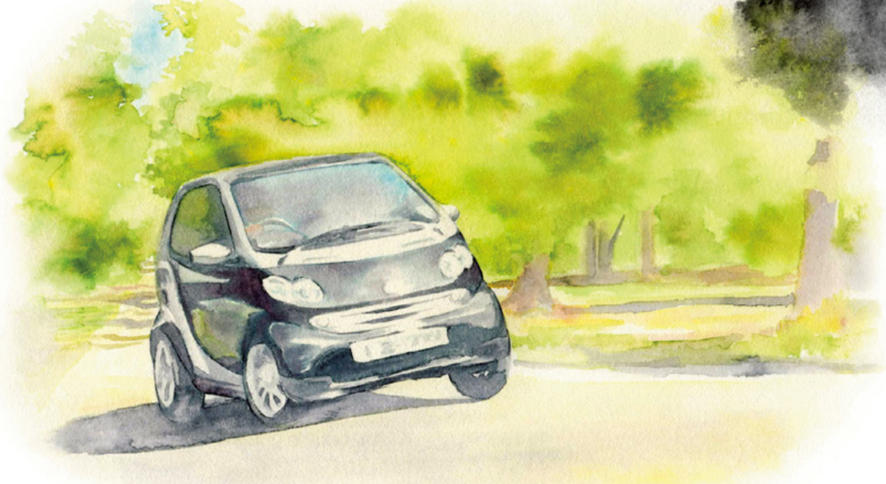
監督・主演：ウディ・アレン／新進気鋭の若手コメディ作家とアレン演じるドーベルの友情を描いたコメディ。イラストは356に乗った2人が路上の駐車スペースが空くのを待っているってシーン。なんだけど、空いたと思ったら別の男たちに割り込まれてしまい、キレたドーベルはバールのようなもので彼らの車をめちゃくちゃにする。

SCOOP

タロットカード殺人事件（2006）

DVD

監督：ウディ・アレン　主演：スカーレット・ヨハンソン／ジャーナリスト志望の女子大生と、アレン演じる初老のマジシャンが、連続殺人事件の真相を究明するハメになるっていうお話。で、そのアレンの愛車がスマート。アレンはこの車をものすごくおっかなびっくり運転するから、全然スマートに見えないってのはギャグか？



CELEBRITY

セレブリティ（1998）

DVD

監督：ウディ・アレン　主演：ケネス・ブラナー／マンハッタンに生きる芸能人たちの派手な生活の内幕を、ブラックユーモアたっぷりに活写した群像劇。主人公はどうにかセレブの仲間入りをしたいと願っているワナビーな男で、そんな彼が乗っているのがDB6。大物に目をかけてもらうには、これくらいの車に乗らなきゃダメなのか？

なんかアメリカ産のゴッツいマッスルカーの話ばっかりしてしまったけど、安心してくれ、丸っこい車が登場するいい映画もちゃんとある。その筆頭が、我らがウディ・アレン先輩の作品だ。

例えば、『アニー・ホール』。これはアレン演じる主人公が、テニス合コンで知り合った女のコに「私の車（フォルクス・ワーゲンのビートル）に乗って帰れば」と誘われることによって恋が始まるって話だ。これが良例だけど、実はアレン映画って劇中の人間模様が丸っこい車の挙動によって左右されがちなんだよね。

2003年に撮った『僕のニューヨークライフ』も、アレン演じるおじいちゃんが若いコメディアンをドライブに誘うところから物語が動きだす。このときにアレンが乗っているのが、赤いポルシェの356。そういえば、『マンハッタン』にも356が出てきたっけ。なんでアレンはこんなに356が好きなんだろうと思って調べてみたら、彼が崇拝しているフェデリコ・フェリーニの『8 1／2』にもこの車が出てくるっていうから、もしかしたらその影響なのかもね。

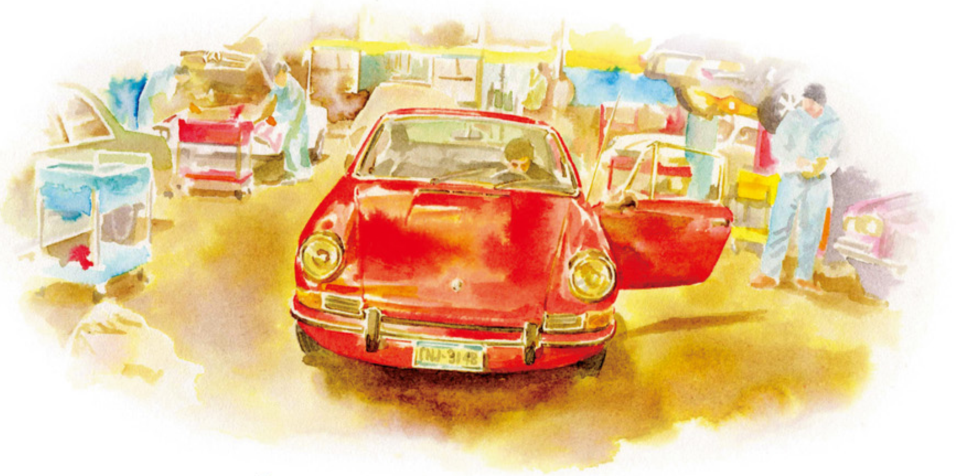
車をダシにしてナンパをキメるっていうのもアレン映画ではお馴染みの光景だ。例えば、『セレブリティ』で主人公はアストン・マーティンのDB6に乗っているんだけど、たまたま知り合ったファッションモデルの女に「運転してみる？」と言って口説くシーンがある。この2人、いったんはいい感じになるも、浮かれすぎた男が運転をミスってブティックにぶっこんでしまう。車で始まり車に終わった恋の物語ってわけだ。

クラシックな車ばっかに触れてきたけど、ニュースクールな丸っこい車が出てくる作品もある。ロンドンが舞台の『タロットカード殺人事件』がそれ。この作品で、アレンは「イギリスは左側通行なのが嫌だ」とかなんとかボヤきながら黒いスマートを乗り回す。で、最終的に事故るんだけど、お気づきのようにアレン映画の車はなぜか事故りがち。ところで、今調べたら、スマートって〈スウォッチ〉とダイムラー・ベンツが協業して開発した車なんだって。言われてみりゃ、〈スウォッチ〉感がある可愛らしいデザインだ。

もう一人、丸っこい車を作品に登場させがちな監督を紹介しよう。言わずもがなのウェス・アンダーソンだ。『ダージリン急行』は、いまいち仲のよろしくない3兄弟がインド旅行を通じて絆を深めるっていうのが本筋なんだけど、回想シーンもあって、そこに登場するのがポルシェの912。亡くなった父親の愛車で、修理に出されていたのを兄弟が引き取ってクダリがある。ドキッとしたのがこの修理屋さんの名前。「ルフトヴァッフェ修理工場」っていうのだけど、これドイツ語で〝空軍〟って意味。ポルシェの創業者がヒトラーとネンゴロで、軍用車を作っていたことを踏まえているのか？

あと、『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』ね。何かと問題の多いテネンバウム一家のアレコレを描いた本作で、長女のマーゴが乗っているのが〝ビッグヒーレー〟ことオースチン・ヒーレーの3000。〈ラコステ〉のポロワンピに毛皮のコートがトレードマークの彼女が乗ると、この質実剛健なスポーツカーもやたらに色っぽく見えてくる。

なんやかんやと紹介してきたけれども、やっぱり冒頭で引用したゴダールの発言は100％正しい。物語があろうがなかろうが、車種がなんであろうが、車が出てくるだけで映画は成立してしまう。映画と車の相性は、コッペパンとソーセージに匹敵するくらいバツグンなのだ。



DIR. Wes Anderson

洒落た車がさらに良く見えてくる。

THE DARJEELING LIMITED

ダージリン急行（2007）

DVD

監督：ウェス・アンダーソン　主演：オーウェン・ウィルソン／不仲の3兄弟がインド旅行を通して家族の絆を取り戻すロードムービー。912の他にも、インドで3人が乗るタクシーも丸っこくて洒落ていた。ヒンドゥスターンっていうインドの自動車会社のアンバサダーってモデルで、ある時期まではインド人の大半がこの車に乗っていた。

photo: Everett Collection/afllo

ウェス・アンダーソン

1969年生まれ。最新作は2023年9月に日本で公開予定の『Asteroid City』（原題）。写真は『グランド・ブダペスト・ホテル』撮影中のウェス。現場でもやっぱりコーデュロイのスーツなんだね。

THE ROYAL TENENBAUMS

ザ・ロイヤル・テネンバウムズ（2001）

DVD

監督：ウェス・アンダーソン　主演：ジーン・ハックマン／問題だらけのテネンバウム一家の生活を綴った喜劇。長女マーゴは12歳で脚本家デビューを果たし世間から注目を集めながら、最近は筆が進まず一日の大半をバスルームで過ごしている。彼女が乗っているのが“ビッグヒーレー”なんだけど、言われてみると浴槽に見えなくもないかも。

レースを題材にした1968年の映画『男の挑戦』（松竹）の撮影現場で、主人公のテストドライバーに扮する俳優・石坂浩二と栗塚旭にコーチするレーサーの福澤幸雄。本作には福澤本人もレーサー役で出演している。

サーキットのシティボーイたち。

HEROES IN THE ’60s CIRCUIT

1960年代、日本のモータースポーツの黎明期。サーキットに青春を賭けたのは、最高にお洒落でかっこいい男たちだった。

text: Kosuke Ide illustration: Goro Nagashima (P107)

資産家・川添浩史とその妻の梶子が開いた本格的イタリアンレストラン『キャンティ』。伊丹十三、三島由紀夫、岡本太郎、かまやつひろしから加賀まりこまでが集う文化サロン的存在だったこの店に、福澤も出入りした。

「瀟洒なマンションに金魚と棲んでるハンサムなPLAYBOY／タイトなスーツにシャープなスリッポンでどこ行くの？／ヘイヘイヘイ／ゴー！

青山あたりでモデルとデートかな？　それとも麻布かな？／なんにも云わずにニヤリと笑って／スポーツカーで／BOOM BOOM BOOM BOOM／イエ！　イエ！　イエ！　イエ！」

クレイジーケンバンドの名曲「ハンサムなプレイボーイ」。今や〝死語〟とも言える言葉を重ねてタイトルにしたこの曲の詞の世界が、そのまま現実のものとして存在した時代があった。今から約半世紀前、最高にハンサムでプレイボーイだった男たち。そんな彼らに、少年・横山剣は憧れを募らせていた。

「僕が子供の頃、レーサーというのはとにかく洗練されていて、知的で、センス抜群で……僕は〝ヨコワケハンサム〟と呼んでいるんですが、みんな髪型もビシッとキマってて、ファッションはアイビー。憧れましたねえ。彼らが溜まって遊んでる場所があるんですよ。飯倉のイタリアンレストラン『キャンティ』とかホテルオークラのカフェ『カメリア』とか、当時そういう場所に恐る恐る見に行っては『うわぁ、生沢徹だ、式場壮吉がいるぞ』なんてやってました」

ほとんどロックスターの〝追っかけ〟の世界。だが実際のところ、当時のトップレーサーは一流芸能人に勝るとも劣らぬ本物の「スーパースター」だった。今では想像しがたいその状況を知るには、当時の自動車を取り巻くシーンを振り返らねばならない。

第2次大戦後、アメリカでは大量消費社会を背景に〝モータリゼーション〟の時代を迎えた。その波は戦後復興を遂げる日本にも確実に及び、大衆の間で車への関心はうなぎ上り。同時にヨーロッパでも自動車産業が復活し、車の性能が飛躍的に向上、大排気量のエンジンを積んだスポーツカーが最高速度を競う時代が到来する。

そうした中、'63年に「第1回日本グランプリ」が開催された。会場は前年に完成した鈴鹿サーキット。ポルシェ、ロータス、フェラーリなど日本人のほとんどが見たこともない名車たちが走り抜ける大会は2日間で20万人の動員を記録する盛り上がりを見せた。その様子を会場で目にし、「これしかねえ!」とレースの世界に飛び込んだのが、当時ロカビリーシンガー・俳優と

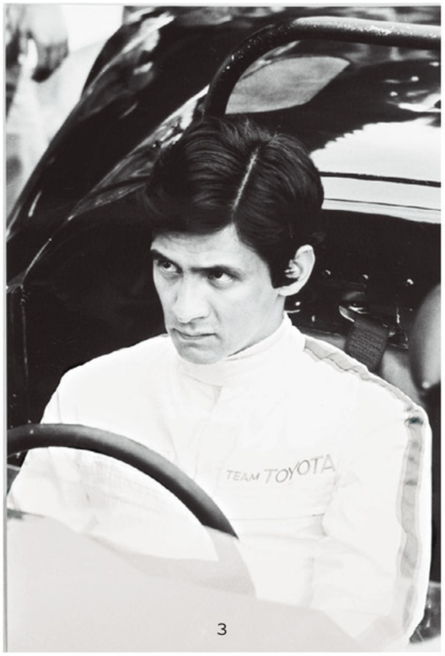
JASRAC 出 2304066-301

2

1

5

4



3

福澤幸雄の追悼作品

『追悼写真集 福澤幸雄の光と影』

福澤が事故死したすぐ後に刊行された追悼本。妹の福澤エミ、朝吹登水子、三保敬太郎らが寄稿する他、生前の福澤のさまざまな素顔を知る写真が満載の、貴重かつかっこいい一冊。ノーベル書房

SOUND POESY SACHIO

『サウンドポエジー・サチオ』三保敬太郎と彼のグループ／『11PM』テーマ曲などで知られる三保が大学の後輩である福澤の不慮の死を悼み、制作したアルバム。二人がパリの思い出を語り合う曲も。ウルトラ・ヴァイヴ

して人気絶頂だったミッキー・カーチスさんだ。

「すぐに東京に帰って運転免許の試験に行ったんだよ、車に乗って（笑）。ずっと前から車は乗ってたから。免許を取ってすぐトライアンフTR4を買って、そのまま鈴鹿に行って〈いすゞ〉のドライバーテストを受けたら受かって、レースに出るようになったんだ」（ミッキーさん）

どこからツッコんでいいかわからないほどすごい話だが、ミッキーさんに限らず当時のレーサーたちはみなブッ飛んでいた。一般庶民がスポーツカーに乗るなど夢のまた夢という時代。彼らの多くは資産家や文化人、芸能人の子弟であり、海外情報をいち早く取り入れる〝遊び人〟の若者である彼らはトレンドリーダーだった。

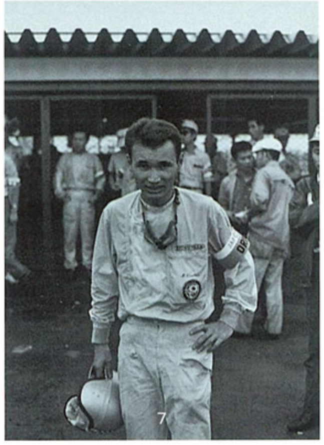
「『VAN』がスポンサーになって、生沢さんや式場さん、ミッキーさんのレーシングスーツを作ったり、揃いのセーターを着たりしてお洒落でしたね。あと式場さんはピアニストでもあったし、三保敬太郎さんは作曲家。音楽に近しい人が多かったのもシビれました」（剣さん）

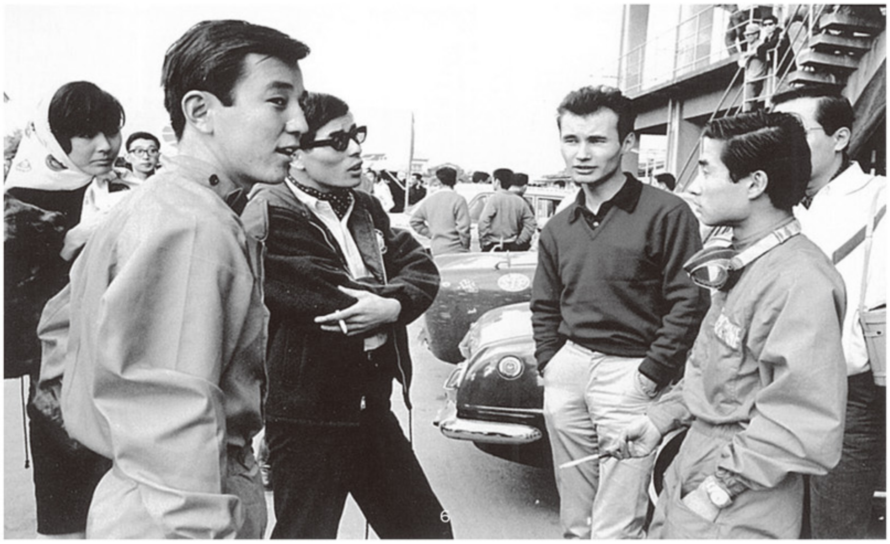
そうした世界の象徴と言えるレーサーが、福澤幸雄だった。福沢諭吉の曾孫であり、日本人の父とギリシャ人の母を持つ福澤はパリ生まれ。慶應義塾大学在学中からモータースポーツに熱中、'66年にトヨタの契約ドライバーとなった。その一方で、モデルとしても活動、ファッションブランド〈エドワーズ〉ディレクターまで務めた。最先端の文化人や芸能人が集まる『キャンティ』に出入りし、かまやつひろしやミッキーさんら音楽関係者とも親しく付き合った。

「サチオは楽しくてかっこいい奴だった」とミッキーさんは当時を振り返る。「俺と付き合っている女がかぶってるから、代わりばんこでデートしてたよ（笑）。当時はキャンティかオークラに行けば誰か知り合いがいたから、深夜まで喋ったり、よく遊んだな。式場壮吉の結婚式のときなんか『オークラから箱根の古湧園ホテルまで最初に着いた奴が勝ちだ』とみんなで走って、5、6台は崖から落っこちてね。夜通し遊んで、朝そのまま仕事に向かうとかいう生活だったね」

しかし、若きレーサーたちの交流とは裏腹に、モータースポーツを取り巻く空気はシリアスさを増していた。レース人気の隆盛につれて、戦績が車の評価と売上に直結するようになり、国内メーカーの開発競争が激化し始めたのだ。

「『他社のドライバーと口利くな』なんてよく言われてたよ。俺たちは友達だったからそんなの無視してたけどね。とにかく当時は秘密厳守。





当時を語ってくれた人。

横山 剣

ミュージシャン

よこやま・けん｜1960年、横浜生まれ。'81年に「クールスR.C.」としてデビュー。以後、数々のバンドを経て、1997年春「クレイジーケンバンド」を発足。

ミッキー・カーチス

ミュージシャン、俳優

1938年、東京都生まれ。英国人の祖父を持つ。落語家・ミッキー亭カーチスとして立川流真打でもある。70代から絵を描き始め、現在は画家としても活動中。

1. 1966年、新設の「富士スピードウェイ」で行われた第3回日本GP。「打倒ポルシェ」を狙うプリンス自動車R380が優勝を飾り、前回の雪辱を果たした。**2.** トラディショナルなスタイルで街を闊歩する福澤。**3.** レーシングカーのシートに座る"ヨコワケハンサム"な福澤。**4.** 福澤の慶応時代からの学友でジャズピアニストの三保敬太郎もレーサーだった。**5.** 後に実業家、自動車評論家となった式場壮吉。**6.** 仲間のレーサーと揃いで作った〈VAN〉の赤いVネックセーターを着るミッキーさん。左手前は生沢徹。**7.** レーシングスーツに身を包んで。レースには「加千須ブライアン」名義で出場した。**8.** 式場壮吉（前列左）とその妻（当時）でモデルの三富邦子（前列右）。右奥はミッキーさん。**9.** イギリスの伝説的カーレーサー、スターリング・モスを囲んで。左から浮谷東次郎、式場壮吉、生沢徹、石津祐介、浅岡重輝、ミッキーさん。**10.** ミッキーさんが乗った〈いすゞ〉ベレット1600GT。

俺は一度、鈴鹿サーキットでベレット1500に乗ってスピンして落ちたことがあったけど、そのとき、実は俺にも内緒で開発中の1600のエンジンを積んでたんだ。それで俺がボンネットを開けたら、その内部をヘリコプターから望遠カメラで撮られて、業界紙に載っちゃった。それで『お前、わざと撮らせたんだろう』と産業スパイの疑いをかけられたんだ」

しのぎを削る企業間の激しい争いの中、図らずも企業における一種の〝尖兵〟の役割を担わされた契約ドライバーたちの行き着く最悪の結果は、当時は今よりもずっと頻繁に起こった、走行中の事故による死だった。

「'65年に鈴鹿での練習中に事故死した浮谷東次郎も、翌年の第3回の日本GPで転落死した永井賢一も友人だった。俺も骨折なんかしょっちゅうだったけど、死を覚悟で走ってたから、怪我くらいは何でもなかったよ。一度、福澤が事故で火傷して入院してたから『お前、焼き肉だな』って醤油持って見舞いに行ったら、ギリシャ人のお母さんが驚いちゃったことがあったな」

'67年から自らのバンドでヨーロッパを回っていたミッキーさんの元に、福澤幸雄の訃報が届いたのは、'69年のこと。静岡ヤマハテストコースでトヨタ7のテスト中に起きた事故により、福澤は25歳でこの世を去った。

クールなナイスガイだった彼の死を多くの人々が悲しみ、悼んだ。親友のかまやつひろしは彼を偲ぶ曲「ソー・ロング・サチオ」を作り、三保敬太郎は追悼アルバム『サウンドポエジー・サチオ』を発表した。レースで多くの友人を亡くしたミッキーさんも、帰国後は再びレースの世界に本格的に戻ることはなかった。

「要するに、遊びだったんだよ」。飄々と語るミッキーさんの言葉の裏に、疾走する車に人生を賭け、青春を燃やし尽くした若き男たちの姿が見え隠れする。少年時代の横山剣さんが憧れたハンサムなプレイボーイたちは、戦場の孤独に向き合うヒーローだった。

「みんな群れてなくて、一匹狼の集まりみたいな感じで。ライバルであり良き友であり……その関係性がまたいいんです。短期間でレースから身を引いた人も多いんですけど、すごい才能とセンスを持った人たちがある時期にだけ集まり、スパークした瞬間。それがたまらない。僕の原点であり、永遠の憧れですね」（剣さん）

ロールス・ロイスのシルバークラウドⅢは1962〜'65年の間に約2500台が生産された。このチャイニーズアイモデルは100台。ボディはベントレーを長年支えるコーチビルダー〈H・J・マリナー〉により製作され、兄弟車であるベントレーS3とは、ラジエーターグリル以外はほぼ同じ車。ブレーキはドライブシャフトの回転エネルギーを使ってアシストする「メカニカル・サーボ」方式。

中村ヒロキ

My Archive SPECIAL

“ロールス・ロイス シルバークラウドⅢ”

数年前、ベルリンのあるカーマニアの方に、ロールス・ロイス シルバークラウドⅢの、通称〝チャイニーズアイ〟というモデルを見せていただいたんです。〝吊り目〟型のヘッドライトから名付けられたものですが、どこかアメ車っぽい、トッポい雰囲気があっていいなあ、いつか乗ってみたいなと思っていたら、縁があって良い状態のものを入手することができました。

1940年代までの車は、エンジンやシャシーを作るメーカーとボディを作るメーカーが分かれているのが一般的で、後者は〝コーチビルダー〟と呼ばれる、独自の技術を持つ専門業者でした。この車は1964年のモデルですが、ロールス・ロイスはその後もコーチビルド仕様のモデルがあり、これは〈H・J・マリナー〉というイギリスの老舗ビルダーが手掛けています。古いロールス・ロイスですが、オーナードライバー（つまり運転手ではなくオーナーが自分で運転する）の2ドア、クーペであるところも好きです。あまり構えず、カジュアルな格好で普通に乗り回す感じのほうがあってますよね。さすがにエンジンはとてもよくできていて、'60年代のものとは思えないほど安定感があります。この車で仙台や京都など、全国色々な所に行きました。

ブレーキラインやブレーキシューなど、安全に走るためにクリティカルなパーツは交換してありますが、それ以外は基本的にオリジナルのまま。シートカバーのレザーが割れていたりするんですが、僕は車が長年使われてきた中で生まれた経年変化にこそ愛着を感じるし、インスピレーションを受ける。少しだけボディの後ろを下げていたり、ライトの内側をアイボリーに塗ってみたりと、わずかに変更している部分はありますが、あくまで全体のバランスが崩れない範囲で。オリジナルの魅力を尊重した上で、自分なりのキャラクターが滲み出てきてくれたらいいなと思います。

なかむら・ひろき｜キュビズム代表。〈visvim〉クリエイティブディレクター。1971年生まれ。2000年にブランド〈visvim〉を立ち上げる。2013年よりレディスライン〈WMV〉をスタート。東京・青葉台の『VISVIM GENERAL STORE』を中心に11の直営店を展開。www.visvim.tv

photo: Katsuhide Morimoto (P108), Kazuharu Igarashi (portrait & P109)
text: Kosuke Ide

1. ロールス・ロイスファンにはよく知られる“チャイニーズアイ”のライトはやはりアメリカン・デザインの影響を受けたもの。**2.** シックなローズウッドのウッドパネルなど内装はほぼオリジナルのまま。パワーステアリング、パワーウィンドーが採用されている。**3.** ステップ部分には当時のトップ・コーチビルダー〈H・J・マリナー〉の名前がクレジットされたパネルが取り付けられている。ロールス・ロイスでは戦後も、一部の複雑な製造工程が必要なボディのみをこうした専門のコーチビルダーが手掛けていた。**4.** 縦型3連テールランプもやはりアメリカ車的なディテール。**5.** 羽ばたく女神像のエンブレム『The Spirit of Ecstacy』はロールス・ロイスの象徴。

旧車には、車が本来持っていた魅力の“原点”がある。

’16年のポパイ40周年記念号（ISSUE831）で、自宅のあるロサンゼルスからサンフランシスコまでのロードトリップに出かけた中村さんが乗っていた1979年型ジープ・グランドワゴニアは、彼が現在所有する車の中では〝最新〟の車だった、というほどの筋金入りの旧車好き。

「子供の頃からアメリカの車が好きで、1960～’70年代のNASCARのストックカーレースで走っているような、セダンの大きな車がかっこいいなと思っていたんです。それで最初に自分が買ったのは、アメリカで暮らしていた20歳くらいの頃に新聞で見つけた1964年のキャデラック・ドゥヴィル。すごく安い値段で買えたんですけど、すぐに壊れてしまいました」

旧車乗りとしての〝洗礼〟を受けた中村さんだが、当然ながらこれに懲りることはなかった。その後も数々の旧車に乗り続け、現在、日常的な「足」として最もよく乗る愛車は1935年型フォード・ロードスター。故障したり、牽引してもらったりと色々な経験を含めて、古い車に乗ることが魅力的だと彼は言う。

「古い車なら自分でいじったりとか、多少の修理はしたりしますが、最近の車になると手が出せない。もちろん故障しにくいわけですが。1980年代以後、そんなふうに『生産者／消費者』という形で距離ができてしまい、ユーザーが自分から能動的に車に関わる楽しみが失われてきたように思います。もちろん現代の車は実用性が高く、移動の手段としては便利で快適ですが、車と関わる楽しみという点では、古いものを直しながら乗るほうがより豊かな体験だという気がしますね」

壊れない、劣化しないという意味での〝完璧〟を目指すのでなく、経年により生じる「皺」や「傷」を受け入れ、愛着を持つ。それは中村さんのものづくりに一貫して流れる哲学でもある。

「現代の車はボディの劣化を防ぐため、表面をウレタンで塗装していますが、かつてはラッカーを塗っていました。塗膜が弱いラッカーは表面が不均一に波打ったり、剥がれやすかったり。でもそうした面が、僕にとっては魅力的に映る。『古いから良い』というわけではありませんが、旧車には車が本来持っていた、楽しさや美しさの〝原点〟のようなものが感じられるんです」

ボーズ BOSEと ジャルジャル後藤 JJGの 伝えたい車がある！

絶妙に外したラインのヨーロッパの大衆車。
ニッチな趣味で意気投合したふたりが語る、
世のシティボーイにいま、伝えたい車とは？

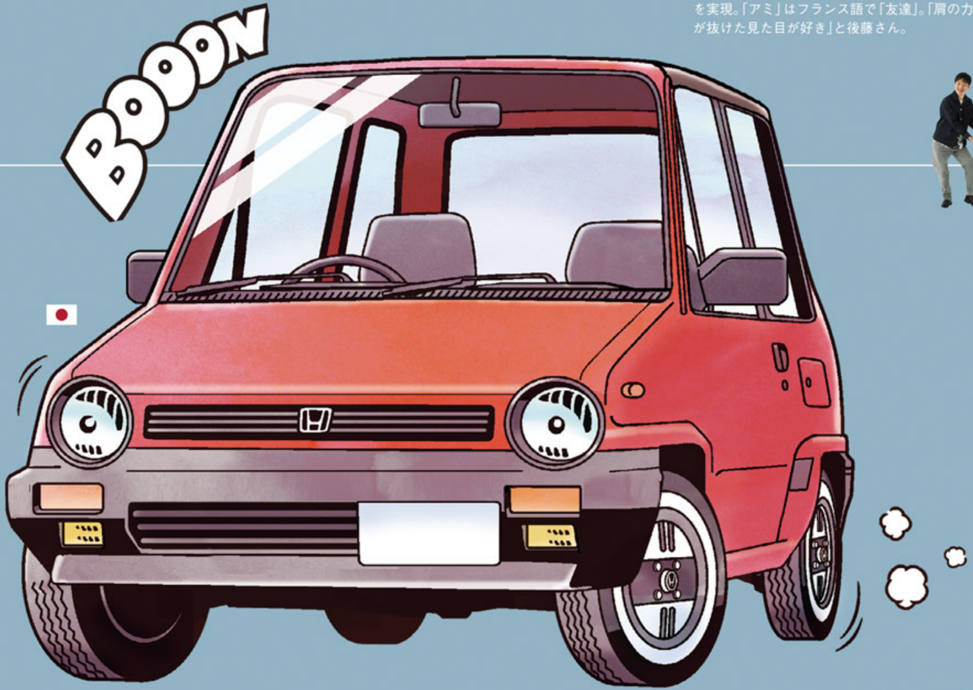
2.フィアット ウーノターボi.e.

1983年から'95年まで製造。デザインはジウジアーロ率いるイタルデザイン。Boseさんが所有するのは'89年式、1.3Lのターボ仕様。購入当初はサビだらけだったボディを再塗装、デッドストックのアバルトステッカーでお化粧直しした。曰く「ウーノは日本で全滅したといわれてて。20年ぐらい前までは環八の中古車屋さんとかでわりと売られたけどね」。現在のお気に入り。

1.シトロエン アミ8

1969年から'78年まで製造。「アミ」シリーズは2CVの兄貴分として'61年に登場。当時のシトロエンは2CVの上にはDSとIDの高級車しかラインナップがなく、大衆車へのニーズの高まりとともに誕生。「アミ6」が最初のモデルで「8」はその進化形。当時としては珍しいFF(前輪駆動)を実現。「アミ」はフランス語で「友達」。「肩の力が抜けた見た目が好き」と後藤さん。

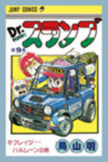
オレたちが愛した車。



3.ホンダ シティ

1981年に登場したコンパクトカー。「トールボーイ」と呼ばれるユニークな背の高いデザインを採用し人気となった。Boseさんの愛車カブリオレは'84年に登場。ピニンファリーナが幌の設計を手掛けた。初代発売時にはイギリスのバンド、マッドネスを起用したCMが話題を呼び、マッドネスが踊る「ムカデダンス」が大流行。『8時だヨ！全員集合』で加藤茶と志村けんもギャグのネタに。

『Dr.スランプ』



鳥山明の初期代表作。発明家・則巻千兵衛が作ったアンドロイド・則巻アラレの日常を描くギャグ漫画。車好きの鳥山はホンダ シティやアウトビアンキなど自身が当時所有していた、あるいは乗りたい車をよく漫画に描いていた。右はそんな鳥山明にオマージュをこめ、イラストレーター師岡とおるが描いた「ホンダ シティ」。

THEME 1

ニッチなラインのヨーロッパの大衆車好き。同じ趣味の二人が出会うまで。

Bose（以下B） 後藤くんのシトロエンアミ[1]は買ってどのくらいたった？

後藤淳平（以下後） 1年ちょっとくらいすね。買ってすぐの頃、Boseさんちまでドライブして見せに行って。その後、箱根の温泉も一緒に行かせてもらって。

B 日々乗ってる？

後 仕事に行くときは必ず。ほぼ毎日乗ってますね。買う前は、故障とかいろいろあるんやろなって覚悟してたんですけど、拍子抜けするほどなんもないんです。

B 旧車だからいまのクルマと違ってややこしいものが一切ついてないもんね。

後 エアコンなんてないし、電子制御もない。構造がものすごくシンプルだから、壊れるところがないんですよ。

B 何年製だっけ？

後 1970年製です。

B てことは僕と同い年ぐらいだ。50歳超え(笑)。そもそも何故にアミ？

後 ずっと小型のフランス車を探してて。ルノー サンクとかキャトルとかを見るうちに、たまたま見つけて。しかも、フランスから持ってきたばかりで、エンジンやミッションは特に手を入れなくても状態が良く。とはいえ50年なんで、ボディは傷だらけでクタクタ。でも、そういうのが欲しかったんです。その前は、アルファロメオに乗ってたんですけど……。

B そうだ、赤いジュリアに乗ってたね。

後 GT1300ジュニア[5]。車検2回通して4年乗って。ただ、常にピカピカにしとかないとカッコつかないし、乗るときもいちいち気合入れなあかん。だから、もっとラフに乗れるクルマがいいなって。

B フランスの田舎をトコトコ走ってた感じだよ、アミは。これで一本映画ができるでしょ。タイトルは「幸せの水色のアミ」。心温まるロードムービー（笑）。

後 おじさんが主人公の(笑)。ていうか、おじさんによくのぞかれるんですよ。この間も、コインパーキングに停めて戻ってきたら、おじさんが4～5人アミを取り囲んでましたもん(笑)。

B しかし、後藤くんから「アミ買いました」って突然写真が送られてきたときは驚いたよ。ナヌ!? って(笑)。「あ、とうとういっちゃったんだな」って。

後 いっちゃいました(笑)。

B クルマ好きはどっから始まった？

後 ボルボからです。初めてのクルマはジープのパトリオットで。28の頃に新車で買って。そのとき、クルマに興味があったわけではないんです。子供の頃にクルマが好きだったとかそういうこともなく。ただ、結婚したし、クルマがあったほうが便利だなって、それくらいの気持ちやったんです。で、3年乗って車検がきて。このまま乗るか乗り換えるか、どうしようとなったとき、知り合いのお笑い作家さんでボルボのディーラーで整備士をやってた人がいて、相談したら「ボルボがいいですよ」と。「240でしょ」って。で、調べて、ああコレか、四角いやつかと。東京のボルボ専門の中古車屋さんへ見に行って、そこで買ったんです。'88年式の240を。

B 後藤くん、ちょうどその頃、「旧車芸人」に出たんだよね。『アメトーーク！』の(2016年放送)。で、「それは旧車じゃなくて中古車や！」って、ケンコバくんとかにいじられて(笑)。

後 そうですそうです(笑)。そしたら、別のクルマ屋さんから「こんなん出てきましたけど、興味ありませんか？」って連絡がきたんです。それがその次のクルマ、ボルボ245[4]やったんです。

B 角目？ 丸目？

後 丸目です。'74年製でボディはメタリックな水色。しかも、エンジンとミッションは前のオーナーさんが'93年式に載せ替えてて。これは掘り出しモンやなと。そこからはもう加速度的にハマっていきましたね。

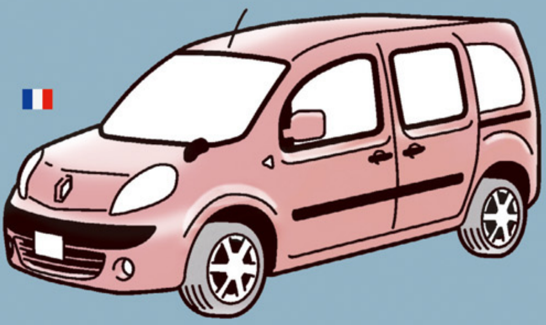
B 旧車の「沼」に(笑)。しかし、大人になってからスイッチが入ったっていうのが面白い。僕ら昭和のおじさん世代って、それこそ、ケンコバくんやおぎやはぎの2人もそうだけど、ずっとクルマに憧れを抱いて育ってきたんですよ。子供の頃

Boseさんのマイカー年表。

- 1992 | 三菱 ミニカ
- 1994 | ホンダ シティ カブリオレ
- 1997 | フォルクスワーゲン ゴルフ カブリオ
- 2007 | アルファロメオ 147
- 2009 | いすゞ 117クーペ
- 2011 | フィアット パンダ スポルティーバ
- 2013 | ルノー カングー
- 2014 | フィアット ニューパンダ
- 2016 | フォルクスワーゲン ゴルフ２ CLi
- 2016 | メルセデス・ベンツ vito
- 2018 | フィアット 500
- 2019 | フィアット ウーノ ターボ ie
- 2021 | トヨタ プロボックス (リノカ ユーロボックス仕様)

ぼーず｜1969年、岡山県生まれ。'90年、ANI、SHINCOとともに「スチャダラパー」でデビュー。MC担当。中古車専門誌で連載を持つなどクルマに関する造詣が深い。現在、ウーノ、ユーロボックス、グッチ仕様のフィアット500（妻専用）を所有。

こんな形の車もいいね。

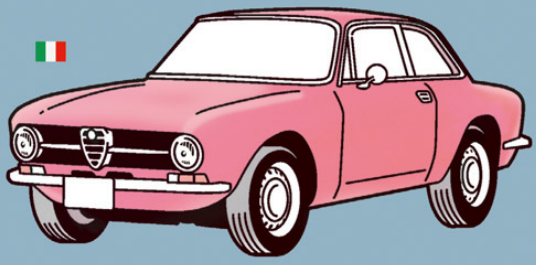


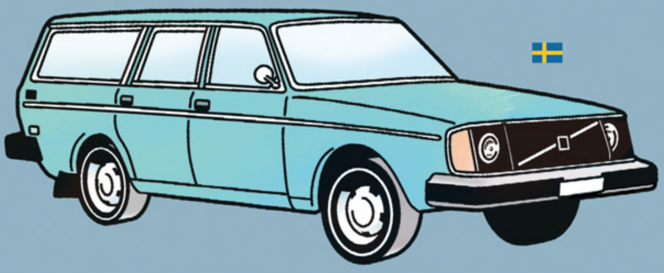
7. ルノー カングー

1985年に登場した小型貨物車エクスプレスの後継として、乗用車としても使用できるよう後部座席や室内装備などを充実させ'97年に発売。広い車内と使い勝手の良さから大ヒット。ヨーロッパにおけるミニバンのリーダーであり続けている。2021年には14年ぶりにフルモデルチェンジをしての3代目が登場。2022年後半には日本でも販売開始。

6. フィアット ムルティプラ

1998年に登場。「ムルティプラ」は「多様」を意味するイタリア語。当時のミニバンブームを受け、まったく新しいマルチパーパスヴィークル（MPV）として開発。フロントシートに3人、リアシートに3人、計6人が乗車できるクルマに。深海魚のような顔をしたエクステリアデザインは「世界一醜いクルマ」と酷評されるも、2019年、MoMAに永久収蔵。





5. アルファロメオ GT1300ジュニア

アルファロメオの傑作として知られている。1962年、ジュリア スプリントGTが大ヒットし、より若者向けのクルマとして'66年に発売。ボディデザインは、イタリアのカロッツェリア「ベルトーネ」時代のジョルジェット・ジウジアーロ。美しさと機能性を備えた名車としていまもなお人気が高い。おぎやはぎの小木博明の愛車としても知られている。

4. ボルボ245

1974年から'93年まで製造された240シリーズの5ドアワゴン。車の頑丈さを表す四角いエクステリアデザインは140も手掛けたボルボのカーデザイナー、ヤン・ヴィルスガールドによるもの。「簡潔さは美である」が彼のモットー。フォトグラファーやスタイリスト、デザイナーなどクリエイターに根強い人気がある。シリーズ累計約286万台が生産された。

はスーパーカーブームがあって、プラモデルブームがあって、ラジコンブームがあって、で、F1ブームがあって。大人たちが築いたクルマ文化をずっと刷り込まれてきたというか。でも、僕らより一回り下の後藤くんたちの世代になると、クルマに執着しない人が多くなって。

後 そうなんです。だから、クルマ好きの同世代の知り合いがなかなかいない。僕、突然変異かもしれないです。

B しかも、5〜6年前だったかな、後藤くんと初めて会ったとき、クルマの話ですごく盛り上がって。ああ、好きなクルマの系統がまるで一緒だなって。

後 ヨーロッパの大衆車好きっていう。

B しかも、「ドヤ！」って感じが苦手で、あえてハズしたビミョーなラインを攻めるというニッチすぎるやつ（笑）。

後 だいたい、フィアットウーノ[2]を見て、「うわー！ すごい！」ってなる人、あんまりいないじゃないですか（笑）。

B いや、まったくいない。結局、後藤くんの「旧車芸人」じゃないけど、旧車っていうより中古車好きなんだよね。だから、僕も意外と、同じ趣味の友達がいないんです、後藤くん以外は（笑）。

THEME 2 『グランツーリスモ』と『Dr.スランプ』が、Boseさんの車好きの原点。

後 Boseさんはどうですか？ どこからクルマスイッチが入りました？

B だから、もともと子供の頃から好きっていうのはあるんだけど、本格的にハマったのは、やっぱ後藤くんと同じで30手前。金銭的にちょっと余裕が出てくる年頃ってのもあっただろうし、当時、プレステの『グランツーリスモ』にすごくハマって。あれって市販のクルマや旧車を走り屋仕様にいじって楽しむゲームじゃない。子供の頃に憧れたスーパーカーとか、デザインが好きだった欧州車とかで遊ぶうちに、実際のクルマももっと面白くしたいなと思うようになって。

後 ちなみに、初めてのクルマって？

B 23のときに買った三菱ミニカ。駐車場が軽しか停められない広さだったというのもあって、中古車情報誌で探して一番安くて可愛かったのがそれ。だから、走りがどうというより、クルマで夜中に移動できるというのがなにより楽しくて。

後 行動範囲が広がりますよね。

B 若かったからそれが一番嬉しいのよ（笑）。で、そのうち、もう少し余裕が出てきたときに、もうちょいオシャレなクルマに乗りたいと思い、その次はホンダ[3]シティ カブリオレ、そのまた次はゴルフのカブリオレになって。

後 カブリオレシリーズですね。

B ゴルフはね、初代ゴルフに2代目のエンジンとかパーツを取り入れた'92年式のクラシックラインっていうやつ。ボディはエンジ色で。結構好きだったから、10年ぐらい乗って。壊れなければ永遠に乗り続けたかったんですよ。デザインも好きだし、完成された一台だったし。だから結局、あのカンジをずっと求めてるんだよね。ちっちゃくて速い、四角いクルマ。だから、最近手放しちゃったけど、ゴルフ2もわりと長い間持ってたし。

後 ちっちゃいクルマがいいっていうのは、遡ればどこからきてるんですかね？

B チョロQが好きっていうのもあるけど、一番は鳥山明の『Dr.スランプ』。ペンギン村を走ってるクルマだよね。則巻千兵衛さんが運転するクルマ（笑）。

後 あー、まさに！

B だから、僕の世代は鳥山先生の影響ってすごく大きいと思う。とにかく刷り込まれたもん。コロンとしててキビキビ走るちっちゃいクルマ。鳥山さん自身もそういうのが好きみたいで、シティもそうだし、アウトビアンキA112アバルトとかミニとかチンクエチェントとか。

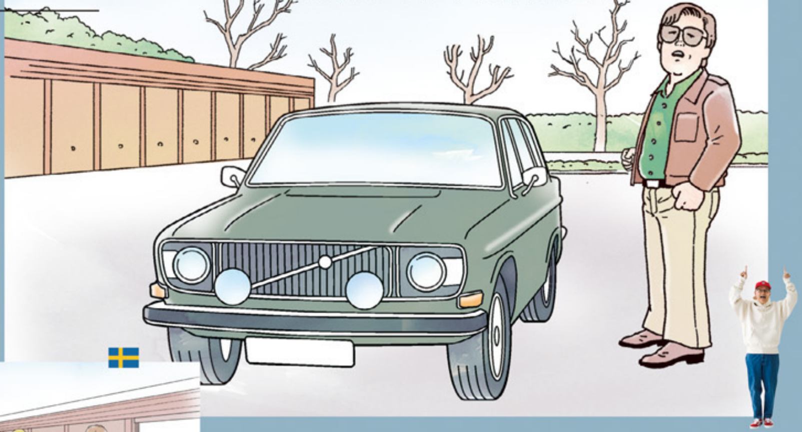
後 欧州車好きの原点が鳥山明先生。

B めちゃめちゃトラウマ。だからやっぱ、大きいクルマに「ドヤ！」って乗るのが恥ずかしいっていうかさ（笑）。それこそ年齢的にはベンツとか乗っていいんだけど、な〜んかハズい。それより、ちっちゃいけど性能がいい、目立たないけどこだわってる、そういうクルマのほうが粋だと思うし、惹かれるんだよね。

後 めちゃめちゃわかります。

photo: Kazuharu Igarashi　illustration: More Rock Art All　text: Izumi Karashima

映画のなかの気になる車。



『幸せなひとりぼっち』
妻に先立たれた中年男オーヴェは失意のため自殺を試みるが、隣人パルヴァネとその家族の邪魔で失敗。渋々、彼女たちと交流を続けるうちに彼の中に変化が訪れ――。不器用な男の人生の回想録をサーブやボルボなど北欧の名車が彩る。

12. サーブ900 ターボ16 カブリオレ

1978年に登場。サーブはもともと航空機メーカー。フロントガラスが垂直気味に立ち上がっているなど飛行機を彷彿させる内外装が特徴。'90年代初頭のバブル期には業界人やクリエイターの間で人気となり、映画『サイドウェイ』に登場する'87年式ターボ カブリオレは当時のおしゃれの象徴に。近年は『ドライブ・マイ・カー』でも注目され、人気再燃!? しかし生き残りの個体が少なく稀少車である。

『サイドウェイ』
ワインオタクの中学校教師マイルスは、小説家の夢を捨てきれずにいる。悪友ジャックの結婚を知り、独身最後の二人旅として愛車サーブ900とともにカリフォルニア州サンタ・バーバラのワイナリー巡りに出かける彼だったが――。

11. ボルボ vs サーブ

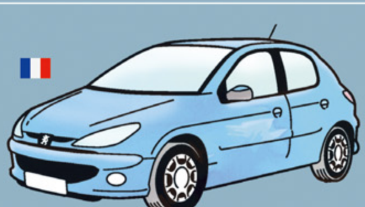
日産派かトヨタ派か。日本でもそういった問いはよくあるが、スウェーデンではサーブかボルボかで分かれる。サーブ96に乗る主人公はボルボ140の隣人と仲良くしようとするが次第に張り合い、サーブ900に乗れば隣人はボルボ240、9000CSに乗れば960エグゼクティブに。しかしある日、主人公がサーブ9-5を買おうとしたら隣人はBMWのカブリオレに。主人公は激怒し大いに落胆する。イラストは隣人のボルボ140と主人公のサーブ96。

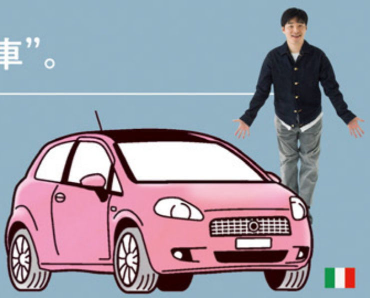
ジャルジャル後藤さんのマイカー年表。

2011	ジープ パトリオット
2014	ボルボ 240
2017	アルファロメオ GT1300ジュニア
2018	ボルボ 245
2021	シトロエン アミ 8
2022	ランドローバー 2nd レンジローバー

ごとう・じゅんぺい 1984年、大阪府生まれ。2003年、高校時代の同級生・福徳秀介とお笑いコンビ「ジャルジャル」を結成。キングオブコント2020優勝。クルマ好きとなってからはさまざまな中古車店と交流、マニアックなクルマ情報を交換し試乗しては店主とクルマ談議をするのが楽しい。

シティボーイにすすめたい"ミゾ車"。





10. フォルクスワーゲン アップ!

2011年に登場。低価格で購入できることを目指し開発されたコンパクトカー。全長3610mm、2ドアで車重は900kg。フォルクスワーゲンの中ではいちばん小さいものの、車内は大人4人でも十分なスペースを確保。燃費もよくアイドリングストップ機能を搭載することで1Lあたり25kmを達成。中古車で50万円台のものもある。

9. プジョー206

1999年、ホットハッチの代名詞だった205の後継車として登場。日本では手頃な価格とフランス車のオシャレな雰囲気が相まって大ヒット。2000年には年間販売台数が1万台に。また世界ラリー選手権(WRC)でも活躍し、'00年以降3年連続で優勝をおさめている。現在、中古車市場では本体価格10万円台からあるので狙い目だ。

8. フィアット グランデプント

フィアット ウーノの後継車として1993年に登場したプント。2005年、3回目のフルモデルチェンジで一回り大きくなり「グランデプント」として登場。デザインを手掛けたのはジウジアーロ率いるイタルデザイン。グランデプント推しのBoseさん曰く「マセラティみたいな顔で最高!」。「プント」とはイタリア語で「点」の意味。

B で、ゴルフ カブリオレに長く乗った後、アルファ147にいって。そろそろ40歳になっちゃうぞっていうときに、ここでちゃんとした旧車にいっとこうと思い、117クーペを買ったんですよ。

後 いすゞの名車ですね。

B ジウジアーロの傑作。緑色の丸目。それはもう素晴らしくカッコいいクルマで。珍しく、自分で洗車するようになったもん。常になでなで触りたくて。

後 いすゞはピアッツァもいいですよね。

B ピアッツァは欲しいね。いま欲しい。いま乗りたい(笑)。あれもジウジアーロのデザインだし、僕のウーノともよく似てて。で、117に2年乗った後、フィアット パンダ。旧パンダね。黒のスポルティーバ。あれも可愛かったし、すごく好きだった。ゴルフもそうだけど、「乗ってる」感がすごくあるんですよ。マニュアルで走る面白さを教えてくれたのはパンダだったかな。

後 ハイテクじゃないから、自分が動かしてる感がダイレクトに伝わってくるんですよね。運転が楽しくなりますもん。

B そう。で、その後、結婚して、子供が生まれて。その辺から鎌倉に住むようになり、クルマがもう一台あったほうがいいなってことで、ルノー カングー[7]。あれはめちゃくちゃ便利。街乗りできる商用車だから、荷物をどんどん乗っけられるし、赤ちゃんを乗せるのも簡単。そこから「便利なもう一台」が加わるようになるんだけど、それがいま持ってるトヨタ プロボックスへとつながるもうひとつの僕のクルマの系譜ですね。

THEME 3 クルマ初心者のシティボーイへ。買うなら「ミゾ車」だ!

後 このあいだ、ルノー アバンタイムを見かけたんです、街中で。うわあ、もしかしてこれちょっとエエかも、ちょっと欲しいかもって思ったんですよね。

B あのクルマ、超ヘン(笑)。デザインがトンがりすぎて日本ではあんまり受け入れられなかったのか、走ってるのをあんま見かけない。これとフィアット ムルティプラ[6]は全然見ない(笑)。

後 ムルティプラって、ウーパールーパーみたいな顔してかわいいですよね。

B そうなのよ。見た目が超ユニーク。でも、実は前に3人乗れるから、子供がいる人には超おすすめなんだよね。

後 お父さんお母さん子供で前にギュッて3人乗ってたらオモロいですよ(笑)。

B そういったクルマに、あえて乗りたいって気持ちもあるんですよ。例えば、プジョー206[9]とか。昔はすごく売れて、いっぱい走ってたのに、いまは誰も見向きもしない、ちょうどミゾにいるクルマ。

B いいね、ミゾ車(笑)。玉数はあるのに需要がないから安いっていう。クルマ初心者のシティボーイにちょうどいい。フィアット グランデプント[8]とか。日本で全然売れなかったけど、デザインはジウジアーロだし、僕はすごく好き。アバルト仕様もあるけど、何でもないやつが僕は好きで。あと、フォルクスワーゲン アップ![10]も超いい。初期型のやつ。

後 いいっすよね。プロダクトとしてのデザインがいい。後ろ姿が印象的ですし。

B ずっと欧州車に乗ってて思うけど、日本車が絶対に越えられない線ってやっぱりあるなって。いまの日本車が劣ってるわけじゃないけれど、でも、日本車とは決定的に違う「何か」は確実にあって。それは、具体的に見えるものじゃなく、運転して「そう感じる」としか言えないけど、そういった「決定的な違い」が小型車には如実に出てると思うんだよね。

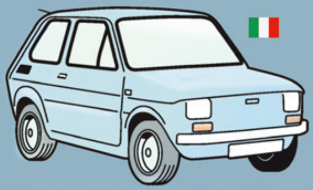
後 数値には表れない部分ですよね。

B そう、体感。フィーリング。運転席に座ったとき、ハンドルを触ったとき、エンジンをブンと回したとき。これはホントにすごく感じる。やっぱ、クルマに対する根本的な思想が違うと思うし。日本車は、どっちかというと、便利さを追求してきたじゃない。小物入れがいろいろついてて気が利いてるとか。でも、ヨーロッパ人からすれば、そこまで便利じゃなくていい、って部分があって。だから、クルマに初めて触れるシティボーイは、そういうのを感じてほしいと思うんだよね。それは例えば、メイド・イン・

いつか乗りたいあの車。

16. ランチア テーマ V6

1984年に登場。サーブ900やフィアット クロマ、アルファロメオ164とプラットフォームを共同開発するプロジェクトから誕生。基本デザインはジウジアーロ。内装の一部はイタリアの老舗家具メーカーが担当するなど高級感溢れる仕上がりに。後藤さんもこの内装に心が惹かれたそう。ちなみに「テーマ8.32」はフェラーリ308のV8エンジンを搭載。

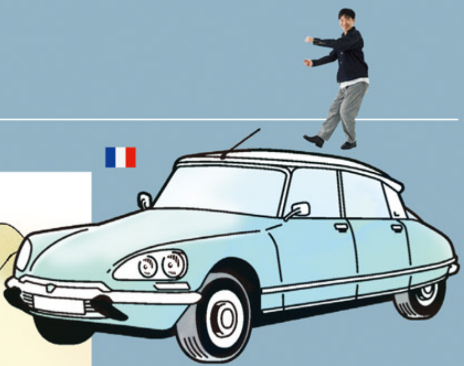


17. フィアット126 ジャンニーニ

チンクエチェントの後継車として1972年に登場。全長3054mm、全幅1378mmの小ささで、イタリアでは「バンビーノ」の愛称で親しまれた。エンジンも600ccなので日本では軽自動車として登録できる。Boseさんのオススメは老舗工房「ジャンニーニ」によるチューンナップモデル。中古車サイトでたまに見かけるものの値段は「ASK」。高そう。

15. マーク3 ミニ 1000

1959年から2000年にかけて造られていたクラシック・ミニ。Mr.ビーンの愛車MK Ⅲ(マーク3)は'69年から'76年まで製造。ちなみにMr.ビーンことローワン・アトキンソンは大のクルマ好きで、マクラーレンF1やランチア デルタHFインテグラーレ、ホンダNSXなどをコレクションするエンスー。運転もめちゃくちゃうまく、カーレースに出場したり自動車雑誌で執筆したりも。

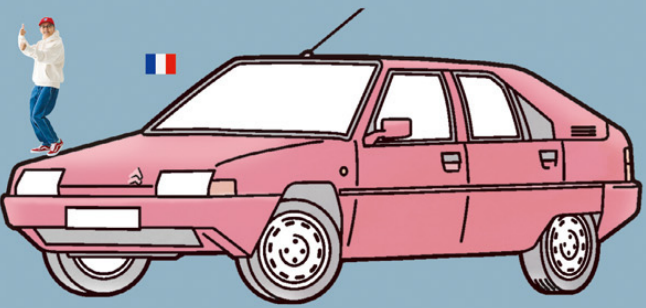


13. シトロエン DS

1955年から'75年まで製造。1960年代初頭にはフランス大統領の公用車として使われていた。「宇宙船」と呼ばれた前衛的な流線形ボディはフラミニオ・ベルトーニがデザイン。シトロエン独自の柔らかな乗り心地を生み出す「ハイドロニューマチック・サスペンションシステム」はDSから搭載。同システムは2015年発売のC5まで使用されていた。

『Mr.ビーン』

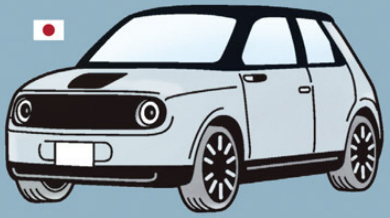
'90年から'95年にかけてイギリスで放送されたコメディドラマの名作。主人公ビーンの愛車ミニは第1話ではオレンジ色のモーリス製MK Ⅱだが作中で全損。第3話以降には左のMK Ⅲが登場する。



14. シトロエン BX

1982年に登場。それまでの曲線的なシトロエン車とは真逆の直線的でシャープな造形が特徴で、デザインしたのは、ランボルギーニ カウンタックやディアブロ、ランチア ストラトス、ルノー サンクなどで知られるマルチェロ・ガンディーニ。大幅なイメージチェンジが人気を呼び、ヨーロッパではベストセラーに。プジョーとの合併後の新生シトロエンの象徴とされ歴史に残る名モデルとなった。'94年の生産終了までに231万5739台が販売された。バリエーションは、5ドアハッチバックと5ドアステーションワゴンのブレークがある。

やっぱり気になるEV カー。



18. ホンダ e

2020年に登場したハッチバック型の電気自動車。全体的に丸みのあるフォルムで愛着のわきやすい柔らかな表情をしているのがポイント。どことなく初代シビックの面影がある。スマートフォンとの連動はもちろんCMS(カメラミラーシステム)を標準装備。カメラによる車両後方の映像がサイドミラーに表示され、後方確認ができる。30分の充電で200km走行可能とのこと。

USAのゴワゴワしたスウェットを着るのと一緒で、「味わい」だと思うんだ。

後 欧州車はキャラが立ってますもんね。性能はレンジローバーよりトヨタのランドクルーザーが勝る部分はもちろんあるけど、道具として持つなら、やっぱりレンジがいいなって。それはホント、ちょっとした感覚の違いなんですけど。ていうか、実は僕、最近もう一台買ったんです。ランドローバー レンジローバー。'00年式のセカンドレンジなんですけど。

B そうなんだ!!

後 シートが革なんで、僕がいままで乗った中でいちばん高級です。「あ、すごい、パワーウィンドーだ!」って(笑)。

B あはははは。え、何色?

後 水色です。ボルボ、アミ、レンジ、いま持ってる3台、全部水色です。

THEME 4 映画の中の気になる車。そして、いつか乗りたい憧れのあの一台。

B 後藤くん、レンジいったかー。おじさんちょっと置いてかれたなあ(笑)。

後 あはははは。スウェーデンの映画で『幸せなひとりぼっち』っていうのがあって。隣に住んでるおじさん同士、ボルボ派とサーブ派でどっちがいいクルマに乗ってるかを競い合うんです。最初はボルボ140サーブ96[11]で、時代が変わるごとにお互いグレードアップしていく。こっちがサーブ900にしたら隣はボルボ960とか。で、ある日、ボルボの人がBMWに乗り換えちゃうっていう。

B 突然ドイツかい(笑)。

後 で、もうええわ、っていう(笑)。

B サーブが出てくる映画というと、『サイドウェイ』っていうロードムービーがあって。赤いサーブ900 ターボ16 カブリオレ[12]が出てくるんですよ。あれ? 『ドライブ・マイ・カー』の元ネタじゃない? って。話の内容は全然違うけど。

後 サーブもいいクルマですよね。

B いい。でも、サーブって会社自体がもうないんだよね、残念なことに。バブルの頃にすごく流行って、一時期、東京はサーブだらけだったもん。いまはすっかり見かけないけど。

後 そういえば、前に、『コントが始まる』っていうドラマをやってたんですが、劇中、シトロエン BX[14]が出てくるんです。お金のない若手芸人が安いBXを買って足代わりに乗るという設定で。単なるボロ車扱いなんですよ。僕らからすれば、え、BX? それ欲しい! って(笑)。

B だって僕、いますごくBXに乗りたくて、毎日探してるもん。乗るならいまがラストチャンスだし。そういうので言うと、いま何に乗っておきたい?

後 いやもういっぱいありすぎて。BXはもちろん、ルノー サンク アルピーヌも乗りたい、ランチア テーマ[16]のV6も乗りたいし。とはいえ、近い将来、EV車も視野に入れんとあかんのかなとは思ってて。それも興味はあるんです。

B ホンダ e[18]とかね。日本車も、日産なんかはこれから10年の間で新車の半分はEVにするそうで、EV化が進むのは既定路線だもんね。でもだからといって、いま造ってるクルマや残ってる中古車を壊す必要はないわけで。いまのクルマが50年後も走ってていいわけじゃん。

後 アミは50年ものですからね。

B そう。なにからなにまでEVにするんじゃなく、中古車を大事に直しながらずっと乗るのもエコなんだし。僕としては、これからのクルマが全部電気になってしまうとしても、現行のガソリン車もずっと残っててほしい。軽自動車なんてむちゃくちゃ燃費がいいわけだから、そのままいてもいいと僕は思うんだ。

後 そのとおりですよね。

B で、後藤くんの最終目標は?

後 DSですね。シトロエン DS[13]。

B やっぱそこだ(笑)。

後 DSに似合う大人になりたいっす。

B 僕はちっちゃいのが好きだから、ミニ[15]も乗っておきたいな。旧ミニ。『Mr.ビーン』じゃないけど、僕もミニをゲタ代わりにラフに乗りたいんですよ。……あ、そうだ、後藤くんにピッタリのがあるよ。フィアット126ジャンニーニ[17]。

後 あ、いいですねえ!

B 4台目の水色に、どう?

クルマのコラム、大集合。

PCCF（ポパイ カー クラブ フォーラム）

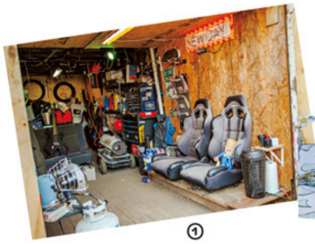
POPEYE_ CAR_ CLUB_ FORUM_

ポパイカークラブ！ それはポパイの誌上で結成された、車と自由を愛するシティボーイたちによるカークラブ。今日も世界中の会員たちから気になる話題が続々到着。古今東西のネタを集めた、1度限りの会報誌の始まりだ！

ガレージはブルックリンのレッドフック地区にある。以前は路上で修理を行っていたそうだ。「集まれる場所ができて、すべてが変わったよ」

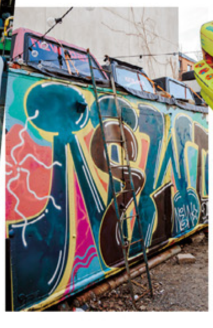
NEW DAY MOTOR CLUB

アートギャラリー「Entrance」を営むルイス（右から2人目）とバンドAnamanaguchiのメンバーでもあるアリー（左下）によって2018年に始動。ピーターなエンジン駆動の乗り物を愛する、NYの若きクリエイターが集う。


①

②

③


④

⑤

秘密基地のようなNew Dayのガレージ（①、④）に潜入！　コンテナにはペインターのジャスティン・ヘイガーによるペイント（ページ右上写真）があったり、写真家ニック・セティとのコラボカー（⑤）が鎮座する。アリーはツアー先で現地のカー用品店に立ち寄ってイナタイものを買うのが趣味で、その戦利品たち（②）も。不定期で作るマーチ（③）はほとんど一点もの。

photo: Takeshi Matsumi (1), Shu Yamamoto (2) text: Shimpei Nakagawa (1), Koji Toyoda (2) edit: Koji Toyoda

①英国大手ガソリンスタンド「BP」の’70～’80年代頃のステッカー ¥2,800 ②イタリアの自動車部品メーカー「マニエッティ・マレリ」の’70～’80年代頃のステッカー ¥2,700 ③世界的なタイヤメーカー「ミシュラン」の’80年代頃のステッカー ¥2,300 ④デンマークの音響機器メーカー「バング＆オルフセン」がスポンサードした「サーティース・レーシングチーム」のステッカー ¥3,200 ⑤ステレオメーカー「BOSE」の’80～’90年代頃のステッカー ¥2,500 ⑥レイモン・サヴィニャックが手掛けた「ボルボ」のステッカー ¥2,900 ⑦’70年代イタリアの速度規制ステッカー ¥2,400 ⑧1972年のモンテカルロ・ラリーで、ピレリタイヤを履いたランチア・フルビアが優勝した記念ステッカー ¥2,700 ⑨’80～’90年代のシトロエンのコンパクトカー AXのステッカー ¥2,400 ⑩バイエルンのクラシックメルセデス専門の整備工場のステッカー ¥3,000 ⑪’80年代トヨタバルーンチームのステッカー ¥2,600 ⑫オランダ語版のフォルクスワーゲンのステッカー ¥2,500（すべてデカールバッジ Instagram: @tuchiya10）

COLUMN 2

クルマをお手軽にドレスアップしてみない？

車をセンスよくドレスアップするなら、ステッカーカスタムが手っ取り早い。インスタグラム上の専門店『DECAL BADGE』には、上のようなナイスなステッカーばかりで、どれを貼ろうかな？と考えるだけでウキウキしてくる。でも、一体どう貼るのが正解なの？ 店主の槌谷智之さんに聞くと、「例えば、ドイツ車のメルセデスなら、お隣フランスのパーツメーカーのステッカーを貼って、フランス国内でフランス人が乗っている体にしてみる。そんな変化球なカスタムがお洒落だと思います。逆に、別のメーカーのステッカーを貼ったり、ドイツ車にドイツの国識別ステッカー（車を登録した国を表すもの。外国で運転するときに貼る）を貼るのは避けたいところ。フロントグリルにバッジ（下写真）を付けるのも玄人感が出ておすすめですよ」。1枚3000円弱。多少のセンスがあれば、簡単にマイカーを趣味車っぽくメタモルフォーゼできちゃう。ホイールやステアリングを替える前に試してみよっと。

上／ロンドンの「The Royal Automobile Club」が1967年に主催した国際ラリーの記念グリルバッジ¥25,000 下／フランス国旗のグリルバッジ¥16,000（ともにデカールバッジ）

COLUMN 1

NYのBeaterを蘇らせる「New Day Motor Club」って？

憧れのクラシックカーでもなければ、安心・堅実な現行車とも違う。「New Day Motor Club」がこよなく愛するのはBeater（ビーター）な車。ビーターとは訳すると〝ボロボロ〟なのだが、彼らのガレージには、擦り傷やサビなんてのは当たり前、開いた穴をテープでふさぎ、パーツのぐらつきもそのまま、といった具合の車が並び、バリバリ現役の愛車たちだという。リーダーのルイスとアリーに聞いた。そもそもなぜビーターに？

「まず安いこと。黄色のGEOのトラッカーは5万円だったし、同じくGEOのメトロなんてビール1ケースと交換したんだ。それを馴染みのあるメカニックたちに学びながら、自分たちの手で修理して走れる状態にして乗るのさ。正直、止まることもある（笑）。でも、移動や目的地に着くことだけではなく、すべての過程を楽しむことこそが俺たちの目的だ」

メンバーの車が止まれば、手が空いている誰かが助けに行くのも活動の一環。「クラブに理解を示してくれる整備工場があって、どんなにボロボロでも車検を通してくれる」とか「本来土地がバカみたいに高いNYでこんなスペース出てこないけど、友人づてに格安で見つけられた」とか、繋がりや創意工夫で不自由さを楽しんでいる様子だ。できないじゃなくて、どうすればうまくいくか。ビーターが教えてくれることは、車の面白さだけじゃないのは間違いないね。

“ボロボロ”だったらいいというわけではなく、セレクトにはしっかりこだわりがある。GMとスズキが手を組んで立ち上げたGEO（ジオ）のトラッカーは四輪駆動でパワフルだけれど小さく小回りが利き、あらゆる環境に適応するためオススメ。ミュージシャンでメカニックのクリスのベンツはメイン州にてジャンク品を格安で購入し、現地で自ら修理して乗って帰ってきたとか。

COLUMN 3

ラッパーと車の間柄って？

ただひたすら、ヒップホップアーティストと車の写真や動画だけをポストし続けるインスタアカウントがある。フォロワーの数はめちゃくちゃ多いわけじゃないのに、その中にはTalib KweliやIce-Tなんてビッグネームも！　気になるそのアカウント@refresh.eraにDMしてみると、投稿主だという南カリフォルニア在住のエドリスが二つ返事で取材を快諾。元はインスタグラムもない頃から趣味で集めていた画像を、友達や車仲間と共有するために投稿し始めたんだそう。そもそも、車とヒップホップの関係って？

「ヒップホップが生まれた’80年代、ストリートのアイコンといえばハスラーやドラッグディーラーたちで、派手なジュエリーにハイブランドの服、そして高級車っていうのが彼らのスタイルだった。初期のラッパーたちはそういう地元のアイコンにインスパイアされたんだ」

その後ヒップホップの広がりとともに西海岸のローライダー、南部のドンクと、車のスタイルも進化。現在も、自ら部品を集めて修理するほどのヴィンテージカーマニアとして知られるCurren$yや改造魔として悪名高い（？）Will.I.Amなど、ラッパーと車の話題は尽きない。推しのラッパー&車のジャケも4つ選んで紹介してくれたけど、この本人&愛車のポートレートもいい感じだね。

photo: Jon Arcinas, Shu Yamamoto (still)　text: Hikari Hakozaki

Selected by
Refresh Era

某ホテル勤務のエドリスが運営するインスタグラムのアカウント。高級車からマニアックなカスタム車、リアルなカーギャザリングの様子まで、ラッパー＆車のビジュアルを自在にポスト。

Unfinished Business (1989)
EPMD

「写ってるのはゴールド・ホイールの3代目シボレー・カマロと『Gotti』のレアなホイールのメルセデス・ベンツW124。車本体だけじゃなく、アクセサリーのカスタムで勝負してるね」。ちなみにEPMDのパリッシュ・スミスはRefresh Eraのフォロワーだとか。

Sittin' On Chrome (1995)
Masta Ace

「背景にあるバーガーショップを含めて、ベイエリアのカーカルチャーを象徴するようなイラストだよ。カーギャザリングってまさにこんな感じなんだ。真ん中に描かれてるのは本人の愛車だったシボレーのサバーバン。トラックも低音強めでカーステレオ向きだね」

I Got That Work (2000)
BIG TYMERS

「彼らは当時テレビでジェット機の形にカスタムした車を登場させたり、ツアーではステージ上でランボルギーニを回らせたり、まさにブリンブリンの全盛期って感じだった。このジャケはロールス・ロイスのグリルに自分たちのレーベルのロゴを乗せちゃってる」

Eyes On This (1989)
MC LYTE

「MC Lyteはちょいちょい車好きっぷりを覗かせてて、このジャケではポルシェ カレラの2台の色と、着ている服の色を対比させてるのがいいよね」。彼女の愛車は日本でもバブル期に一世を風靡したBMW E30 3シリーズの真っ赤なモデルだったそう。

photo: Ryan Cookson (4), Shu Yamamoto (book) text: Koji Toyoda coordination: Hiroko Yabuki (4)

PCCF

RYAN COOKSON “TELL THEM ABOUT ME”

メルボルンの出版レーベル「KNOWLEDGE EDITIONS」よりリリースされたBMWスピニングカルチャー初の写真集。カバーデザインと折り込みポスターは、泣く子も黙るNYのアーティスト、ハッサン・ラヒム作。ライアンのウェブでは、BMWスピンの短編映画が観られるぞ。http://ryancookson.com/short-films

COLUMN 4

BMWでスピン！

オーストラリアの写真家、ライアン・クックソンの作品集『テル・ゼム・アバウト・ミー』を手にとれば、ページを捲る手が止まらないだろう。なんてたって、BMWのセダンでスピンしまくる写真がひたすら続くんだもの。しかも、子供も大人も皆、このクレイジーな〝遊び〟に観客として熱狂している し……。一体何なのこれ？

調べてみると、これは南アフリカのソウェト地区で発祥したカーカルチャー。その名もBMWスピニング！ 現地のスピナーと生活を共にしたライアンによれば、もともとは'80年代後半に地元ギャング団の弔いの儀式だったものを、〝遊び〟に飢えた若者たちが真似するようになったのが始まりなんだとか。面白いのは、'80年代東京で〝六本木のカローラ〟と呼ばれたBMW E30型（325iS）が、グーシェ（現地のスラングでQUICKの意味）という名でスピナーに崇め奉られていること。そんな最高の一台を駆って、路上でスピンを始めれば、家という家から人が飛び出てきて、それを囲んでのお祭り騒ぎ。明確なルールや勝ち負けはなく、ドライバーはとにかくエグいスピンをキメて、観衆を熱狂させるだけ。同乗する補助ドライバーも、ボンネットに乗ったり、箱乗りしたり。荒馬のようなBMWの上で、路上のフェスを盛り上げる。これはもはやモータースポーツ版のロデオ。そして、スピナーたちは南アフリカに現れた現代のカウボーイといったところか。その狂乱に満ちたカルチャーをこの写真集とYouTubeで覗いてみれば、キミもスピンしたくなるはずだぜ。

COLUMN 5

デニスカーサービスの2桁ナンバー収集活動。

街をパトロールするときはグラフィティのタグだけじゃなく、車のナンバープレートに注目してほしい。もしも、それが2ケタナンバー（地名の横の分類番号が2ケタ）だったら、それはかなり貴重な一台。なぜなら2ケタナンバーは'98年に廃止され、以降は3ケタに。おそらく1オーナーで20年以上もメンテしながら、たった一台に惜しみない愛を注いでいることの証しなのだ。旧車を題材にしたTシャツを手掛ける〈デニスカーサービス〉の運営者であり、グラフィティライターのSECTさんは、そんな車を見つけては直接アポ入れ。写真を撮り、オーナーの話に耳を傾け、記録に残そうとしている。いわば、2ケタナンバーの保全活動。一部はインスタで公開しているけれど、数が揃った暁には作品集にする予定！ 昭和遺産のような車たちを守り、若者へ引き継ぐ橋渡し役になれればと考えているそうだ。2ケタを発見したら、SECTさんに報告だ！

②

①

⑥ ⑤ ④ ③

SECTさんが捕獲した2ケタナンバーたち。① STI（スバルテクニカルインターナショナル）チューンを定着させる存在になった、'95年式スバル インプレッサ WRX タイプRA STI。② ラリー界のレガシー、'95年式ランチア デルタ エボルツィオーネ。③ 根強い人気を誇る日産の名車、'92年式日産スカイライン GT-R BNR32。④ 当時は「サイバースポーツ」がキャッチフレーズ！ '89年式ホンダ CR-X 1.5X。⑤ ジュリーをCMキャラに起用し、大ヒットを飛ばした昭和のスポーティカー、'84年式日産ブルーバード TURBO SSS-S。⑥ 通称ハチロク。漫画『頭文字D』で人気を博した、'84年式トヨタ カローラレビン GT-APEX。

DENISE CAR SERVICE

その昔、NYに存在したカーサービス会社のチラシをサンプリングした〈デニスカーサービス〉のTシャツ。本人の愛車スバル インプレッサ WRX STIバージョンは幻の一品。

COLUMN 6

ベルリン国際映画祭の熊を描くのは、救急車のオーナーだった。

世界三大映画祭のひとつ、ベルリン国際映画祭。'21年と'22年のキービジュアルである熊をデザインしたアーティスト、クラウディア・シュラムケさんの愛車はなんと救急車！「旅行用の車がほしくてね」という彼女は、「AutoScout24」などの中古車サイトで〈フォルクスワーゲン〉のトランスポーターを探す中、この救急車に出合ったという。ドイツじゃ働く車が割と普通に買えて、地方で見つけるとリーズナブルなんだって。全高2600㎜、全長5107㎜とワイドな車体はインパクト抜群。後部座席が広くフラットで、カップボードなど収納スペースがあるのも救急車ならでは。キッチンとベッドルームが合体したキャンピングカー仕様に改造して快適そうだ。「丈夫で実用的。今年の夏も遊ぶのが楽しみ！」

'22年に開催された『第72回ベルリン国際映画祭』のフライヤー。期間中はBをメガネに見立てたポップな白熊が街中をジャックした。

運転席後ろの仕切りを取り外して、〈イケア〉で購入したスパイスラックやキッチン用品を収納できる戸棚を設置。もともと備わっていた白い戸棚は、薬や医療用品用に使われていたとか。後部座席を倒してトランスポーター専用のマットレスを敷けば、ベッドに早変わり。「ここで料理もできるし、寝泊まりもOK。のんびりくつろげる空間で気に入ってる」

photo: Rie Yamada (6, 7) text: Yukiko Yamane (6, 7), Koji Toyoda (8)

COLUMN 7

コーヒーと車。毎月最後の日曜は早起きしてespresso GTへ。

ベルリン東部リヒテンベルク地区にあるコミュニティガレージ「Craftwerk Berlin」で名車が集まるイベントがあると聞きつけ、日曜日の朝9時に訪ねてみた。カリフォルニアで行われている早朝カーミーティング「Cars and Coffee」をもとに誕生した「espresso GT」には、クラシックカー、オフロード、ワンオフ、ハイパースポーツカー、バギーなど毎回テーマに沿った車が大集結。この日は'60〜'70年代の車が多く見られた。「名車をみんなで楽しむオープンなイベントなんだ。車や知識の有無に関係なく、ビギナーからコレクターまで誰でもウェルカムだよ」とオーガナイザーのマックスが語るように、会場では車をきっかけに自然とコミュニケーションが生まれている。若者たちが気軽に先輩オーナーたちと情報交換できる雰囲気もいい感じだ。おいしいコーヒーと焼きたてのクロワッサンを片手に、名車を愛でる。こんなリラックス感溢れる日曜日が過ごせるなら、頑張って早起きするのも納得だな。

espresso GT

4〜10月の毎月第4日曜日、午前9〜11時に「Craftwerk Berlin」で開催しているカーミーティング。ベルリンのクラシックカー愛好家たちが集まるコミュニティとして人気。Instagram: @espresso_gt

ガレージ前の駐車場には、1998年モデルまでのクラシックカーがずらりと並ぶ。なかにはブリジット・バルドーが所有していた〈ジャガー〉もあった！ 眺めているだけでもかなり楽しめる。

COLUMN 8

ボロボロの車に乗るのはなんで？

見よ！ このボロボロの車を！ 旧車といえど、ここまで年季の入った車には、そうそうお目にかかれないだろう。これは、古着店『ステップアヘッド』の店主、長岡雅裕さんの愛車。1954年式のGMC100というモデルで、相当レアものらしい。でも、どうしてオンボロのまま乗るの？

「僕が古着屋だからですかね。やっぱりジーンズもTシャツもボロいほうがかっこいいじゃないですか。車も同じで、歴史の中で年輪を刻んだエイジングは何物にもかえがたくて。この手のトラックは、わざとサビ加工を施したものもありますが、僕のはアメリカの荒野が育んだ自然熟成品。塗装のハゲも錆もオリジナル・ヴィンテージなんです」

なるほど！ いい色落ちをしたジーパンに愛着が湧くのと同じ心理なのか。そう考えると、ボロボロの車が格好よく見えてくるね。

元は、車高の高いザ・トラックだが、あえて長岡さんはシャコ短にして乗る。これもローライダーの一種らしい。

GMC 100

アメリカ製トラックやバンの代表格GMCが、1954年に生産したピックアップトラック。タマ数はかなり少なく、状態のいいものを探すのは至難の業。似たような面構えで、比較的流通数の多い「シボレー」の「3100」というクラシックトラックもあるぞ。

シボレーのコルベットと同じ35馬力のLS1エンジンに変更。こんな見た目で、時速150kmは出せるらしい。

photo: Takeshi Matsumi (9), Naoto Date (10) text: Shimpei Nakagawa (9), Keisuke Kagiwada (10)

①'90年代の『カー・マガジン』はデザインやフォントがインスピレーション源に。② スバルのキャップは「なぜ牛柄なのか？　理解が難しいそのデザインがいい」。③ 三菱の作業着は、社員証用のポケットが面白くて購入。④ F1のバッグは〈アシックス〉。「当時〈ナイキ〉と同社がもめていたみたいで、この時代のアイテムには"Don't Just Do it"のスローガンが使われていたみたい」

James West 〈EasyGo〉ファウンダー

ジェームス・ウェスト｜1990年、ノースカロライナ州出身。日本企画の〈スリクソン〉の靴下を来日時に入手し、それを参考に2020年に〈EasyGo〉をスタート。Dreams West名義で音楽活動も行う。

PCCF

Passion Red

FIA世界ラリー選手権において、1996年から4年連続ドライバーズタイトルを獲得したトミー・マキネンが乗っていた三菱のランサーエボリューションのカラートーンを再現した。$14

GC8

ブルーとイエローのカラーリングは、FIA世界ラリー選手権にて日本車メーカーで初めてとなる3年連続でマニュファクチャラーズタイトルを獲得したスバル インプレッサ555より。$14

COLUMN 9

NYのストリートで日本車愛を貫く〈EASYGO〉のジェームスについて。

掘り性に裏打ちされた確かなデザインとクオリティで、今や多くのニューヨーカーの足元からチラ見えするソックスブランド〈EasyGo〉を手掛けるジェームス・ウェストは、周りも納得の'80〜'90年代の日本車好き。地元の書店にあった"ジャパニーズマンガ"コーナーで『頭文字D』にたまたま出合い、そこに登場する車や走り屋カルチャーに魅了され読み漁った少年時代。その好きが高じて訪日し、憧れの日産スカイライン GT-R R32型をレンタカー。栃木、群馬など聖地巡礼までやってしまった。自宅にお邪魔すると、主にヤフオクで手に入れたという日本車にまつわるコレクションが次々と出てくる。自分のサイズのものはほぼないけど、面白いとついつい買ってしまうとか。その好事家精神は「ものづくりにおいて何かをリファレンスにする場合、本当に自分が好きなものしか俺にはできない」と語るように、〈EasyGo〉のアイテムにも色濃く反映されていて、憧れのインプレッサやランサーエボリューションⅥのアイコニックなカラーリングでソックスを作ったことも。次はどの日本車が採用されるのか？　乞うご期待。

ガンメタのネイビーが目を引くADマックスワゴン。走行距離は20万㎞程度で調子は抜群らしい。荷台は三上さんが改造しカヤックなどが入れられるようになっている。

COLUMN 10

渋谷の路上に現れた、ゲリラ移動販売車の謎。

かつて車の荷台でミックステープを売る黒人がよくいたけど、まさにそんな感じ。

ある日曜、渋谷の某所に現れたのは日産ADマックスワゴン。普通乗用車なのにリアセクションに荷台がついている、フルゴネットと呼ばれるタイプだ。と、中から怪しげな外国人のおじさんが登場し、荷台を開いて露店を始めるではないか。こ、これは絶対ヤバいやつを売っている……と思いきやさにあらず。おじさんは、イラストレーター三上数馬さんをはじめ、さまざまなアーティストを支援する"Cyber Actress"略して"CATS"という団体を運営する人だった。名前はザミさん。今日は同団体で扱っているアイテムを販売するのだという。アーティストグッズの露店なんてエクストリーム！

「この車は三上が知人から譲り受けたものだ。彼自身がいじって自家用車として乗っていたのだが、CATSでも使わせてもらうことになった。ネット販売が基本だから、お客さんと顔を合わせることはない。このワゴンはそれをするのにもってこいだから重宝しているよ。これからもいろんな場所でゲリラ販売していきたいね」

CATSの中心的なプロジェクトである「Cyber Pottery Project」「Three Pillars Project」「P.V.C TREE PROJECT」のグッズの他、イラストレーターのMASAYOSHI SUZUKIさん率いる「Hi-Wheelers」のZINEや、デザイナーの大田拓未さんの手掛けるブランド〈PP_PP〉のTシャツなんかも並んでいた。① 「Three Pillars Project」のバンダナ¥3,000　②「Cyber Pottery Project」のTシャツ¥5,000　③ オブジェは時価

information

CATS は、2020年に発足したアーティスト支援団体。ザミさんが日本語ぺらぺらなのも含め謎に包まれている。露店イベントは不定期開催らしいので、こまめにInstagram (@cats_cyberact) をチェックしよう。

右が葛木良さんで、左はその父であり『ロッドモータース』代表の葛木誠さん。2人の後ろにあるのが、ドラッグレースの日本記録を出した'64年型コルベットだ。

お店でカスタム中のトランザム。シートが臙脂(えんじ)だったのを白に変え、車高を低くし、ホイールもチェンジしたそう。

原形をとどめないくらいカスタムされた'69年のコルベットもお店でメンテナンス中。外装のごつさや中にあるメーターの多さも含め、完全にバットモービル。

COLUMN

11 ホットロッドって一体何ですか？

映画『アメリカン・グラフィティ』を観たら、「一度はホットロッドに乗ってみたいなぁ」と誰だって思うはず。でも、本作に登場するカスタムされたアメ車がホットロッドと呼ばれているのは知っていても、その言葉の持つ実際の意味は知らない。教えてわかる人！

「大まかに言えば、車を自分好みにカスタムして遊ぶことを指す言葉ですかね。'60年代頃のアメリカにおいて、ガレージで自分の車のホイールを大きくしたりするところから始まっていると思います」

そう教授してくれたのは、アメ車専門カスタム&チューニングショップの老舗、『ロッドモータース』の葛木良さんだ。なるほど。その上、ホットロッドというとビジュアルの迫力に目が行きがちだが、真の目的はそこではないという。

「『アメリカン・グラフィティ』には、直線の公道でドラッグレースをするシーンがありますが、'60年代のアメリカでこれが若者たちの間で大流行していたんですよ。だから、とにかく速くするためにみんないろいろなカスタムをした。まずは強力なエンジンを載せ、そのパワーをしっかり生かすために後ろタイヤを太くし、太くしたらはみ出しちゃうからボディも作り替え……。そうやって、外装もどんどん変わっていったんです」

葛木さんが速さにこだわる理由は、ご自身がドラッグレーサーであり、日本記録保持者だからだ。

「僕の'64年型コルベットは、よーいドンで時速250㎞くらい出るようにカスタムされていますから、もう人間の乗り物じゃない（笑）。ホットロッディングの最終形態ですね。もちろん、店では速さのためだけではないカスタムもやっています。お客さんの中には映画を観て、『こういうふうにしたい』って人も多い。『ゴースト・バスターズ』のECTO-1みたいな車を作れますか？」とか（笑）。『アメリカン・グラフィティ』もそうですが、日本のホットロッド文化は、映画の影響が大きいですね」

ROD MOTORS

1977年にサンフランシスコで開業し、'81年に現在の場所に移転。'50年代から'80年代前半のアメ車のカスタム、チューニング、メンテナンスまでを行っている。オートマをマニュアルに変えてほしいなんていうマニアックな依頼も対応可。○神奈川県横浜市都筑区高山18-8 ☎045-942-2229 9:00〜20:00 不定休

PCCF

photo: Yutaro Tagawa (11), aflo (11), Jun Nakagawa (12)　text: Keisuke Kagiwada (11), Kazuyuki Ozawa (12)

ホットロッドな映画はコレだ！

Chevrolet Lumina

デイズ・オブ・サンダー　1990

ナスカー（市販車を改造してレースすること）に命をかけるレーサーを描いた本作は、『ロッドモータース』の葛木良さんが一番好きなスピード狂映画だ。トム・クルーズ演じる主人公が、ラストの手に汗握るレースで乗るのは'90年型シボレー ルミナ。熟練メカニックの手により速さだけが追求された仕様だ。監督のトニー・スコットは『トップガン』『アンストッパブル』など速い乗り物を描きがち。

Dodge Charger

ワイルド・スピード　2001

現在もっともアツいホットロッド映画といったら、『ワイルド・スピード』で決まりだろう。日本車もまぁまぁ登場するけど、やっぱり目が行くのはアメ車。とりわけ、ドミニクの愛車である、ボンネットにチャージャーを載せた漆黒のダッジ・チャージャーは一度観たら忘れられない迫力。『ロッドモータース』のお客さんにはこれとそっくりのダッジ・チャージャーを街乗りにしている人がいるそう。

Chevrolet Bel Air

断絶　1971

ストリートでの賭けレースをしながら旅する2人の青年を、ドライに描いた知られざる名作。2人が乗るのは'55年型シボレー ベル・エア。オンボロだが、ビッグブロックエンジンを搭載しており、エキゾーストサウンドはかなり暴力的。車体を手掛けた伝説的なビルダーのリチャード・リースは、当時運営していた自身のショップのTシャツを着て、ガソリンスタンドの店員としてカメオ出演している。

Mercury Monterey

コブラ　1986

シルヴェスター・スタローン演じる型破りな刑事コブラと狂信的ギャング集団"ナイト・スラッシャー"の死闘を描く『コブラ』で、コブラが乗り回すのはカーボンブラックのボディがイカす1950年型マーキュリー・モントレー。チェイスシーンでは、搭載されたNOS（亜酸化窒素を噴射してエンジンに爆発的なパワーを与える装置）を使用し爆走する。彼が冷めたピザを片手に運転する姿も素敵。

Cadillac

ゴースト・バスターズ　1984

幽霊退治会社「ゴースト・バスターズ」の3人が、出動するとき乗るのが、長い車体のECTO-1。屋根上に謎の機器が積まれているが、このベースは霊柩車＆救急車に特化した車メーカーのミラー・メテオ社が、1959年式キャデラックを改造したものらしい。霊柩車をホットロッディングして幽霊を退治しにいくというギャグなのかもしれないが、マニアック過ぎてたぶんほぼ伝わらない。

Ford Deuce Coupe

Buick

アメリカン・グラフィティ　1973

'60年代のアメリカ郊外を舞台に、車に乗った青年たちがナンパしたりレースしたりする、青春映画の金字塔。スピード狂のジョンが乗る、エンジン剥き出しの黄色い'32年式デュース・クーペは、映画史上もっとも有名なホットロッドだ。他にも、カスタムされたアメ車がゴロゴロ登場し、若き日にレーサーを目指していたというジョージ・ルーカス監督のクルマ愛がひしひしと伝わってくる。

COLUMN 12

このキッチンカー、只者じゃないぞ。

丸の内のオフィス街にも、今では昼時キッチンカーに列をなす光景は当たり前。あの箱の中から生み出されるおいしい料理に、今日はどれにしようかと迷うのも楽しみのうち。けど僕たちは、その箱の方にも興味津々なんだよね。軽トラックのキッチンカーも可愛いけれど、個性に欠ける。今回見つけたクルマたちは車両単体にも価値がある4台だ。街で見慣れたハイエースの、最初期の一台で鯛焼きが買えちゃったり。そもそもメトロやロデオなんて、その存在すら知らなかったし、フィアットムルティプラはやっぱり先祖も個性的！ 僕らが並びたいキッチンカーは断然こっちに決まってる。

Food Express & FEX COFFEE

ISUZU RODEO

INTERNATIONAL METRO VAN

16号沿いの横田基地の目の前で、キッチンカーと古着の店を営む横谷さん。アメリカで目にしたトレーラーの古着ショップを自分もやりたいと、衣食住をテーマにした会社を立ち上げ、まずは古着販売からスタート。そして次にこのいすゞのピックアップをキャンパーにしたロデオと、1950年代から'60年代にかけてアメリカで製造されていた貴重なメトロのキッチンカーで食を提供。となれば、次なる仕掛けは、クルマが家になるのかも。（Instagram: @lef_tokyo & @fexcoffee_foodexpress）

右から立飛ブルワリーのクラフトビール¥800、レモネード¥500、SA THÉ SA THÉの冷茶¥300

ロデオとメトロは立川のグリーンスプリングスに常設。チリタコス（ミート）¥700

Multi Cafe

チョコミントスムージー¥600、カフェラテ¥450

FIAT 600 MULTIPLA

1967年式のフィアット600ムルティプラから、おいしいコーヒーを提供してくれる谷内さん。「持っていたエスプレッソマシンを積めないかと試行錯誤。寸法測って手作りで、ようやく今のカタチに落ち着きました」。秘密基地感がいいね！（Instagram: @multicafe_coffee）

鯛焼きのよしかわ

一匹ずつ丁寧に焼かれた鯛焼きはひとつ180円。夏には、かき氷も楽しめる。

TOYOTA HIACE VAN

西武新宿線東伏見駅南口、アイススケート場前の広場に現れる青いボディの初期型ハイエース。えっ？ これがハイエース？ 国産車には見えないそのデザイン。「違う仕事でたまたま通りかかったクルマ屋さんの店頭で、偶然見つけたこのクルマに思わず手を出しちゃいました」とはオーナーで店主の吉川さん。レトロなスタイルと鯛焼きが、ベストマッチ！（Twitter: @yo2jyo）

COLUMN 13

〈ビュリー〉のラムダンとガソリンスタンドの顛末。

パリの街角に現れたミニカーのような丸い車。降り立ったのは〈オフィシーヌ・ユニヴェルセル・ビュリー〉の元オーナー、ラムダン・トゥアミだ。ラムダンといえば、トロッコのようなフィアット フェルベス レンジャーなどマニアックな車に乗るカーフリーク。'21年には「LVMH」へ会社の売却を発表したが、その少し前からなんとガソリンスタンドを始めていた。「小さい頃からガソリンスタンドをやるのが夢だった。子供の学校の近くにパリいち高いガソリンスタンドがあってな。廃業すると聞いて買い取ったのさ」。'21年夏にオープンした店は、道路脇に小さな給油機が佇むパリスタイル。キオスクには軽食やグラフィカルな雑貨も揃えた。と、ここで衝撃の一言が。「来てもらって悪いが、この店はもう閉める。戦争があってガソリンが高くなりすぎた。それに、これからは地球を守る動きをしないとダメだ。今まで乗っていたアンティークカーを売り、シトロエンのEVを買ったよ。ガソリンスタンドの前に電気自動車が止まってる。このプロジェクトの終わりにふさわしいブラックジョークだろ？」

オンラインではグッズも販売されていた。① オリジナルの店名入りトートバッグ。日本では見かけないハンドル付き。② オリジナルのパーカ。日常にガソリンを注入してくれそうな元気なイエロー。③ 食事や雑貨を入れるショッピングバッグもラムダンの事務所がデザインしたもの。

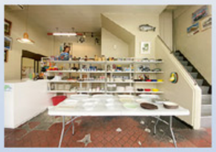
現在の愛車はフランスでは電気屋で買える（！）というシトロエンAMI。免許がなくても乗れて、新車でも7000ユーロという嘘のようなEV。

The Gazoline Stand

軽食はサンドイッチやホットドッグの他、フランスらしくクレープも。ラムダンが大好きなショコラショーに使うチョコは、フランスの老舗〈カカオバリー〉に特注するこだわりよう。他にも文房具に自転車のギアなど、ラムダンのおもちゃ箱のようなキオスクだった。「"こんなに面白いガソリンスタンドがパリにあった"ってアーカイブさ！」

The JB's

家具の他NYで買い付けた食器などの生活用品も。○長野県松本市城東1-1-7　☎なし　13:00〜18:00　月〜金休



松本城のお膝元で2021年にオープンした『The JB's』。スタンドをほぼ居抜きで使う店内には、『D&DEPARTMENT』出身で内装デザイナーでもある店主の鈴木崇之さん（通称ジャンボさん）が独特のユーモアとセンスで目利きした家具や雑貨が並ぶ。車好きらしく、ミニカーや古い車の写真も発見。今後は中古車の販売も計画中とか！

NōTO GENERAL STORE

カレーは1000円ほど。○岩手県遠野市上組町2-24　☎0198-68-3777　詳細はインスタ（@noto_general_store）を。

車にとってのガソリンのように、ゲストの元気をカレーで補充してくれるのが『NōTO GENERAL STORE』。月替わりカレーはスパイスから欧風まで多種多様。ガソスタらしい簡素な外観とは対照的に店舗部分は温もりある板張りで居心地抜群。古着バイヤーの経験もある店主の松田成人さんによるスーベニアも忘れずに。

ABCD STORES

店前の電話機は安福さんが自作。完敗です。○岐阜県大垣市林町1-43　☎0584-40-1232　11:00〜19:00　水休

輸入雑貨がひしめく『ABCD STORES』は、アメリカのスーパーの生活用品売り場をそのまま運んできたようなお店。オーナーの安福洋二さんはハワイで見たガソスタ横のコンビニに心惹かれるあまり、なんと自分たちでゼロから建ててしまった！　工法もアメリカ式で居抜きにはないオリジナリティ。ガソスタ好きにはたまらない。

広がってます。ガソリンスタンドなお店の輪。

コンクリートと鉄筋の四角いフォルム。広い敷地に車が並んで賑わう様子も、暗がりにポツンと電気が灯る夜の雰囲気も、ガソリンスタンドって場所には不思議な魅力がある。その感覚はパリだけじゃなく日本も共通で、全国各地でガソリンスタンドの跡地をお店にしちゃうムーブメントがひっそり進行中。長野、岩手、岐阜とローカルに根付く3店舗の店主に話を聞けば、独特の雰囲気から地元の人の溜まり場となり、ロードサイドのオアシスという役割は変わらない模様。パリのように都会に馴染む小さなガソスタも良いけれど、日本らしいインダストリアルな佇まいもやっぱり好きだ！

photo: Mai Shimmura (paris)　coordination: Masae Takanaka　text: Ku Ishikawa

COLUMN

14 カーミーティングって、一体どんなイベント?

21時。横浜のみなとみらいは轟音に包まれた。年代物のシボレーインパラに、車高を下げまくったアウディのA7、おしとやかなポルシェ 911 カレラ4やトヨタ クラウン GS121などなど、ありとあらゆるクールな車が続々とやってくる。みなとみらい観光に来ていたカップルや家族連れは、その異様な光景に踵を返したことだろう。とはいっても、いかちーなんて思うなかれ。これは若き車好きによる、若き車好きのための野外サロン。町田のベリーヤングなカークラブ「フリーリベラリスト」が、車にまつわるアパレルブランド〈カーサービス〉に熱烈なラブコールを送ることで実現したカーミーティングなのである。「カーミーティングって何? って聞かれることも多いんですが、イベントに集った車をただ眺めて、情報交換する健全な会合なんです。今日みたいに友達のカークラブとコラボすると、インスタだけで繋がった友達がわざわざ駆けつけてくれたり、新しい人と知り合えたり。輪がどんどん広がっていくんです。みんな車も音楽も洋服も大好きだし、先輩後輩関係なくわいわいと車のことを話しているのは最高の時間。青春ですよね」と、〈カーサービス〉デザイナーの橋本奎さん。今後は都内での開催も計画中らしいから、免許や車を持っていなくとも、臆せずその輪に入ってみよう。何といっても、これは新たな東京カーカルチャーのもっともディープな部分。車が好きになる良いきっかけになるはずだ。

photo: Naoto Date, Kei Hashimoto text: Koji Toyoda

CHEVROLET IMPALA 1959 柿野谷紘志さんの愛車

TOYOTA CROWN GS121 加藤滉大さんの愛車

TOYOTA CROWN GS131 椎野虎太郎さんの愛車

PORSCHE 911 CARRERA4 NEONSYRUPさんの愛車

CHEVROLET IMPALA 1961 大貫元さんの愛車

AUDI A7 吉田祐輝さんの愛車

VOLKSWAGEN JETTA 1991 栗田優さんの愛車

ROVER MINI 1989 ユリさんの愛車

CHEVROLET IMPALA 1968 廣田風人さんの愛車

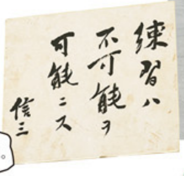
都市型ロープウェイ「YOKOHAMA AIR CABIN」が何度も行き来する、ロマンチックなみなとみらいの夜景。その袂の駐車場に、エキゾースト音やウェッサイなヒップホップを響かせながら集まりしやんちゃな車は総勢約40台! ここから海老名PAまでみんなで連れ立って、まったりとクルージング。

CarService 橋本 奎さん(左) & freeliberalist 吉田祐輝さん(右)

東京の若きカーカルチャーのシンボル、橋本さん率いる〈カーサービス〉と、町田を拠点に活動するカークラブ「フリーリベラリスト」のボス、吉田さん。2人の出会いは、渋谷のセレクトショップ『パルプ』で開催した〈カーサービス〉のインショップ。

慶應義塾體育會 自動車部

日吉キャンパスの奥の方。通称「イタリア半島」と呼ばれている眺めのいい高台の門の中。ここは単なる大学の自動車部というよりも、メーカーのファクトリーガレージと呼ぶにふさわしい佇まい。いや実に羨ましい！



右上はパイロンの間をクネクネと走り抜け、タイムと正確さを競い合うジムカーナの練習の様子。これが思う存分できるのは広い練習場を持つ慶應の強み。残り2種目、ダートトライアルは滑りやすい土のコースでタイムを競う競技で、フィギュアは車庫入れやS字にクランクといった、教習所で習うような基本操作の正確さとタイムを競うもの。練習練習！

photo: Takayoshi Takeuchi (15), Jun Nakagawa (16)　text: Koji Toyoda (15), Kazuyuki Ozawa (16)

COLUMN 15

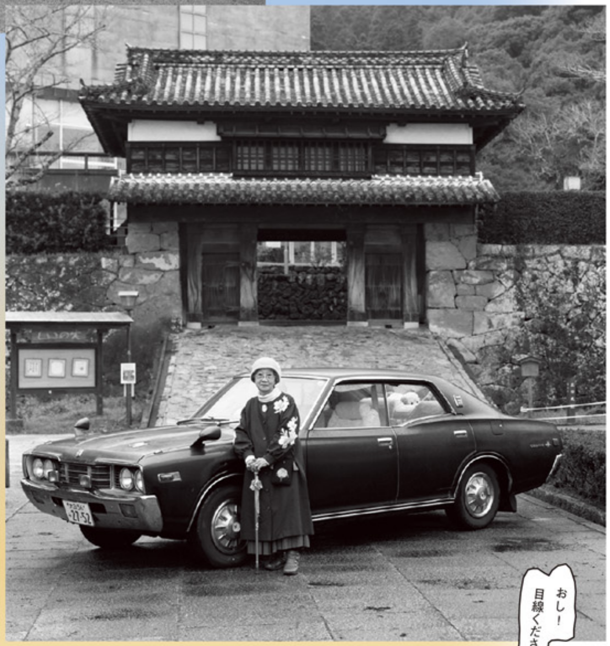
車と一緒に写真を撮ろう。「Car with us.」。

毎日の通勤はもちろん、週末は家族と共にどこかに出かけるための相棒。考えてみれば、車も家族の一員だ。ただの足だ、なんて悲しいことは言わないで、いつも健気にどこかに運んでくれる車に愛着があるならば、家族写真を撮るように思い出に残してみないか？なんて思ったのは、出張写真家・竹内貴誉詞さんの活動「Car with us.」を知ったからだ。

「4年前、たまたま友人を愛車のトヨタのランドクルーザー60と一緒に写真に収めたときに、ふと自分の中で腑に落ちまして。あぁ、車も家族の一部なんだって。それ以来、各地のギャラリーや店舗で開催する撮影会があるときに、ナイスな車に乗っている人がいたら撮らせてもらうようになって。ホームページ上に『Car with us.』というギャラリーを設けるようになったんです。嬉しいことにそれを見て、車と一緒に撮ってほしいと言われることも多くなりました。今度ランボルギーニを撮るんですよ」

4×5の大判カメラで、ドライバーと車の距離感を絶妙に掴んだモノクロ写真はものすごく素敵。これを見りゃ、誰だって撮ってもらいたくなるに決まってる。次の開催は鹿児島と宮崎。ロングドライブでもしながら、家族写真でも撮ってもらいに行こうかなぁ。

車と家族写真を撮るきっかけを与えてくれた友人カップルとランクル60。大阪のラボマン、勢井正一さんが手作業でプリントするから雰囲気も抜群。竹内さんの心に残る一枚は、大分の90歳を超えるおばあちゃんが嫁入り道具として預かり、45年間、大切に連れ添った'70年代のセドリック。



Car with us.

特定の拠点は持たず、各地で撮影会を行う写真家・竹内貴誉詞さんのプロジェクト。今まで撮影した車は累計160台。撮影料（カメラ撮影。コンタクトプリントのお渡し）1万3000円。巡回情報は、インスタをチェックしよう。Instagram: @gowasu0302

COLUMN 16

大学の自動車部に潜入だ！

クルマに青春をかける学生たちのクラブ活動事情を知りたくて、やってきたのは慶應大学日吉キャンパスの奥の奥。ここは今年で創部90年という長い歴史を持つ「慶應義塾體育會自動車部」のガレージだ。

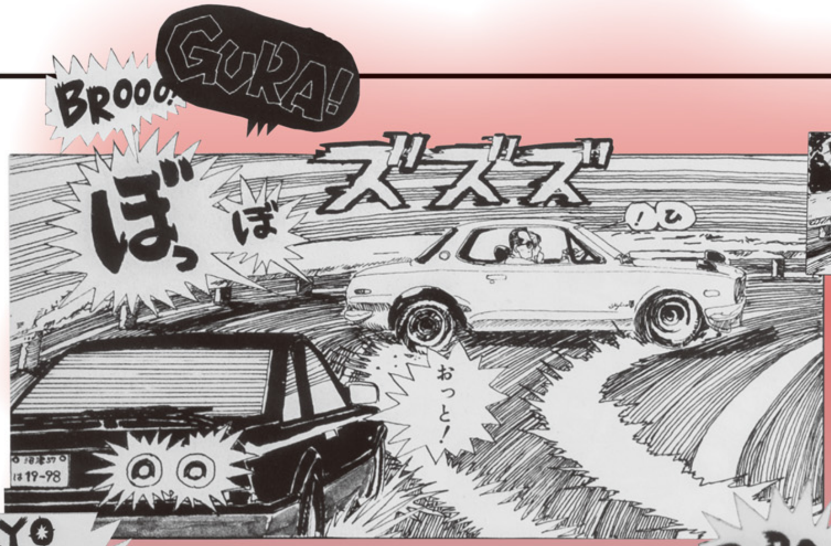
「全日本学生自動車連盟に所属する大学が『ジムカーナ』『ダートトライアル』『フィギュア』の3種目（詳しくは上で解説）で1年間競い合う、その大会に向けての練習とレース車両のメンテナンスが、主な活動内容です」。そう礼儀正しく話を聞かせてくれたのは、文学部で主将の小野徳馬さん。

お邪魔した慶應自動車部は、'21年全国2位の強豪。一度にクルマ10台くらいのメンテナンスが行えちゃうような、ビッグなガレージを持つ建物（2階に部室）と、奥には野球ができちゃいそうな広さの練習スペースまであるんだから、伝統校の貫禄を見せつけられた感じだ。構内で練習ができる大学は、そんなに多くないんだって。

「練習場では早慶戦も行われ、しっかり応援合戦もあります。免許がなくても入部可能、この春も頼もしい新入部員が入部してくれました。今年も頂点目指します！」

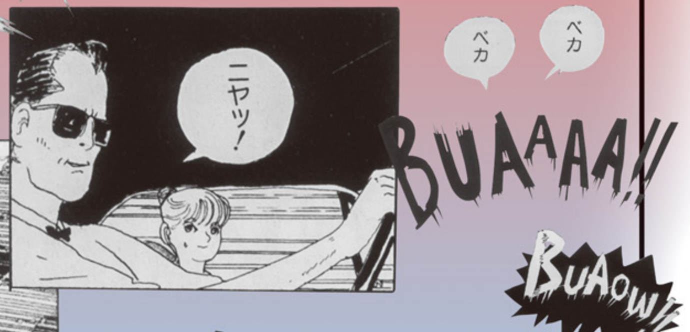
体育会系ならではの真剣勝負が、大学生たちのモータースポーツにも根付いているんだろうな。クルマで青春、カッコいいよね。

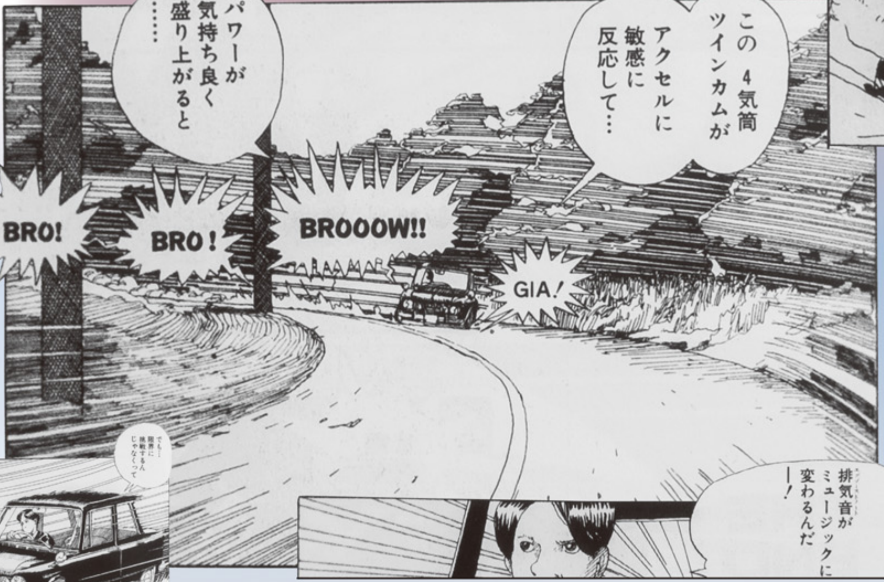
photo: Shu Yamamoto (book) text: Keisuke Kagiwada special thanks: Kosuke Ide



これが『GTロマン』の中心的な舞台となるカフェ『roman』。下のコマに登場しているサングラスの沢木がマスターだ。愛車は日産GT-R。

上はマスターが愛車GT-Rで、馬力的な差があるGT-Sをテクニックで抜くシーン。下は新入社員の青年が、仕事をサボってアルファ・ロメオ ジュリアスーパーでドライブするシーン。いずれも、乗り手たちが車と対話しながら走っているのが印象的だ。そして、その逐一が、まるでアメコミのごとき個性的な擬音とともに描かれる。西風先生の車への愛がなければ、こうはならなかったんじゃないか。





西風先生の助手席でインタビュー！

COLUMN 17

走り出したくなる漫画がある！

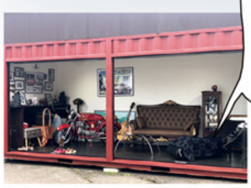
車は便利な移動手段だと高をくくっているうちは、その楽しみを半分も味わえてないのかも？ そんな疑念を抱いたのは、沼津のカフェを舞台に車愛好家たちの交流を描く、走り屋漫画の金字塔『GTロマン』を読んだから。作者は車やバイクにまつわる作品を多数発表し、自身も猛スピード狂の西風先生だ。ジャガーXJ-S、ホンダS800、日産GT-R……。1巻から錚々たる名車が劇中を疾走するのだが、すべての〝乗り味〟の違いが、ダイナミックな描写や英語も駆使した擬音で表現されているのがすごい。乗ったことがなくても手に取るように伝わってくる。

「ほぼ取材で乗ってから描いているからね。そうするといろんなことがわかるんですよ。例えば、ポルシェのバリオカムなんてギャーッて怒ったような音がする（笑）。逆に、ホンダのSシリーズなんかは高級時計みたいに精密にできているから、まったく違う音で。車には、そういうことを体感する楽しみもあるんだよって伝えたくて、いろいろ工夫しているんです」

劇中では峠道で自然発生する車同士のレースが毎回のように描かれるのだが、車のポテンシャルの差をものともせず、テクニックで勝敗が決まるのも痛快でたまらない。「実際、車の腕前はコーナリングでわかるんですよ。例えば、コーナーでブレーキをかけないなんてのは、よく知らない奴で信じちゃいけない（笑）。そういう技術は乗りながら研究するうちに身につくと思うけどね」。そんな先生に、シティボーイへのおすすめの車を聞いてみた。

「『スズキのカプチーノとか小さい車から始めてみれば？』と言いたいところだけど、今そのへんは値段は上がっているんだよね（笑）。まぁ、大事なのは欲しい車があったら誰の意見も聞かずに買うことかな。特に中古車は出合いだから」

実はこの取材、先生の運転によるディーゼルターボ車で峠道の疾走中に行われた。高等テクで2車線を使い分けながら、前の車をどんどん追い抜いていくその爽快さたるや！ 帰り道で疑念は確信に変わった。やっぱ車は速さでしょ。



箱根の山間にある『バイカーズパラダイス南箱根』では、西風先生の特製ガレージが見学できる。男の夢を詰め込んだかのようなゴージャスさだ。

最新シリーズが連載中！

GT ROMAN

1986年から断続的に続く『GTロマン』シリーズの最新章が、自動車雑誌『Tipo』で連載中の『GT roman ～LIFE～』。第1巻にはポルシェ911やアルファ・ロメオ ミト クアドリフォリオ ヴェルデ、日産GT-R、ロータスヨーロッパなどが登場する。¥1,100／ネコ・パブリッシング

COLUMN

18 セレブの車見ぃ～っけ！

「もし自分がセレブだったら……。」なんて妄想をすることがある（私だけ？）。そのとき私のそばにいるのは、ポルシェ911やロールス・ロイス ゴーストなどの高級車で、パパラッチされたあかつきには、カメラに向かってピースをするつもり。なんて余談はさておき、本物のセレブはどんな車に乗っているのか、調べたら結構面白かった。例えば、元祖お騒がせセレブのパリス・ヒルトン。最近はホログラムボディのBMWがお気に入りのようだけど、過去には真っピンクでいかにもパリスな車を走らせていたことも。シュワちゃんはずーっとハマー愛好家。というか、ハマーの立役者（！）で、オフロードをタフに走る姿が容易に目に浮かぶ。気になったのはジャスティン・ビーバーの未来的ロールス・ロイス。こんな目立つ車に乗ってたら、そりゃパパラッチも飛びつくよね！

① Paris Hilton
BMW i8 Roadster

② Arnold Alois Schwarzenegger
HUMMER H1

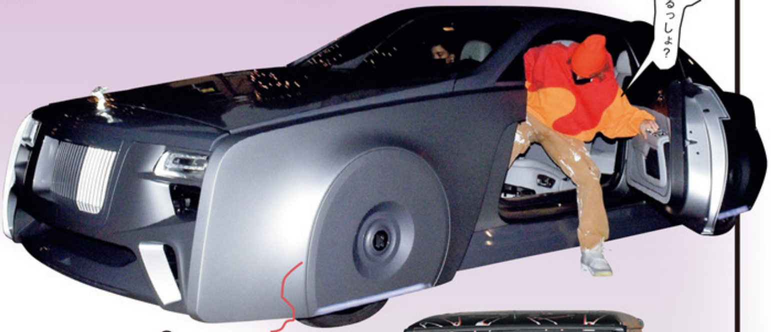
③ Orlando Bloom
Ford Pickup Truck 1940

④ Billie Eilish
Dodge Challenger

⑥ Cristiano Ronaldo
Aston Martin DBS Superleggera

⑤ Elizabeth the Second
Land Rover Range Rover

⑧ Ewan McGregor
Volkswagen Baja Bug



⑦ Justin Bieber
Rolls-Royce

⑨ Avril Lavigne
Mercedes-Benz G-Class

①パリス・ヒルトンの“That's Hot!”な愛車はBMW i8ロードスター。もともと真っ白だったボディをオーロラカラーでラッピング。②ハマーに乗れるのはアーノルド・シュワルツェネッガーのおかげ。だって彼が「アメリカ軍向けに製造しているハンヴィーを民生化して！」とお願いしたことがきっかけだから。「Terminator」のロゴ入りハマーも所有している。③オーランド・ブルームは'40sのフォード ピックアップトラックで風を切る。ホイールのイエローが差し色になって可愛いね。④日本車に乗る家族に対し「トヨタは嫌」と、ビリー・アイリッシュが選んだファーストカーはマッドブラックなダッジ チャレンジャー。⑤90歳を超えてもハンドルを握り続けたエリザベス女王。公用車はベントレーのリムジンだが、私用では走行性能抜群のレンジローバーに乗り続けた。公道は危ないので、城内ドライブを楽しんでいたそう。その精神はひ孫にも受け継がれている？　⑥車にかけた総額はなんと25億円超え!!　クリスティアーノ・ロナウドの最新カーは最高時速340kmのアストンマーティン。速いのはドリブルだけじゃない。⑦セレブ御用達カスタムショップ『West Coast Customs』で3年かけてロールス・ロイスを大改造したジャスティン・ビーバー。すっぽりと隠れたホイール、見当たらないサイドミラー。超未来的！　⑧ユアン・マクレガーの愛車はビートル＋バギーカーのような見た目のバハバグ。飾りつけでさらにキッチュな仕上がりに。⑨資産目的で買う人も多いベンツのゲレンデを、アヴリル・ラヴィーンは完全自分好みにカスタム。

photo: Aflo (①~④, ⑥~⑨), Getty Images (⑤)　text: Nozomi Hasegawa

photo: Mie Nishigori (20), Kazuharu Igarashi (20: Cars) illustration: Yo Ueda text: Toromatsu (19), Shogo Jimbo (DRIVETHRU) (20), Koji Toyoda (BGM)

EARLY SUMMER VIBES May 2022
15 BGMs
by INSIDEMAN a.k.a Q

運転中の僕も、隣の彼女もニヤリ。
初夏のドライブ専用プレイリスト。

1) **SHINTARO SAKAMOTO** "ONITAIJI"

2) **RUDY DE ANDA** "CASCADING"

3) **DURAND JONES & THE INDICATIONS with AARON FRAZER** "RIDE OR DIE"

2)

4) **TIERRA** "WHAT DID I GET MYSELF INTO NOW?"

5) **URBAN VOLCANO SOUNDS** "URBAN HIGHTS"

4)

6) **JITWAM** "I'M A ROCK"

7) **MAC MILLER with ANDERSON. PAAK** "DANG!"

8) **BLUE LAB BEATS with GHETTO BOY** "BLOW YOU AWAY (DELILAH)"

9)

9) **DENGARYU with RINGO** "EASY, YOU BUSY"

10) **MALOW MAC with FRENCHY VALENS, FINGAZZ** "TAKE ME BACK"

10)

11) **SLY, SLICK & WICKED** "SHO' NUFF"

12) **FRIDAY SATURDAY & SUNDAY** "THERE MUST BE A BETTER WAY"

13) **BARDO MARTINEZ** "SUMMER"

14) **DANTE ELEPHANTE** "SANTA BARBARA"

15) **TETSU NISHIUCHI with ARIWA** "SHIRANUMA NI KOKORO SAWAGU"

「車って移動手段でもあるのだけど、ある意味では動く密室じゃないですか？　一人でも二人以上でもとてもプライベートな空間ですよね。そこに音楽が加わると、さらに景色を変えてくれるというか、ムードを盛り上げるには欠かせないアイテムだと思います。今回は、そんな空間で聴けばいろんな意味で「心さわぐ」曲を選びました。音楽とドライブが特別な時間になる初夏を、楽しんでもらえたら幸いです」(INSIDEMAN a.k.a Q)

Spotifyにプレイリストを作ったよ。www.spotify.comから「popeyemagazine」で検索！

Step 1

まずはオリジナルのシートを取り外した状態。左はシートの表皮を取り外して、ヤシの木の"ヤシ材"と座面のスプリングが剥き出しに。

Step 2

クラフトマンシップ溢れる泉さんの手捌きでシートの表皮はすべて分解され、型紙におこされていく。新調する生地選びに胸が躍る。

Step 3

今回のために東レがUltrasuede®に、元の生地と似た雰囲気でエイジング加工を施してくれた。左が張り替え済みのシート。

Step 4

新車のような清潔感にシートヒーターも加わり機能面もアップ！ 気になる費用は48万円〜＋税。本革シート張り替えは1脚18万円から。

COLUMN 20

車のインテリアなら ここは知っておきたい 内装屋『iS.ME』。

クルマもファッションも清潔感が重要なわけで、やっぱりインテリアこそ、綺麗に越したことはない。P93で紹介しているオンボロBMWのコンバートEVですが、内装もオンボロだとよろしくないので、渋谷・上原の『iS.ME（イズミー）』でビシッとしてもらいました。『iS.ME』はシート張り替え専門のカスタムショップ。日頃はハイエンドな車種が多いんだけど、'80年代から渋谷で長く営んでらっしゃる生粋のシティボーイ、泉さんに相談すれば期待以上の仕上がりで仕立ててくれます。今回のBMWでは、今と違ってシートのスポンジ部分にヤシの木の"ヤシ材"を使っていて、その修復やカスタムには卓越したクラフトマンシップが求められる。これは長時間でも快適な乗り心地を維持するための知恵だったそうだが、今ではほとんど見られない。泉さんにお願いするといろいろ教えてもらえるのが嬉しいし、粋な常連のお客さんがいつも出入りしていて仲良くなれるので、完成した今もつい立ち寄ってしまうお店です。

PCCF

COLUMN 19

ハワイのドライバーたちから学ぼう シティボーイなドライビング所作。

何をそこまで急いでいるのか、残念なことに昨今日本でも横暴な運転が目立つ。良い車に乗っていても、運転マナーがなっていないとせっかくの車も台無しになる。せかせかしたドライバーなんて皆無に等しいであろう地、ハワイを見てみよう！　歩行者は無論、車両にだってガンガン道を譲るし、前の車が遅くたって気にも留めない。心に余裕のある運転って、何よりシティボーイ的だと思わない？

① With Slow Mind!
スロウにいこうよ。

ハワイでレーベル＆レコード店『アロハガットソウル』を営むロジャーに「ハワイって運転マナーがいいよね？」と聞くと「みんなスロウリーだからね。この前も、前方の車が対向車と友達だったのか、道をふさいで長話をしていたよ。ちなみに後続車は誰も気にすることなく話が終わるのを待っていた」と衝撃の返答がきた。そこまではいかずとも(笑)そんなスロウなマインドを僕たちも身に付けたい！

② Come in
どうぞ入って！

隣の車線に入るべくウィンカーをつけると、誰が入れてやるものかとアクセルを踏まれることってあるよね。あれは結構ツライ……。ハワイではというと、ウィンカーを確認するなり当然のごとく入れてくれるし、横断歩道でなくとも車道を横切りたい歩行者がいるだけで停車する。我が国日本に"どうぞ"の精神がないわけがない！　電車で席を譲るように、入りたい人を見つけたら速度を緩めよう。

③ Let's Gesture
身振り手振りもあるといい。

お礼するときにハザードや短いクラクションを使ったりするけど、たまに挨拶のバリエーションが少ないと感じるときがある。横断歩道でも車道でもいつもシャカサインが飛び交うハワイアンの所作も参考にして、軽く手を挙げたり、会釈をすれば、ものすごくピースな雰囲気に包まれるのではないだろうか。かくいう日本にも'80年代頃まで、サーファーが波の良し悪しを車越しからハンドサインで情報共有し合う文化があったという。甦るといいな。

COLUMN 21

クルマのふたりと博物館見学。

車が欲しくなったら博物館に行くのもあり? そう思ったのは、イラストレーターのオカタオカさんとジャズ喫茶『Donato』の店主、加藤寛之さんとの博物館見学がきっかけ。二人は「クルマのふたり」としてポッドキャスト番組も配信するほどの車好きで、この日はホンダ党のオカタオカさんが「2台目にシティを検討したい」とのことで『ホンダコレクションホール』へ行くことに。到着するなり「シティ、やっぱいい」「こっちはシビックカントリー」「S600、初めて見た!」とテンションが上がる二人。確かにこんなに綺麗な旧車を一気に見るなんてお店ではできないことだよね。トヨタや日産、スズキの博物館も東京から日帰り圏内だし、車を迷ってるなら博物館もいいよって、友達にも勧めてみようかな。

1983年に登場した3代目。シビック=スポーティというイメージを世間に浸透させたモデル。

photo: Kenji Nakata text: Nozomi Hasegawa

3階には、'21年F1で久々のタイトルを獲得したホンダの歴代レーシングカーやエンジンが並ぶ。「めちゃくちゃ速そう!」と二人。

1973年に都市部の小口配送のために造られた商用車。ただ、積載量が少ないなどの理由で、生産は1100台ほど。

クルマのふたり

ポッドキャスト番組『クルマのふたり』のDJは、イラストレーターのオカタオカさん(右、愛車はボルボ940)とジャズ喫茶『Donato』店主の加藤寛之さん(左)。休日には二人で車談議に花を咲かせている。

Museum Goods

¥900 cuteな旧ロゴキーホルダー。

¥1,100 シティのピンズは全4色。※廃番

ビートがドーンなメガネ拭き。※廃番 ¥1,100

¥1,000 ウイングを感じるマグカップ。

Kato's Select

バブル真っ只中の1989年にアコードの上級モデルとして登場。「造形として完成されてる」(加藤)

'80年式のこの一台はホンダ初の国内向け本格ステーションワゴン。当時流行した木目調のサイドパネルが可愛い。

Okataoka's Select

「CITYはニュースにあふれてる!」のキャッチコピーと共に1981年に誕生。「やっぱり実物はいいですね」(オカタオカ)

ホンダコレクションホール

「モビリティリゾートもてぎ」内にあり、ミュージアム限定グッズも充実。本物の工具を使い車を組み立てるワークショップ「ピット工房」も面白そう。「モビリティリゾートもてぎ」○栃木県芳賀郡茂木町桧山120-1 ☎0285-64-0341 営業時間はHP(mr-motegi.jp)にて確認。 不定休※冬季に施設メンテナンスにて休業 入館無料※モビリティリゾートもてぎ入場料がかかります。大人(中学生以上)¥1,800

レースでも活躍した'64年式のスポーツカー。愛称は「エスロク」。

オリジナルの3年後に生まれたオープンカー。驚きの12色展開!

illustration: Mao Nishida

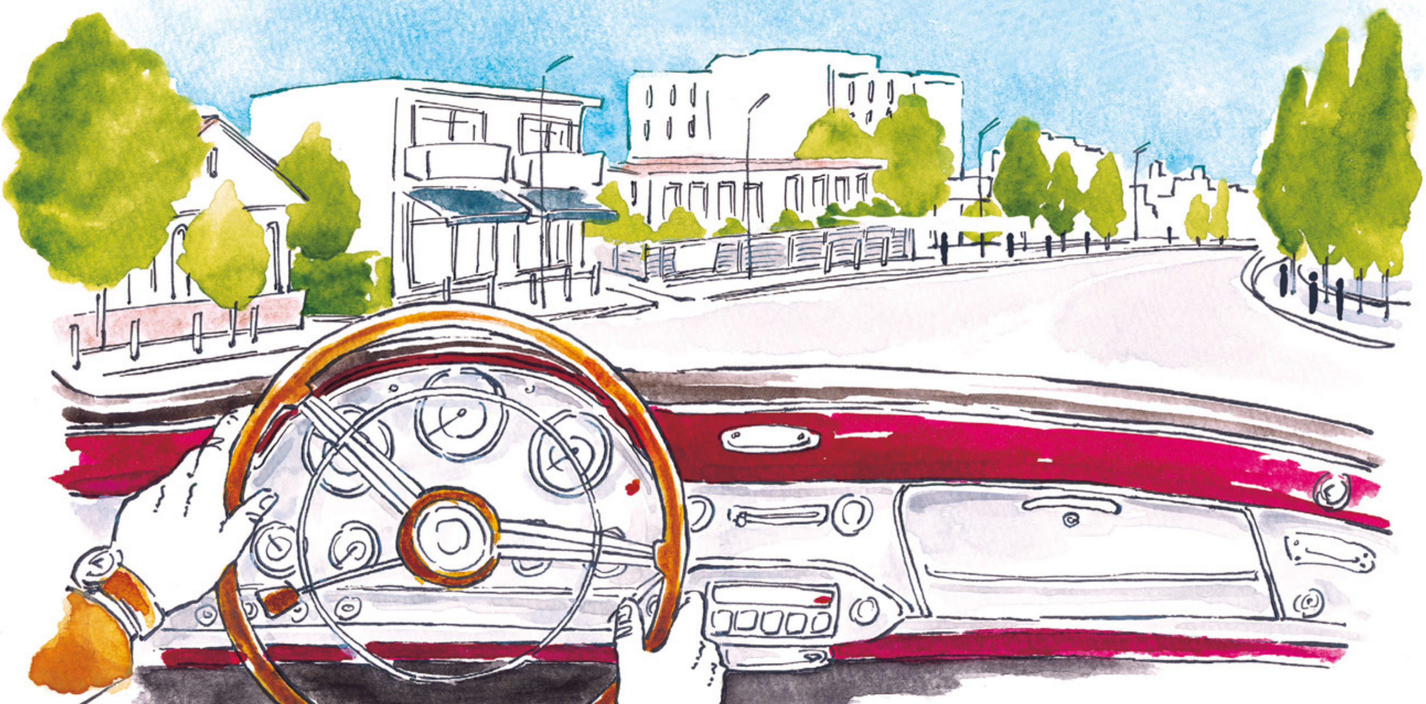
まだ車という自由を知らない君へ。

文・野村訓市

自由になりたくないかーい？　縛られる大人なんかにゃなりたくなーい。というのは尾崎豊が吠えていた’80年代から続くキッズのテーマ。そしてそれは死ぬまで永遠に続くものでもある。締切に追われ、支払いに追われ、一つ仕事が片付いたと思ってもその先にあるのは荒れたオフロード。見えない先の長さに途方に暮れると、「あぁ、自由になりてえ」「もう、色んなことに縛られたくない！」と40歳過ぎても思うのだ。そんなときにどうするか？　突然置き手紙を残して消える？　もう無理ですと辞表を出す？　いいや、そんなことはできないのさ。この世は責任と信用、そいつを築くには時間がかかるが壊すのは一瞬だ。となるとできることはただ一つさ。ドライブマイカー、相棒と一緒にただ走るのだ。

車は確かに手のかかる困ったちゃんだ。買ってお終いというわけじゃない。駐車場も借りなきゃならないし、保険に車検。税金もある。さらには最近の殺気だった世界の中でガソリン代だって上がりっぱなしさ。毎日車を必要とする奴以外にとって、車を持つってことは元を取ることが不可能のミッション。週末だけ乗るならレンタカーの方が圧倒的にコストパフォーマンスは高い。けどね、論点はそこじゃないのさ。俺たちは車を持つということで、いつでも道に打って出れるという自由を手にするんだよ。そいつは尊いものだ。金なんかには換算することなどできない、混じり気なしの本物の自由ってヤツを所有することができるんだよ。東京に住んでいる君がある日の夜、突然大阪でカスうどんが食いたくなる。終電は過ぎている。翌日の10時からは仕事もある。さぁどうする？　普通は諦めるよね。だがマイカーちゃんを持ってる君は違う。行かないかもしれないが、最初にすぐに諦める必要はない。だって自分の足があるんだぜ、その気になれば行けちまう。今日は疲れてるからまぁ止めとくか、と思い断念したとしても、それは自ら選んで決めた断念だ。そう、君は可能性を抱きながら、どうするかの決断権を自ら持てるのだ、車があれば。その気になれば伝家の宝刀のごとく使える移動の自由、可能性こそが、どんなに逃げたいと思う辛い日々に生きていても、寝れないと悩む夜にも、心に平安をもたらしてくれるのだ。ちょっと気分転換するか、思った瞬間に30分でも車で走る。カーステから流れる馴染みの曲も違って聞こえる。いつもの景色が新鮮に感じる。声を上げて一緒に歌ったっていいぜ、そう車の中は自分だけのキングダム、王国なのだから。そこでは他人の目も何も気にする必要はない。

だから君に問うよ。車を持ってみないかと。それも心から自分が惚れる車を買ってみないかと。俺は最初から永遠の愛を誓う相手が欲しかった。とりあえず乗りやすい初心者向けなんていう回り道なんてしなかった。無理も承知、貯金を全額突っ込んでアメリカから自分で輸入した本命が最初のベイビーさ。コンテナだって自分で格安会社をネットで見つけ、晴海ふ頭についた時点で資金は尽き、パーツを集めて組むまでに2年もかかったけれど、それも俺の愛をさらに燃え上がらせた。完成したときの喜び、初乗りにでかけてすぐエンジンが止まったときの悲しみ。高速の出口で止まったときには天を仰ぎもしたさ。俺を裏切った回数は数え切れない。けれどももちろん全部許してきたさ。だって俺の相棒が与えてくれた自由と喜びは何ものにも代え難いし、裏切りの回数以上の愛をもらってきたのだから。



のむら・くんいち｜1973年、東京都生まれ。50か国に及ぶ放浪旅を経て、編集者として活動。ラジオ番組『TUDOR TRAVELLING WITHOUT MOVING』（J-WAVE）のナビゲーター。ポパイで「LISTEN TO T-SHIRT 音楽とTシャツと私」を連載中。

POPEYE

Magazine for City Boys
Special Edition
Car Issue 2023 | Magazine House Mook

CITY BOYS CAR CLUB
車とシティボーイ。

©マガジンハウス2023禁・無断転載
® Hearst Holdings,inc.

COVER TITLE DESIGN
SEIICHI HORIUCHI

COVER ILLUSTRATION
KRZYSZTOF NOWAK

PUBLISHER
NOBUAKI SHIBASAKI

EDITOR IN CHIEF
YUJI MACHIDA

EDITOR
KOHEI YANAGISAWA
KOJI TOYODA
KU ISHIKAWA

ART DIRECTOR
AKINOBU MAEDA

DESIGNER
AKIRA KUROKI
YUSUKE SHONO

PROOFREADING
SHUCHINSHA

MEDIA PROMOTION DEPT.
SHINJI KOBAYASHI

CIRCULATION
CHIKAKO ARAHARA

PRODUCTION
KENJI SAITO

PUBLICITY
SHIGETOMO NAGATA

WEB
https://popeyemagazine.jp/

INSTAGRAM
@popeye_magazine_official

TWITTER
@POPEYE_Magazine

FACEBOOK
@mhpopeye

SPEED
TM
TM
GOOD CARE

MAGAZINE HOUSE MOOK

POPEYE 特別編集　車とシティボーイ。

2023年7月20日発行　発行人／芝崎信明　編集人／町田雄二
〒104-8003東京都中央区銀座3-13-10 株式会社マガジンハウス
編集部tel：03-3545-7160 受注センター tel：049-275-1811

定価：1580円 本体1436円 雑誌66527-08

© 株式会社マガジンハウス 2023
Printed in Japan　印刷所：大日本印刷株式会社

9784838756087

ISBN978-4-8387-5608-7

C9476 ¥1436E

1929476014368